集合的記憶の交渉とメディア

―ふたつのヒトラー映画における記憶のダイナミズム―

齊藤公輔

目次

はじめに 3
0：概念定義 12
1：集合的記憶の流動性 20
1-1：個人的記憶と社会 20
1-2：個人的記憶から集合的記憶へ 28
1-3：記憶の時間的枠組み―コミュニケーション的記憶と文化的記憶 34
1-4：集合的記憶のダイナミズム―機能的記憶と蓄積的記憶 41
1-5：世代 52
1-6：小括―集合的記憶の流動性 57
補論 1：集合的記憶とは何か 59
補論 2：記憶（論）と歴史（学） 64
2：メディアの多元性 72
2-1：学術界におけるメディアの混乱 73
2-2：集合的記憶のメディア概念 78
2-3：集合的記憶のメディア機能 84
2-4：集合的記憶のメディアとしての映画 92
2-5：小括―メディアの多元性 101
補論 3：現実とは何か 104
補論 4：マスメディアにおける現実構築―集合的記憶交渉への足がかり 110
3：現代ドイツにおける過去 132
3-1：再考―なぜ、いま記憶とメディアなのか 132
3-2：戦後ドイツにおける過去の変遷 138
3-3：証言の変化 154
3-4：小括 162
4：ヒトラー映画における集合的記憶の交渉 163
4-1：ヒトラーイメージの現在 165
4-2：映画におけるヒトラー像の分析 170
4-3：ヒトラー映画分析 174

『ヒトラー―最期の 12 日間』 176
『わが教え子、ヒトラー』 196
4-4：小括 217
5：まとめ 220
映画分析表
参考文献

はじめに

本論は、ある社会や文化のなかで共有されている過去のイメージは一定不変ではなく、流動的に変化し、また多面的な様相を示すものであることを提示する。その際、集合的記憶（kollektives Gedächtnis）という言葉をキーワードに、集合的記憶に関する理論の考察と現代ドイツにおけるヒトラー映画の分析を中心に論をすすめる。これらを通して集合的記憶はメディアのなかで「交渉」するということを示す。

1980 年代後半ごろから、集合的記憶はドイツ語圏の文化科学（Kulturwissenschaften）の領域において、より大きな関心を持って研究されている。集合的記憶研究の特徴は、文化や社会はどのような出来事をどのように保存し伝達するかという問いを、多様な視点から考察する点にある。またもうひとつの大きな特徴として、集合的記憶は広範な学問領域にまたがって研究されており、たとえば哲学、心理学、歴史学、社会学、文学、文化理論、メディア論などを包括している（Inter- und Transdisziplinarität）[1]。精神科学における「文化的転向」（Kulturelle Wende）—これはドイツ版カルチュラル・ターンと言い換えられるだろう—以降、文化科学には「それぞれが孤立していた個別の研究を学科横断的に『討論』するという目的を持った、［個々の研究成果を］より高い次元で反省する」[2]という役割が期待されている。つまり、さまざまな領域の研究成果を踏まえてひとつのまとまった学問成果を求めることが望まれている。多くの学問領域を包摂する集合的記憶の研究は、こうした要求に応えられる優れた研究分野のひとつといえる。

---

[1] ñinter-ñおよびòtrans-ñについて、直訳するならば前者は「間学科的」、後者は「超学科的」ということができるだろう。すなわち、間学科的研究はある研究対象を複数の学問領域が共同で研究することであり、一方の超学科的研究はある研究対象が複数の学問領域において研究されてはいるが、各領域間の相互作用は必ずしも必要としない、と理解される。

[2] Vgl.: Nünning, Ansger/ Nünning, Vera: *Kulturwissenschaften: Eine multiperspektivische Einführung in einen interdisziplinären Diskussionszusammenhang*. In: Nünning, Ansger/Nünning, Vera (Hg.): *Konzepte der Kulturwissenschaften. Theoretische Grundlagen – Ansätze – Perspektiven*. Stuttgart, Weimar: J. B. Metzler, 2003, S. 3. Vgl. auch: Wittkamp, Robert F.: *Japanologie als Kulturwissenschaft*. In: *Die Deutsche Literatur*, Nr. 49, 関西大学ドイツ文学会編, 2005, S. 167.

集合的記憶が優れているのは、学問領域の多様さだけではない。アストリート・エアル（Astrid Erll）は著書『集合的記憶と想起の文化』（*Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*）において、集合的記憶が注目されるようになった背景を4つ指摘している[3]。第一に、冷戦の終焉によって一元的な国民的歴史を必ずしも必要としなくなり、むしろかつて政治的に堅持されてきた過去像を再検討する動きが出てきている。ソビエト崩壊が旧共産圏内部に民族意識を再発見させる事態を引き起こし、多くの紛争の原因となっていることはその後の歴史からも明らかである。また西側諸国においても、脱植民地主義と移民の移動によって複（想起）文化主義（Multi (erinnerungs-) kulturalität）という姿勢が優勢となってくる。アンドレアス・ヒュッセン（Andreas Huyssen）はこれに関して次のように述べている。

> 記憶に関する広範な議論が、文化学や社会学、自然科学のなかにみられる。超国家的構造の危機や国民アイデンティティーが問題になる時代には、国民や国家の仮想的アイデンティティーという用語以上に、文化的あるいは集合的記憶という用語がますます論じられるようになる[4]。

冷戦構造が崩壊し、これにかわって民族や宗教が意識されはじめたなかで、既存のアイデンティティーの見直しが迫られている。こうした、これまでは国家や国民といった政治的アイデンティティーというカテゴリーで議論されてきた問題が、集合的記憶という術語に置き換えられて議論されはじめたのである。

第二に、インターネットなど電子メディア技術の発達をあげている。我々が保有できる情報量は爆発的に増加し、無尽蔵に情報を保存することが可能となった。またマスメディアのあり方も変化しており、複数のメディアが連携して作品を売り込むパターンが増えている。1990年代以降、世界中で爆発的に普及したコンピュータやインターネットにより、

---

[3] Erll, Astrid: *Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*. Stuttgart, Weimar: Metzler, 2005a, S. 3ff.

[4] Huyssen, Andreas: *Twilight Memories. Marking Time in a Culture of Amnesia*. New York: Routledge, 1995, S. 5.

情報保存量および情報伝達速度は飛躍的に増加した。これによって、社会内部に大量の情報が保存できる可能性が増したのに比例して、圧倒的な保存量と情報速度によって眼前の情報ですら忘却してしまうという「パラドックス的関係性」（paradoxer Zusammenhang）が指摘されるようになった[5]。加えて、デジタルメディア技術の発達によって過去描写の可能性も拡大している。仮想現実として映像化された特定の過去像は、映画やテレビを通して気軽に楽しむことができ、またその関連図書や雑誌のみならず DVD やウェブサイトなどによって社会内部に広く浸透する。こうしたメディア環境の変化が、記憶ブームの立役者のひとつとなっているのである[6]。

第三として、上述したように現代ドイツにおける精神科学の分野において従来の学科を横断する学際的な研究が求められるようになってきており、共通の学問的基盤および学問的テーマを必要としていたことが指摘されている。過去、歴史、記憶などの名称で呼ばれるテーマはこうした時代背景や時代の要求に合致するものであり、それゆえアクチュアルなテーマとして注目されているのである[7]。

第四として、これが最も大きな要因であると考えられるが、現代ドイツは第二次世界大戦を経験した世代が不在となる社会に直面している。それは被害者加害者の別を問わず、ナチス時代を語ることができる人物がいなくなることを意味しており、それゆえ彼らの記憶保存や後世への伝達などという問題が噴出してきているのである。つまりドイツは、「過去」（Vergangenheit）のあり方の再検討を余儀なくされているといえる。ナチスドイツの罪を伝えることのみならず、第二次世界大戦とは何であったか、ヒトラーとは何であったかなど、戦後ドイツの根幹を問い直す作業が求められている。A. ヒュッセンが指摘するように、このような

---

[5] Ebd.

[6] Ebd. なおドイツ語圏においてメディア（Medien）とマスメディア（Massenmedien）は厳密に区別されており、たとえば記憶論の領域においては博物館や記念碑などもメディアに含まれる。一方、日本においてはメディアとマスメディアはしばしば同義的に用いられている状況である。本論文では特に断りがない場合はメディアを両方を含む概念として取扱い、区別が必要な場合はその都度言及する。

[7] 学科横断的な記憶研究の例として次の著作をあげることができる。Aichenberg, Ariane/ Gudehus, Christian/ Welzer, Harald (Hg.): *Gedächtnis und Erinnerung: Ein interdisziplinäres Handbuch*. Stuttgart; Metzler, 2010.

ドイツアイデンティティーの危機に際して集合的記憶に関する議論はますます重要性を帯びてきつつある。

ここで、上述した第四の理由に注目し、集合的記憶と過去の関係について、特に両者の結節点がどこにあるのかを中心に詳しく検討しよう。現代ドイツ社会には、第二次世界大戦を経験した戦争体験世代が不在となる危機が迫ってきている。つまり終戦から 70 年が経過しようとするなかで戦争体験を語ることのできる人々がいなくなる社会を前にして、彼らの体験をどのように後世に語り継ぐのかが問われているのだ。たとえばノルベルト・フライ（Norbert Frei）は、2005 年の著書『1945 年と私たち』（*1945 und Wir*）のなかで次のように述べている。すなわち、

> 「私は覚えている」と言える人はほぼ誰もいなくなった、ということが真実である。私たちの大多数にとってヒトラー時代は体験した過去ではなく、歴史である。*History, not memory*. ［…］ブランデンブルク門の隣にある石碑は、体験者不在の現代となってしまう、過去の未来のために建っている[8]。

「体験者不在の現代となってしまう、過去の未来」とは、ナチス時代という過去を直接体験した人がいなくなるときが、将来必ず訪れることを意味している。そのときナチス時代は、もはや現代と時系列的に連続している出来事ではなく、現代と断絶した歴史的出来事になるのである。確かに戦争世代が不在になれば、彼らの記憶は歴史として記録されたものを参照するほかない。ブランデンブルク門の隣にある「虐殺されたヨーロッパユダヤ人のための記念碑」（Denkmal für die ermordeten Juden Europas 以下、ホロコースト警告碑）は[9]、ホロコースト体験者が死滅し

---

[8] Frei, Norbert: *1945 und Wir*. München: C. H. Beck, 2005, S. 7ff.

[9] この名称の略式名称は「ホロコースト警告碑」（Holocaust-Mahnmal）である。Mahnmal の原語 monere は「警告する」という意味がある。原語に関する議論は Assmann, Aleida: *Geschichte im Gedächtnis: von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung*. München: C. H. Beck, 2007a, S. 26.を参照。なお日本語の訳語「警告碑」は、中尾健二／丸山佳佑：「公共の記憶をめぐる抗争: 旧西ドイツにおける『ホロコースト』放映」、『静岡大学情報学研究』Nr.10、2004 年を参考にした。

た後もその記憶が失われることのないように、記憶を石碑というメディアに変換し未来に伝えていく役割を負っているのである。

ただし、戦争体験者の記憶や証言をメディア化する重要性が指摘される一方で、その複雑さも浮き彫りになってきている。戦争世代最後の生き残りが「人生の終わりを迎えるにあたって初めて証言する勇気をふるいおこした」[10]ことによって、多くの体験談や目撃談などがメディアなどを通して社会内部にアップロードされた結果、時として対立し矛盾しあう複数の過去像が流通してきているのである。

> ホロコーストという出来事は、時間の隔たりとともに色彩を失い、色褪せていくのではなく、逆説的にも、ますます身近で重大なものとなっている。[…] ショアーに関していえば経験記憶が後退しつつある一方で、メディアや政治に依存する記憶といった、別の形式の記憶が明らかにその重要性を増している。なぜなら、われわれから時間的にますます遠ざかっていく過去は、専門の歴史家たちの庇護下に完全に移るのではなく、競合するさまざまな要求や義務として、今後ともわれわれの現在に重くのしかかるからだ。単数形の歴史という抽象的なジンテーゼに、今日では多種多様な、中には互いに矛盾し合う複数の記憶が対峙している。これらの記憶は社会的承認を求めて自らの権利を主張しているのだ[11]。

「メディアや政治に依存する記憶」、より原語に忠実に訳すならば「メディアの記憶や政治の記憶のような、他の記憶形式」（Gedächtnis wie das der Medien oder Politik）は一枚岩ではなく複数あり、かつ自らの記憶の正統性を主張しあい承認を求めている。このとき重要なことは、戦争体験者が直接主張をするのではない点である。経験記憶の減少と入れ替わるかたちでメディアの記憶や政治の記憶が増加し、それらが戦争体験者

---

[10] Knopp, Guido: *Holokaust*. München: Wilhelm Goldmann Verlag, 2001, S.9.（翻訳：グイド・クノップ著、高木玲／藤島淳一訳：『ホロコースト全証言集―ナチ虐殺戦の全体像』、原書房、2004 年、2 ページ。）

[11] Assmann, Aleida: *Erinnerungsräume*. München: C. H. Beck, 2003, S. 14ff.（翻訳：アライダ・アスマン著、安川晴基訳：『想起の文化　文化的記憶の形態と変遷』、水声社、2007 年、27-29 ページ。）ただし、強調筆者。

の記憶よりも重要な役割を果たそうとしつつあるのだ。

ところで、アライダ・アスマン（Aleida Assmann）が指摘するホロコーストがより身近になっているとはどのような状況なのだろうか。この点に関して N. フライは、ヒトラーは生前の公的会見を上回る頻度でドイツの国内メディアに登場しており、こうした「ヒトラーブーム」[12]は過去としての「1945 年をこれまで以上に身近に」[13]していると述べている。現代ドイツにおいて戦争体験者は減少しているが、これに反比例するかのようにヒトラーやナチスに関するメディア作品が非常に多くなってきているのである。

近年発表された第三帝国時代を題材とする映像メディア作品のうち、代表的なものだけでも『ヒトラー―最期の 12 日間』(*Der Untergang*)、『わが教え子、ヒトラー』(*Mein Führer*)、『白バラの祈り ゾフィー・ショル、最期の日々』(*Sophie Scholl―Die letzten Tage*)、『ドレスデン、運命の日』（*Dresden*）などをあげることができる。このようにナチスやヒトラーに関する作品は日を追うごとに確かに増加しており、この意味において A. アスマンや N. フライが述べたとおり、戦後 70 年近くを経てもなおナチスを目にする機会は減少していないのである。

興味深いのは、こうしたマスメディア作品におけるナチスやヒトラーのイメージが多様化しており、場合によっては「より良く」[14]（besser）描かれはじめている点である。映画評論家であるディートリヒ・クールブロット（Dietrich Kuhlbrodt）は、著書『ドイツ映画の不思議―ナチスがより良くなっていく』(*Deutsches Filmwunder. Nazis immer besser*）のなかで次のように述べている。すなわち、

---

[12] Zimmermann, Peter: *Hitler & Co als Fernsehstars. Das „Dritte Reich“ in Film und Fernsehdokumentationen*. Vortrag zum Symposium ĂHitler und Co als Fernsehstars.ñ im Haus des Dokumentarfilms. Stuttgart 21. April 2005. http://www.mediaculture-online.de/fileadmin/bibliothek/zimmermann_hitler/zimmermann_hitler.pdf.
（2013 年 3 月 29 日アクセス）
Vgl. auch: N. N.: *Hitler boomt.Weltweiter Erfolg „Der Untergang“*. In: *FAZ*, 23.04.2005, S. 41.

[13] Frei, Norbert, 2005, S. 7.

[14] Kuhlbrodt, Dietrich: *Deutsches Filmwunder. Nazis immer besser*. Hamburg: Konkret Literatur Verlag, 2006.

『ヒトラー―最期の 12 日間』によって我々は最良のヒトラーを手に入れた。それは、かつて私たちひとりひとりが抱いていたヒトラーである[15]。

映画『ヒトラー―最期の 12 日間』はヒトラーに「顔」[16]を与え脱悪魔化したことで話題になった作品である。この映画は、それ以降に製作されたヒトラーやナチスを題材としたメディア作品に大きな影響を与えたといわれており[17]、それゆえ近年の傾向としてヒトラーは悪魔ではなく人間として描写されはじめているといえる。

もちろん、こうした脱悪魔化されたヒトラー像に対する批判は少なくない。確かに機械的大量殺戮という事実を無視してナチスを語ることは許されることではないだろう。しかしホロコースト警告碑の建造に代表されるように、現代ドイツは過去の罪を完全に忘却しているわけでは決してない。むしろ完全な忘却に対抗すべく努力している側面も持ち合わせている。つまり現代ドイツにおけるナチス・ヒトラーへの姿勢は、倫理的道徳的な反省が実践されると同時に、多様な「顔」を与える作業が行われているという、多様で複雑な側面があると理解するべきであろう。

ここまでの議論を整理しよう。現代ドイツにおけるナチスやヒトラーといった過去は、時間的距離が遠ざかり証言者が減少の一途をたどる一方で、メディア的距離はより近づいている。ところがメディアのなかの過去は多種多様であり、時には矛盾を含むものや「より良い」ヒトラー像さえ現れてきつつあった。それらは自己の正しさを社会にアピールしており、こうした社会的承認をめぐる動きは集合的記憶という概念とともに注目を集めている。

ここに、現代ドイツのナチス・ヒトラーをめぐるふたつの流れが合流する。ヒトラーイメージが多様化し、ともすれば「より良い」ヒトラー

---

[15] Ebd., S. 9.

[16] Michaelsen, Sven: *Totaler Dämon und elende Witzfigur*. In: *Stern. 39/2004*.

[17] Vgl.Worschech, Rudolf: *Mein Führer-Die wirklich wahrste Wahrheit über Adolf Hitler. Dani Levys Hitler-Satire*. In: Frölich, Margrit/ Schneider, Christian/ Visarius, Karsten (Hg.): *Das Böse im Blick. Die Gegenwart des Nationalsozialismus im Film*. Stuttgart: edition text+kritik in Richard, 2007.

像までもが描かれはじめている一方で、戦争体験者が減少するなかメディアを伴う複数の集合的記憶が承認を求め合っている。つまり戦争世代が減少しつつある現代ドイツにおいて、ヒトラーのイメージ、すなわち集合的記憶の多様化という現象が現れてきており、その正当性をめぐる問題が噴出しているのである。

本論は、こうした文化現象のダイナミズムについて集合的記憶論を用いながら描き出すことを目的としている。言い換えるならば、複数の過去イメージが社会的承認を求めるというプロセスを、文化現象として観察することが本論の主題である。集合的記憶はどこで、どのように承認を求めているのだろうか。またそれはどのように現れるのだろうか。本論はこうした問いについて、集合的記憶は流動的であるという仮説を立て、それを現代ドイツの事例に当てはめることで、この仮説の妥当性を検討していく。戦争体験者の不在と過去の多様化が問題となるドイツについて文化科学の領域から考察を深め、ドイツの過去をめぐる複雑な状況に新しい視点がもたらされることを目指している。

本論は 4 つの章と 4 つの補論によって構成されている。第 1 章は集合的記憶に関する議論をおこなう。はじめに記憶にとって社会や文化が重要であることを示し、そのような社会的文化的枠組みが集合的記憶と呼ばれることを説明する。次に、その集合的記憶は可変的かつ流動的であることを、集合的記憶に関するドイツ語圏の先行研究を確認しながら明らかにする。

第 2 章はメディアについて考察する。集合的記憶にとってメディアは不可欠であるが、メディアもまた複雑で多様なものと理解されている。それでは、メディアのどのような機能が集合的記憶を支えているのだろうか。本章では、本論の研究対象である映画も視野に入れながら、集合的記憶のメディアに求められている機能について議論をすすめていく。これらの考察を通して、集合的記憶のメディアは多様な要素が複雑に絡み合っているものであることを示す。

第 3 章では、現代ドイツにおける過去をめぐる議論について、社会的および文化的な文脈を概観する。上述したとおり、戦争体験者が不在となりつつあるなかで、ナチスやヒトラーをめぐる記憶やイメージが多様化している。これは、当時を追体験しようとする動きと関連がある。こ

の現象の社会的文化的基盤の輪郭を描き出すために、戦争体験者の証言の特徴を検討し、さらに記憶をめぐる議論のきっかけともいわれるヴァルザー・ブービス論争（Walser-Bubis-Debatte）を確認したい。

第 4 章では映画分析を通して、マスメディアのなかで過去イメージ変化するプロセスを実証的に確認する。ドイツで制作されたふたつのヒトラー映画について映画批評や映画に描かれたヒトラー像の分析を行い、両映画におけるヒトラーイメージの変化を描写する。これは、第 3 章で取り組んだ集合的記憶交渉の理論的仮説に、実証的な裏付けを与えることを目的としている。補論はこれらに関する補足的な議論であり、本論文の理解を助ける役割が与えられている。

以上の議論は一貫して現代ドイツにおける集合的記憶のダイナミズムを描き出すことを目的としているが、こうした問題は日本においても歴史認識などの文脈のなかで指摘することができる。たとえば、南京大虐殺や慰安婦問題、沖縄集団自決をめぐる記述の問題などをあげることができるだろう。しかし日本における集合的記憶研究は、少なくともドイツ学（Germanistik）の領域およびその成果を応用したものに限定していえば、現在もなお発展の途上にあるように思われる。確かに、たとえば社会学や歴史学などの分野において集合的記憶に重点を置いた一定の研究成果を認めることができる[18]。しかしドイツ語圏における集合的記憶研究に着目した研究は非常に乏しく、今後の発展が望まれている[19]。すでに言及したとおり、先の大戦と戦後責任などに関してドイツと日本は共通部分が少なくなく、この意味においてドイツ語圏の集合的記憶研究を参照することは、非常に意義深いことであるに違いない。

---

[18] 例えば、森本敏己編：『視覚表象と集合的記憶：歴史・現在・戦争』、旬報社、2006 年や、片桐雅隆著：『過去と記憶の社会学』、世界思想社、2003 年など。

[19] A. アスマン著：『想起の空間』の翻訳者である安川晴基は、訳者あとがきにおいてドイツ語圏の集合的記憶概念は日本への紹介が進んでいないことを書いている（アライダ・アスマン著、安川晴基訳、557 ページ）。このあとがきは 2007 年に書かれたものであるが、その後の翻訳事情を鑑みても改善されているとは言い難い状況である。たとえば、安川が『想起の空間』とならんでドイツ語圏集合的記憶論の重要著作にあげているヤン・アスマン（Jan Assmann）の『文化的記憶』（*Das kultrelle Gedächtnis*）は、2011 年 10 月 8 日現在において邦訳は出版されていない。

0：概念定義

本論文は、集合的記憶はメディアのなかで交渉するという仮説の構築と実証的証明を行うものである。この仮説を実証するために、本章では用語の確認を行う。学問において概念定義が重要であることは論を待たない。集合的記憶およびメディアの諸概念は章を別に設けて検討することとし、ここでは特に記憶と交渉について確認していきたい。

記憶と想起—日本語とドイツ語の相違点

本論文において、「記憶」はドイツ語 ĂGedächtnisò の訳語として用いる。日本の学問領域、とくに歴史学や社会学、文化科学において記憶が話題になるとき、記憶とは何かが定義されていることは非常に少ない状況にある。数少ない例外として、片桐雅隆著『過去と記憶の社会学』において「記憶」「想起」「回想」の三概念を区別する試みをあげることができるが[20]、しかしドイツ語のĂGedächtnisòが持つ意味とは完全に一致するものではない。以下で確認するように、Gedächtnis は何よりも「思い出すこと」（Erinnern）と「忘れること」（Vergessen）の総体として理解されている。これに関して、以下ではとくに日独の学問領域における記憶／Gedächtnis の意味上の差異を確認することを通して、本論における記憶概念の射程を明確にする。

ニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann）の記憶概念によれば、記憶は「思い出すことと忘れることの統合を組織化するもので、忘れることと［中略］思い出すことを区別する」と定義している[21]。つまり忘れることと思い出すことは区別されなければならないが、その一方で記憶は思い出すことと忘れることの総体であるとしている。この概念定義の是非はここでは論じないが、少なくとも思い出すことと忘れることは表裏一体であると捉えていることがわかるであろう。N・ルーマンにとって記憶は両者を組織化するものであり、その意味において記憶はシステムで

[20] 片桐雅隆著、2003 年、117 ページ以下参照。
[21] Krause, Detlef: *Luhmann Lexikon: eine Einführung in das Gesamtwerk von Niklas Luhmann*. Stuttgart: Lucius & Lucius, 3., neu bearb. und erw. Aufl., 2001, S. 133. ただし強調筆者。

あるということができる[22]。

ドイツの集合的記憶研究者である A. アスマンは、記憶と思い出すことの違いについて次のように論じている。すなわち、思い出すことは過ぎ去った出来事へ目を向ける「行為」（Tätigkeit）であるのに対し、記憶はこの行為の前提のための「生物学的器官」（biologisches Organ）である[23]。記憶器官がなければ思い出すこともできず、それゆえ忘れることもできないのである。この意味で記憶は「メタファー的に外的データ保存機構と同一視されうる」[24]。これに対し思い出すことは、常に現在の視点から構成される「生き生きとした意識」（lebendiges Bewusstsein）である[25]。これらの定義から、ドイツ語圏の学問領域において記憶は思い出すことと忘れることからは明確に区別されていることがわかる。

これに対して日本の学問領域においては、記憶は思い出すこととしばしば同一視されており、また忘れることに関する視点が欠けているといえる。ローベルト・ヴィットカンプ（Robert F. Wittkamp）の考察によれば､日本の学術界において記憶概念は｢プロセスとしての思い出すこと」および「内容としての想起」として理解されている[26]。前者のプロセスに該当するものとして社会学者である片桐雅隆の著書『過去と記憶の社会学』に示された三概念を指摘する一方、後者に該当するものとして内容の「表象」（Vorstellung）や「描写」（Repräsentation）、シンボル化（Symbolisierung）や対象化（Objektivierung）をあげている[27]。また歴史学者である成田龍一は「『記憶』とは、しばしば体験／証言／記憶の三位一体の様相をさす」[28]と述べ、自身の体験を語ることもまた記憶の一部

---

[22] N. ルーマンのシステム概念については第 3 章で詳しく解説する。
[23] Assmann, Aleida: *Einführung in die Kulturwissenschaft. Grundbegriffe, Themen, Fragen*. Berlin: Erich Schmidt Verlag, 3., neu bearbeitete Auflage, 2011, S. 182.
[24] Ebd.
[25] Ebd.
[26] Wittkamp, Robert F: *Krieg und Erinnerung zwischen Mündlichkeit und Medien: Streifzüge durch japanische Gedächtnisdiskurse*. In: Chiavacci, David/ Wieczorek, Iris (Hg.): *Japan 2010. Politik, Wirtschaft und Gesellschaft*. Berlin: VSJF, 2010, S. 333.
[27] Ebd. 片桐雅隆著、2003 年も参照。
[28] 成田龍一 :「『証言』の時代の歴史学」、ひろたまさき／キャロル・グラック監修、冨山一郎編 :『記憶が語りはじめる』、東京大学出版会、2006 年、4 ページ。

を構成するものであると定義している。こうした語られる記憶という概念に対して、表象されない過去像は「語られない記憶」[29]と呼ばれる。

ここに明らかなように日本語の記憶概念には忘却の要素が含まれていない。ドイツ語の Gedächtnis は想起と忘却を行うシステムであったのに対し、日本語の記憶概念は過去イメージや語り、体験などと結びついていた。このように両者が内包する意味は非常に異なっており、Gedächtnis を記憶と訳すには非常に大きな誤解を生む恐れがある。以上の議論を踏まえ、本論において術語「記憶」は日本の学術界で一般に用いられている意味ではなく、想起／忘却というコインの表裏のように分かち難い現象を組織する、器官やシステムと定義する。

交渉

DUDEN において交渉（aushandeln）は「関心事に関する慎重な検討において決定すること」と定義されている[30]。ここで決定すると訳した単語の原語は vereinbaren であるが、これは DUDEN に「①合同で決定を固める、②一致に持っていく」と書かれている。このとき注目したいのが、「合同で」（gemeinsam）という点である。これは交渉において物事を決定する際に、どちらか一方の当事者のみが納得する内容で締結されることを意味していない。交渉とは、そのテーブルについている複数の当事者が同一の目標に向かって共同で慎重に進んでいく、または意見の一致を共同で目指すことを意味している。

ところで、次章で詳しく検討するように、個人的記憶であれ集合的記憶であれ、記憶はアイデンティティーの源泉とみなされている。ドイツの集合的記憶研究者である A. アスマンは記憶とアイデンティティーの関係について次のように述べている。

各々にとって伝記的記憶は不可欠である。というのも伝記的記憶は、

---

[29] 赤坂憲雄／玉野井麻利子／三砂ちづる著:『歴史と記憶　場所・身体・時間』、藤原書店、2008 年、30 ページ。

[30] Dudenredaktion (Hg.): *Duden. Deutsches Universalwörterbuch. 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage*. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag, 2001.ñaushandeln: in Abwägung der Interessen vereinbaren. Ă

そこから体験や関係性や、とりわけ自己のアイデンティティー像を作りだす材料だからである[31]。
われわれが記憶について議論する三つの領域［社会的記憶、文化的記憶、集合的記憶］において、それは同時にアイデンティティーについて議論している[32]。

このようにアイデンティティー形成のために記憶は欠かせないものであると理解されている。ところで、記憶はアイデンティティーの源泉となるという考え方は、理想的には集合的記憶と集団は同一視されなければならない、という理解を生む場合もある。たとえば、ドイツの文学史家カール・ハインツ・ボーラー（Karl Heinz Bohrer）もこうした考え方を支持する一人である。A.アスマンは著書『記憶のなかの歴史』(*Geschichte im Gedächtnis*）のなかで、K. ボーラーを次のように引用している。

国民的歴史は［中略］同一視に関わる事柄である。［中略］ボーラーの言うところの国民的記憶は、［中略］一つの社会の集合的な精神基盤と道徳基盤を形成し、世代の変遷のなかで社会がみずからについて釈明し、自らのアイデンティティを確かめるための鏡である[33]。

このように彼は、原則として集合的記憶は集団の「一人ひとり」[34]に共有されているものであると考えている。しかし A. アスマンはこの考え方に賛成するために K.ボーラーに言及しているのではない。確かに A. アスマンは記憶をアイデンティティーの源泉と見なしているが、しかしアイデンティティーと記憶を同一視することは不可能であると考えており、したがって K. ボーラーのような考え方を批判する意図で彼に言及

[31] Assmann, Aleida: *Von individuellen zu kollektiven Konstruktionen von Vergangenheit*. Wien: A. Assmann-Online-Text. -univie.ac.at. 2005. S. 2. http//www.univie.ac.at/zeitgeschichte/veranstaltungen/a-05-06-3.rtf. （2011 年 4 月 12 日アクセス）
[32] Ebd., S. 11.
[33] Assmann, Aleida, 2007a, S. 24.（翻訳：アライダ・アスマン著、磯崎康太郎訳、2011 年、37 ページ以下）ただし強調筆者。
[34] Vgl.: Ebd.（翻訳：同上、38 ページ）

しているのである。すなわち、「ドイツ史はひとまとまりとしてイメージ・表現されるものではない。」「分裂がドイツ史の特徴である。」「意識的な断絶無くして、いかなる再結合もない。」「一体性に代わる断片化。」[35]、と。つまり A. アスマンは、アイデンティティーの源泉たる記憶は全体に共有されているのではなく、むしろ個々に分裂した状態であると考えている。

このような記憶の断裂は社会のなかでどのように現れるのだろうか。ここでは特に「パラゴーネ」（Paragone）という術語を用いて議論を進めていく。パラゴーネとは比較や競合を意味する言葉で、長いあいだ芸術における詩と絵画の交渉を指す場合に用いられてきた。古代ギリシャ時代からことばによる情景描写と絵画によるそれのあいだに、どちらがより優れているかという議論があった。語ることこそ至上であるという認識のもと 18 世紀に至るまで詩が絵画よりも優位であると考えられてきたが、18 世紀以降は絵画と詩は独立した個別の表現手段であると理解されはじめ、この種の議論に一応の終止符が打たれることとなった。こうした詩か絵画か、ことばかイメージか、という議論をパラゴーネと呼ぶ[36]。

ザビーネ・ハイザー（Sabine Heiser）とクリスティアーネ・ホルム（Christiane Holm）は、こうした芸術におけるパラゴーネは記憶と想起をめぐる争いであったと見なしている。なぜなら芸術におけるパラゴーネは、一方でどの芸術が最もよく人間の心や身体に記憶を刻み込み、かつ最もよく想起できるか、という問いであり、他方でどの芸術が最もよく忘却に耐え、死後の名声などを可能な限り長く保持できるのか、という議論だったからである[37]。つまり、記憶や想起とそのメディアに関する優劣の問題として理解されている。ただしこの問題は、メディア技術が発達した現代においては異なる複数のメディアが相互に作用しあう関係のなかで考えられなければならない。第 1 章および第 2 章で詳しく検討するように、集合的記憶とメディアは非常に高い親和性を持っている。

---

[35] Ebd., S. 27f. （翻訳：同上、43 ページ以下）

[36] 西村清和：「詩と絵画のパラゴーネ」、『美学藝術学研究』Nr. 24、 2006 年、3 ページ。

[37] Heiser, Sabine / Holm, Christiane: *Einleitung*. In: Heiser, Sabine / Holm, Christiane (Hg.): *Gedächtnisparagone- Intermediale Konstellationen*. Göttingen; V&R unipress GmbH, 2010, S. 7.

それゆえ現代における記憶のパラゴーネは「メディア・コンビネーション、メディアの模倣、メディアの移り変わり、メディアの競合［という問題］に行きつく」[38]。言い換えるなら、こうしたメディア同士の緊張関係は、記憶とメディアが持つ独自性という文脈のなかで語られる。マーシャル・マクルーハン（Marshall MacLuhan）は「メディアはメッセージである」[39]として個々のメディア媒体自体に意味が備わっており、それゆえメディアによって情報が変化すると述べているが、現代の記憶パラゴーネはこうしたメディアの特性に関する議論なのである[40]。

現代において記憶の交渉は、何よりもまずメディアの特性に関する競合であることを確認してきた。これは特にメディアの技術的側面を話題の中心としているといえる。しかし記憶のパラゴーネは、こうしたメディア技術のみが扱われるのではない。芸術における記憶のパラゴーネは認識の真実性をめぐる争いであった。したがって現代における記憶のパラゴーネにおいて、「想起や記憶のメディアにとって認識の真実性の基準もまた［中略］中心的な役割を果たしている」[41]。つまり、メディアのなかに表象された複数の記憶をめぐる真実性もまた、大きな問題になっているといえる。現代ドイツの文脈に引き寄せていえば、これはナチス・ヒトラーが描かれたメディアをめぐる議論として噴出している。

ここでは、ナチス・ヒトラーが登場するメディアに関する議論について、映画を例にあげて確認したい。マルティーナ・ティーレ（Martina Thiele）は『映画のなかのホロコーストに関するジャーナリズムの論争』（*Publizistische Kontroversen über den Holocaust im Film*）を著し、ホロコースト映画が引き起こした議論を分析している[42]。このなかで M. ティーレは「ジャーナリズムの論争」について「公的に戦われた衝突」（ein öffentlich ausgetragener Streit）[43]と定義している。もちろんこの論争は「相手を目の前にした殴り合いではなく、メディアによって伝達された

---

[38] Ebd., S. 13.ただし括弧内筆者。
[39] マーシャル・マクルーハン著、栗原裕／河本仲聖訳：『メディア論――人間の拡張の諸相』、みすず書房、1987 年、7 ページ以下。
[40] Heiser, Sabine / Holm, Christiane, 2010, S. 7.
[41] Ebd., S. 14.
[42] Thiele, Martina: *Publizistische Kontroversen über den Holocaust im Film*. Berlin: LIT Verlag, 2007.
[43] Ebd., S. 19.

議論」を意味している[44]。論争の目的は意見の「差異を強調すると同時に、衝突のなかで民主主義的コンセンサスを模索する」[45]ことであるが、重要なのは「[歴史家、政治家などのうち] 誰が論争に参与しているか」[46]、および「誰が、なぜ、これやあれの意見を主張したのかということを、それに興味を持った一般大衆が追体験できること」[47]であるとしている。つまりジャーナリズムのなかで露呈したホロコースト映画をめぐる論争について、その主導的意見を大衆が追いかけられる点を重要視している。

このように現代ドイツはホロコースト映画をめぐって様々な角度から意見が戦わされてきた[48]。M. ティーレはこうした状況を「論争」と呼び、大衆を巻き込んで激しく議論が衝突している様子を描いている。しかし一方で、ジャーナリズムの論争は一部の人間の主張を大多数が追体験することを前提としている。それゆえ本論においては、M. ティーレの視点を拡大することが必要であると考えている。記憶のパラゴーネの議論で確認したように、記憶の論争は記憶内容と記憶媒体の両方を含むものである。言い換えるなら、記憶のパラゴーネは複数の記憶内容の真実性をめぐる争いであると同時に、複数のメディアの正当性をめぐる争いでもある。確かにジャーナリストが社会に与える影響を無視することはできないだろう。しかし、社会的文化的な視点から過去をめぐる記憶の衝突を描写しようとするとき、より複眼的で、よりマクロ的な視点が必要であるように思われる。

以上の理由から、本論文では交渉について次のように定義する。交渉とは、当事者同士が共同で同一視形成を目指す不断のプロセスである。このプロセスは複数の記憶の真実性をめぐって絶えず衝突や競合を繰り返し、また更新を迫るものである。このとき、同一視が完全に達成されて不変の過去像が実際に形成されるか否かは問題とない。本論において

---

[44] Ebd., S. 20.
[45] Ebd.
[46] Ebd., S. 21.ただし括弧内筆者。
[47] Ebd., S. 19.
[48] たとえば映画『シンドラーのリスト』に関する議論として、Weiss, Christogh (Hg.): *„Der Gute Deutsche". Dokumente zur Diskussion um Steven Spielbergs „Schindlers Liste" in Deutschland*. St. Ingbert: Werner J. Röhtig Universitätsverlag, 1995.

より重要な関心は、アイデンティティーの源泉である過去の記憶は唯一のものではなく、また一定不変のものではないという点にある。現代における記憶はメディア的問題と複雑に絡み合いながら、自身の正当性をめぐって衝突している。こうした文化的現象を集合的記憶の交渉と定め、それはどのようなメカニズムで起こっているのかを考察していく。

1：集合的記憶の流動性

個人的記憶であれ集合的記憶であれ、記憶は常に再構成されるものである。これはすなわち、記憶内容が将来にわたって安定的に保持される保証はないことを意味している。また、ある過去の出来事が、将来において保存された時点と同じ意味を保持したまま想起されるという保証はないことを意味している。なぜなら、ある過去が想起される時点は常に現代であり、それゆえ記憶は原則として常に現代の視点から再構成されるからである。現代に表象する過去像は、変化の可能性にさらされているのである。

本章は以上のような記憶の特徴を検証することを目的としている。はじめに個人的記憶は単独ではあり得ず、常に周囲や環境との関係のなかで可能となることを示す。特に個人的記憶と社会の関係性に着目し、両者は相互的に作用しあうことを確認する。次に、こうして確認した個人的記憶に対する社会的枠組みの働きについて取り上げ、時間的流れや空間的広がり、または社会的枠組みがその時々においてどのような位置づけにあるのかなどを、集合的記憶論の先行研究を振り返りながら確認する。以上の議論は、一貫して記憶は流動的であることを示すものである。つまり集合的記憶のダイナミズムに関する議論が本章の中心となる。特に、集合的記憶の下位概念であるコミュニケーション的記憶や文化的記憶、蓄積的記憶や機能的記憶などを中心に、一方から他方への移行プロセスを確認する。以上の考察を通じて記憶の流動性を示し、現代ドイツにおいて過去像が多様化している現象を説明する基盤を作る。

1-1：個人的記憶と社会

本節では、個人の記憶は社会によって支えられているということを示す。日常的な感覚では、記憶は個人の想い出によって構築されているといえるだろう。しかし実際は、個人的記憶の形成に与える社会の影響は非常に大きい。それでは、社会は個人的記憶にどのように作用するのだろうか。ここでは個人的記憶に対する社会の役割について、その輪郭を描く。

記憶研究自体はアリストテレスにまで遡り、その意味で記憶研究は2000年以上の歴史とそれに伴う膨大な研究量をもっている。また、19世紀後半にドイツの心理学者ヘルマン・エビングハウス（Hermann Ebbinghaus）によってはじめられた科学的記憶研究は、その後100年のあいだにさまざまな理論的変遷や実験がなされ、心理学のみならず医学や生理学、工学など他の分野からも研究成果を取り入れながらいっそう充実してきている[49]。特に1950年代にコンピュータをモデルとした情報処理理論が確立されて以降、情報保存や再生、抽象化など、記憶活動の一切が機械的に説明されるようになった。それゆえ記憶を研究対象とする「心理学とは，それ［コンピュータ］が作動するさいのプログラムを研究するのと類似した学問」[50]と見なされるようになっていったのである。

一方で、コンピュータモデル以外の視点から記憶へアプローチする記憶研究もみられる。神経科学および認知心理学の立場から『コミュニケーション的記憶』（*Das kommunikative Gedächtnis*）を著したハーラルト・ヴェルツァー（Harald Welzer）もそのひとりである。彼によれば、記憶はその持続時間および機能の面から次のように分類することができる。まず持続時間を分類基準としたとき、記憶は超短期的記憶（Ultrakurzzeitgedächtnis）、短期的記憶（Kurzzeitgedächtnis）および長期的記憶（Langzeitgedächtnis）の3つに分類される。超短期的記憶の持続時間はミリ秒単位であり、神経細胞内の出来事に限定される。短期的記憶は数秒から数分の持続時間を持つものであり、たとえば調べた電話番号をプッシュする場合などがあげられる。これには、言語を理解する場合などに用いられる「作動記憶」（Arbeitsgedächtnis）も含まれるとされている。長期的記憶は、これらの持続時間を超えるものであるとされている[51]。

---

[49] 太田信夫／多鹿秀継編：『記憶研究の最前線』、北大路書房、2000年、ｉページ以下。

[50] 岩本隆茂／上田悦子：行動心理学と認知心理学（III）、北海道大學文學部紀要38（2）、1990年、128ページ。Vgl. auch: Welzer, Harald: *Das kommunikative Gedächtnis. Eine Theorie der Erinnerung*. München: 1. Auflage (Beckôsche Reihe), 2005, S. 20.

[51] Welzer, Harald, 2005, S. 22f.

一方、機能面による分類は情報保存方法や貯蔵された情報の呼び出し方法を基準とし、以下の5つに分類される。すなわち、「エピソード記憶」（episodisches Gedächtnis）、「意味記憶」（semantisches Gedächtnis）、「プライミング」（priming）、「知覚記憶」（perzeptuelles Gedächtnis）および「手続き記憶」（prozedurales Gedächtnis）である[52]。ここでは特にエピソード記憶と意味記憶を中心に、これらの記憶がどのような特徴を持っているのかを確認する。

過去の出来事を意識的に想起し再構成する記憶は「エピソード記憶」と呼ばれている。この記憶機能は、現在までに体験した個々の出来事をひとつの自分史として再構成し、自己の一貫性やアイデンティティーを保証するものとして機能することである。他方「意味記憶」は「世界の知識」（Weltwissen）ないし「知識システム」（Wissenssystem）ともいわれ、たとえば言葉の意味や数式、法律やテーブルマナーなど、主に学習行為によって獲得される知識一般を指している。このとき、エピソード記憶と意味記憶の両者は相互作用的に関係しあっているとされている。意識記憶とエピソード記憶の関係について、H. ヴェルツァーは次のように述べている。

> 意味記憶なしにエピソード記憶は存在しえない。慣習すなわち社会的に共有されている法律や枠組みのシステムに諸経験（Erfahrungen）を当てはめる、という可能性なしに、ある体験（Erlebnis）が意識のなかで形を与えられることはなく、意識的に想起される経験とはならない[53]。

エピソード記憶は意味を与えられてはじめてエピソードとして認識され、また想起されるものであり、それゆえ意味記憶はエピソード記憶の前提である。したがってH. ヴェルツァーはエピソード記憶を人間特有のものとみなしている。なぜなら、ある事柄に意味づけしエピソードとして認識できるのは人間だけだからである。確かに一部の動物は学習によっ

---

[52] Ebd., S. 24. なお、エピソード記憶と意味記憶の傘概念は「宣言的記憶」（Declarative memory）とも呼ばれる。
[53] Ebd., S. 25.

て得た知識をもとにエサを見つけるなど、エピソード記憶に基づいた行動に近い行動をする場合もあるが、それは「学習したやり方のなかで状況に反応している限りにおいて［エサにありつくための知識を］想起しているのであり、しかし［動物］自身はそれを想起しているということを想起しているわけではない」[54]。知識を想起することと、知識を獲得した際の状況（たとえば、獲物を追い詰めたときのチームワークといった社会性など）を回想することは同義ではない。ある体験は社会的枠組みとしての意味記憶に当てはめられることによってはじめてエピソード記憶となるのであり、それゆえ想起には社会的枠組みが必要不可欠であることが強調されているのである。

これまで、エピソード記憶の前提として意味記憶が不可欠であることを確認した。これに対し意味記憶は、興味深いことに、体験や経験といったエピソードを通して獲得されるのである。すなわち、

> 意味記憶の内容は「世界の知識」、学習された知識、つまり社会的相互作用によって獲得された知識である一方で、この知識内容はエピソード的想起としてもあり得るのである。すなわち、これはコミュニケーション可能なものであり、社会的なフォームの形成として経験されたものである[55]。

学校や家庭での学習行為が意味記憶を獲得する契機であることはすでに述べたとおりであるが、しかし同時に、他者とのコミュニケーションを通して経験された自分史に刻まれるエピソード記憶にもなり得る。つまり意味記憶は、エピソードを形成する出来事によって獲得されるものであり、この意味で意味記憶はエピソード記憶なしには形成され得ないということができる。ここに、意味記憶とエピソード記憶の相互作用性が明らかとなる。エピソード記憶の保持は意味記憶を有することが前提となる一方で、意味記憶の獲得は社会的相互作用、すなわちエピソードを通して可能となる。両者は互いに補完し合うものであり、独立して存立することは不可能であるといえる。

---

[54] Ebd. ただし括弧内筆者。
[55] Ebd., S. 26.

このように長期的記憶は単一的なものではなく、複数の機能が互いに関連しあって構成されている。それゆえH. ヴェルツァーは「記憶は、現実をそのまま模写するのではなく、異なる方法とさまざまな機能に従って現実をフィルタリングし解釈する構成的システム」[56]であり「コミュニケーション的」（kommunikativ）[57]なものであると述べている。つまり記憶は、自己と社会の複雑な相互作用によって形成されるものなのである。

ここで、人間の記憶は神経回路内にのみ限定されるものではなく、コミュニケーションという外的相互作用に強く依存していることが明らかとなった。つまり、上述した意味記憶に関していえば、過去の思い出を形成するコミュニケーション（エピソード）は意味記憶によって可能となるが、一方の意味記憶はコミュニケーションを通して形成されるという、相互作用的で複雑なシステムであると解釈すべきであった。アメリカの社会学者ジェフリー・オリック（Jeffrey Olick）はこの点に注目し、記憶における個人と社会の関係性を以下のように描写している。その際のキーワードが 「コレクティヴ・メモリー」（collective memory）と「コレクテッド・メモリー」（collected memory）である。前者は集合的記憶すなわち個人の外部にある社会を、後者は集められた記憶すなわち個人の内部に刻み込まれた社会的規範などを意味している[58]。

コレクテッド・メモリーとは、社会的および文化的に形づけられた個人の記憶である。つまり、「想起は文化に特有なスキーマの助けを借りて行われ、ある集合に共有されている価値観や規範に従って取り扱われ、見聞きした経験は［スキーマに従って形成された］個人の豊富な経験コレクションに集約する」ものとされている[59]。スキーマとは主に心理学で用いられる用語であり、「複合的で階層的な認知構造であり、意味論的ネットワークの一部でもある。人間やシチュエーション、対象、場所もしくは出来事に関する、典型化された承認において意味を付与し組織化

[56] Ebd., S. 20.
[57] Ebd., S. 45.
[58] Olick, Jeffrey K.: *Collective Memory: The Two Cultures*. In: *Sociological Theory* 17:3. American Sociological Association, November 1999.
[59] Erll, Astrid, 2005a, S. 97. ただし括弧内筆者。

する」[60]という特徴を持っている。たとえば、心理学の実験においてもスキーマの個人的記憶への影響が確認されている[61]。したがってコレクテッド・メモリーは、文化的社会的スキーマによって形成される個人的記憶ということができるだろう。

一方コレクティヴ・メモリーは「シンボル、メディア、社会的制度、過去との社会的関連における実践行為のことであり、メタファー的に『記憶』として描かれるものである」[62]。過去との社会的関連における実践行為とは、たとえば伝統芸能や儀礼、記念式典などをあげることができる。シンボルやメディア、伝統芸能などは、過去の出来事やその意味を現代に伝える役割を果たしている。したがってコレクティヴ・メモリーは、情報の蓄積および媒介を可能にするものである。言い換えるならば、コレクティヴ・メモリーは過去の出来事を現代に伝えるメディアそのものであるともいえるだろう[63]。ところで、ドイツのメディア研究者であるジークフリート・J・シュミット（Siegfried J. Schmidt）によれば、メディアは次のような特徴を持っている。すなわち、

> メディアはわれわれの認知的、同様にコミュニケーション的可能性と機能を形成する。われわれが今日知っていることは、その大部分がメディアによって知っていることである。メディアは、われわれが何を想起し何を忘却するかを決定する。メディアは知の構造とその制御の連続化（Sequenzierung）をコントロールする[64]。

---

[60] Pethes, Nicolas/ Ruchatz, Jens (Hg.): *Gedächtnis und Erinnerung. Ein interdisziplinäres Lexikon*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch, 2001, S. 519ff.

[61]「出来事の記憶はまた、先行する期待に一致するように、そして、スキーマに首尾一貫するように、歪められる傾向がある。
それらは、その種のもっともありそうな出来事や、最も典型的な出来事へと形を変えられることがある。人は、実際に見たことよりも、自分が見るのを期待していたことを、記憶しているのだろう。」（ウィリアム・シュテルン：「現実的実験」、　U・ナイサー編、富田達彦訳：『観察された記憶―自然文脈での想起（上）』、誠信書房、1988 年、82 ページ。ただし、強調筆者。

[62] Erll, Astrid, 2005a, S. 97.

[63] 集合的記憶におけるメディア概念の詳細は後述する。

[64] Schmidt, Siegfried J.: *Medien- die alltäglichen Instrumente der Wirklichkeitskonstruktion*. In: Fischer, Hans Rudi / Schmidt, Siegfried J. (Hg.): *Wirklichkeit und Welterzeugung*. Heidelberg: Carl-Auer-Systeme

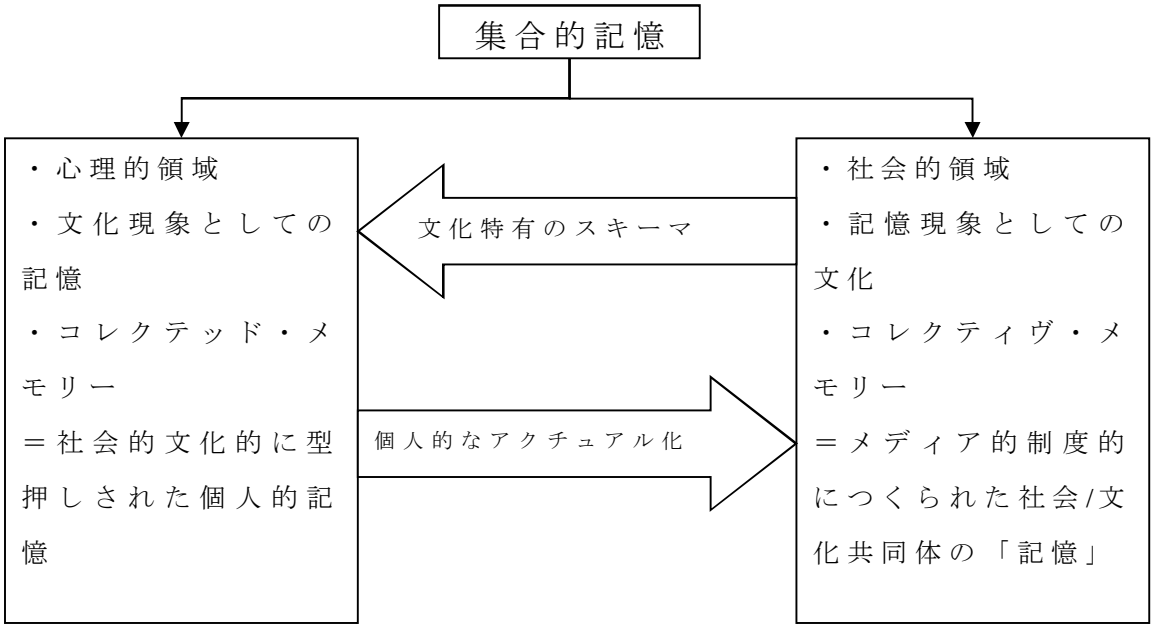
つまりメディアはわれわれの知識、すなわち何をどのように記憶するか、という機能を制御している。メディアのこうした機能面は、コレクテッド・メモリーにおいて確認したスキーマと同じ機能を果たしていることがわかるだろう。ここから、コレクティヴ・メモリーとコレクテッド・メモリーの関係について次のようにいうことができる。すなわち、過去を現代に伝えるメディアであるコレクティヴ・メモリーは、文化的社会的スキーマとして、コレクテッド・メモリーである個人的記憶の形成に関与しているのである。

これまでコレクティヴ・メモリーからコレクテッド・メモリーへの作用について確認してきた。それでは、逆方向の作用であるコレクテッド・メモリーからコレクティヴ・メモリーへの影響はどうであろうか。コレクテッド・メモリーはメディアやスキーマ、すなわちコレクティヴ・メモリーによって型押しされた個人的記憶であった。言い換えるならば、個人が現在保有している社会的価値観が個人的記憶の形を決定していた。このように考えたとき、コレクテッド・メモリーは常に社会的価値観であるスキーマを参照し続けているといえる。別の言葉でいえば、コレクテッド・メモリーはコレクティヴ・メモリーを常に現在化しているといえるだろう。A. エアルは、これを「社会的文化的スキーマが個人的記憶の形を決定するのと同様に、メディア的に制度的にあらわされた文化の『記憶』[すなわちコレクティヴ・メモリー] もまた、個人の中の『探求ポイント』(Ausblickspunkt) としてアクチュアル化されなければならない」[65]と説明している。この関係性について逆の視点からいえば、個人的記憶によってアクチュアル化されないコレクティヴ・メモリーは社会的にも忘却された状態にあり、その人に意識され続けるスキーマのみが価値を持ち続けるといえるだろう。たとえば、文字や文法がその典型である。古代エジプトの象形文字は現在でもメディアであることに疑いないが、しかしもはや日常的な価値は消滅してしまっている。象形文字を参照するひとがいなくなったことで文化的スキーマとしての役割を果たさなくなり、忘却の淵へと追いやられてしまったのである。

Verlag, 2000b, S. 83.

[65] Erll, Astrid, 2005a, S. 98. ただし括弧内筆者。

以上がコレクティヴ・メモリーとコレクテッド・メモリーの関係である。コレクティヴ・メモリーはコレクテッド・メモリーの形成に関与し、コレクテッド・メモリーはコレクティヴ・メモリーを参照し続けることでその価値を維持してきた。A. エアルはこうした両者の関係性を次の図にまとめている。



「集合的記憶概念」の二つの使われ方[66]

以上のようにコレクティヴ・メモリーとコレクテッド・メモリーの相互作用について確認してきた。コレクティヴ・メモリーはスキーマとしてコレクテッド・メモリーに影響を与え、コレクテッド・メモリーは常に参照するというかたちでコレクティヴ・メモリーに影響を与えていた。このとき、どちらが先に影響を与えるかということは問題にならない。この分類はあくまで分析上の措置であって、実際には不可分である。この考察におけるより重要な点は、個人的記憶の形成には個人内部のみならず、社会や文化などの外部も大きく関与しているという点であろう。こうして記憶研究は、「記憶を個人の精神活動としてだけで考えるのではなく、個人を取り巻く状況、社会、文化、時代背景との関連を含めて、広く記憶に関する問題をとらえ直そう」[67]という、社会的文脈と個人的

[66] Ebd., S. 97. ただし筆者により一部省略、改変。
[67]金児曉嗣／結城雅樹編：『文化行動の社会心理学』、北大路書房、2005

記憶の関係性を視野に入れた研究が意識されるようになってきたのである。

1-2：個人的記憶から集合的記憶へ

前節では、個人的記憶と社会や文化は相互作用的に関係していることを、コレクティヴ・メモリーとコレクテッド・メモリーという概念に従って提示してきた。ここでは、個人的記憶と相互作用的関係にある社会について、具体的にどのような社会が想定されているのかを確認する。特に記憶の社会的枠組みに焦点を絞り、記憶形成における外的要因を限定していく。

1945年にブーヘンヴァルト強制収容所で生涯を閉じたM. アルヴァックスもまた、個人的記憶と社会の関係性を探求した人物のひとりである。その功績は今日においてもなお高く評価され、現在の集合的記憶論に大きな足跡を残している。彼は個人的記憶と社会の関係に関する3つの著作を書き、それは「記憶三部作」と呼ばれている[68]。

これらの作品のなかで彼は、師であるアンリ＝ルイ・ベルクソン（Henri-Louis Bergson）の「記憶は純粋に個人的である」という視点から批判的に出発し、「文化現象としての記憶」（Gedächtnis als Kulturphänomen）という視点への転回を試みた[69]。M. アルヴァックスは社会内部において精神はいかにして協同的に働くか、社会的合意は精神活動をどのように構成するかという問題に取り組み、「集合的記憶」

年、8 ページ。金児らによれば、この領域は「文化心理学」と呼ばれている。

[68] それぞれ ñ*Les cadres sociaux de la mémoire*“, ñ*La Topographie légendaire des Èvangiles en Terre Sainte*òおよび ñ*La mémoire collective*ò（モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳:『集合的記憶』、行路社、1989 年）となっている。

[69] Pethes, Nicolas: *Kulturwissenschaftliche Gedächtnistheorien*. Hamburg: Junisu Verlag, 2008, S. 52. Vgl. auch: Erll, Astrid, 2005a, S. 14. Vortrag von Wetzel, Dietmar J.: *Maurice Halbwachs – kollektives Gedächtnis und Vergessen*. Institut für Soziologie, Universität Bern, Kolloquium Theorie, 21.10.2009, S. 4. http://www.soz.unibe.ch/unibe/wiso/soz/content/e5976/e7254/e8637/e8647/files17831/Vortrag.MauriceHalbwachs-KollektivesGedchtnisundVergessen.21.10.2009.pdf.（2012 年 9 月 27 日アクセス）

（mémoire collective）と「社会的枠組み」（cadres sociaux）という概念を用いながら個人的記憶は常に社会的に制限されていることを主張した。

M. アルヴァックスは個人的記憶形成のために必要な外的要因として、社会的本質である人間、人間を取り巻くさまざまな環境および社会で共有している共通の知識をあげている[70]。つまり、個人的記憶の想起は常に社会とのコミュニケーションのなかで行われるといえる。これについてM. アルヴァックスは、ロンドンの旅行者を例に説明を試みている。すなわり、ロンドンを旅行する者はたとえ一人で訪れたとしても、旅行を通じて個人的な思い出しか得られないというわけではない。ロンドンの街並みについて友人から見聞きしたこと、観光案内書で得た知識、子供のときに読んだロンドンを舞台とした小説など、あらゆるコミュニケーションを通して接触した他者との思い出もまた、そこには含まれるのである[71]。M. アルヴァックスはこの考え方を押し広げ、「われわれは、他の人びとの記憶に依拠できるからこそ、いつでもわれわれの欲するときに、想い出を想起できる」[72]と述べている。

個人と社会の関係性の考察は、M. アルヴァックスのこうした考え方を基礎として、文化科学的記憶論のなかでさまざまな発展をみせている。たとえばA. アスマンは著書『過去の長い影　想起の文化と歴史政策』（*Der lange Schatten der Vergangenheit. Erinnerungskultur und Geschichtspolitik*）のなかで、個人的記憶の特徴として次の4点を指摘している。

1. 時間的遠近法的であり、交換したり他者に譲渡したりできない
2. 想起は孤立的ではなく、他者の記憶とネットワーク化している
3. 想起は断片化されており、限定的で形式化されていない
4. 想起は流動的で不安定である[73]

---

[70] 安川晴基：「『記憶』と『歴史』」、『藝文研究』No.94、慶應義塾大学藝文研究会、2008 年、71 ページ。
[71] モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、3 ページ以下。
[72] 同上、40 ページ。
[73] Assmann, Aleida: *Der lange Schatten der Vergangenheit. Erinnerungskultur und Geschichtspolitik*. München: C. H. Beck, 2006, S. 24ff.

A．アスマンはこの4点を指摘する際、M．アルヴァックスを前提にしているとは明示していない。しかし、以下で確認するように、彼の考え方との高い親和性を見つけることができる。

1点目は、個人的記憶は他者と交換できないことを意味している。デジタルデータはコピーなどによって複数のコンピュータのあいだで共有できるが、個人的記憶の完全なコピーを他者と共有することは不可能である。M．アルヴァックスもまた、次のように述べている。すなわち、「すなわち、われわれの記憶は他人のそれと混じり合うことがないということも事実である」[74]。このように第一の特徴は、こうした個人的記憶の共有不可能性を意味している。

2点目に関して、個人的記憶はコミュニケーションを通して、他者の記憶と網目のように結びついていることを示している。第一で確認したように、個人的記憶をコピーして他者と共有することはできないが、しかしコミュニケーションを介して他者の記憶と重なり合うことは可能である。これはちょうど、M．アルヴァックスがロンドン旅行者を例に説明したことに該当する。ドイツの記憶研究者であるニコラス・ペテス（Nicolas Pethes）もまた、同様の問題について「カスパー・ハウザーのように完全に隔離されて育った子供は、想起を自由に行うことができない。なぜなら、彼の体験は社会的枠組みなしに起こったものだからである。」[75]と説明している。これらの例からわかるとおり、個人的記憶は他者との連関のなかではじめて存在可能となると理解されている。

3点目に関して、基本的に想い起されたものは「切り刻まれていて、それ以前もそれ以後もない断片化された瞬間である」[76]。つまり想い起される過去は、常に全体の一部分だけであり、過去の出来事を完全に見渡せる想起というのはあり得ないのである。これについてM．アルヴァックスは、学校の教師と生徒を例にあげている。教師と生徒は、同じ教室のなかで学校生活を共に過ごしており、教室内の経験を共有している。しかし数年後に教師とその当時の生徒が再び出会ったとき、生徒が覚えている出来事を教師は想起できない場合があると指摘している。教師が

[74] モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、46 ページ。
[75] Pethes, Nicolas, 2008, S. 54.
[76] Assmann, Aleida, 2006, S. 25.

想起できる出来事は、せいぜい卒業式などの年中行事のワンシーンなどであろう。これに対して生徒たちは、日々の教室内の出来事をありありと語ることができる[77]。なぜなら、過去の出来事はそのすべてが想起されるのではなく、特に印象深い出来事などが記憶されているに過ぎないからである[78]。生徒にとっては新鮮で刺激に満ちた学校生活も、教師にとっては毎年繰り返されるルーティンワークなのである。それゆえ、同じ時間を共有しているにもかかわらず、教師はより断片的にしか想起できないのである。

このように記憶は断片化されているが、断片化した記憶をつなぎ合わせてひとつの出来事を再構成するために、A. アスマンは「物語り」（Erzählung）が必要であるとのべている。すなわち、「想起は物語りによって後付け的に形式と構造を手に入れる。こうした形式や構造は、同時に想起を補い安定化させる」[79]。つまり物語ることは、記憶の断片をつなぎ合わせ、ひとつのストーリーを完成させる働き意味している。こうした物語り行為は、自己の次元と他者の次元との両方で行われる。自己の次元について、ドナルド・E・ポーキングホーン（Donald E. Polkinghorne）は、自己語り（Selbst-Narrative）は断片化した想起を結びつける働きがあると述べている。すなわち、「自己語りは過去の出来事に関するばらばらの想起や現代的視点からの確信と、体験や将来において想像的に予期される行為を互いに結びつける」[80]。このように、自己語りは「ばらばらの想起」（disparate Erinnerungen）に確信をもたらすものである。想起は断片的であるが、その時その時に応じた興味関心に従って物語ることを通して、これに一貫性と連関性を与えことができるので

---

[77] モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、7 ページ以下。

[78] 認知科学の実験において、左右の耳それぞれに異なる情報を聞かせながらどちらか一方の情報を覚えるよう指示をする実験がある。この場合、指示がなかった方の耳に流された情報は実際に耳に届いていたにもかかわらず被験者に保持されていない。これは興味関心に従って記憶のフィルターに選別されていることを示している。実験については：岩本隆茂／上田悦子、1990 年参照。

[79] Assmann, Aleida, 2006, S. 25.

[80] Polkinghorne, Donald E.: *Narrative Psychologie und Geschichtsbewußtsein Beziehungen und Perspektiven*. In: Straub, Jürgen (Hg.): *Erzählung, Identität und historisches Bewußtsein. Die psychologische Konstruktion von Zeit und Geschichte*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1998, S. 33.

ある。つまり自己語りとは、断片的な過去の破片を現代の視点から再構成しストーリーを紡ぎだす行為なのである。

一方の他者の次元に関して、M. アルヴァックスは、家族間の会話が幼児期の記憶形成に関与していることを強調している。M. アルヴァックスは『集合的記憶』のなかで、フランスの小説家スタンダール（Stendhal）が幼児期の思い出について書いた部分を引用している。

> 「私の最初の想い出は、私の従姉妹である、ピゾン・デュガラン夫人の頬ぺたか額に噛みついたことである。［中略］…その場面がいまも目に見える。たぶん、その場で私がきつく叱られ、またたえず私がその話を聞かされたからであろう。」
>
> 「『もうちょっとでこの子は死ぬところだった』と祖父は言った。私はその出来事を想像する。しかしたぶんそれは直接の想い出ではない。それはずっと昔に、そして人がそれについて私にはじめて話して聞かせたころに、それについて私がこしらえたイメージの想い出にすぎない。」[81]

M. アルヴァックスは、こうした引用を用いて、過去の記憶形成において他者とのコミュニケーションが重要な役割を果たしていることを主張している。以上のように、記憶は不連続で断片化している。断片化された記憶は語りによって再構成され、出来事としてのストーリーを獲得するのである。

4点目は、時間の経過や環境の変化によって、想起内容が変化することを示している。3点目において示した通り、記憶は語りによって想起される。しかし、個人の成長や、たとえば学校を卒業して社会に出るなどの所属先の変化によって、記憶を語るときの視点が変化する。記憶は常に現在の視点から語られるがゆえに、そのときそのときの状況に応じた語り口になる。M. アルヴァックスはこれについて、想起は現在の視点から行われるがゆえに、ある出来事を思い出すことについて、過去と現在とではその内容が異なっていると述べている。

---

[81] モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、22 ページ以下。

子供は成長するに従って、とくに成人になると、［中略］より明確で反省的な仕方で、彼が属しているこれらの集団の生活と思考に参加するのである。彼がその過去について抱く観念が、それによってどうして変様されないでいられようか。彼が獲得する新しい観念、事実についての観念、あるいは反省や考えが、どうして彼の想い出に反作用しないでいられようか。われわれが何度も繰り返し述べたように、想い出とは大部分、現在から借用した所与の力を借りて過去を再構成することであり、その一方では、以前の時代になされた別の再構成によって準備された過去の再構成である。そのためかつてのイメージは、すでに著しく変えられている[82]。

3点目で確認したように、記憶は語られることによって一貫性と安定性を得るものであった。しかしここで確認したように、時代の移り変わりやそれに伴う思考様式の変化などによって、記憶を語る視点が変化する。それによって、かつての語りといまの語りに差異が生じ、同じ出来事であっても想起される内容に違いが出てくるのである。

このように個人的記憶は、それを取り巻く環境に強く依存していることが明らかとなった。M. アルヴァックスが個人的記憶の形成に関与する「社会的枠組み」と呼んだそれは、すなわち、個人的な記憶はそれ自身のみでは成立しないことを明確に示すものである。これによって、外的要因を主眼に据えた記憶研究である集合的記憶論や文化的記憶論の重要性を指摘することができる。つまり記憶を問題とするときには、記憶の社会的文化的領域が常に考慮されなければならないのである。ドイツの記憶研究者ヤン・アスマン（Jan Assmann）は、これについて次のようにまとめている。

一般に記憶は、さしあたって純粋に［人間の］内的現象として考えられ、個人の脳のなかに位置づけられている。つまり、大脳生理学、

[82] 同上、72ページ以下。ただし強調筆者。

神経学、心理学の主題としてとらえられているのであって、歴史的文化科学の主題としては理解されていない。しかし、何がこの記憶を内実のあるものとし、いかにその内容を組織し、また、何をいかに長く保持しうるのかということは、内的な能力や制御能力の問題ではない。むしろ外的な、社会的、文化的枠組み条件の問題である[83]。

ところで、A. エアルは記憶の社会的文化的領域、つまり集合的記憶がカバーする領域として「神話、伝統、歴史認識（歴史的意識）、アーカイヴ、カノン、記念碑、記念式典、家族内のコミュニケーション、生活経験と神経ネットワーク」などをあげている[84]。これは、記憶は非常に多彩な外的要因から形成されていることを端的に示しているといえるだろう。つまり集合的記憶はこれまで確認してきた社会的条件だけではなく、次節で検討するような文化的、時代的枠組みも問題になってくるのである。

1-3：記憶の時間的枠組み—コミュニケーション的記憶と文化的記憶

集合的記憶は個人の記憶の社会的枠組みであり、個人的記憶の形成に不可欠なものであった。一方でM. アルヴァックスは、集合的記憶が維持されるシステムにほとんど言及していない。そこでJ. アスマンは、この集合的記憶に時間的な視点を導入しながら、集合的記憶が社会や文化のなかで維持されるメカニズムを考察している。ここでは、J. アスマンが提唱する集合的記憶維持のメカニズムを概観する。次にJ. アスマンが抱えている問題点を指摘し、最後に集合的記憶に時間的枠組みが導入された結果、集合的記憶論の議論にどのような新規性がもたらされたのかを確認する。

---

[83] Assmann, Jan: *Das kulturelle Gedächtnis. 5. Auflage dieser Ausgabe*. München; C. H. Beck, 2005, S. 19ff.（邦訳：岩崎稔：「ヤン・アスマンの《文化的記憶》1」、『未来』Nr. 382、未来社、1998 年、20 ページ。）

[84] Erll, Astrid: *Literatur als Medium des kollektiven Gedächtnisses*. In: Erll, Astried/ Nünning, Ansger (Hg.): *Gedächtniskonzepte der Literaturwissenschaft*. Berlin, New York: Walter de Gruyter, 2005b, S. 250.

J. アスマンは、M. アルヴァックスの集合的記憶は文化伝承のメカニズムを説明するために適していると見なしている。特に、M. アルヴァックス理論から自らの記憶論に導入したいものとして、「『社会構築的』と名付けることができる過去のコンセプト」[85]をあげている。

> 過去は社会的構築物であり、その内実は各々の現代における関連性の枠組みや意味づけの欲求によって生じるものである。過去は自然発生的に並べられていくのではなく、文化的創造物なのである[86]。

このようにJ. アスマンは、M. アルヴァックスの理論から過去は社会的に文化的に構築されるものであるというコンセプトを見出し、そこを自身の記憶論の出発点としている。

このとき J. アスマンは、M. アルヴァックスの集合的記憶を上位概念とし、その下に時間的距離を基準としてふたつの下位概念を設定している。ひとつは社会的枠組みと、もうひとつはそれよりさらに射程の広い文化的枠組みである。このふたつは、それぞれコミュニケーション的記憶（kommunikatives Gedächtnis）と文化的記憶（kulturelles Gedächtnis）と名づけられている。コミュニケーション的記憶は日常的コミュニケーションに基礎づけられている記憶であり、これに対して文化的記憶はシンボル的要素の高い文化的対象化によって維持されているものを基準としている[87]。ここではまずはじめにコミュニケーション的記憶について検討し、次に文化的記憶について概観する。

コミュニケーション的記憶とは「新しい過去に関係している想起」であり、「同時代の人々と分け合っている想起」のことである[88]。新しい過去とは比較的直近の過去を意味しており、おおよそ 3 世代から 4 世代くらいにわたって持続し得るものと定義されている[89]。それゆえ、ある共同体のなかのある世代にとって、「あの時」は誰もが振り返ることのでき

---

[85] Assmann, Jan, 2005, S. 47.
[86] Ebd., S. 48..
[87] Erll, Astrid, 2005a, S. 27.
[88] Assmann, Jan, 2005, S. 50.
[89] Ebd.

る出来事である。またそのような出来事は、M. アルヴァックスの箇所で確認したとおり、日常生活のコミュニケーションによって想起が繰り返されることを通して個人的記憶に定着していく[90]。

J. アスマンのコミュニケーション的記憶の重要な特徴は、記憶の担い手が人間に限定されていることである。

> この記憶は集団に帰属し、時代のなかで生起し時代とともに消滅する。より正確に言うならば、記憶の担い手とともに、である。その記憶を体現していた担い手が死ぬと、新しい記憶に席を譲ることになる[91]。

つまり、コミュニケーション的記憶は人間と人間の直接的なコミュニケーションによって媒介されるものである[92]。しかし記憶の担い手である人間には寿命があるがゆえに、コミュニケーション的記憶にも同じように寿命が設定されている。J. アスマンがコミュニケーション的記憶の耐久期間を 3 世代から 4 世代､年数でいえば 80 年から 100 年と定めているのはそのためである[93]。

一方、文化的記憶は「過去における固定点に向けられている」ものであり、その「過去はここでは想起がそれと結びついているシンボル的象徴にかなりの程度凝固したものとなっている」[94]。この「過去における固定点」は、コミュニケーション的記憶は比較的直近の過去を指していたのとは異なり､「非常に遠く離れた過去」[95]を意味している。遠く離れた過去の例として､J. アスマンは出エジプトやトロイヤ戦争などをあげている[96]。この例にみられるように、文化的記憶の対象となるものは神

---

[90] アーリック・ナイサー :「スナップ写真か水準点か？」、U. ナイサー編、富田達彦訳、1988 年、57 ページ以下も参照。
[91] Assmann, Jan, 2005, S. 50.
[92] Vgl, auch: Berek, Mathias: *Kollektives Gedächtnis und die gesellschaftliche Konstruktion der Wirklichkeit. Eine Theorie der Erinnerungskulturen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz GmgH & Co. KG, 2009, S. 43.
[93] Assmann, Jan, 2005, S. 50, 56.
[94] Ebd., S. 52.
[95] Berek, Mathias, 2009, S. 43.
[96] Assmann, Jan, 2005, S. 52.

話時代や絶対的な過去である。J. アスマンによれば、この神話は「機能的な歴史であり、現在を起源から照らす目的のために語られている歴史」[97]という役割を持っている。つまり、自身の起源の拠りどころとなる「集合のアイデンティティー」（Kollektives Identität）[98]として機能するものである。

J. アスマンは、この集合のアイデンティティーについて、日常のアイデンティティー（Alltagsidentität）とは異なっており区別されると述べている。「それ［集合のアイデンティティー］は日常のアイデンティティーではない」[99]。集合のアイデンティティーは、祭りのような非日常と結びついており、それゆえ祭典的なコミュニケーション（zeremonielle Kommunikation）に結びついている。こうした祭典におけるコミュニケーションは形式化されており、儀礼や儀式などの決まった形のなかで行われると述べている[100]。したがってJ. アスマンにとって文化的記憶とは、祭りや儀式などの祭典と不可分であるということができる。

特徴的なのは、文化的記憶は定形化された形式と不可分であるため、その伝承者として専門家を必要とする点である[101]。たとえば詩人ホメロスが叙事詩『イリアス』や『オデュッセイア』などでトロイヤ戦争を物語ることや、宗教儀式におけるシャーマンの所作、伝統的舞踏の踊り手などはその典型である。こうした専門家の存在によって、時代を超えても神話時代の過去を回想することが可能となるのである。同時に、その方法を伝授するための組織や制度も整備される必要がある。このように、文化的記憶を不変的に継承するためには、専門家とその育成を行う基盤が必要なのである。

J. アスマンはコミュニケーション的記憶と文化的記憶の相違点などについて、次の表にまとめている。

---

[97] Ebd.
[98] Ebd., 53.
[99] Ebd.
[100] Ebd.
[101] Ebd., S. 54.

	コミュニケーション的記憶	文化的記憶
内容	自伝的枠組みにおける歴史経験	神話的原史、絶対的過去の出来事
形式	非形式的、わずかに形式的、自然発生的、相互作用によって発生、日常	設立された、高程度形式化された、セレモニー的コミュニケーション、祭り
メディア	器官的記憶、経験、見聞における生き生きとした想起	不変的客体化、言葉や絵や踊りなどによる伝統的シンボル的コード化/演出
時間構成	80-100年、現代と共に移ろう3-4世代の時間地平	神話時代の絶対的過去
担い手	不特定、想起共同体の時代の証人	専門化された伝統の担い手

コミュニケーション的記憶と文化的記憶[102]

この対比から明らかなことは、コミュニケーション的記憶と文化的記憶のあいだには明確な時間的断絶が横たわっていることである。J. アスマンは、この断絶をフローティング・ギャップ（floating gap）と呼んでいる[103]。まだ文字が発明されていない古代ギリシャの歴史学では、歴史は神話時代からはじまり、次いで直近の、おおよそ80年から100年前の出来事が語られるといわれている[104]。つまり、神話時代と直近の過去のあいだが抜け落ちて、空白の期間となっているのである。この例としてJ. アスマンはコンゴの部族に関する調査をあげており、そこでは神話時代とその後に語られる出来事のあいだの空白が、時代変遷とともに推移する様子を観察することができる。それによれば、1880年当時の調査では1800年の出来事から語られたのに対して、1960年には1880年の出来事から語られたとしている[105]。このようにフローティング・ギャップは、神話時代と直近の過去のあいだを橋渡しするものがなく、つまり「両端はあるが真ん中がない」（beide Enden ohne Mitte）[106]という状態である。このとき、ギャップの両端、すなわち一方の神話時代を文化的記憶と、次に語

[102] Ebd., S. 56.
[103] Ebd., S. 48.
[104] Ebd., S. 49.
[105] Ebd.
[106] Ebd., S. 50.

られる直近の過去をコミュニケーション的記憶と説明している。このように両方の記憶のあいだには時間的空白が横たわっており、この埋めがたい断絶が両記憶を特徴づけているといえる。

集合的記憶を時間的基準に従って分類したコミュニケーション的記憶と文化的記憶であるが、集合的記憶の研究者であるマティアス・ベレク（Mathias Berek）は、J. アスマンの記憶概念に対する批判として次のものをあげている。第一に、神話時代という遠い過去であっても日常のコミュニケーションによって現在化されなければならない。M. アルヴァックスの集合的記憶論において、記憶は現在の視点からコミュニケーションを通して再構成されることが確認されていた。したがって、文化的記憶もまた現在のコミュニケーションのなかに想起・再構成されるのである。第二に、現代はマスメディアが高度に発達しており、宗教的儀式も数十年前の過去の話題も、すべてマスメディアによって伝達されている。それゆえJ. アスマンの記憶モデルでは現代の文化現象を記述することはできない。J. アスマンはエジプト学の専門家であり、それゆえ彼の研究対象は確かにメディアの発達していない古代が中心である。それゆえ、そうした時代の研究から作り上げた記憶モデルでは、社会の形が全く異なる現代を分析することは難しいといえるだろう[107]。

これに加えて、文化的記憶のコンセプトは次の点でも現代社会になじまないといえる。本節で述べた通り、J. アスマンは文化的記憶を集合のアイデンティティーとして機能するものととらえていた。しかし、**0：概念定義**においてA. アスマンを引用して確認したことは、集合の構成員ひとりひとりに共有されているアイデンティティーはない、というものであった。それゆえ、文化的記憶を集合のアイデンティティーとする文化的記憶という概念もまた、理想的なものに過ぎないといえる。

M. ベレクはこうした批判を前に次のような提案を行っている。つまり、コミュニケーション的記憶と文化的記憶を集合的記憶から分離させた記憶領域と見なすのではなく、集合的記憶のさまざまな「様態」（Modi）として見なす、というものである[108]。M. ベレクは、アイデンティティ

[107] Berek, Mathias, 2009, S. 44.
[108] Ebd., S. 45.

一の形成は特定の祭典などといった形式のなかで形成されるものと、日常的なコミュニケーションのなかで形成されるものがあることを指摘している。これと同様に、コミュニケーション的記憶と文化的記憶も、集合的記憶を形成するさまざまな様態のひとつであるといえる。

J. アスマンは集合的記憶に時間的広がりを与え、それによって文化的記憶とコミュニケーション的記憶という集合的記憶のふたつの様態を描き出した。このとき、各々の記憶が伝達されていくメカニズムとして、それぞれメディアと担い手という概念が導入された。つまり集合的記憶が時間を超えて保持され、また文化や社会の構成員に伝達され共有されるためには、メディアが必要であることを明らかにしたのである。

M. アルヴァックスは著書『集合的記憶』において、メディアを特に意識した議論を行ってはいない。たとえば同書第4章の「集合的記憶と空間」において、家具や骨董品や都市、法律や経済や宗教などが話題となっているが、集合的記憶を保存し伝達するといった体系的な位置づけは行われていない。もちろん、確かにM. アルヴァックスは次のように述べて、過去の想起にはメディアが欠かせないことを示唆している。「このようにして、空間的枠の中で展開しないような集合的記憶は存在しない。［中略］もし過去が実際にわれわれを取り囲む物的環境によって保持されていなければ、過去を取り戻せるということは理解されないであろう」[109]、と。しかしながら別の箇所では「家具、装飾、絵画、台所用品や置物などは、集団の内部で流通しており、［中略］昔の社会的慣習や社会的栄誉を想起させる。」[110]と述べており、これは次章で確認するメディア機能のなかのキュー（cue）にのみ該当する。ここから、彼が指摘するメディアは非常に限定的な意味で用いられているといえる。

一方でJ. アスマンは、文化的記憶とコミュニケーション的記憶それぞれにメディアと担い手を設定するなど、集合的記憶の様態に応じて体系的にメディアを割り当てている。J. アスマンは文化が伝達され続ける「結合性の構造」[111]（die konnektive Struktur）に焦点を絞り、その構造の根

[109] モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、182 ページ。
[110] 同上、164 ページ。
[111] Assmann, Jan, 2005, S. 16.

本原理を「反復」（Wiederholung）と「現在化」（Vergegenwärtigung）であるとした[112]。J. アスマンはこのふたつを、非文字文化においては儀式のなかに、文字文化においては文字のなかに見て取っている[113]。このようにJ.アスマンは集合的記憶におけるメディアの役割を明確にしたうえで、各文化形態や記憶の様態に当てはまるメディアおよび担い手を定義しているのである。

以上のようにJ. アスマンは、集合的記憶に時間的な枠組みを導入し、持続時間が比較的短いコミュニケーション的記憶と、持続期間がより長い文化的記憶という下位概念を提唱した。これに合わせて、それぞれの記憶を保持し現在化するものとしてメディアを取り入れた。集合的記憶にメディアを体系的に組み込むことは、M. アルヴァックスには見られなかったことである。ここに、集合的記憶に時間的枠組みを導入することと併せて、集合的記憶とメディアの関係性という視点が登場するのである。確かにJ. アスマンが想定するメディアの範囲では、現代社会の高度に複雑化したメディアの状況に当てはめることはできないという批判もあった。しかしそれでもなお、J. アスマンが集合的記憶とメディアの関係を体系化したことにより、集合的記憶論が大きな前進を果たしたといえる。

1-4：集合的記憶のダイナミズム—機能的記憶と蓄積的記憶

前節は集合的記憶の下位概念であるコミュニケーション的記憶と文化的記憶について概観してきた。また、集合的記憶に時間的視点を導入した結果として、記憶の反復性と現在化を可能にするものとしてメディアが体系化されたことも取り上げた。ここでは以上を踏まえ、メディア化された集合的記憶は社会内部でどのような状態として現れるかを確認する。特にA. アスマンが提唱する集合的記憶の下位概念「機能的記憶」

---

[112] Ebd. S. 17.

[113] Ebd., S. 17ff. なお、J. アスマンが同書のなかで議論した文化的記憶やコミュニケーション的記憶のメディアのなかに、表で確認したように文字は含まれていない。ここで議論されている文字は、ハイカルチャーとしてのカノン（Kanon、たとえば文学など）が継承される仕組みの文脈で言及されている。

（Funktionsgedächtnis）および「蓄積的記憶」（Speichergedächtnis）に着目し、これらが流動的に変化するという点に焦点を当てて論を進めていく。

A．アスマンは、過去を描写するための方法として歴史と記憶があることから出発している[114]。A．アスマンは、M．アルヴァックスら集合的記憶研究者の理論について、そのなかで歴史と記憶がどのように区別されているのかを分析した。この分析結果を端的に示すために、A．アスマンが引用したフランスの記憶研究者ピエール・ノラ（Pierre Nora）の次の言葉を確認する。

> 記憶と歴史、両者は決して同義語ではなく、今日われわれが意識しているように、どの観点からみても対立している。（…）記憶とは常にアクチュアルな現象、永遠の現在において体験される結びつきである。それに対して歴史は過去の表象だ。（…）記憶は思い出を聖なるものの領域に移し、歴史は思い出をその領域から追放する。歴史の仕事とは脱魔術化することだ。記憶は集団から生まれ出て、その集団をつなぎ合わせる。（…）それに対して歴史は皆のものであり、誰のものでもない。それゆえ歴史は普遍的なるものにかなっている[115]。

記憶は現在における集団の結びつきに関係しているのに対して、歴史は集団と現在から切り離された普遍的な過去である。A．アスマンは次のようにも説明している。記憶は「構成主義的で、アイデンティティを確保する性格」であり、これに対して歴史は「客観的で中立」である、と[116]。この場合の構成主義的（konstruktivistisch）とは、「記憶が［中略］集団

---

[114] 歴史と記憶の区別をめぐる問題については、補論 2 を参照。
[115] 原著：Nora, Pierre: *Zwischen Geschichte und Gedächtnis*. Berlin: 1990, S. 12ff. ただし A．アスマンより引用。Aleida, Assmann, 2003, S. 132.（翻訳：A．アスマン著、安川晴基訳、2007 年、161 ページ。）
[116] Assmann, Aleida, 2003, S. 133.（翻訳：A．アスマン著、安川晴基訳、2007 年、162 ページ。）

の構成と存続に直結している」[117]という機能を指していると思われる。つまり記憶は集団に結びついており、現在の視点からアイデンティティを構成するものであり、一方の歴史は集団から分離しており、現在とのつながりを失ったものである、といえる。

しかし A.アスマンはこの対比を無条件に受け入れているのではなく、むしろ「このように解された記憶と歴史の対立を維持することが、ますます困難になっていることを認めなければならない」[118]と述べている。なぜなら、一方で歴史と記憶はまったくの別物ではないという主張の正当性も確認されているからである。そこで A. アスマンは、歴史と記憶の対立について次のような提案を行っている。

> 歴史と記憶を著しく対極化することは、両者を完全に同一視することと同様に、満足のいくものではないように思われる。それゆえ以下では、歴史と記憶を想起の二つの様態として確保することを提案したい。この二つの様態は、必ずしも互いに排除して押しのけ合う必要はない[119]。

このように A. アスマンは、歴史と記憶を「二つの互いに補い合う想起の様態として理解すること」[120]を提案した。こうして、A. アスマンはふたつの記憶概念を提案するのである。これまで議論してきた歴史に該当するのが蓄積的記憶であり、記憶に該当するのが機能的記憶である。言い換えるなら、あらゆる過去描写や想起の様態を、蓄積的記憶と機能的記憶というカテゴリーに再分類しようと試みたのである[121]。蓄積的記憶は、現在とのつながりを失った過去描写や想起の様態を、機能的記憶は現在とのつながりを保ったアイデンティティの源泉である過去描写や想起の様態をあらわしている。

---

[117] Ebd., S. 131.（翻訳：同上、159 ページ。）
[118] Ebd., S. 133.（翻訳：同上、163 ページ。）
[119] Ebd., S. 133ff.（翻訳：同上。）
[120] Ebd., S. 134.（翻訳：同上。）
[121] この分類の妥当性については今後さらなる検討を行う必要がある。少なくとも A. エアルは「過去描写にはふたつの形式がある。ひとつは歴史学であり、もうひとつは文化的記憶である」と述べ、歴史学と集合的記憶を明確に区別している。

さて、蓄積記憶と機能的記憶に分類することは、われわれに何をもたらすのだろうか。この問いに答えるためには、A. アスマンの集合的記憶の基盤を確認する必要があるだろう。A. アスマンもまた、J. アスマンの集合的記憶論を受け継ぐ形で、集合的記憶にとってメディアは必要不可欠であると見なしている。A. アスマンの主著である『想起の空間』（*Erinnerungsräume*）が出版される前年に、彼女は論文のなかで次のように述べている。

> 産業化された国の文化的記憶は、記憶保存と知識媒介を行う［内なる心的記憶に対して］外的なデータ蓄積機関と制度によって支えられている。文化的記憶の次元においては、本や映画のような物的なデータ移送手段に、体験や想起、知識を移し替えるということが決定的な役割を果たすようになる[122]。

このように集合的記憶は、物的なデータ移送手段すなわちメディアに移し替えられており、A. アスマンはこのことこそが重要であると考えている。ここで注目すべき点は、J. アスマンが『文化的記憶』のなかで分析対象としていたケースと異なり、「産業化された国」における「本や映画」の集合的記憶が対象となっていることである。つまり、J. アスマンと比較して、A. アスマンの記憶論はより現代に近い社会構造の集合的記憶を対象としていることがわかる。したがって、A. アスマンの集合的記憶論の意義は、本論文の関心に引き寄せて述べるならば、現代におけるメディアと集合的記憶の関係を分析するモデルとして、非常に有効なのである。それゆえ A. アスマンの問いは次のように言い換えることもできるだろう。現代社会において、メディア化された集合的記憶はどのように現れるのか、と。この問題を解くモデルが、A. アスマンの蓄積的記憶と機能的記憶なのである。以下では、蓄積的記憶と機能的記憶の特徴や社会における役割について、詳しく検討していく。

---

[122] Assmann, Aleida: *Vier Formen des Gedächtnisses*. In: *Erwägen, Wissen, Ethik*. Nr. 13, 2. Stuttgart: Lucius & Lucius Verlagsgesellschaft mbH, 2002, S. 189. ただし括弧内筆者。

はじめに、ふたつの記憶を対置させ、機能的記憶と蓄積的記憶のおおよその輪郭を確認する。すでに説明した通り、A. アスマンは主著『想起の空間』において記憶と歴史の区別から出発している。この区別について A. アスマンは、記憶を機能的記憶に、歴史を蓄積的記憶に置き換えたことを確認した。この置き換えを行う際に、A. アスマンは「住まわれた記憶」（das bewohnte Gedächtnis）および「住まわれざる記憶」（das unbewohnte Gedächtnis）という言葉も用いている。住まわれた記憶は記憶ないし機能的記憶を、住まわれざる記憶は歴史ないし蓄積的記憶を意味している。それでは、A. アスマンはこのふたつの記憶についてどのように説明しているのだろうか。A. アスマンは『想起の空間』のなかで次のように述べている。

> 住まわれた記憶は、
> ―何らかの担い手と結び付いている。それは集団、機関、個人でありうる。
> ―過去、現在、未来を橋渡しする。
> ―ある部分を想い起し、ある部分を忘れることで選択的にふるまう。
> ―アイデンティティの輪郭を描き、行為に規範を与える諸価値を媒介する。
> 住まわれざる記憶は、
> ―特定の担い手からは切り離されている。
> ―過去を現在と未来から根本的に切断する。
> ―何にでも関心を抱く。すべてが等しく重要だ。
> ―真実を突きとめ、その際に価値や規範を保留する[123]。

この説明について、一番目と二番目は現代との社会的および時間的関連性を、三番目は記憶のあり方を、四番目は記憶の働きを表している。つまり、住まわれた記憶と住まわれざる記憶を区別する基準は、以上の観点にあるといえるだろう。これはすなわち、機能的記憶と蓄積的記憶の区別の基準も同様であることを意味している。

---

[123] Assmann, Aleida, 2003, S. 133.（翻訳：A. アスマン著、安川晴基訳、2007 年、162 ページ。）

このような基準に従って区別される機能的記憶と蓄積的記憶に関して、その内実はどのように異なっているのだろうか。はじめに機能的記憶について確認しよう。A.アスマンは機能的記憶について、「機能的記憶は、選択、関連付け、意味形成のプロセスを［…］根源とする習得的記憶を問題とする」[124]ものと述べている。加えて、先述した住まわれた記憶の特徴を見てみると、一番目に「何らかの担い手と結び付いている」とある。これは現代社会の機関や制度と今なお関係している記憶を意味している。このふたつを組み合わせると、機能的記憶について次のようにいえるだろう。すなわち機能的記憶は、現在の視点による必要性から選択され、意味づけされるものである、と。この例として、ヒトラーの書いた『我が闘争』(*Mein Kampf*) をあげることができるだろう。この本はヒトラー政権下ではほぼバイブルのような扱いであったが、現在はヒトラーの歪んだ思想を代表するものと捉えることができる。戦後ドイツにおいて『我が闘争』は発禁扱いであるが、一方で他国においては翻訳版が出版されている。この例として興味深いのは、2008 年に日本で漫画版の『我が闘争』[125]が出版されたことである。またドイツにおいても、ミュンヘンの現代史研究所（Instititut für Zeitgeschichte）において注釈本の出版が企画されている[126]。このように『我が闘争』は、出版から現在に至るまで、その社会的意味を変えつつもさまざまな機関と結びつきながら途切れることなく出版され続けている。このことから、『我が闘争』は現代においてナチスに関する機能的記憶のひとつであるということができる。

他方、蓄積的記憶はどのような性格なのであろうか。住まわれざる記

---

[124] Assmann, Aleida/ Assmann, Jan: *Das Gestern im Heute. Medien und soziales Gedächtnis*. In: Merten, Klaus/ Schmidt, Siegfried J./ Weisenberg, Siegfried (Hg.): *Die Wirklichkeit der Medien. Eine Einführung in die Kommunikationswissenschaft*. Opladen: Westdeutscher Verlag, 1994, S. 122.

[125] ヒトラー著、円尾公佑編:『わが闘争』、イースト・プレス、2008 年。この漫画に関する記事として、石川智也著:「売れる「わが闘争」漫画版 苦言も「歴史資料」の声も」、asahi.com 2009 年 9 月 6 日 http://book.asahi.com/clip/TKY200909020105.html.（2012 年 11 月 15 日アクセス）

[126] Hannemann, Mathias: *Interview Horst Möller. Soll man „Mein Kampf“ edieren?* http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/interview-horst-moeller-soll-man-mein-kampf-edieren-1460152.html. （2012 年 11 月 15 日アクセス）

憶の基準から読み取れるように、蓄積的記憶は現在との関連性を失っている、それゆえ時代錯誤的な位置づけを与えられている記憶である。A. アスマンは蓄積的記憶について、次のようにも説明している。すなわち、「過去との活気ある関係性を失ったものを取り上げた記憶の記憶」[127]、と。つまり蓄積的記憶は、現在との関連性を失った過去の記録の全体、ということができる。言い換えるなら、現代的文脈の外に取り除かれた過去ともいえるが、こうした性質の蓄積的記憶は博物館や美術館、図書館などのアーカイヴとして存続している記憶が該当する。このように、原則として蓄積的記憶は、過去の記録を収集し保管するということを意味している。

以上のように、機能的記憶は現在に流通している記憶、蓄積的記憶は現在とは切り離され保管された記憶という特徴を持っているものである。この対比は、機能的記憶はアイデンティティーの源泉となるなど社会のなかで非常に重要な役割を果たしているのに対して、蓄積的記憶はアーカイヴのなかに保管されるだけで社会に影響を与えることがない、ともいえるだろう。このように考えると、機能的記憶は蓄積的記憶に対して優位にあるように見える。しかし、この優位性は絶対的なものではなく、時間の流れのなかで変化する可能性を持っているのである。つまり、蓄積的記憶と機能的記憶は永久不変の地位というわけではなく、むしろ常に流動的なのである。

> 機能的記憶と蓄積的記憶の境界は完全に遮断されているわけではなく、両方向に対して越境が可能である。意志や意識によってくまなく照らしだされていた機能的記憶から関心の失せた要素がアーカイヴに後退し、一方で蓄積的記憶から機能的記憶の方に（再び）取り出されることもある[128]。

社会が要求するアイデンティティーの源泉は、時代の変遷や権力構造の変化などによって、見直しを迫られる可能性を孕んでおり、それゆえふたつの記憶のあり方は流動的であるといえる。A. アスマンは、このふ

[127] Assmann, Aleida, 2003, S. 134.
[128] Assmann, Aleida, 2002, S. 190.

たつの記憶の流動性を「集合的記憶の変化および更新」と説明する[129]。このように考えたとき、蓄積的記憶は永遠にアーカイヴに保管されたままの記憶ではなく、何かのきっかけによって機能的記憶に移動する可能性を秘めているのである。それゆえ蓄積的記憶は、「将来の機能的記憶の貯蔵庫」[130]である。極端なことをいえば、蓄積的記憶として保管されていない過去の記録は、将来も現在化され得ないことを意味している。時代の変遷とともに新しく現れた機能的記憶であっても、何もないところから降って湧いたのではなく、蓄積的記憶として保管されていたものがあるタイミングのときに現在化したものであるといえる。

これを端的に示す例として、音楽の父とも呼ばれているヨハン・セバスティアン・バッハ（Johan Sebastian Bach）の再発見をあげることができるだろう。J. S. バッハは、生前は非常に高名な音楽家であったが、1750 年に亡くなった後は急速に忘れられていった。その後、約 100 年後にフェリックス・メンデルスゾーン（Felix Mendelssohn）によって J. S. バッハ作『マタイ受難曲』（*Matthäus-Passion*）が再演されたことよって、ふたたび評価されはじめたのである[131]。澤井千恵は、この J. S. バッハ再発見の下敷きとして、ロマン主義時代における歴史意識の変化との関連性を指摘している。

> この歴史意識発現の一つの例としては、ロマン主義時代における J. S. バッハの再演が挙げられる。［中略］過去の音楽を復興させようという運動は、ロマン主義時代の特徴の一つである［後略］[132]。

確かに 18 世紀の音楽は、同時代の曲を演奏することがほとんどであり、過去の作品を殊更取り上げて演奏するという機会はほとんどなかった[133]。しかし、19 世紀になって歴史意識が興って過去を再評価する動きが盛んになると、かつての優れた作曲家の作品を演奏しようとする運動が

---

[129] Ebd.
[130] Assmann, Aleida, 2003, S. 140.
[131] 小林義武著：『バッハ復活―19 世紀市民社会と音楽運動』、春秋社、1997 年参照。
[132] 澤井千恵：「詩論　芸術歌曲の成立をめぐって」、『熊本大学社会文化研究』Nr. 1、2003 年、100 ページ。
[133] 同上、101 ページ。

現れはじめたのである。J. S. バッハの再発見は、このような文脈のなかで起こった出来事といえる。

ここに、蓄積的記憶から機能的記憶への移行というダイナミズムを見て取ることができる。J. S. バッハの死後、彼の名前と作品は蓄積的記憶として保管され、人々に想起されることはほとんどなかった。しかし、歴史意識の発現というきっかけによって再評価され、今日ではJ. S. バッハは偉大な作曲家として記憶され続けている。特に、彼が生前務めていた教会であり、現代では彼の墓や像、ステンドグラスも有名となっているライプツィヒのトーマス教会（Thomaskirche）では、J. S. バッハの音楽を伝承するために定期的に音楽会が催されている[134]。これは、トーマス教会はJ. S. バッハの機能的記憶を担う特定の機関である、ということができるだろう。このようにJ. S. バッハの再発見は、蓄積的記憶から機能的記憶へ移行したものであると説明することができる。

以上確認してきたように、機能的記憶は社会とのつながりを保持した過去であり、それに対して蓄積的記憶は社会とのつながりを失った過去である。しかし蓄積的記憶は機能的記憶の源泉であり、集合的記憶が変化するための記憶の貯蔵庫としての役割を果たしている。ただしこのとき、蓄積的記憶は過去の遺物を無条件に収集したものを意味しない。なぜなら「保存は制御された行為」[135]だからである。すなわち、

> 蓄積的記憶もまた、機能的記憶と同様に、自然に生成するのではなく、文化の知識を記録し、維持し、開拓し、循環させるためのしかるべき制度によって支えられる必要がある。アーカイヴ、美術館、図書館、記念の場所は、研究機関や大学と同様に、この課題に関与している［…］[136]。

---

[134] トーマス教会ホームページ http://www.thomaskirche.org/r-thomanerchor.html.（2012 年 11 月 17 日アクセス）

[135] Assmann, Aleida: *Speicher oder Erinnern? Das kulturelle Gedächtnis zwischen Archiv und Kanon*. In: Csáky, Moritz/Stachel, Peter (Hg.): *Speicher des Gedächtnisses. Bibliotheken, Museen, Archive 2: Die Erfindung des Ursprungs - Die Systematisierung der Zeit*. Wien: Passagen, 2001. http://www.kakanien.ac.at/beitr/theorie/AAssmann1.pdf, S. 1.

[136] Assmann, Aleida, 2003, S. 140. （翻訳：A. アスマン著、安川晴基訳、2007 年、171 ページ。）

A. アスマンは、公の博物館や美術館などが 18 世紀以降に当時の知識や技術収集の目的に適うよう収集していたことを指摘している[137]。つまりアーカイヴは本来的には社会的構成物であり、それゆえ収集目的に適わないと判断された知識や技術は、アーカイヴ化されないといえるだろう。つまり蓄積的記憶は現在との関連性を失ってはいるが、社会との連続性は保持されているのである。言い換えるならば、アーカイヴに保存されるためには、「特定の選別原理と価値の尺度」[138]に合致しなければならないのである。このとき、その選別基準が「必ずしも後の世代によって共有されるとはかぎらない」[139]。つまり時代の移り変わりによって、アーカイヴに保存すべき過去情報もまた変化し得るのである。A. アスマンは断絶の理由として戦争や価値観の変化もあげているが、この例としてアレクサンドリア図書館の興亡をあげることができる。紀元前 300 年ごろにエジプトのプトレマイオス朝の保護のもとで建設された同図書館は、アルキメデスなど著名な学者たちが集う一大学術拠点であった。ここでは 70 万を超える蔵書があり、ヘレニズム学術の殿堂として科学の発展に大きな役割を果たしていたが、4 世紀後半にはじまるキリスト教徒の攻撃によって破壊された[140]。キリスト教徒という新しい基準によってそれまでの選別基準が否定され、ヘレニズム学術のアーカイヴすなわち蓄積的記憶が破壊されてしまったのである。このように、機能的記憶であれ蓄積的記憶であれ、常に忘却の危険性に晒されているのである。

ここまで、A. アスマンの機能的記憶および蓄積的記憶について確認してきた。以下は、両者の特徴を表にまとめたものである。

---

[137] Vgl. auch: Assmann Aleida, 2002, S. 2.

[138] Assmann, Aleida, 2003, S. 345ff. （翻訳：アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007 年、410 ページ。）

[139] Ebd., S. 346.

[140] ルチャーノ・カンフォラ著、竹山博英訳：『アレクサンドリア図書館の謎：古代の知の宝庫を読み解く』、工作舎、1999 年参照。

	蓄積的記憶	機能的記憶
内容	他のもの、現代を超えているもの	自己に固有のもの、特定の過去に対する現在的視点からの基礎づけ
時間構成	時代錯誤的：両時間性、今日に並置された昨日、反現在的	通時的：昨日の、今日に対する接続
形式	テキストの不可侵性、記録の自律的様態	選択的＝戦略的、想起の観点的用法
メディアと制度	文学、芸術、博物館、学問	祝祭、集合的な公的記念祝典
運び手	文化共同体内の個々人	集合化された行為主体

蓄積的記憶と機能的記憶の違いについて[141]

ふたつの記憶は、メディア化された集合的記憶のあり方について分析したものであった。それによれば、社会に流通し社会との関連性を維持している機能的記憶と、アーカイヴとして保管されたままであるが、将来の機能的記憶の源泉でもある蓄積的記憶という、ふたつの形態を確認することができた。ただしこの分類は絶対的なものではなく、価値観の変化などによって蓄積的記憶から機能的記憶に移行する場合や、その逆の場合もあることが指摘されていた。さらに蓄積的記憶も、選別基準の変化によって破壊され忘却されてしまう可能性があることも確認した。

ここから明らかなことは、集合的記憶は一定ではなく流動的である、ということである。ここに、A. アスマンとJ. アスマンの集合的記憶論の相違点を指摘することができるだろう。J.アスマンの集合的記憶論は、文化的変遷やメディア化された社会構造が考慮されていないとして批判されたが、A. アスマンのそれはこのふたつの批判を吸収し見事に回答している。メディア化された社会において、集合的記憶は常に流動的なものとして考えなければならないことがわかる。

[141] Assmann, Aleida/ Assmann, Jan, 1994, S. 123.

1-5：世代

これまで確認してきたように、集合的記憶の流動性には、文化的記憶とコミュニケーション的記憶および保存的記憶と機能的記憶という、ふたつの次元があった。前者は時間の流れを基準とした流動性で、後者はある時代における記憶の状態を基準とした流動性であった。言い換えるなら、前者は通時的な流動性と、後者は共時的な流動性といえるだろう。いずれの場合も、時代の変化とともに、ある記憶カテゴリーから別の記憶カテゴリーへと移行するダイナミズムを描写するものであった。

一方で、機能的記憶ないしコミュニケーション的記憶のカテゴリーの内部であっても、集合的記憶が一定ではなく流動的である現象も指摘されている。これは、第3章で詳しく確認するところの、現代ドイツにおいてナチス時代へのパースペクティヴが多数観察されるという状況に直結する問題である。そこで本節では、世代をキーワードに共時的な集合的記憶の流動性について輪郭を描き、それを通して第4章で取り上げるナチス表象の多様性について、理論的な背景を与えることを目的とする。

すでに確認したとおり、コミュニケーション的記憶の時間幅はおおよそ80から100年であるが、ある社会において100年のあいだにひとつのコミュニケーション的記憶のみが伝達され、次の世紀に移行すると同時に別の新しいコミュニケーション的記憶が流通しはじめる、というわけではない。実際には、1世紀のなかに複数のコミュニケーション的記憶が流通しており、機能的記憶としての役割を果たしているのである。しかもそれらは、社会内部において等しい価値を持っているわけではなく、社会を支配するコミュニケーション的記憶、すでに主導権を失ったコミュニケーション的記憶、将来的に社会的優位を得る可能性を持つコミュニケーション的記憶など、さまざまな次元で語り得るものである。こうしたコミュニケーション的記憶は「世代」(Generation)と呼ばれている[142]。

世代は、「『世界観や世界の捉え方の共通性』を共有しており、自分たち自身を先の世代や後継世代とは異なると理解している」ような集団、

[142] Vgl: Assmann, Jan, 2005, S. 51. Vgl. auch: Assmann, Aleida, 2005, S. 5.

と説明されている[143]。特徴的なことは、世代は自己を特定するアイデンティティーのひとつであるが、一度形成された世代的アイデンティティーは変更不可能である、という点にある。A. アスマンによれば、人は12歳から25歳くらいまでの体験、特に歴史的に重要な出来事よって自己が形成され、それが将来にわたって思考や世界観などを他者と共有することになる。つまり「個人的記憶は、時間的広がりにおいてのみならず、体験によって作り上げた形式のなかで世代記憶の広大な地平によって規定されるのである」[144]。

それゆえ各世代は各々の時代（Alter）を形成することに貢献している。ある時代の枠組みは特定の世代によって規定されるが、この場合の世代は「重要な体験を大人として体験した」世代に限定されており[145]、したがって時代的枠組みは30年の周期で変化するとされている[146]。なぜなら、ある社会において時代的枠組みを形成できるのは、その時代を主導する世代によるところが大きいからである。世代の移り変わりは、このとき、社会のなかで支配的な価値観や世界観、思考様式や行動様式の変化に貢献する。これはすなわち社会全体の刷新を意味している。

> およそ30年ごとに生起する世代交代とともに、共同体の想起のプロフィールは明らかに変化する。決定的かつ代表的であった姿勢が、時間の経過とともに徐々に中心から周辺部へと移行するのである。そして、支配的世代の交代とともに、経験、価値、希望、強迫観念に対する特定の雰囲気が解放され新しい特性が登場したことを、回顧的に確かめることができるようになる。世代交代の大きな意味はある社会の記憶の変化や刷新であり、また後世においてトラウマ的で恥じ入るような想起を修正する際にも重要な役割を果たすのである[147]。

世代記憶は同時代人の価値観や世界観を形成するものであるが、その記

---

143 Assmann, Aleida, 2005, S.5ff.
144 Assmann, Aleida, 2006, S. 26.
145 Assmann, Jan, 2005, S. 51.
146 Ebd. Vgl. auch: Assmann, Aleida, 2005, S. 6.
147 Assmann, Aleida, 2006. S. 27.

憶の担い手が人間であるがゆえに不安定であり、常に変更を迫られる運命にある。しかしこれは社会変動の原動力として機能しており、この意味において社会および時代の枠組みを決定する役割を担っているのである。

ここで、世代がどのように生起するのかを詳しく確認しよう。なぜなら、世代は確かにおよそ30年周期で変化するが、時間の経過だけが世代交代の要因ではないからである。むしろ、A. アスマンの引用にもあった「重要な体験を大人として体験した」ことの方が、世代交代にとってより重要であるといわれている。ここでは、こうした世代交代の要因についてA. アスマンを参考に確認していく。

A. アスマンは社会学者ハインツ・ブーデ（Heinz Bude）を引用しながら、世代を次のようにも説明している。すなわち「およそ同年代の人々による、出来事に即し経験的に開かれた連帯化」であり「世界観や世界占有感を共有している」[148]、と。この「世界観」（Weltauffassung）や「世界占有感」（Weltbemächtigung）とは、具体的には信念、社会的価値規範、文化的解釈のひな型などを指している[149]。つまり世代は、ある出来事などを共に経験することによって連帯した結果であり、こうした共通経験を通して同じ価値観を共有している集団なのである。言い換えるならば、世代は年齢などの時間的な要因によって形成されるのではなく、共通の経験とそこから得られる連帯感によってはじめて形成されるものといえる。

> ある家族のなかで、世代というのはなんの問題もなく確定できる。［中略］家族を構成するさまざまな世代は、生物学上の再生産に要する時間間隔に基づき、はっきりと区別される。一方、社会を構成する世代という考え方には、家族を構成する世代に対応するような自明の理があるわけではない。［中略］世代に境界線がひかれるのは、深刻な歴史体験や社会的な刷新を通じてのことであり、これらは歴史的な切れ目として経験される[150]。

---

[148] Assmann, Aleida, 2005, S. 5ff.
[149] Ebd., S. 5.
[150] Assmann, Aleida, 2007a, S. 33ff.（翻訳：アライダ・アスマン著、磯崎

このように、世代は何よりも歴史的な出来事によって生起することが強調されており、年代が直接的な役割を果たしているわけではない。とはいえ、年齢や年代から完全に独立した世代もまたあり得ない。なぜならこうした経験は、まさに時間的な流れの一時点において生起するからである。したがって、世代を形成するうえで決定的なことはいつ経験したか、という点に凝縮される。

> 危機、戦争、劇的転換点というものは原則として、その時々で生きているすべての同時代人がおかれた共時的な地平のなかにあるにもかかわらず、それらは年齢群（コーホート）が異なることによって別の経験となるのだ。［中略］したがってたとえば、一九四五年という年を老人として体験したか、成人として体験したか、若者として体験したか、子どもとして体験したかによって、大きな違いが生じることになる[151]。

ドイツ敗戦は 1945 年の出来事であり、その瞬間を生きていたすべての人に等しく降りかかった出来事である。ただし、世代の境界線が歴史の切れ目を経験することによって引かれるからといって、ドイツ敗戦を経験したすべての人が全員同じ世代を形成するかというと、そうではない。A. アスマンは、15 歳から 25 歳のあいだに起こった出来事が、人格形成およびその後の人生における態度などを決定づけると考えており[152]、つまり 15 歳から 25 歳のあいだに何を体験したのかを基準に、世代は「自分たちを前後の世代とは異なっていると理解する」[153]のである。

さらに A. アスマンは、世代は上述したような歴史的出来事とそれを経験した年齢という外的要因によって区別されるのみならず、世代内部の積極的な意識によっても区別が生ずるとしている。

> 世代形成は［中略］他方で規制のものから意識的に区別することや

康太郎訳、2011 年、52 ページ以下。）ただし強調筆者。

[151] Ebd., S. 34ff.（翻訳：同上、54 ページ以下）

[152] Ebd.

[153] Assmann, Aleida, 2005, S. 6.

> 離反することの問題となる。［中略］どの若い世代も、これまでとは違う方法をとる権利、違う考え方をする権利を求めた。若い世代は、かなりの部分、先行する世代からの区別を求める、こうした意欲から、自分たちのアイデンティティや自分たちの計画を得る。そのために必要な距離は、通用しているものの価値を貶めることによって生まれる[154]。

若い世代は、先行する世代との区別を積極的に求めていくことで、自分たちのアイデンティティを獲得しようとする。そのために、まず古い世代の価値観を否定し、新しい物事や別の視点に価値を付与することを通して自らの世代を作り上げていくのである。このように世代形成には、思春期に経験した共通の出来事は何かという外的な要因と、先行世代との区別を確立するため意識的に古い価値観を捨てようとする内的な要因が関係している。この二つの要因によって世代は区別され、ひとつの社会のなかに複数の世代、すなわち複数の価値観が併存することになるのである。

ところで、こうした複数の価値観は平等のパワーバランスでそこにあるのではなく、当然のことながら社会内部でイニシアチヴを握る世代のそれが大きな影響を持つ。

> そこで決定的な問いとなるのは、ある世代に社会全体を解釈する力があるのかどうかである。ある世代が握った解釈権が効力をもちうるのか、それが人々に受け入れられるのか、またそれがどのくらい維持するのかは、ある社会とその歴史的変遷の精神的・文化的環境いかんである。そのためエポックの切れ目が生じるのは、とりわけ世代の交代やある解釈のモデルが他の解釈のモデルのために取り消されることによる[155]。

社会全体を解釈する力とは、その権力（Macht）のことを意味する。つ

---

[154] Assmann, Aleida, 2007a, S. 35ff.（翻訳：アライダ・アスマン著、磯崎康太郎訳、2011 年、56 ページ）
[155] Ebd., S. 53.（翻訳：同上、86 ページ）

まり解釈する権力を持つ世代によってエポック（Epochen）が、言い換えるならばある社会における新時代が形成される。ここで述べられているように、ある世代の価値観が維持されるためには、精神的文化的環境―たとえば道徳意識など―もまた保持されていなければならない。つまりある世代の価値観が保持されるためには、その世代が社会的権力を有していることに加え、その社会の精神文化に合致していることが重要となる。社会の精神文化は世代的価値観よりもより大きな次元でとらえられるものであり、世代を超えた同時代的な枠組みといえよう。それゆえ A. アスマンは時代の切れ目として世代交代のみならず、解釈モデル（Deutungsmuster）の転換もそこに含めているのである。

ここまでの議論で明らかとなったように、世代が移ることは価値観もまた変化することを意味していた。それまで社会の中心を担ってきた世代が次世代にその席を譲るわけだが、次の世代は先行世代とは異なる価値観であろうとすることから、世代交代によって社会の価値観も変化することとなる。ただし、この価値観の変化は世代交代によってのみ達成されるのではない。他の世代も含めた社会全体がそれに合意するか、少なくとも許容することが求められるのである。

かくして、世代交代は「社会の記憶におけるダイナミズム」[156]として社会におけるコミュニケーション的記憶の変化に寄与するのである。このような世代交代は「トラウマ的記憶の加工に大きく貢献」[157]するものであり、それまで社会内部に停滞していた陰鬱とした雰囲気を変える作用があるとされている。

1-6：小括―集合的記憶の流動性

ここまで、一貫して集合的記憶の流動性について考察してきた。個人的記憶における外的条件の場合であれ、世代の場合であれ、さらには文化的記憶の場合であれ、それらはすべて永久不変の記憶ではありえず、常に変化する可能性を孕んでいた。集合的記憶は常に変化の可能性にさ

[156] Assmann, Aleida, 2005, S. 6.
[157] Ebd.

らされているものである。たとえば、歴史的出来事によって世代記憶が形成され、時間の流れとともに主導的な価値観が変化することを確認してきた。また、ある出来事をきっかけとして蓄積的記憶から機能的記憶に昇格する場合もあれば、機能的記憶から蓄積的記憶に降格する場合もあることも確認してきた。これらはすべて、集合的記憶の流動性ということができるだろう。

ここで重要なことは、記憶は常に現代の視点から変化する、ということである。たとえば、ナチス時代が現在であった当時と、ナチス時代が過去となった現代では、『わが闘争』を評価する基準が異なっているのである。またJ．S．バッハが再発見されたのは、ロマン主義時代が現在であった当時に、過去を振り返ろうとする基準が誕生したからである。世代の変化についても同様である。1920年生まれのドイツ人にとって、1945年が現在であった当時は、世代形成の適齢期であった。しかし1945年生まれのドイツ人にとって、1970年が現在であった当時の出来事が、世代形成に大きな影響を与えるのである。

以上のことから、次のことをいうことができる。すなわち、集合的記憶の変化は、社会の価値観が変化したことを示すメルクマールである。集合的記憶は常に流動的であるが、集合的記憶は社会的価値観が以前とは異なるがゆえに変化していた。つまり記憶の流れの軌跡は、価値観の変遷の軌跡であるともいえる。それゆえ、ある集合的記憶の変化の流れを追うことは、社会的価値観の変遷を裏付けていくことでもあるだろう。集合的記憶は常に流動的で、移ろいゆくものである。そしてわれわれはその背景のなかに、時間の流れや世代の変化、価値観の逆転など、さまざまな文化的および社会的現象を読み取ることができるのである。

補論 1：集合的記憶とは何か

これまで個人的記憶と社会的環境の関係を中心に、コミュニケーション的記憶と文化的記憶および蓄積的記憶と機能的記憶について言及してきた。神話時代に固定点を持つ文化的記憶を除いて、いずれの場合もある程度同時代的な枠組みが問題となっていた。つまり、M. アルヴァックスが提唱し、J. アスマンが継承した個人的記憶を規定する社会的枠組みについて、同時代人のあいだの相互作用において生起するものとして機能していることが明らかとなったといえる。これは制度的文化的枠組みである文化的記憶に関しても同様である。すなわちこれまでの議論は個人的記憶を制限する条件的枠組みが話題の中心であったといえる。世代記憶は、個人の記憶を規定する同時代的枠組みである。これは、いわゆる集合と呼ばれるものが記憶の主体である、という議論ではない。つまり共同体の構成員に共有されている記憶（のようなもの）を議論の対象としていたに過ぎないのである。

これは、各々の記憶の担い手が人間であることに起因しているように思われる。コミュニケーション的記憶の運び手は人間であり、神話時代に起源をもつ文化的記憶でさえ、文字化されていない限りにおいて、その運び手は制度の枠内で養成された特定の専門家であった。つまり集合的記憶とは、特定の枠組みが広く集合の構成員に共有されており、自明視されているものだと考えることもできる。

そもそもA. アスマンが自著『想起の文化』（*Erinnerungsräume*）で指摘しているように、記憶概念は文化科学や自然科学など個々の学問分野内においてさえ「矛盾に満ち、対立している」（widersprüchlich und kontrovers）という有様である[158]。これは研究者によって記憶の定義や概念が異なっていることを指しているが、たとえば文化的記憶に関して、J. アスマンは上述したように人間を記憶の担い手として認めているのに対し、A. アスマンは文化的記憶の媒体として「物質的担い手」（materielle Träger）を強調している[159]。このように記憶概念は各研究者によって異

[158] Assmann, Aleida, 2003, S. 16.（翻訳：アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007 年、29 ページ。）
[159] Assmann, Aleida, 2006, S. 54.

なる定義がなされており、この意味において先行研究を比較検討したところですべてを包含する統一的定義を打ち出すことは不可能であるといえよう。

そこで以下では、ニクラス・ルーマン（Niklas Luhmann）を援用しながらJ．アスマンとA．アスマンの集合的記憶理解について概観し、本論における集合的記憶概念をどのように定義するべきかを考察する[160]。

J．アスマンは主著『文化的記憶』（*Das kulturelle Gedächtnis*）のなかで、M．アルヴァックスの集合的記憶論に言及しながら次のように述べている。すなわち、M．アルヴァックスは「記憶や想起の主体としての集合」（das Kollektiv als Subjekt von Gedächtnis und Erinnerung）という考え方を導入し、個人から独立した記憶主体としての集合をメタファーとして確立した。なぜなら、個人的記憶の外的条件としての集合的記憶という理解だけでは、「忘却」（Vergessen）という現象の説明が困難だからである。

> この理論の長所は、想起と同時に忘却についても説明が可能なところにある[161]。

人間がほかの動物と区別されうるポイントのひとつとして、個人的記憶を、記憶主体としてのその人から外的なデータ保存装置に移行させ保管する（aus-lagern：外に‐貯蔵する）ことができる点があげられる[162]。これによって個人的記憶の可視化が可能になり、他者に共有される可能性が開けるのである。しかしこのとき、すでにJ．アスマンが文字の登場の個所で言及していたように、外部化された個人的記憶は最終的に社会内部で巨大アーカイヴとして存在することとなるが、当然そのすべてが個人的記憶の条件的枠組みになるわけではない。コミュニケーション的記

---

[160] N．ルーマンの社会システム理論は、彼の社会システム理論から構築された概念以外には接続不可能である。本論文では社会をコミュニケーションの主体として規定する目的にのみルーマン理論を用いることとする。なお、ルーマン理論と集合的記憶については Esposito, Elena: *Soziales Vergessen. Formen und Medien des Gedächtnisses der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: Surkamp Verlag, 2002. などがある。

[161] Assmann, Jan, 2005, S. 36.

[162] Assmann, Aleida, 2005, S. 9.

憶に典型的なように、他者とのネットワーク化の過程で話題にのぼらない情報は完全な忘却も同然なのである[163]。

このとき注目したいことは、「記憶はコミュニケーションのなかで維持され生き続ける」[164]という点である。裏を返せばコミュニケーションのなかに現れない外部化された個人的記憶は、他者の個人的記憶を規定する外的条件にはなりえないといえる。以上の点から次のことが帰結する。すなわち、個人的記憶を規定する社会的文化的枠組みを決定するのはコミュニケーションである。社会内部に構築された巨大アーカイヴに移された個人的記憶のうち、コミュニケートされた続けたものだけが他者と共有される。また、コミュニケーションを通して他者と共有されていたある特定の社会的枠組みに関して、何かをきっかけとして徐々にコミュニケートされる機会が減少することもあるだろう。そのとき、これは忘却として理解される。

社会学者N. ルーマンによれば、社会は人間からではなく、コミュニケーションから成立している。ルーマン理論において、システムはある形式のもとでオートポイエーシス的に作動していることを必要とする。たとえば生物システムは生命（Leben）という形式において、心的システムは意識（Bewusstsein）という形式において、それぞれ独立した作動を行っている。同様に社会システムはコミュニケーションという形式によって作動しているのである。

> 社会システムはただコミュニケーションのみを問題とする[165]。
> このシステムが成り立つ要素を生産する社会システムの基礎的プロセスは、このような状況下においてただコミュニケーションだけである[166]。

---

[163] アーカイヴ化された情報は蓄積的記憶として社会に保存されており、情報が完全に消滅してしまうわけではない。蓄積的記憶は機能的記憶の源泉であったが、この意味においてメディア化された情報は原則として社会内部に留まり続ける。

[164] Assmann, Jan, 1992, S. 37.

[165] Lumann, Niklas: S*oziologische Aufklärung 6. Die Soziologie und Mensch*. Opladen: VS Verlag, 1995, S. 29. ここでは Berghaus, Margot: *Luhmann leicht gemacht*. Köln: Böhlau Verlag, 2003, S. 56 より引用。

[166] Luhmann, Niklas: *Soziales System*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1984, S. 192.

このとき、社会システムの構成に人間はまったく関わりがないとした点がルーマン理論に特徴的である。つまり社会システム内部から人間は完全に排除されており、コミュニケーションの産出活動にも参加しない。なぜなら、人間はコミュニケーションそのものではないからであり、同時に社会そのものでもないからである。

> 社会のシステムはコミュニケーションから成り立っている。コミュニケーション以外のいかなる要素や物質もありえない。社会は人間の身体や脳から成り立っているのではない。社会は一貫してコミュニケーションのネットワークである[167]。

当然のことであるが人間がいないところにコミュニケーションは発生せず、その意味において人間の存在がまったく無視されるわけではない。しかし社会システムは人間がそこにいるから作動するのではなく、コミュニケーションが生起することによってはじめて作動するのである。それゆえN. ルーマンにおいては、コミュニケーションこそ社会システムの唯一の構成要素なのである。

社会システムはコミュニケーションによって成立している独立したシステムであった。それはつまり、人間から独立していることを意味しており、言い換えるならば人間の意識システムから独立しているといえる。ここで再び集合的記憶の話題に戻るとするならば、コミュニケーションによって成立している記憶は常に社会システムを主体とするものであり、人間に依存していない記憶であるといえる。コミュニケーションを視野に入れることによって社会を記憶の主体とする集合的記憶論への道が開けてくるのである。

社会が記憶主体となるということは、社会自身が何かを想起し忘却することを意味している。J. アスマンが「この理論の長所は、想起と同時

---

[167] Luhmann, Niklas: *Kommunikationsweisen und Gesellschaft*. In: Rammert, Werner/ Bechmann, Gotthard (Hg.): *Technik und Gesellschaft, Jahrbuch 5*. Frankfurt am Main, New York: 1989, S. 12. ここでは Berghaus, Margot, 2003, S. 59 より引用。 なお、N. ルーマンのコミュニケーション概念も独自のものがある。これについても Berghaus, Margot, 2003 などを参照。

に忘却についても説明が可能なところにある」[168]と述べた理由がここにある。すなわち、J. アスマンが文字文化の巨大なアーカイヴのなかに保存されながら忘却されるという矛盾的な状況を読み取ったとき、社会を記憶主体とすることでその説明が可能になるのである。

[168] Assmann, Jan, 2005, S. 36.

補論 2：記憶（論）と歴史（学）

はじめにで述べたとおり、現代ドイツはナチス時代を直接体験した世代が不在になる社会を目前にし、多様な過去を保存するために記憶とメディアに注目が集まっている。しかし過去保存の方法として、我々はすでに歴史学という領域を持っている。その意味において、なぜ改めて記憶に着目する必要があるのだろうかということを、改めて問い直す必要があるだろう。この点に関して、記憶論と歴史学の学問的関心の相違点を明らかにすることで、なぜ記憶を必要とするのかについて考察していきたい。

すでに確認してきたとおり、現代は第二次世界大戦の記憶を忘却から守る様々な方法が模索されている状況である。その方法のひとつとして、過去の歴史化をあげることができるだろう。J. アスマンによれば、歴史は、ある出来事について誰も思い出せる人間がいなくなったところからはじまる[169]。つまり J. アスマンにとって歴史は静的であり、それは当時を語ることが不可能になって初めて可能となるのである。言い換えるならば歴史は記憶が終わったところからはじまるものであり、この意味において第二次世界大戦はまさに歴史化の過程のなかにあるということができるだろう。

ところが J. アスマンの見解とは異なり、戦争の記憶は我々の生活のなかでますます充実してきているといわざるを得ない。というのも現代は、歴史学に対する記憶側からの反発が盛んになってきているのである。これは戦争体験世代の消滅と無関係ではないだろう。岩崎稔は「記憶をめぐる論争は、何よりもまず『戦争の記憶』をめぐって生じている」[170]としたうえで、次のように述べている。すなわち、

> 歴史とも歴史学ともただちには分節化されて表現されるものではない過去に向かう心［記憶］と、「科学的歴史学」を標榜してきた戦後

[169] Assmann, Jan, 1992, S. 44.
[170] 岩崎稔：「歴史学にとっての記憶と忘却の問題系」、歴史学研究会編：『現代歴史学の成果と課題 1980-2000 年 I：歴史学における方法的転回』、青木書店、2002 年、265 ページ。

歴史学という制度とが互いに背馳する可能性が暗示されている[171]。

さらに岩崎は「過去へ向かう心」としての記憶を「過去に関するある『真正性』を指示する記号」と定義したうえで、この「『真正性』という含意のなかに、歴史学そのものに対する、つまり学問知や制度化された知に対する、そしてそのひとつである『戦後歴史学』に対するある違和感」が歴史と記憶の背馳に通じていると考えている[172]。これは、歴史学の伝統的な手法である文献や記録に基づく歴史記述に否を突きつけたものと理解することができるだろう。つまり歴史が書かれるとき、体験者の視点があまりにもないがしろにされてきたのではないか、という批判である。そしてこの批判は、第二次世界大戦の証人が生物学的に死滅する時を目前に迎えて、特に激しくなってきているように思われる。特にドイツでは歴史家論争が話題となった時期に、「『忘れてはならない。想起こそがあがないの秘密である』とする視点が強調され、『記憶』『忘却』『想起』に関わる思考が鍛えられ、問題を理解するための手がかりとなって」[173]いくと考えられたことで、過去をめぐってますます記憶の重要性が増していったのである。つまり記憶が終わるところに歴史がはじまるのではなく、記憶のなかに歴史が形成されていくのである。

以上のような視点が問題になる一方で、科学的歴史学のもつ理論性がないがしろにされてしまう危険性も指摘されている。つまり記憶を強調しすぎると、かえって過去を歪めてしまうことにつながりかねない、という批判である。例えば J. アスマンは、単数の歴史は実証主義的歴史概念であるがゆえに放棄される歴史研究であるとする一方で、こうした態度は純粋な理論的歴史学が失われてしまうことにつながることを指摘している[174]。自身の体験や記憶を基盤とした過去記述をいたずらに増やすことは、記憶違いに由来する不正確な過去情報が「歴史」として氾濫することに繋がりかねない。こうした問題を解決することは、過去を忘却から守るためにも必要である。つまり歴史学的に誤っている個人の記憶がメディア化されて社会に流通することで、歴史学的に誤った過去の

[171] 同上、264 ページ。ただし括弧内筆者。
[172] 同上。
[173] 同上、271 ページ。
[174] Assmann, Jan, 2005, S. 43, Anmerkung.

イメージが社会内部に蓄積されてしまうことが危惧されているのである[175]。

これに関して、フランスの歴史家ジャック・ル・ゴフ（Jacques Le Goff）は次の問題を指摘する。すなわち、過去記述は本来「集合的記憶の歴史と歴史家の歴史という、二つの歴史が存在する」[176]という二つの形態があるにもかかわらず、現在は両者が混在している点である。この二つの歴史のあり方についてル・ゴフは

> 集合的記憶の歴史は、本質的に神話的で変形されており、無時間的なものとして現れる。しかしそれは、現在と過去との間の決して終わることのない関係の生きられた体験なのである。専門的歴史家によって惜しみなく与えられ、学校や―少なくともそうあるべきであろうが―マス・メディアによって普及されている歴史の情報が、この伝統的な偽りの歴史を正すことが望まれる。歴史は記憶を啓蒙し、それが自らの過ちを改めるのを助けなければならない[177]。

と述べており、記憶によって構成された過去像の歪みは科学的歴史学によって補正され教育されなければならないとしている。つまりル・ゴフにとって歴史とは、確かに記憶とは共存関係にあるが、記憶の生き生きとした流動性・可変性を監視し、正確な過去情報に正すことが求められる領域なのである。J. アスマンは、記憶論への傾倒は純粋に理論的で時代や関心から独立した歴史学のカテゴリーを失うという懸念を示していたが、それはまさに以上のような理由によるのである。

事実、虚偽の記憶をベースにホロコーストを告発して問題となったヴィルコミルスキー事件は、記憶に対する無批判な信仰に警鐘を鳴らすこ

---

[175] Vgl., Weyand, Jan: *So war es! Zur Konstruktion eines nationalen Opfermythos im Sipelfilm „Der Untergang“*. In: Bischof, Willi (Hg.): *Filmri:ss. Studien über den Film „Der Untergang”*. Münster: UNRAST-Verlag, 2005, S. 39. この報告によれば、ヒトラーの元秘書の証言を元に作成された映画『ヒトラー―最期の 12 日間』は、CDU と FDP の推薦によって学校教材となる見通しである。つまり、記憶が「歴史」として学校教育の中で学ばれることになるのである。

[176] ジャック・ル・ゴフ著、立川孝一訳：『歴史と記憶』、法政大学出版会、1999 年、175 ページ。

[177] 同上、175 ページ以下。

ととなった。1995 年にビンヤミン・ヴィルコミルスキー（Binjamin Wilkomirski）と名乗るひとりの男が、自身が幼少時代に体験した強制収容所での体験を著作『断片：幼少期の記憶から 1939－1948』（*Bruchstücke. Aus einer Kindheit 1939–1948*）にまとめ出版した。世界 12 か国で翻訳出版され、また 1997 年度ブック・オブ・ザ・イヤー賞（ワシントン・ホロコースト博物館）を筆頭に数多くの賞を受賞するなど、同書は世界中で非常に高く評価された。また B. ヴィルコミルスキー自身もホロコースト関係の会議や講演に呼ばれるなど、生き証人の顔として活躍することとなったのである。しかしほどなくして、スイス人ジャーナリストによって B. ヴィルコミルスキーが実はブルーノ・デッセッケル（Bruno Dössekker）という名のスイス人であり、幼少期を強制収容所で過ごした事実などないことが暴露され、一大スキャンダルとなった[178]。

確かにヴィルコミルスキー事件はもっとも極端な例であるが、こうした事例が今後も起こらないとは限らない。歴史学としては、こうした前例があるだけに記憶に対して慎重にならざるを得ないのだろう。科学的に実証可能な「過去」記述こそ、歴史学の使命であるといえる。

一方で記憶論は、真実性とは別の視点から過去を扱う立場にある。A. アスマンは著書『記憶のなかの歴史』（*Geschichte im Gedächtnis*）において、「想起の真実性よりも重要なことは、想起されたものの意味である」と明確に述べている[179]。つまり史実に基づくかどうかは問題ではなく、むしろその出来事が現代においてどのような意味を持つのかを問うべきであると主張している。

> 過去は［現代の］鏡であり、そのなかで我々は自分自身をある特定の瞬間を超えて認識し、また私たちが自分自身と呼ぶものを、常に新しい始まりのなかで構成するのである[180]。

過去は常に現代の視点から把握されるがゆえに、過去を観察することは

---

[178] 岩崎稔：「虚偽の記憶と真正性」、ひろたまさき／キャロル・グラック監修、冨山一郎編：『記憶が語りはじめる』、東京大学出版会、2006 年参照。
[179] Assmann, Aleida, 2007a, S. 9.
[180] Ebd., S. 10. ただし括弧内筆者。

現代を観察することである。つまり、現在において想起されている過去は、そこに現在的な意味が必ず付与されている。想起は「流れ去ったものに現代的意味を付与することである」[181]。このような視点に立ったとき、問題となるのは「偶然ないしは継続的に現在に保持されている、もしくは再び現在化され、それによって新しく意識のなかに掘り起こされたもの」であり、こうした事象と「我々はどのように出会うのか」という点がより重要なのである[182]。言い換えるならば記憶論が問題とするのは、何が／なぜ／どのように現在化しているのか、という問いである。歴史学は主に現在化された過去の正当性を扱う学問であったことと比較すると、その違いは一目瞭然である。

これに加えて次の批判も見逃すことはできない。すなわち、歴史学も含めてすべての思考様式は同時代的な思考の枠組みに無関係でいることは不可能である、というものである[183]。人間の思考の同時代的枠組みによる制限は第 1 章においてすでに議論した通りであるが、それゆえ歴史学は、原理的に補正対象である現代の記憶の影響を受けながら現代の記憶を補正するという矛盾に悩まされることになる。ベネデット・クローチェ（Benedetto Croce）の「すべての歴史は現代史である」[184]という有名な言葉は、過去記述はまさにその時の社会的状況や欲求などに左右されていることを指しているが、この意味において歴史学もまた現代の記憶の影響を受けているのである。

ただし記憶論は、過去をすべて恣意的に操作できると考えているわけではない点を補足しなければならないだろう。

---

[181] Ebd.
[182] Ebd., S. 12.
[183] モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、48 ページ。
[184] 「『過去の歴史』と呼ばれまたは呼ばれようとしている既成の歴史もまた（この歴史が歴史でなければならず、それがまたある意味をもっているものであり、空な言葉として響くのみのものであってはならぬならば）現代の歴史であり、かのいま一つの歴史とすこしも異なるものではないはずである。[…]その歴史家の精神の中で生命を呼吸しているということであり、[…]現在の生の関心のみこそが人を動かして過去の事実を知ろうとさせることができるということは明らかである。」（クロォチェ著、羽仁五郎訳：『歴史の理論と歴史』、岩波書店、1952 年、16 ページ以下。）

過去は個人的集合的な干渉を乗り越える。過去を独占することはできず、閉鎖的に価値を与えることもできず、不変的に否定することもできない。何よりも完全に破壊することができないのである[185]。

過去は現代の視点から構成されるものであり、それゆえ現代の鏡であるが、あたかも CG のように自由に創造できるものではない。なぜなら現代は過去の積み重ねであるがゆえに、過去との連続性と継続性も問題となるからである[186]。

ここまでの議論を整理しておこう。まず従来の歴史学に異議が唱えられ、「真正性」の観点から記憶が注目されていた。これに対し歴史学は、科学的かつ実証主義的な視点から過去にアプローチすることで、記憶が主観的に過去を改変しないよう監視をする役割を自負していた。一方で記憶論は、過去の「真正性」は問題にせず、また歴史学を含め思想はすべて現代的枠組みのなかの出来事であり、純粋に客観的な歴史記述はあり得ないという主張を行っていた。

歴史と記憶の関係性に関する問題は、まさにこの点にある。つまり、記憶違いによる不正確な過去情報が「歴史」として社会に流通するなかで、歴史学がその誤りを修正しようと試みる。しかし、歴史学自身も現代的意味の枠組みで行われるものであり、結果として正確な過去情報を更新することが原理的に不可能になっているのである。過去情報の伝達はこうした二律背反に悩まされており、それゆえナチスに関する過去記述に対する信頼性も問題にならざるを得ない状況である。

このような歴史か記憶かという問題は、学問的にも非常に意義のある興味深い問題である。しかし本論では、次のように論を進めることで問題解決を保留したい。すなわち過去は、記憶を基盤とした過去記述や科学的実証主義的歴史学も含め、あらゆる視点から構成される構成物であると考える。A. エアルは、「歴史の目撃者がいない社会においては、二つの異なる方法、学問的歴史研究およびメディアによって支えられた『文化的記憶』という方法で過去関係を参照させる」[187]と説明しており、証

[185] Assmann, Aleida, 2007a, S. 10.
[186] Vgl., Ebd., S. 9 参照。
[187] Erll, Astrid: *Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*. In:

言者が不在となった社会では歴史学と記憶がともに過去を記述していくことの可能性に言及している。つまり、学問的過去記述とともに、たとえば歴史小説、歴史映画といったメディア作品の過去記述もまた、社会における過去の源泉となりうるのである。

より重要なのは、歴史学の領域であれ記憶の領域であれ仮にヴィルコミルスキー事件のようなことが起こったときにそれを訂正できる環境が整っているか、という点であろう。ル・ゴフが主張するように確かに記憶は主観的であり、それゆえ実証的な修正を必要とする場合があるだろう。しかし同時に、岩崎が述べているように歴史学もまた記憶の側から書き換えを求められる場合もある。そうであるならば、歴史か記憶かという議論は、興味深い問題ではあるが生産的とはいえない。両者ともに過去記述の一形態であり、それゆえ双方が共に過去像を創りあげていくことが望ましいと考えられる。

過去記述の形態に関して学問的客観性を追求する過去描写方法と、記憶再生に依存する過去描写方法という二つが存在することを確認し、互いに排除しあうのではなく協調して共に過去像を描写すべきであることを確認してきた。過去描写はどちらか一方に許される権利ではない。歴史学の視点と記憶の視点が交差することによって、重層的で多様な過去像が生まれるのである。

そうであるならば、改めて記憶に着目する利点はどこにあるのだろうか。第一に、現代の視点を重視することがあげられる。想起は過去に現代的意味を付与することであり、この意味において過去は現代の鏡であった。それゆえ記憶に焦点を当てることは、現代がどのような過去に関心を示しているのかを観察することに他ならない。A. アスマンが述べるように、そこでは真実性が問題となるのではなく、あくまでも現代的意義が強調されるのである。第二に、メディアとの関係性を視野に入れて分析することが可能な点である。メディアと記憶の関係は次章で詳しく検討するが、先取りしていうならば「集合的記憶はメディアなしには考えられない」[188]。**はじめに**で確認したように、近年発表された多くの

Nünning, Ansger/ Nünning, Vera (Hg.): *Konzepte der Kulturwissenschaften*. Stuttgart und Weimar: J. B. Metzler, 2003, S. 156ff. Vgl. auch: Erll, Astrid, 2005a, S. 3ff.

[188] Erll, Astrid, 2005a, S. 123.

ナチス関連のメディア作品を前にして、この文化現象と過去を包括するのは歴史学よりも記憶論のほうがより適しているといえる。現代における過去への関心をメディアから考察しようとしたとき、記憶から出発するほうがより近道であるといえる。

2：メディアの多元性

集合的記憶にとってメディアは必要不可欠である。ある人物の個人的な記憶が社会に広がり浸透するためには、それをメディアに移し替えて拡散、伝達する必要がある。また、文化的記憶のように神話時代から時代を超えて記憶を伝承するためには、それを保存するためのメディアが必要となる。つまり個人的記憶をメディア化することで他者と共有することが可能となり、世代を超えて伝承され得るようになるのである。それゆえ集合的記憶研究においてメディアの考察もまた不可欠なものであり、このことから「集合的記憶研究はメディア研究である」[189]といわれている。

本章では特に集合的記憶のメディアについて機能面から考察し、メディアと集合的記憶の関係性を示す。第1章では集合的記憶の流動性について明らかにしてきたが、集合的記憶のメディアもまた多元的重層的に捉えなければならないものであるということを、これまでの集合的記憶論を振り返りながら検討していく。

第一に、メディアとは何かを確認する。特にメディア概念やメディア論（Medienwissenschaft）におけるカオス的状況を確認し、メディアを論ずる上での注意点を明らかとする。第二に集合的記憶におけるメディア概念を確認する。集合的記憶論におけるメディア概念は多種多様であり、概念によって対象となるメディアが異なっている。ここではメディア概念を概観し、本論文におけるメディアの枠組みを規定する。第三に集合的記憶のメディア機能について考察する。集合的記憶にとってメディアは不可欠であるが、その詳細について、特にどのようなメディア機能が集合的記憶にとって必要であるかを中心に考察する。第四に集合的記憶と映画について考察する。本論はヒトラー映画の分析を予定しているが、それに先だってメディアとしての映画について集合的記憶論の視点からアプローチしたい。

---

[189] 「メディアと集合的記憶の密接な関連性により、記憶の歴史はしばしばメディアの歴史として書かれる。」Erll, Astrid, 2005b, S. 252.

2-1：学術界におけるメディアの混乱

メディア（Medium, Medien）という言葉は日常生活においても広く使われており、この意味においてメディアが何であるのかを知らない人はいないであろう。情報化社会がますます進行する現代社会においてメディアという言葉を目にしない／耳にしない日はないといっても過言ではない。それほどにこの言葉は広く社会に浸透している。

しかしメディアを学問的に考察しようとした場合、事情はそう簡単ではない。というのも、メディアは定義、概念、理論のすべての面で未だ統一されていないからである。ドイツのメディア研究者であるヴェルナー・ファウルシュティヒ（Werner Faulstich）は、現在までに出版されているメディアに関するほぼすべての体系的入門書は、数あるメディアの定義から恣意的に選択したものを並べただけであり、メディア概念やメディア論全体を体系的に見通すものとはいえないと批判している[190]。続けてW．ファウルシュティヒは、メディア概念はまったくカオス的状態（Verwirrung）にあるがゆえに、メディアについて考察する際にはこの点を念頭に置かなくてはならないと警告している[191]。

メディアをめぐる混乱について、より具体的にみていこう。W．ファウルシュティヒはメディアを、生物的、物理学的、技術的、社会学的、文化的、システム的、構造的といった複数のカテゴリーに分類することについて「[メディアとは何かという問いに対する]回答よりも、疑問の方をより多く提起するもの」[192]であると批判している。さらに、メディアを情報メディアやコミュニケーションメディア、デジタルメディアなどの下位概念に分類することも、メディア概念が混乱する原因であると見なしている。なぜならそれらは「非論理的、理解不能、機能不全、不完全、根拠のないものであるか、もしくは月並みでつまらないもの」[193]だからである。つまりW．ファウルシュティヒは現代におけるメディアのカオス的状況について、メディアそれ自体というよりはメディア論と

---

[190] Faulstich, Werner: *Einführung in die Medienwissenschaft*. München: Wilhelm Fink, 2002, S. 19ff.
[191] Ebd.
[192] Ebd, S. 20.
[193] Ebd.

いう学問により大きな責任を認めているのである。

こうした状況を背景に、メディア概念はどのように扱われてきたのだろうか。ディーター・メルシュ（Dieter Mersch）は『メディア理論入門』（*Medientheorien zur Einführung*）のなかで、メディアを論ずることは慢性的に困難であったとのべている[194]。これについて「メディア概念を現代において用いることは複雑な歴史にさかのぼることであり、それは理論そのものよりも古い」[195]ことがその要因のひとつであるとしている。またメディアは学問領域において伝統的に「『記号』『意味』または『相互作用』といった近接概念のあいだに位置づけられて」おり、かつ「文化理論や社会理論、芸術や諸学問と明らかな関係性を有している」[196]ことから、メディア概念はいっそう見通しの悪いものとなってしまっている。このようにD. メルシュは、メディア論が確立する以前にすでにメディア概念が用いられてきたこと、およびメディアの近接領域や近接概念が広いことなどが要因となり、結果として「実体的な、歴史的に安定的な意味でのメディア［概念］はない」[197]という事態を引き起こしたとしている。具体的には、メディア概念は表現形式（たとえば映画など）、技術（印刷術など）、シンボル（文字など）に還元できるものではなく、むしろ「認識、コミュニケーション、記憶、社会的規範の確立の理解において重要な役割担う」[198]ものであるという、きわめて抽象的なメディア理解が浸透してきているのである。

非実体的、非安定的、カオス的メディア概念と同様にメディア理論もまた複雑で、メディア理論の全体像を把握することが不可能となっている[199]。シュテファン・ヴェーバー（Stefan Weber）編『メディアの理論』（*Theorien der Medien*）において、メディアに関する応用理論も含めて11個ものメディア理論が紹介されている。そのなかには、「メディアの技術理論」（Techniktheorie der Medien）や「メディアの記号論」

---

[194] Mersch, Dieter: *Medientheorien zur Einführung*. Dresden: Junius Verlag, 2006, S. 9.
[195] Ebd., S. 12.
[196] Ebd., S. 11.
[197] Ebd., S. 10. ただし括弧は筆者。
[198] Ebd., S. 10ff.
[199] Weber, Stefan: *Einführung: (Basis-) Theorien für die Medienwissenschaft*. Weber, Stefan (Hg.): *Theorien der Medien*. Konstanz: UVK, 2003, S. 11.

（Zeichentheorie der Medien）といった伝統的にメディアの近接領域とされてきた理論のほかに、「メディアの文化理論」（Kulturtheorie der Medien）や「構成主義的メディア理論」（Konstruktivistische Medientheorie）、「メディアのシステム理論」（Systemtheorie der Medien）など、比較的新しい学問領域と結びついたメディア理論も含まれている。理論は研究の方向性を決定し、研究の枠組みを構成するという働きを持っており[200]、それゆえメディア理論の多義性多様性はメディアに関する研究のあり方が一様ではないことを示している。統一されたメディア概念がないことに加えメディア研究の方向性も多岐に渡って拡大し続けており、したがってW．ファウルシュティヒが批判したメディア論におけるカオス的状況はメディア研究の発展に伴う問題であるということもできる。つまり、メディアとは何かを追及するメディア研究は、不可避的にメディアのカオス的状況を引き起こしてしまうのである。

このような、メディアを多様に分類することについてW．ファウルシュティヒが「疑問を多く提起する」「非論理的」と評価していたのとは対照的に、D．メルシュおよびS．ヴェーバーはメディア概念やメディア理論の複数性は学問的深化の結果であると肯定的に評価している。D．メルシュはこれまでメディア論が努力を怠ってきたわけではないことを強調したうえで、メディア概念を一元化することはメディアの複雑性を見失う危険性を孕んでいると指摘している[201]。S．ヴェーバーもまた、理論の複数化は西洋科学が高度に細分化（Ausdifferenzierung）した論理的帰結であり、学問システムの生産的長所であると見なしている[202]。そもそも理論を現在の状況からひとつにまとめようとすることは「『ひとつの』『真実の』『包括的な』理論があるということを含意している」[203]が、そうした考え方は「おそくとも20世紀には［…］放棄されている」[204]。そこで本論においても、メディアに関する理論的概念的複雑性は研究の障害ではなく研究視点の豊富さであるととらえ、論を進める過程においてそのつどふさわしい概念および理論を採用していくこととする。

---

[200] Ebd., S. 14.
[201] Mersch, Dieter, 2006, S. 11.
[202] Weber, Stefan, 2003, S. 11.
[203] Ebd., S. 12.
[204] Ebd., S. 11.

集合的記憶論におけるメディアをめぐる議論について、その方向性は少なくともふたつ確認することができる。ひとつは記憶をメディア的メタファーのなかでとらえようとするもので、「記憶としてのメディア」（Medien als Gedächtnis）という概念で議論されるものである。つまり情報保存や呼び覚ましといった記憶や想起に関する現象を議論するために、メディアをメタファーとして用いるもので、メディアの変遷と記憶のメディア的メタファーの関係性などを考察するものである。

> メディアと記憶メタファーは、互いに密接に関係している。なぜなら、哲学者、学者、芸術家たちが想起と忘却のプロセスを表現するために見つけた比喩の数々は、その時代に支配的な物質的書き取りシステム（Aufschreibesystem）と蓄積技術に従っているからだ。つまり、これらの多種多様な比喩のいくらかを再現することは、同時に記憶理論の変遷をメディア史と重なる領域で記述することでもあるのだ[205]。
>
> 想起について語る者はメタファーなしにはやっていけない、[…なぜなら]想起という現象は直接的な記述を明らかに寄せつけず、メタファーを強要する[206]。

このように記憶の比喩としてのメディアという視点は、メディアの発展と記憶モデルの変遷を相互に関連付けながら観察するものといえる。

こうした研究の代表例はA. アスマン『想起の文化』第二部「メディア」に収められている。記憶メタファーの歴史を主に文学作品から抽出して解釈しており、たとえば記憶を「発掘」というメタファーで解釈した例は「記憶の空間メタファーは時間の性質をますます強く帯びていった」[207]ところから忘却や不連続性へと記憶観察の視点を変化させることが可能となり、そこから「嚥下、反芻、消化」という記憶メタファーへとの可能性が広がることなどが指摘されている。

---

[205] Assmann, Aleida, 2003, S. 149. （翻訳：A. アスマン著、安川晴基訳、2007 年、179 ページ。）ただし括弧内翻訳者。
[206] Ebd., S. 150. （翻訳：同上、180 ページ。）ただし括弧内筆者。
[207] Ebd., S. 165. （翻訳：同上、198 ページ。）

ふたつめは、集合的記憶の機能面からメディアの必要性をとらえようとするものである。集合的記憶は個人的記憶を社会内部に保存することを必要としており、メディアはその要望に応えるために不可欠な道具である。しかしA. エアルの次の言説に明らかなように、集合的記憶におけるメディア機能は保存機能だけに限定されるものではない。すなわち、

> それ［集合的記憶のメディア］は、スキーマの伝達や生活を送る上でのコード化、かつての生活世界に関する表象の形成、歴史像の流通、想起に関する論争の交渉や集合的記憶の経緯や問題に関する反省など、想起の文化の多彩な機能を満たすものである[208]。

個人的記憶が外部メディアに保存されるだけでは、前章で確認した可変的かつ流動的という集合的記憶のダイナミズムを十分に説明することができない。それゆえ集合的記憶にとってメディアは個人的記憶の保存容器だけにとどまらず、集合的記憶がそれとしてあり続けるために多くの機能を担っていると考えるべきである。言い換えるならメディアは集合的記憶と社会の接点なのであり、具体的にはメディアは集合的記憶の保存や伝達、コード化や過去像の流通、集合的記憶論争の交渉など、実に多様な機能を担っているのである。

集合的記憶論におけるメディアの研究は、少なくとも以上のふたつを出発点とすることができる。メディア的メタファーに関する考察の重要性は否定できないが、その研究は別の機会に行うこととし、本論文では映画における集合的記憶の交渉というテーマに沿って、メディアの機能面を中心に検討を行いたい。その際、A. エアルの「［メディアは］想起の個人的次元と社会的次元とのあいだの媒介装置かつ変圧器と見なされなければならない」[209]という条件をメディア機能考察の前提とし、また考察対象は物質的メディアに限定する[210]。

---

[208] Erll, Astrid, 2005b, S. 249.
[209] Ebd., S. 251. ただし括弧内筆者。
[210] **補論 1**および**補論 4**で言及しているN. ルーマンの社会システム理論では、愛やお金などもメディアとして考えられているが、ここでは言及しない。本論では、一貫して集合的記憶論におけるメディア概念を取り上げる。

2-2：集合的記憶のメディア概念

集合的記憶研究はメディア研究でもあるがゆえに、集合的記憶を論ずるうえでメディアは非常に重要な概念となっている。メディア概念は文化科学のみならずメディア論や社会学の領域でも用いられているが、しかしその多様さゆえに「メディア概念をはっきりと提示することができていない」[211]状況であった。ここではA. エアルのメディア概念に焦点を当て、集合的記憶論におけるメディア概念について考察する。

A.エアルは著書『集合的記憶と想起の文化』(*Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*）において、S. シュミットが提唱するコンパクト概念を応用し、集合的記憶に適するよう再構成したメディア概念を提示している。S. シュミットは、メディア概念の複雑さはメディア自身の機能的な多様性に由来していると考えており、そこからメディア概念のなかに自身の様々な機能を詰め込んだコンパクト概念を提案した[212]。これは、多様な文化的現象に関係する集合的記憶のメディア概念に応用が可能であると考えられる。そこで本論文では、S. シュミットのコンパクト概念とそれを応用したA. エアルのメディア概念を基本に据えながら、集合的記憶とメディアの関係性について論じていきたい。

S. シュミットはメディア概念を設定するにあたり、次の4つの構成要素からなる複合的なメディア概念を考案した[213]。その構成要素は以下のとおりである。

1. コミュニケーション手段（Kommunikationsinstrumente）
2. メディア技術（Medientechnologie）
3. 社会システム的要素（sozialsystemische Komponente）
4. メディア番組（Medienangebote）[214]

---

[211] Erll, Astrid, 2005a, S. 131.
[212] Schmidt, Siegfried J.: *Kalte Faszination. Medien, Kultur, Wissenschaft in der Mediengesellschaft*. Weilerswist: Velbrück Wissenschaft, 2000a, S. 94ff.
[213] Ebd.
[214] Ebd. なお S. シュミットのメディア概念は次の点を出発点としている。すなわち、①可能な限り容易である、②経験的に納得できる、③観察領域において十分な区別化を達成する、④周知の付加的コンセプトを排除するためにシステマチックであること。 Vgl.: Schmidt, Siegfried J.:

第一のコミュニケーション手段について、日常言語をプロトタイプとした文字、音や絵（記号）などがこれに該当する。これらの特徴は、意味するものと意味されるものが明らかであり（記号論的）、持続可能かつ反復可能なことであり、社会的に重要な意味を成しうるものである。つまり、意味の無い音の羅列や解読不可能な文字（のようなもの）は、誰も理解することができない。そこに記号論的な関係が成り立たず、それゆえそのようなものはコミュニケーション手段とはいえないのである。

このときS. シュミットは、コミュニケーション手段について物質的な伝達能力に重点を置いている。それゆえ自然的言語はコミュニケーションの方法（Mittel）ではあるが手段（Instrument）とは認められていない[215]。したがって口承文化における叙事詩による伝承などは、このメディア概念を採用する限り考察の対象から除外されることとなる。

第二のメディア技術は特定のメディア作品にさまざまな形式を与え、社会内部で流通受容されることに貢献するものである。これは特に本や映画、Eメールなどの形態で現れるが[216]、こうしたメディア技術はそれを使用するために技術の習得が求められるものである。「（印刷、映画やテレビ技術など）メディア技術に慣れ親しむことは社会化によって学習される必要があり、それが個人の構成要素の強固な一部分となる」[217]。これは、カナダのメディア学者であるマーシャル・マクルーハン（Marshall McLuhan）が唱えた「人間の身体と精神の拡張」と多くの共通点を持つ考え方であるといえるだろう。たとえば現代であれば、携帯電話の普及が典型的であるように思われる。携帯電話というメディアによって、現代社会やコミュニケーションの構造が変化し、また人々の意識や行動パターンも変化した。このように、メディアはわれわれの認知やコミュニケーションに形態を与えるがゆえに、個人の構成要素の一部分とみなすことができる。

Der Medienkompaktbegriff. In: Münker, Stefan / Roesler, Alexander (Hg.): *Was ist ein Medium?* Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 2008, S. 144.

[215] Schmidt, Siegfried J., 2000a, S. 94.

[216] Schmidt, Siegfried J., 2008, S. 145.

[217] Schmidt, Siegfried J., 2000a, S. 95.

メディアはわれわれの認知的、同様にコミュニケーション的可能性と機能を形作る。われわれが今日知っていることは、その大部分がメディアによって知っていることである。メディアは、われわれが何を想起し何を忘却するかを決定する。メディアは知の構造とその制御の連続化（Sequenzierung）をコントロールする[218]。

第三の社会システム的要素は、学校やテレビ局などの社会的制度や組織を意味している。メディア技術開発のためには社会的組織が欠かせないばかりでなく、教育などを通してコミュニケーションツールを社会的に保持・伝達する機関も必要である。第三の要素は、それゆえ他の構成要素と特に密接な結びつきがある。すなわち、「自己組織的にモデル化される」[219]ことが求められるのである。

第四に、具体的なメディア番組がある。これは以上の3点によって具体化されるものであるが、それは「個々の特定の実在としてではなく、各々のメディアシステムの条件を個別の特徴として常に持ち合わせているようなプロセスの結果として理解されなければならない」[220]ものである。つまり、他の要素との共同的作用としてあらわれるものである。これは一般化して次のようにいうことができるだろう。すなわち、

これらのファクターの共同的作用はシステム的、自己組織的共同的作用として考えられる。その際、4個の構成要素を考慮せずに存立することは不可能である。メディア供給を話題にするときには、使用するコミュニケーションツールや技術、社会的制度はどのような可能性を開くことになるのか。またそれらはどのような影響をユーザーグループに及ぼすのか。この点を考慮しなければならない[221]。

S. シュミットは以上のようにメディアの自律的な自己組織化に言及している。つまり、メディアの4要素は互いに関連しあいながらひとつの具体的なメディア作品を作り上げていくのである。

---

[218] Schmidt, Siegfried J., 2000b, S. 83.
[219] Schmidt, Siegfried J., 2000a, S. 95.
[220] Schmidt, Siegfried J., 2008, S. 145.
[221] Ebd.

しかしその一方で、S. シュミットはメディアにおける人間の役割の重要性も指摘している。

> 人間の死というすべての主張に反して、次のことはまったく問題にならない。すなわち、少なくとも今日までメディア自身が自分自身を発見したり、自分の意思を押しとおしたり、自分自身を用いたりしたことはなく、むしろ人間がメディアを通して／メディアのための需要によってそれを作ったのである[222]。

ここで言われている「人間の死」（Tod des Menschen）とは、たとえば後述するN. ルーマンの社会システム論に代表されるものである。N. ルーマンは社会を構成する要素から人間を除外し、代わりにコミュニケーションが社会を成立させている要素であると考えている。つまり社会的活動の一切から人間は締め出されたわけであるが、上述したS. シュミットの引用はそれに対する批判と考えられる[223]。

以上、S. シュミットのメディア概念を概観してきた。S. シュミットのメディアは、メディアには多様な側面があるということから出発し、それゆえ特定のメディア現象について常に複数の視点から考察する必要があることをモデル化した点に特徴があった。S. シュミットが特に強調したのは、人間がいなければメディアもありえないことを前提としたうえで、メディアの構成要素自体は自律的に相互作用的であるという点であった。またそれと同時に、メディア利用者側への影響も考慮すべきであることを説いていた。

A. エアルはS. シュミットのメディア概念を、集合的記憶論的コンパクト概念として再構成することを試みている。A. エアルはコンパクトメディア概念について次の通り2つに分類し、各々について検討を加えている。ひとつはメディアの物質的次元（materiale Dimension）であり、もうひとつは社会的次元（soziale Dimension）である[224]。

物質的次元には3つの要素が含まれており、それぞれ意味論的コミュニ

---

[222] Schmidt, Siegfried J., 2000a, S. 95.
[223] N. ルーマンの議論は**補論 1**および**補論 4**を参照。
[224] Erll, Astrid, 2005a, S. 132ff.

ケーション手段（semiosefähige Kommunikationsinstrumente）、記憶内容の拡散と伝承のためのメディア技術（Medientechnologien zur Verbreitung und Tradierung von Gedächtnisinhalten）および具体的な記憶のメディア番組としての文化的対象化（Kulturelle Objektivation als konkrete Gedächtnismedienangebote）である。意味論的コミュニケーション手段は集合的記憶構成の前提として捉えられている。これはS. シュミットのコミュニケーションツール同様言語や文字､絵や音などを指しているが、これらが無ければ記憶を外部化することができない。それゆえ集合的記憶を可能にするという意味でも非常に重要な要素であるといえる。

第二のメディア技術は、集合的記憶の空間的拡張と時間的伝承を可能にするものである。活版印刷の発明などメディアの革命は社会を大きく変化させてきたが、集合的記憶論において特に問題となるのが「メディア技術において重要な変化が起こった場合、想起実践にとって何を意味するのか」[225]という点である。後に詳しい検討を行うとおり、ナチス時代の情報は体験者から外部化されて様々なメディア媒体に保存されはじめている。

文化的対象化はS. シュミットのメディア番組に該当し、具体的なメディア作品などを意味している。文化的対象化にとって最も重要であるのは、そのメディアにおいて過去をどのように提示するかという「形式」（formale Gestaltung）を決定付けることにある。チャップリンの『独裁者』（*The Dictator*）は後のヒトラー映画に大きな影響を与え続けているが[226]、これはその典型例であろう。つまり文化的対象化は、集合的記憶の表現のあり方を決定する重要な役割を持っているのである。

以上の物質的次元と並んで、A. エアルは集合的記憶のメディアの社会的次元として､社会的制度化および機能化（soziale Institutionalisierung und Funktionalisierung von Medien des kollektiven Gedächtnisses）をあげている。上述した3つの物質的次元は集合的記憶生成の前提であるが、実

---

[225] Ebd., S. 133.

[226] 2004年公開『ヒトラー―最期の12日間』のアイヒンガー監督および同映画でヒトラー役を演じたブルーノ・ガンツは、もっとも影響を受けた映画に『独裁者』を上げている。編集部（文責）:「オリヴァー・ヒルシュビーゲル監督、自作を語る」､『シネ・フロント』第337号、2005年7月号、8ページ参照。

際に集合的記憶を構成しているのは社会的次元である。物質的次元の要素を用いて形成された過去像を集合的記憶として機能させるためには、カノン化やアーカイヴ化などの社会的制度による後押しを必要とするからである。

同時に社会的次元は、かつて集合的記憶と認められていなかったメディアをそれとして機能させる能力を有する[227]。S. シュミットのメディア概念においては、儀礼（Ritual）や踊りなど特定の物質的メディア技術を必要としない集合的記憶は包含することができなかった。しかしA. エアルは社会的制度の「受動面的機能化」（Rezepionsseitige Funktionalisierung）として「ある集合によって過去として伝達されていると思われるもののすべてを記憶のメディア」[228]と見なすことで、身体的動きなども集合的記憶のメディアに取り入れることを可能とした。つまり社会的次元には、社会的制度など集合的記憶を作り出す創造面的機能（produktionsseitige Funktionalisierung）と、すでにある文化現象を集合的記憶であると受け入れる「受動面的機能」の2つが考えられているのである。

以上、集合的記憶論におけるメディア概念についてS. シュミットとA. エアルのメディア概念を中心に概観してきた。ここで明らかなのは、メディアは複合的に理解しなければならないということである。確かに本という媒体であっても、活版印刷発明の前後ではその役割と意味はまったく異なっているだろう[229]。出版社や図書館など本に関するあらゆる社会的制度および組織が確立されることで、社会における本の扱われ方が変化するからである。それゆえ各メディアの特性だけを問題にするのではなく、各メディアを成立させている側面をも視野に入れているA. エアルの議論は、非常に重要であろう。

次に上記のメディア概念を前提に、本論の関心に惹きつけながら集合的記憶におけるメディア機能にスポットライトをあてる。コンパクト概

---

[227] Erll, Astrid, 2005a, S. 135.
[228] Ebd.
[229] メディア技術の発達による各種メディアの役割の変遷については、Spangenberg, Peter M. : *Mediengeschichte- Medientheorie*. In: Fohrmann, Jürgen / Müller, Harro (Hg.): *Literaturwissenschaft*. München: Wilhelm Fink, 1995, S. 31ff.を参照。

念はメディアの複雑な機能を背景にしていたが、集合的記憶はどのようなメディア機能を必要としているのであろうか。

2-3：集合的記憶のメディア機能

本節ではA. エアルの論文「集合的記憶のメディアとしての文学」（*Literatur als Medium des kollektiven Gedächtnisses*）に倣い、集合的記憶を次の3点においてメディアなしには成立不可能な現象であると考える。すなわち、第一に集合的記憶の保存媒体として、第二に集合的記憶の流通媒体として、第三に集合的記憶の呼び覚まし（キュー、*cue*）として、集合的記憶にとってメディアは必要不可欠なものであると仮定し、これらについて検討していく。ただしこれらは実際には不可分である。あくまで分析上の区分であり、重なり合う部分も少なくないことを付言しておく。

保存媒体としてのメディア

集合的記憶は、コミュニケーション的記憶では80～100年、文化的記憶では神話時代から社会内に保持されることが求められる[230]。したがって集合的記憶は、記憶内容を保存するための媒体を必要とする。

非文字文化社会においては、このメディアは常に身体的である。つまり、伝統的舞踏や口承叙事詩、儀式や祭りなどが非文字文化における集合的記憶のメディアとなる。これは、特に口承文化に特徴的なメディアといえるだろう。口承文化の特徴は「安定状態の回復」（die Wiederherstellung eines Gleichgewichtszustandes）「［社会にとって］必要ないものの文化的要素の忘却」（das Vergessen kultureller Elemente, die nicht gebraucht werden）の2点であり[231]、この意味において集合的記憶は常に一定で、過去は固着している[232]。口承文化のメディアは、声、身体、模倣、ジェスチャー、踊り、リズム、儀式的行為などを組み合わせ

---

[230] **第1章**を参照。
[231] Assmann, Aleida /Assmann, Jan, 1994, S. 130.
[232] Assmann, Jan, 2005, S. 52.

たものである[233]。それらを正確に用いてすべての文化的知を保持することが求められた社会においては、記憶保持のための専門家が生まれることになり、具体的には吟遊詩人、シャーマンなどが考えられている[234]。

文字が登場すると、集合的記憶のあり方は大きく変化する。すなわち、文字によって身体外部に記憶を保存することが可能になったのである。これは記憶保存の方法が身体的多様性への依存から文字のみへ縮減されたと評価できるが[235]、一方で文字の誕生は正確な記録が可能となったことも意味している。つまり、情報が文字化されることで、伝承の過程で何かが失伝するという危険性がなくなったのである。さらに、文字の発明はアーカイヴという新しいシステムを生み出し、これによって人間は膨大な蓄積的記憶の貯蔵庫を手に入れることに成功することとなる。確かに、現在のようなアーカイヴが確立するのは印刷術の発明を待たなければならない。しかし、それも文字というメディアがあればこその発明であることに異論はないだろう。その意味で声の文化から文字の文化への移行は、人間の技術メディア史のなかで最も革新的な発明であったといえる[236]。

一方、書かれたものすべてが無条件にアーカイヴ化されるわけではない。アーカイヴは当該社会の「過去の証拠」（das Archiv als Zeugnis der Vergangenheit）であるがゆえに、つまり「権力や財産や血統に関する主張の正しさを証明することができる文書」の集積体であるがゆえに、「政治的支配が後退すれば、正当性の諸々の構造は変化する。それに合わせてアーカイヴの保管資料もまた変わってくる」[237]。これの典型は焚書であろう。たとえば 1933 年 5 月のナチス・ドイツの焚書

---

[233] Ebd, S. 56ff.

[234] ただし、口承文化におけるこれらのメディアを集合的記憶のメディアと素朴に断定することは、前節のメディア概念の定義に従う限り非常に難しい。すなわち A. エアルのメディア概念は、集合的記憶のメディアは「メディア技術」（Medientechnologie）を要素として要求していた。したがって、声や身体に限定される先技術時代のメディアは、定義に厳密に従うならば除外されなければならないといえる。

[235] Assmann, Aleida / Assmann, Jan, 1994, S. 134.

[236] ワルター・J・オング著、桜井直文／林正寛／糟谷啓介訳：『声の文化と文字の文化』、藤原書店、1991 年、178 ページ。

[237] Assmann, Aleida, 2003, S. 343. （翻訳：アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007 年、408 ページ。）

（Bücherverbrenngung 1933 in Deutschland）があげられる。これは「非ドイツ的な魂に対する抵抗運動」（Aktion wider den undeutschen Geist）の一環としてユダヤ系の著者を中心に行われたものであるが、これはいわゆる純粋なドイツの伝統的価値観のみが社会的に承認され、反ナチスやユダヤ的思想の一切の蓄積が社会的に無化されたことを意味する。このように、アーカイヴは政治に大きな影響を受けるものである。

20 世紀におけるメディアの電子革命は、集合的記憶のあり方にも革命をもたらすことになる。この場合の電子革命とは、20 世紀初頭における映画とラジオの発明と普及、60 年代におけるテレビ文化の発展と 20 世紀末に起きたコンピュータの普及およびインターネット網の発達を意味する[238]。これらのメディアは記録することが「書き換えや上書きと密接に結びついている」がゆえに「常に新鮮で［社会が］受け入れ可能である」情報のみが重視されることとなる[239]。確かにテラバイト級のハードディスクが個人でも手に入れることができるようになり、その意味において現代社会における記憶保存量は劇的に増大したといえるだろう。しかしその一方で、「すべては気分しだいで見直され、書き換えられうるのである」[240]。

電子メディアの登場と発達は、それまでの文字文化時代と比べて、情報の保存形態に再び大きな変革をもたらした。文字文化時代はすべての情報を文字というひとつのメディアに集約させていたのに対し、映画やラジオ、テレビの登場によって再び声や身体などが復活するのである[241]。これによって情報を文字化することなく、多様な方法で保存することが可能になったといえる。しかも情報は文字化されないため、限りなく現実に生起した出来事そのままに保存することが可能となった。「動きを伴う映像は現実の保証、アリバイの現実を提供する」[242]。

流通媒体としてのメディア

---

[238] Assmann, Aleida / Assmann, Jan, 1994, S. 137.
[239] Ebd. ただし括弧内筆者。
[240] Ebd.
[241] Ebd., S. 137.
[242] Berghaus, Margot, 2003, S. 165.

集合的記憶は、ある共同体の内部でそれが共有されることによって成立する。すなわち、共同体内部に集合的記憶を伝達するためにメディアが必要となってくるのである。このとき問題となるのは、伝達の速度と持続性、およびその情報量である。

非文字文化におけるメディアは常に身体的であるがゆえに、人は情報伝達の現場に居合わせることが必要不可欠である。それゆえ情報の流通範囲が限定され、したがってある集合的記憶が共有されている社会も「小さい」[243]といえる。

これに対して文字の発明は、情報を空間と時間から解放させることに成功した。これまで情報の保存と伝達は身体に限定されていたため、他者への伝達は時間的空間的制限があった。まず寿命という時間的限界があり、同時に伝達の際にそこにいなければならない（anwesend sein）という制約があった。儀式や祭りの空間を共有するものだけが、記憶も共有できたのである。一方で文字は情報の身体からの外部化を可能にしたことにより、これらの制限をなくしてしまった。これによって、第1章で確認したA. アスマンによる蓄積的記憶と機能的記憶という区別が可能となるのである。

ただし、文字メディアの誕生によって口承文化が衰退したわけではない。ペーター・M・シュパンゲンベルク（Peter M. Spangenberg）は、中世の文字文化が主に修道院と大学が中心であるとしたうえで、そこでは文字による権威づけと口承による実践が結びついた独特の文化を形成していたと指摘する。

> 両者［修道院および大学］において口頭の相互コミュニケーションと、文字―写本―をとおして伝達され公となっている知識の典拠が根本的な役割を果たしていた[244]。

修道僧が町の法律家や大学の教員となり、また講義などがもっぱら口承文化的なシチュエーション、つまり口伝に基づいて行われていたことを

---

[243] 「小さい社会は口承のコミュニケーションを用いる。」Ebd., S. 131.
[244] Spangenberg, Peter M., 1995, S. 41. ただし括弧内筆者。

考慮すると[245]、流通面において当時はまだ口承文化とほとんど変わらない状況であったといえよう。流通媒体としての実績を得るのは、活版印刷術を待たなければならなかったと考えることができる。

15世紀になって活版印刷術が誕生すると、時間的空間的制約はますます失われ、人がアクセスできる情報量はそれまでと比較にならないほど膨大になっていく。1455年に活版印刷が発明されたのち、ほどなくしてフランクフルト・アム・マイン（Frankfurt am Main）にて書籍見本市（Buchmesse）が開催されはじめたとされている[246]。これは書籍が前述した写本時代とは比較にならないスピードで流通したことを示している。こうした印刷本の劇的な流通は、社会におけるコミュニケーションの考え方を根本から変えることとなった。すなわち、「黙読」（stille Lektüre）という身体的相互作用に依存しないコミュニケーションがその基本フォームとなり、それによって相互コミュニケーションというプロセスを経ない個人的解釈が成立するようになる。つまり、作者から直接的に読者へとコミュニケートする、新しいコミュニケーション形態が誕生するのである。

> 創作活動を行う筆者の精神的所産としての印刷本は、作者の身体を超えて直接的で「回り道」のない方法で読者の意識に到達することが目指されていた。印刷本は精神内容のコミュニケーションの形式に、および自分の意識が考える自己とするような、またそれを伝達するというような明示的メディア形態になったのである[247]。

流通量の増加によって読者という新しい集合が誕生し、それに伴いコミュニケーションのあり方が大きく変化した。身体的相互作用を必要としない作者から読者への一方通行的コミュニケーションは、その後のデジタルメディアにおいても共通のコミュニケーションモデルとして引き継

---

[245] Ebd., S. 42.
[246] フランクフルト書籍見本市の歴史に関する書籍として：Weidhaas, Peter: *Zur Geschichte der Frankfurter Buchmesse*. Frankfurt am Main: Surkamp Verlag, 2004.
[247] Spangenberg, Peter M., 1995, S. 41.

がれている[248]。

19世紀後半から20世紀におけるメディアの変化は、交通機関の発達と相まって「人間の身体と精神の拡張」（Extensionen des menschlichen Körper und seines Bewußtsein）として経験された[249]。この考え方によれば、交通速度の上昇は身体的拡張、ニュースなどのライヴ性は精神の拡張としてみなされている。1895年に初上映された映画は人々の関心の高さと映画技術の改良により、20世紀初頭には各所に映画館が建設された。これと同時に、観客側からは長編映画を求める声も多くあがり、結果として映画産業が発達する。このとき、映画作品を販売するという産業構造は大衆の需要に合致するものを作成するということに等しい。すなわちそれは個々の商品を個別に販売するのではなく、匿名の大衆にまったく同じメディア製品を提供することであり、大衆の需要と密接に関連しているのである。

集合的記憶のキューとしてのメディア

これまで確認してきたメディア機能とは異なり、キューは送り手と受け手というコミュニケーションの枠組みとは関係がない。キューは心理学的研究領域において認知されてきた概念で、想起の動機となる内的外的刺激のことを意味している。個人的記憶は過去の出来事との直接的関係がなく構成主義的に形成するというラディカルな見解がある一方で、その中庸を取ろうとする研究もある[250]。それはおおよそ次のようなものである。すなわち「記憶の痕跡」（Engramm ,Gedächtnisspuren）が現存する（Vorhandensein）という点から出発し、感情などに起因するキューがエングラムと統合することで、そこから連想的に想起するというものである[251]。その典型的な例としてA. エアルは家族写真をあげている[252]。すなわち、ある写真が引き金となって家族構成員が当時の出来事を想起する。このとき、想起することは写真の被写体と直接的な関係にある必

[248] Vgl., Luhmann, Niklas: *Die Realität der Massenmedien*. Wiesbaden: VS Verlag, 2004.
[249] Spangenberg, Peter M., 1995, S. 42.
[250] Erll, Astrid, 2005a, S. 84.
[251] Ebd.
[252] Erll, Astrid, 2005b, S. 256.

要はない。祖父の写真をみて、第二次世界大戦のストーリーを想起することも許されているのである。

A. エアルは別の個所で、集合的記憶におけるキューはP. ノラの記憶の場と重なることを示している。

> ノラ的な記憶の場所の多くは（エッフェル塔、コーヒー）、第一に集合的記憶にとってのキューであると考えられる。なぜならこのメディアは送り手というわけでもなく、また狭い意味での社会的コードを示すというわけでもないからであり、それらは想起の文化の文脈以外では現在化されることはない[253]。

つまり、特定の社会的文化的コンテクストのなかで何かが想起される、そのきっかけを与えるのがキューである。しかしこの場合の想起内容は、個人的記憶のレベルでいえば同質ではなく個々で異なっている。「コーヒー」に触発されて得られる想起は、個人の体験によってさまざまであろう。それゆえ、ある共同体内部で同質の想起内容を喚起させようとする場合には、必ず繰り返しの説明が伴わなければならないのである。

> 写真は物語をとおしてはじめて記憶のメディアになる。蚤の市で見つけた古い一枚の家族写真が「われわれに語りかける」ことは非常に少ないか、まったくないといえる。[…] それに対して、家族の歴史をよく知っている曾孫などは、それを過ぎ去った時代のたくさんの思い出に関するメディア的キューとしてアクチュアル化することが可能であるだろう[254]。

注目すべきは、キューの機能はコミュニケーションによって可能となるという点である。記憶のメディアは、最初から記憶のメディアであるわけではない。それもまた集合的記憶と同様に、コミュニケーションによって形成されるのである。

---

[253] Ebd., S. 255.
[254] Ebd., S. 256.

以上、集合的記憶のメディア機能である保存、流通、キューについてそれぞれ確認してきた。保存と流通に関して、このモデルは伝統的なコミュニケーション概念であるコンテナモデルに基づいていることは明らかであろう。確かにコンテナモデルは情報の意味創出においていわゆる受け手の果たす役割が矮小化されてしまい、この点において批判は少なくない。しかし、一方でコンテナモデルにも一定のメリットが認められることも間違いのないことである。この点に関してP. M. シュパンゲンベルクはメリットを3点あげているが、集合的記憶論との関連でいえば次が重要である。すなわち、

> （たとえば言語表出や機械的に伝達された認識など）コンテナ内の情報の意味は、空間や時間を超えて交換可能であり、それによってコミュニケーションの状況における社会的時空的組織の意味構成における関与は次第に薄れていく[255]。

集合的記憶は過去情報によって個人及び社会を規定するものであったが、その際に時代の変化から守られている必要があった。コンテナモデルは、時間の流れにおいて情報の価値が変化しないケースの説明において非常に有効なモデルなのである。

一方で、キュー機能はコミュニケーションによって形成されるメディアであった。コミュニケーションは常に現在的であり、その意味においてキューは語られた時点の時代的および社会的な枠組みにおいて機能している。つまりコンテナモデルと対置する機能であり、あるメディアが同時的にコンテナモデルとキューの機能を有することは矛盾しているように思われる。しかしすでにこのメディア機能は分析上の分類であることに言及しているが、それのみならずすでに確認したようにメディア概念そのものが複合的であり、単純な構造をしていない。それゆえメディア機能もまた、重層的な特徴を持っているのである。

集合的記憶は流動的な性質を持っていたが、それを支えるメディアもまた幾重にも入り組んだ複雑な機能を果たしていることが明らかとなっ

[255] Spangenberg, Peter M., 1995, S. 32.

た。これらの機能は分析上は分類され得るが実際には不可分であり、あらゆる機能がひとつのシステムとして作動している。集合的記憶が存在し続けることができるのは、メディアのこうした複雑な機能に支えられているからである。

2-4：集合的記憶のメディアとしての映画

前節では集合的記憶のメディアの一般的な機能について言及してきた。メディアは多様な機能を果たしており、それによって集合的記憶のあり方が決定付けられることを確認することができた。以下では、メディアを本論の関心にひきつけて映画に限定し、集合的記憶論においてメディアとしての映画はどのように理解されているのかを明らかにする。

映画のメディア性

はじめに、映画のメディア性について考察する。映画は他のメディアと比較したとき、どのような特徴を備えているのであろうか。映画特有の性質は、集合的記憶形成にどのような作用を及ぼすのであろうか。以下でこの点を中心に考察していく。

テッサ＝モーリス-スズキは歴史概念を二分し、それぞれ「一体化（アイデンティフィケーション）としての歴史」と「解釈としての歴史」と呼んだ。「一体化としての歴史」は、特定集団との一体感を、過去との共感的関係を結びながら得ることを目的とするものであり、一方の「解釈としての歴史」は史実の因果関係や社会変化の力を理解するための学問である、としている[256]。このとき、歴史を題材とした映画は「一体化としての歴史」に大きく貢献するものであると指摘している。なぜなら映画は映画館のなかで多数に混じって無言で見入ることを強いられ、また上映中は巻き戻し不可能という性質から、観客が容易に理解できるストーリー構成がなされているからである[257]。それゆえ映画は観客に過去との一体感をもたらすといわれて

[256] テッサ・モーリス-スズキ著、田代泰子訳：『過去は死なない：メディア・記憶・歴史』、岩波書店、2004年、27ページ以降参照。
[257] 同上、151ページ。

いる[258]。

さらにモーリス‐スズキは、映画を上映する映画館という特殊な環境にも言及している。

> スクリーンに最初のシーンが映ってしまえば、観客は途切れることなくつづく流れに身をまかせるだけで、止めたり、逆行させたりはできない。映画館では、映画のなかの視覚世界に引きこまれて、じっさいの空間環境を意識しなくなるばかりか、日常の時間の流れから外れて、ロバート・ゲスナーが映画の“継続する現在”と名づけたものにひたりきる。［中略］映画館の観客になると、制作者の時間意識の囚われ人となり、エンド・クレジットまで容赦なく映画の流れに運ばれる[259]。
>
> テレビジョン番組とそれを見る人との関係は、映画館で上映される映画とそれを見に行く人との関係とはまったく違う。映画館では、暗闇のなかに座って、映像と音とに身をゆだねるしかない。［中略］映画館では、なにか言うことがあっても声を潜める。［中略］こうしたすべてのことが、［中略］わたしたちが過去をどう見るかに影響している[260]。

加えて、テレビやビデオの視聴は基本的に家族などの小さな集団に限られている。これに対して映画は、一度にテレビ視聴者の何十倍の観客を収容できる特殊な環境を特徴としており、それゆえ作品と観客同士の一体化がより強力にもたらされるのである。このとき、モーリス‐スズキはあくまで同一空間内での共体験という視点で論じていることに注意しなければならないだろう。現代はDVDなどが普及し、映画は映画館のなかだけで見るものではなくなってしまった。この意味で、映画とテレビの境界は無くなりつつあるということもできるだろう。しかしモーリ

---

[258] これは、過去イメージの大部分を映画が補うということにつながるだろう。この例としてモーリス‐スズキは、『風と共に去りぬ』の南北戦争、『ズールー』のズールー戦争、『アミスタッド』のアミスタッド事件をあげている。詳細：同上、149ページ以降。

[259] 同上、147ページ。

[260] 同上、168ページ以下。

ス‐スズキの議論は伝統的な映画視聴やテレビ視聴を前提としており、映画とテレビの差異がなくなりつつあるという議論には踏み込んでいない。

さて、モーリス‐スズキが主張する以上の視点は、A. アスマンの映画理解と共通している。A. アスマンは著書『記憶のなかの歴史』において、映画のメディア性について次のように述べている。すなわち、映画は観客に映画への同一視を迫る作用があることを指摘したうえで、その危険性に言及している。

> 映画による歴史の再構成が一つの「物語（ストーリー）」に沿ったものであり、原典からのみまとめられた「歴史（ヒストリー）」に基づくものではないために、人々はあたかも自分がその場に居合わせたかのように、歴史的エピソードを想像しなおすことができる。［…想像力をメディア技術で増幅させる技術が］なぜ危険なのかと言えば、観客でしかないはずの公衆が、自分は証人であるという錯覚を生むからである。「あたかも自分がその場に居合わせたように」から、「自分はその場に居合わせた」という幻覚が生まれる。「そうだったかのように」の「あたかも（アルス・オプ）」が、その後「まさにそうだった」という誤った推論に屈するのである[261]。

映画は巻き戻し不可能なストーリーを持ち、観客に共感を呼び覚ます働きをもっている。また巨大箱型の映画館においてストーリーを共同体験することにより、映画の内容を追体験していると錯覚する傾向があることが指摘された。集合的記憶における映画のメディア性は、まさにこの点にあるといえる。

想起の映画

近年における歴史映画の相次ぐ発表に後押しされる形で、集合的記憶論のなかでも映画研究に注目が集まりはじめている。確かにこれまでも

[261] Assmann, Aleida, 2007a, S. 163.（翻訳：アライダ・アスマン著、磯崎康太郎訳、2011 年、251 ページ以下）

ヒトラー映画をテーマとする議論はあったが、集合的記憶のメディアとしての機能を詳細に検討される機会は極めて少なかったといえる。後述するように、ドイツのギーセン大学を中心とする集合的記憶論は特にハイカルチャーの分析を出発点としており、なおさら映画研究への取り組みが遅れがちであると指摘されている。こうした空白を埋めるために、現在は集合的記憶と映画を結ぶ研究が進められている。集合的記憶論のなかで研究対象が映画にシフトしはじめている背景には、以上のような理由があるといえる。

A. エアルとステファニー・ヴォディアンカ（Stephanie Wodianka）は2008年に論文集『映画と文化的想起』（*Film und kulturelle Erinnerung*）を発表した。第二次世界大戦後、それまで以上に集合的記憶のメディアとしての性格を強めていった映画は、現在では集合的記憶の保存と媒介に不可欠なメディアとしての地位を確保している。しかし、集合的記憶のメディアとしての映画概念はこれまでの映画研究とは一線を画する視点が要求されるものであり、現在までの研究成果だけではこの映画概念を明確に説明することは不可能であると A. エアルらは述べている[262]。それゆえ集合的記憶のメディアとして理論的に耐えうる新しい概念「想起の映画」（Erinnerungsfilm）を導入し、集合的記憶研究に新しい領域を開拓しようと試みたものが、以上の論文集である。

本節の目的は、『映画と文化的想起』のなかに収められた論文「序章：『想起の映画』の現象学と方法論」（*Einleitung: Phänomenologie und Methodologie des ‚Erinnerungsfilm'*）を参照しながら最新の集合的記憶論的映画研究を紹介するとともに、想起の映画概念が抱える問題点を明らかにすることである。

前述したとおり、ドイツの集合的記憶研究の中心地であるギーセン大学においてさえ、映画研究はほとんど未開拓の状態にあった。これについて、自身もギーセン大学の研究チームに属している A. エアルおよび S. ヴォディアンカは「[集合的記憶]研究におけるメディア概念の中に、

[262] Erll, Astrid / Wodianka, Stephanie: *Einleitung: Phänomenologie und Methodologie des „Erinnerungsfilms"*. In: Erll, Astrid/Wodianka, Stephanie (Hg.): *Film und kulturelle Erinnerung. Plurimediale Konstellation*. Berlin: Walter de Gruyter, 2008, S. 2.

映画というメディア研究の空白が広がっているところに原因がある」[263]と述べ、従来の研究を反省的に批判している。彼女たちによれば、集合的記憶のメディアは重層的であるにもかかわらず、これまでのところメディアの保存機能に注目した研究が主流であったとしている。しかし保存機能に注目した場合は必然的に時間経過が問題になり、それゆえ研究対象となるメディアは長い伝統を誇る「ハイカルチャー」（Hochkultur）に集中することになった。映画は誕生から 100 年程度しか経過しておらず、それゆえ必然的に研究対象から除外される傾向にあったために、文化科学の研究対象として取りあげられてこなかったとしている。加えて、伝統的な映画研究手法である映画内在的（filmimmanent）な作品分析は、文化科学的関心が寄せられる社会のなかの映画や複数メディア時代における映画というマクロ的分析には未対応であり、したがって映画のなかで個人的もしくは集合的記憶はどのように演出されているのか、などの問題設定がなされてこなかった[264]。こうした状況を背景として、論文集『映画と文化的想起』は従来のメディア概念および映画分析方法から批判的に出発し、集合的記憶論的分析が可能となる新しい映画概念を模索することが目指されている。

確かにメディア技術やメディアシステムの発展によって、映画のあり方が大きく変貌している。これに伴い映画の社会に果たす役割もまた時代とともに変化していると考えると、集合的記憶論にとって社会や複数メディア時代などを視野に入れたマクロ的な映画概念は必要不可欠であるといえる。以上の事柄を念頭に、A. エアルらは一般的な映画から区別される想起の映画概念を提案した。つまり、メディアがもつ過去情報の保存機能だけではなく、社会における過去像を形成し拡散させる機能に着目した概念を目指したのである[265]。

集合的記憶はコミュニケーションの所産であり、集合的記憶が何ものにも依存せずそのままで存在するわけではなかった。同様に想起の映画という映画形態もまたはじめから与えられるものではなく、社会的文化的活動によって形成されるのである。

---

[263] Ebd., S. 3.
[264] Ebd., S. 5.
[265] Ebd., S. 4.

文化的想起は「それ自身」（Ăan sichñ）で存在するわけではなく、コミュニケーション的、社会的、文化的、政治的プロセスの結果である。同様に想起の映画もシンボル的構造としての「それ自身」があるわけではなく、社会システムのなかで作り出されなければならないのである[266]。

この視点は、先に確認した S. シュミットのコンパクト概念と次元を異にしていることは明らかである。S. シュミットのコンパクト概念は物質的側面に焦点があてられていたのに対して、想起の映画は社会内部のコミュニケーションによって価値づけられるものとしている。つまり想起の映画が成立する要件として、物質的側面のみならず社会的プロセスも重要であることを示している。これに関して A. エアルらは特に次の 3 つの視点から解説している。すなわち、拡張機能、文化的想起のシステム、複数メディア性である。以下ではこれらを個別に検討していく。

①拡張機能

A. エアルおよび S. ヴォディアンカによれば、少なくともアスマン夫妻以降のドイツ語圏における集合的記憶研究はメディアの保存機能を研究の中心としてきており、それが映画分析の発展を遅らせてきたと考えている。想起の映画の拡張機能は、この点を批判的に反省し導入されたものである。この拡張機能を持つメディアはほとんどの場合マスメディアであるとしており、それゆえこの機能に焦点を当てることにより、発行部数の多い歴史小説や雑誌の歴史特集、映画など歴史が描くポピュラーカルチャー・メディアなどを、記憶論的に分析することが可能になるのである。

とくに映画は、以下でもう一度説明する通り、テレビや雑誌などを媒介とする宣伝、テレビ番組としての放送、ブログや動画投稿サイトなどインターネット上における情報拡散、DVD による再配信など、多くのメ

[266] Ebd., S. 5.

ディアが複雑に絡み合う巨大なネットワークを構成している。それゆえ映画は、他のメディアコンテンツと比較した場合、集合的記憶を形成するメディアとしての要素が非常に強いといえる。想起の映画の拡張機能は、ここに注目したものといえるだろう。つまり、複数のメディアと連携して情報を伝達することは、情報をより広範囲に媒介することができるのである。想起の映画の機能として、こうした情報を拡張する機能があげられている。

②文化的想起のシステム

想起の映画は制作された時から想起の映画として存在するわけではなく、社会システムのなかで構築されていくものである。言い換えるならば､ある映画を社会システムが想起の映画とカテゴライズするのである。A. エアルおよび S. ヴォディアンカによれば、そのカテゴリーは以下の 3 つである。

(a) 狭義の歴史映画と過去描写がある作品
(b) 他のジャンル（音楽 PV など）で、ある社会において由来やアイデンティティーや特定の価値の表象として理解されたもの
(c) 特定のメディア的形式の想起が可能なもの[267]

(a)は特定の過去の出来事や時代を描写した映画である。具体的には第二次世界大戦を題材とした映画や、史実を再現した映画、ノンフィクション、時代劇などが該当する。(b)は、たとえばアイデンティティーの源泉として特定の集団に支持されている映画のことを指す。これについての具体例は示されていないが、たとえばマイケル・ジャクソン（Michael Jackson）の代表作『We are the World』などが当てはまるように思われる。(c)はある映画技術の先駆的位置づけにあるものを指し、たとえば世界初の完全 CG アニメーションを達成した『トイストーリー』などがあげられる。

[267] Vgl.: Ebd., S. 8.

このなかで(b)および(c)は、本来的には過去情報を含まない映画であっても想起の映画に分類され得ることを意味しており、すなわちあらゆる映像作品が社会システムのなかで想起の映画として受け入れられる可能性があることを示している。これは時代の経過とともに、特定の映画が想起の対象として社会に認識されていく可能性を意味している。つまり想起の映画には(a)に定義されるように過去情報を映し出すものと、(b)および(c)のように将来において想起の対象となるものとが考えられている。言い換えるならば、想起の映画は想起対象が表象する場であると同時に、時間の経過と社会的価値付けを経ることで、その映画自身が想起対象にもなり得るのである。つまり、想起の映画は想起の対象であり想起の内容なのである。

この視点は、M. アルヴァックスの個人的記憶に関する問題を映画に適用したものと考えることができる[268]。もちろん M. アルヴァックスの考えを応用したのは A. エアルらが初めてではなく、アスマン夫妻の研究にも多分に引用されており、それ自体が目新しいわけではない。繰り返し強調すべき A. エアルらの特徴は、作品分析がメインであった集合的記憶論における映画研究に対し、社会的システムのなかで映画をとらえなおす視野を開いたことにある。個人的記憶同様、社会的文化的想起もまた社会的システムすなわちコミュニケーション的プロセスによって形成されていくのである。

③複数メディア性

現在のマスメディアは複数の媒体が密接に絡み合う傾向をますます強めている。映画はテレビ、雑誌、著作、インターネットなど複数のメディアに媒介されながらひとつの「作品」として構成されている。このことは、小説の映画化や映画作品の小説化などが多く見られることからも明らかであろう。A. エアルおよび S. ヴォディアンカは「現代ドイツの

[268] M. アルヴァックスは個人的記憶形成について、マスメディアに大きく影響されることに言及している。つまり、社会的コミュニケーションによって個人の中に特定の評価が固定されるのである。詳細はモーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳、1989 年、4 ページ。

多くの想起の映画も非常に高い次元で複数メディア的ネットワーク化がなされている」[269]と述べているが、これは以上のような状況を指摘したものであるといえる。A. エアルはこうした複数メディアのネットワークを「複数メディア性」（Plurimedialität）と呼び、想起の映画の大きな特徴をなしていると述べている。

ところで拡張機能および文化的想起のシステムは、以上のような現代のメディア産業構造によって、すなわち複数メディア性によってはじめて可能になるものではないだろうか。まず①**拡張機能**について明らかなことは、集合的記憶は単体のメディアによって媒介されるよりも複数メディアによる媒介の方が拡張領域が広いということである。齊藤は「『ヒトラー―最期の 12 日間』の観察―集合的記憶論の視点から―」において、インターネットの爆発的普及とメディアミックスの爆発的普及に言及しながら近年の映画が影響範囲を拡大させていることについて論じているが[270]、それは複数メディア性と拡張機能の関係をよく指摘しているといえる。

同様に②**文化的想起のシステム**に関して、上述したように複数のメディアが複雑に絡み合うことによって、より強固な想起システムが構築される、ということができるだろう。想起の映画は社会システムによって各カテゴリーに分類されていた。このとき、カテゴリー化を行う「社会システム的プロセスはメディアによって媒介される」ことから、「ネットワークが複雑であればあるほど、集合的記憶のメディアとしての映画の意味も強くなる」[271]のである。言い換えるなら、想起の映画のカテゴリー化は、それに参加しているメディアが多く複雑であるほど、結果として分類されたカテゴリーが支持されるのである。それゆえコミュニケーションすなわち社会システムによって想起の映画と認定されるために、複数メディア性は不可欠なのである。

ここまでの議論を整理しよう。現代におけるメディア技術の発展は、集合的記憶論に複数メディア性という新しい視点を導入させることになった。この複数メディア性は拡張機能と文化的想起のシステムという機

[269] Erll, Astrid / Wodianka, Stephanie, 2008, S. 6.
[270] 齊藤公輔：「『ヒトラー' 最期の 12 日間』の観察' 集合的記憶論の視点から' 」、『独逸文学』第 53 号、関西大学独逸文学会、2009 年参照。
[271] Erll, Astrid / Wodianka, Stephanie, 2008, S. 6.

能が備わっているのと同時にそれらを強化させており、したがって複数メディア性は想起の映画概念を構成する上で非常に重要な地位を占めているということができるだろう。

以上想起の映画について解説してきた。A. エアルらが主張するように、従来の映画研究には欠けていた視点が明らかになったように思われる。特に複数メディア性は 1980 年代においては現代と比べて規模が小さく、それゆえ問題として現れにくい側面であると考えられ[272]、この意味において現代に特徴的な現象であるといえる。すなわち A. エアルが提唱した新しい映画概念は、従来のメディア概念を批判的に出発したというよりも、メディア環境の変化に対応した新しい概念を創出したとみるべきであると考える。

2-5：小括—メディアの多元性

集合的記憶はメディアを必要とするというテーゼを出発点に、集合的記憶とメディアの関係性について多角的に考察してきた。その過程で明らかとなったのは、集合的記憶とメディアの複雑な関係である。

本章では次の 4 点を確認してきた。すなわち、メディアの概念定義における問題性、集合的記憶におけるメディア概念、集合的記憶論におけるメディア機能、集合的記憶論的映画概念である。まずメディア研究の歴史とそれに伴うメディア概念および理論の複雑さを確認し、次に集合的記憶にとって重要なメディア機能として保存および流通、キューの 3 点を確認した。次にこの 3 つの機能を有するメディアは、4 つの構成要素、すなわち意味論的コミュニケーション手段、記憶内容の拡散と伝承のためのメディア技術、具体的な記憶のメディア番組としての文化的対

[272] インターネットの普及によって想起の映画が拡張性および想起システムを拡大補強していったことに疑いの余地はない。WWW（ワールドワイドウェブ）は世界中からアクセス可能であり、情報の蓄積量も他のメディアとは比較にならない。また検索機能およびアーカイヴも整備されており、それらが小説や映画作品、テレビ番組などを媒介している。この例として、図書館検索システム、オンライン百科事典、インターネットショップ、などをあげることができる。

象化、社会的制度化および機能化によって成り立っていることを確認した。次に本論文の関心から映画について考察し、集合的記憶論的映画概念である想起の映画は拡張機能および文化的想起のシステム、複数メディア性という特徴を備えていることを確認した。

集合的記憶とメディアの関係性の視点から述べるならば、第一に重要なのは集合的記憶を可能にするためのメディア機能である。メディアに上述した機能が認められるからこそ、集合的記憶がそれとして機能することができるのである。第二に、そのようなメディアを成立させる条件的枠組みないしはメディアの構成要素である。確かに S. シュミットのメディア概念では自然言語が除外されるなど、集合的記憶分析において若干の不都合はみられる。しかしメディア概念を複合的にとらえることで、集合的記憶の持つ複雑な形態を描写することが可能になっていると評価できるであろう。複数のメディア要素こそ、多様な集合的記憶現象を支えているのである。

第三に想起の映画は、現代におけるメディア技術という視点と時間経過に伴う記憶化という視点を準備した。現代のハイパーメディア技術がメディア機能を増幅するという共時態的メディア描写とともに、時代変遷のなかで特定の映像が想起の対象となるという、あるメディアに対する意味付けの通時態的変遷を描いていた。

これらの機能、要素、特徴は分析的に分類化したものであり、実際には不可分に結びついているものであることは論を待たない。本章の冒頭で「メディア理論をもってしてもメディア概念をはっきりと提示することができていない」と述べた。確かに集合的記憶論的関心に限定したとしても、メディアは上記のように非常に多様な側面を有しており、その輪郭は多重的である。比喩を用いて説明するならば、メディアは太いロープのようなものである。ロープをほぐして分解していけば複数の糸にわけられるように、集合的記憶のメディアもまた複数の機能や要素に分類することができるのである。しかしわれわれはロープを複数の糸の集合体とはとらえることはせず、常に 1 本のロープとして認識し用いるのと同様に、メディアもそれ自体でひとつの完成体である。ロープを構成する糸をほぐして 1 本ずつに分けて使用することがないのと同様に、メディアを構成する機能や要素をひとつずつ取り出し、そこにのみスポッ

トライトを当てることはできないのである。このロープは、現代と過去をつなぐ集合的記憶のロープ＝メディアである。

補論 3：現実とは何か

補論 1：記憶（論）と歴史（学）で確認したように、過去をめぐる議論は正しさをめぐる争いでもある。つまり、歴史学がより正しい歴史的現実を描き出すのか、記憶のほうがより正確に現実を描写するのか、という問題である。正しさをめぐる争いは、現実概念に関するに議論とみなすこともできるだろう。しかし、学問領域において現実という概念は非常に長い論争があり、いまなお決着がついていない状況である。また近年の社会的文脈により、議論に新しい方向が生まれてきている。それゆえ歴史的現実について議論する場合においても、その前提として現実について検討を加える必要がある。そこでここでは現実概念を検討し、歴史的現実を論じるための礎を築く。

現実をめぐる現代の文脈

ヴォルフガング・ヴェルシュ（Wolfgang Welsch）によれば、現代の文脈において現実（Wirklichkeit）に関する議論はふたつの潮流に分けられる。一方は文化的意味において、他方は哲学的意味においてである[273]。ここでは特に哲学的意味に重心を置きながら、このふたつを確認するところから出発し、現実概念が持つ現代的問題についての輪郭を描く。

はじめに文化的意味について確認しよう。現実概念はデジタルメディア技術の発達に伴い、「弱々しく、妙に色あせた、見通しが悪く、かつ一見する限りではますます重要性を失い理解しにくくなってしまったように思われる」[274]、と見なされつつある。つまりデジタルメディア技術の登場と発展によって現実と仮想現実（Virtual Reality）の境界があいまいになったばかりでなく、新しい現実が旧来の現実を追い出そうとしているのである。しかしこれに対して、仮想現実をむしろ肯定的に扱おうという動きもある。上述した新しい現実とは仮想現実、すなわちヴァーチャル・リアリティーを指しているが、このときヴァーチャル・リアリテ

[273] Welsch, Wolfgang: *„Wirklich“. Bedeutungsvarianten – Modelle – Wirklichkeit und Virtualität.* In: Krämer, Sybille (Hg.): *Medien Computer Realität*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1998, S. 169.
[274] Ebd.

ィーは決して否定的にとらえるべきではない。

> バーチャルであるとは決してリアルと対立するものではなく、対象に対する感官の能力の限界をはじめとする諸々の制約のために狭隘なものになっている現在のリアルの領域を拡大する可能性を指す[275]。

この説明を発展的に解釈するならば、ヴァーチャル・リアリティーは身体の拡張と捉えることができるだろう。したがってヴァーチャル・リアリティーの問題は、よりリアルな認識の可能性を問うものであるといえる。新しい現実とはそれゆえ、身体性（Körperlichkeit）などを備えた「信用できること」（Verläßlichkeit）を基準とするものである[276]。つまり、仮想現実の登場は、現実の認識に信用性を与えるものであり、したがって現実概念をより強化することに貢献しているといえる。

他方の哲学的領域において、現実概念はこれまでの長い議論の歴史からの回帰（Wiederkehr）が見られるとしている。すなわち、認識したそのままの世界が実在するという「自然な実在論」（natural realism）を提唱したヒラリー・パトナム（Hilary Putnam）に代表されるような、新しい立場が現れはじめている。哲学では伝統的に現実概念や実在論（Realismus）、認識論（Erkenntnistheorie）が話題となっており、その歴史は古代ギリシャのプラトンのイデア論にまでさかのぼることができる。近代以降ではイマヌエル・カント（Immanuel Kant）の業績が非常に有名であるが、彼は『純粋理性批判』（*Die Kritik der reinen Vernunft*）において人間の認識能力の限界を説き、物自体（Ding an sich）を直接認識することはできないことを説明した。つまり客体（Objekt）はそれとして直接認識することができず、常に主体（Subjekt）の認識能力によって構成されるがゆえに、人間は経験に依存しないアプリオリな認識は不可能であることを示したのである[277]。これは、人間の認識が（再）構成した世

---

[275]水谷雅彦：「バーチャルリアリティは「悪」か（共同討議 リアリティとヴァーチャル・リアリティ）」、『哲学』Nr. 60、日本哲学会、2009 年、68 ページ。

[276] 同上。

[277] この論に関する記述として、たとえば「それだから我々が、感性は

界は、実際のあるがままの世界と同じであるかどうかを検証することができないことを意味している。近代以降、この認識論はさまざまな領域に影響を与え、また類似の図式をもつ認識論が多く生まれた。

しかし現代はこうした実在論からの転向が試みられており、W. ヴェルシュはその代表者として先ほど言及した H. パトナムをあげたのである。H. パトナムはそれまで自身が保持してきた内在的実在論（internal realism）を放棄し[278]、前述したような認識した通りに現実が存在するという実在論を提唱した。またこうした流れは分析哲学の領域にとどまらず、言語哲学（Sprachphilosophie）や脱構築論（Dekonstruktivismus）においても同様の潮流が見られるとしている[279]。

W. ヴェルシュは現代における現実概念への学術的関心を以上のようにまとめたうえで、次のように端的にまとめている。すなわち、

> 現実を文化的に話題にしている領域においては、現実の信用性（Verläßlichkeit）、もしくは非信用性が議論の俎上にあがっている。それに対して哲学的領域においては、現実の認識、もしくは認識不可能性が問題となっている[280]。

ここで、歴史と記憶の対立を思い起こそう。そこでは確かに現実の信頼性が問題になっていた。それゆえ W. ヴェルシュの要約はその意味において適切である。文化的領域における現実の問題は、なによりもその信頼性の担保に重点が置かれているのである。

対象をそれが現れるままに示すし、また悟性は対象をそれがあるままに示すというときには、その『あるがまま』は、経験的意味に解せられるべきであって、先験的意味に解せられるべきではない、即ちかかる対象は、現象の完全な全般的連関において経験の対象として表象せられねばならない、つまり我々はかかる対象を、可能的経験と従ってまた感官一般とに対する関係のそとで、純粋悟性の対象として存在するかも知れないようなものになぞらえてはならないのである。」カント著、篠田英雄訳：『純粋理性批判　上』、岩波書店、1961＝1996 年、332 ページ。

[278] H. パトナムの内在的実在論は、I. カントの超越論的観念論と同じ流れと理解されている。宇佐美公生:「道徳における内的実在論と自由」、岩手大学人文社会科学部：『人間・文化・社会』、岩手大学人文社会科学部地域文化基礎研究講座、1997 年、59 ページ。

[279] Welsch, Wolfgang, 1998, S. 170ff.

[280] Ebd, S. 171.

ただし哲学的領域の問題が無視されてよいわけではない。なぜなら、「言語や文化、関心の多様性が、[現実]描写方法や世界像の多様性に対応する」とき、「二つの現実描写が大幅に、もしくはまったく完全に互いに異なり合うならば、それらは同じ現実の描写であるということができるのか」という問題を引き起こすからである[281]。つまり、同一の事象を描写した二つの言説が互いに異なっていたとき、一方が正しく他方が誤っているということができるのだろうか、という問題を引き起こすのである。言い換えるなら、信頼性の問題は現実認識や現実描写の問題と無関係ではないといえる。それゆえ文化的問題と哲学的問題は、まさに表裏一体の問題群なのである。

以上の問題は、主に実在論（Realismus）の領域で扱われている。しかし実在論にも多様な立場があり、一口に上記の問題を解決できるわけではない。そこで以下ではさまざまな実在論の立場を概観し、認識能力との関係も踏まえながら上述した問題について考察していきたい。

実在論

実在論の基本的立場は「現実の存在（*Existenz*）や性質（*Beschaffenheit*）は、人間（およびその他の存在者）がそれについて考える（言う、知る）ことのできるものに依存していない」[282]というものである。この基本的立場からさまざまな問題が派生するが、本節では特に現実認識能力と現実描写に限定して論を進めていく。

すでに言及した通り実在論は一枚岩ではなく、科学的実在論（wissenschaftstheoretischer Realismus）や数学的実在論（mathematischer Realismus）など多様な立場が認められる。それぞれの特徴などを詳細に検討する学問的意義は非常に大きいが、ここでは本論の関心に引きつけて急進的な実在論（radikaler Realismus）と意味論的実在論の形式化（semantische Realismusformulierung）のふたつを紹介するにとどめよう。前者はさらに以下の三つに分類される。ひとつめは、現実はいかなる場

[281] Willaschek, Marcus: *Einleitung: Die neuere Realismusdebatte in der analytischen Philosophie*. In: Willaschek, Marcus (Hg.): *Realismus*. Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2000, S. 9ff. ただし括弧内筆者。
[282] Ebd., S. 10.

合でもどんな人間精神にも依存しないというものである。ここでいう依存しないとは、「人間が観念的に把握するもの、特に言語的に表現しうるものからの独立、または人間が知りうることや証明可能なもの、少なくとも基礎づけることができるものから独立していること」[283]を指すが、これは多様な現実描写がそれぞれに真実（wahr）であることを認めており、「穏健実在論」（gemäßigter Realismus）と呼ばれている。

ふたつめは「弱い実在論」（schwacher Realismus）と呼ばれるもので、認識を基準にするものである。W. ヴィラシェクは「弱い実在論」の代表を H. パトナムの「内在的実在論」（interner Realismus）にみている[284]。内在的実在論とは「指示や真理性をわれわれの言語的活動（discourse）ないし概念図式（conceptual scheme）の枠内でそれら［独立した実在］と相関的に定義しようとする」[285]ものである。つまり独立した実在と人間精神の相関性を認めることを意味しており、ここからひとつめとの類似性が指摘できる。3 点目は「イチジクの葉実在論」（Feigenblatt-Realismus）と呼ばれている[286]。これは観念から独立したものを認める一方で、それの色などといった人間の観念に依存しているものが同時にあることを主張するものである。時間的空間的「広がり」（Ausdehneung）としての実在は人間の感覚に依存せず、実在の特徴（色など）は人間認識に依存するという考えである。

以上のように急進的実在論においてさまざまな立場があることを確認してきた。各立場の見解の相違については専門家に譲るとして、ここでは以下のことを確認するにとどめたい。すなわち急進的実在論は、「どんな観点においても現実はなにか精神的なものに依存している、ということを否定する」である[287]。つまり現実それ自身は存在しているが、言語的相関性や色彩知覚など限定的な形でしか人間認識はそれを認識し得ない、とする立場であるといえよう。それゆえ多様な現実描写を真実と

---

[283] Ebd., S. 11.
[284] Ebd., S. 12.
[285] 松本俊吉：「ヒラリー・パトナムの『内在的実在論』についての一考察」、『東海大学文明研究所紀要』Nr. 20、2000 年、1 ページ。ただし括弧内筆者。
[286] イチジクの葉とは、芸術作品で陰部を隠すために描かれるそれを意味している。
[287] Willaschek, Marcus, 2000, S. 13.

して扱う可能性が残されるが、これは相反する真実描写が同時に成立することを認めることにつながっている。

一方で後者の意味論的実在論の形式化は、「どの観点であれば現実はわれわれの思考に依存しているといえるか」を問題としている[288]。それゆえ彼らは現実や客体（Gegenständen）の存在論的議論の代わりに、つまり現実を直接把握するという議論の代わりに言語と現実をつなぐ関係性を問題とするのである。このとき重要なことは、現実に対してどれほどの確信を持って真実（wahr, Wahrheit）と言えるかである。この真実性の確信は、他者の確認との一致においてより強化される。

> 特に、ある確信が他の確信とともに相互干渉的関係性において成り立つとき、その確信が真実であるような干渉理論（Kohärenztheorie）は、真実を独立した現実にではなく他者の確信に依存させる[289]。

このとき「思考から独立した現実があるということを排除しない」[290]。つまり、そのような現実が存在する可能性を残しながらも、あくまでわれわれの認識上の問題として処理しようとする態度であることがわかる。しかもこれは他者との関係のなかで真実性を保証するものであり、常に真実を確認し続ける作業が求められるのである。

以上、実在論の枠組みにおいて現実認識に関する議論を概観してきた。そもそも現実描写は単一ではあり得ず、複数のそれが認められていることを確認した。実在論の範囲内においては、多様な現実認識を拒否することができないと言い換えることもできるだろう。また、人間の現実認識の限界を超えて対象を把握することが不可能であることから、意味論的実在論の形式においては客体の直接把握という問題から離れ、自分が得た確信を他者のそれと確かめ合うことで現実の真実性を高めていくことが模索されていた。ここで重要なのは、多様な現実が他者とのコミュニケーションを通して絞り込まれていくことである。この意味において、現実の真実性はコミュニケーションが関係しているといえる。

---

[288] Ebd.
[289] Ebd., S. 14.
[290] Ebd.

補論 4：マスメディアにおける現実構築—集合的記憶交渉への足がかり

第 2 章では集合的記憶とメディアの関係について述べた。メディアは集合的記憶を保存かつ媒介し、または想起のきっかけであるキューとしての役割を果たしていた。こうした機能面に焦点を当てることで、メディア機能の多元性が集合的記憶の維持に貢献していることは明らかとなったが、しかし集合的記憶の流動性との関連性が明確になったとはいい難い。集合的記憶が保存され流通していく過程のなかで、なぜ、どのように変化していくのであろうか。

本章ではこの点に関して、N. ルーマンの社会システム理論的マスメディア論を考察の中心に据えながら検討していきたい。N. ルーマンのマスメディア論を応用することで、A. アスマンが言及していなかった機能が集合的記憶論に加わることになる。すなわち、マスメディアは現実を構成するというルーマンマスメディア論に特徴的な機能を援用し、マスメディアは集合的記憶を構成するという新しい機能を導入する。この機能を導入する最終的な目的は、集合的記憶はマスメディアにおいて交渉されることを示すことにある。

ところで、N. ルーマンの社会システム理論は非常に難解複雑であり、またそこで用いられている術語も特殊である。そこで第一に N. ルーマンの社会システム理論一般の解説を行い、次に社会システム理論的マスメディア理論へと論をすすめていく。なおここでは一貫して現実が問題となるが、**補論 3** において確認した現実の真実性をめぐる議論と密接に関係していることを強調しておく。

N. ルーマンのマスメディア理論における現実

ドイツの社会学者 N. ルーマンはタルコット・パーソンズ（Talcott Parsons）の社会システム理論を発展的に批判し、独自の社会システム理論を構築した。N. ルーマンの社会システム理論は社会学のみならずさまざまな分野に影響を与えて続けており、現代のドイツ語圏文化科学において非常に重要な理論のひとつとなっている。

N．ルーマンは著書『マスメディアの現実』（*Die Realität der Massenmedien*）のなかで、現実はすべてマスメディアの構築物であると述べている[291]。これに関して本節ではN．ルーマンのシステム理論的マスメディア理論を通して、現実とマスメディアの関係性について考察する。すでに述べたように、その独特さゆえにルーマン理論を扱う際には術語を確認することが重要となる。そこでまず各概念について触れたのち、マスメディアと現実について考察することとする。

①システム理論

システム理論とはシステムを構成している要素の関係についての理論である。このとき、システムは個々の要素の単なる結びつきとして表現されるのではない。むしろ、「今日システム理論と呼ばれるものは、［中略］全体の諸要素が互いに関連しながら成り立っているものとしてみなされる概念」[292]なのである。それゆえ、システム理論においては何よりも全体（Ganzheit）が重要になってくる。これは有機生命体におけるシステムの説明に明らかであろう。「［システム概念］はある全体―ここでは有機的生命組織―における個々の独立した要素に関連付けるものではなく、諸要素の関係を視野に―ここでは有機的生命組織―のなかに取り入れたものがシステムである」[293]。

このとき、システムを構成する要素はオートポイエーシス的に作動する。オートポイエーシスとはチリの神経生物学者であるウンベルト・マトゥラーナ（Humberto Maturana）とフランシスコ・ヴァレラ（Francisco Varela）によって提唱された概念である。彼らによればオートポイエーシスは次のように定義される。

> オートポイエティック・マシンとは、構成素が構成素を産出するという産出（変形および破壊）過程のネットワークとして、有機的に

[291] Vgl.: Luhmann, Niklas: *Die Realität der Massenmedien*. Wiesbaden: VS Verlag, 2004, S. 9, 16.
[292] Kneer, Georg / Nassehi, Armin: *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme: Eine Einführung*. München: Wilhelm Fink Verlag, 1993=2000, S. 17ff.
[293] Ebd., S. 19.

構成（単位体として規定）された機械である。このとき構成素は、次のような特徴をもつ。（ｉ）変換と相互作用をつうじて、自己を産出するプロセス（関係）のネットワークを、絶えず再生産し実現する、（ii）ネットワーク（機械）を空間に具体的な単位体として構成し、またその空間内において構成素は、ネットワークが実現する位相的領域を特定することによってみずからが存在する[294]。

この定義によればオートポイエーシスであるものは自分で自分自身に必要なものを再生産しているものといえるだろう。つまりオートポイエーシス的システムとは､システムの構成要素が､自らを存続させるために、システムの構成要素自身によってさらなる構成要素が不断に再生産されているシステムを意味するものである。逆を言えば、オートポイエーシス的システムは自身の構成要素を再生産しないということはあり得ないのである。

加えて、システム理論においてシステムを述べる際には必ず「環境」（Umwelt）も問題にされなければならない。なぜなら、環境なしにはシステムは存立し得ないし、システムのない環境も同様にあり得ないからである。

あるシステムは環境との差異である。環境はシステムを通してのみ存在する。環境はシステムの「外側」であり、常に「システムに相関的」である。したがって各システムによって異なるものであり、すなわちシステム自身の視点からみて各々のシステムの外部に存立するものである[295]。

したがってシステムと環境を別々に扱うのではなく、あくまでもシステム／環境という対概念として理解しなければならない。さらに、各システムによって環境も異なってくることに注目する必要がある。環境は常

[294] Maturana, Humbert/ Varela, Francisco: *Autopoiesis and cognition : the realization of the living*. Boston: D. Reidel Pub. Co, 1980, S. 78ff. （翻訳：H. R. マトゥラーナ／ F. J. ヴァレラ著、河本英夫訳：『オートポーエーシス：生命システムとはなにか』、国文社、1991 年、70 ページ以下。
[295] Berghaus, Margot, 2003, S.39.

にシステムに依存的な形で現れるのである。

このように考えの N. ルーマンにとって、現実もまた社会システムのなかで理解されるものとしている。すなわち、

> 現実それ自身が存在するということに反論するものでもない。しかし、それは世界というものを、対象としてではなく、現象学の意味における地平として前提する。だから、そこに到達することはできないのだ。[中略] したがって、「リアリティ」で意味されることは、システム・オペレーションの内部的相関でしかありえない。[中略] リアリティとは、システムにおいて整合性が成功しているかどうかをテストするための指標以上のなにものでもない。リアリティはシステム内部での意味付与をとおして（あるいは英語でいう、センス・メーキングと言ったほうがいいかもしれない）つくられる[296]。

N. ルーマンにおいても現実それ自身の存在は否定されていないものの、それ自身としてシステムに認識されることは不可能であり、ただシステムの作動（Operation）が正常であるかどうかをチェックする指標としてのみシステムと関連付けられるものである。それゆえ現実は常にシステムに固有のものなのである。そしてシステム固有であるがゆえに、システム内部の作動による意味付けによって作られるのである。

さて、このような現実の捉え方はどのような仕方で可能になるのであろうか。N. ルーマンによれば、観察（Beobachten）によってシステムに固有な現実に到達することができるとする。この観察は実在論において問題となっていた現実認識問題の解決も視野に入れている。次の文は、先に引用した「そこに到達することはできないのだ。」に続くものである。

> 以上のことから、ほかに可能性は残っていない。リアリティを構築するか、そして場合によっては、観察者がリアリティをどのように構築するか、観察者を観察するよりほかないのである。ともすれば、異なった観察者たちが「同じこと」を認識するという印象を受ける

[296] Luhmann, Niklas, 1996, S. 18ff.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳:『マスメディアのリアリティ』、木鐸社、2005 年、15 ページ以下。）

ために、超越論的理論家たちは、そのことを先験的アプリオリの構築という説明の仕方で解決しようとする。例の見えざる手が、個別性を超えて、認識に秩序を担保する、というあの考え方である。しかし、現実にはそれさえも構築されたものなのである。なぜならばそれぞれのシステムに固有な自己言及と他者言及の区別なしには、ともかくすべては不可能なのだから[297]。

すべては観察によってのみ可能であり、観察によってすべての現実が構築される。哲学史において中心的テーマのひとつであった実在論や超越論的認識論さえも、システム固有の作動によって構築された現実なのである。そして観察とは、現実を構築することに他ならない。システムにとって観察は非常に重要な作動なのである。

そこで、次に観察とは何かを明らかにしていく。観察は「区別と記録の差異の総体」である[298]。この観察はシステムの作動のひとつである。システムの作動とはシステムと環境という差異をオートポイエーシス的に再生産し続けるものであったが、一方の観察はシステムの作動ではあるものの「高度に複雑なオペレーション」[299]である。すなわち、

観察は区別を利用して、なにか（そしてそれ以外のなにものでもない）を記録する。観察ももちろんオペレーションであるが（それ以外に起こりうるはずがない)、しかし区別の力を借りて、それが観察したものを、観察しないものから分離する[300]。

ここで言われている「区別」（Unterscheidung）とは先に引用した自己言及（Selbstreferenz）と他者言及（Fremdreferenz）の区別を意味している。自己言及と他者言及とは、この場合はシステム／環境という差異がシステム内部にコピーされたものと理解することができる[301]。つまりシステ

[297] Ebd., S. 18ff. （翻訳：同上、15 ページ。）
[298] Krause, Detlef, 2001, S. 111.
[299] Luhmann, Niklas, 1996, S. 169.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、2005 年、140 ページ。）
[300] Ebd.
[301] ジョージ・スペンサー・ブラウン（George Spencer Brown）の「再参

ム内部にそれとして設定されている、システム自身とそれ以外という区別である。ゆえにシステムは観察を通して環境をつくりだすのである。この意味において、「観察という概念でもって確認されるのは、世界そのものが観察されうること、ましてや認識されうることは決してない」といえる[302]。というのも、観察はシステムに固有のものであるがゆえに観察を通してシステムに固有の環境が現れるのみだからである。

このとき観察には、「観察者を観察すること」(Beobachter zu beobachten)というさまざまな階層（オーダー、Ordnung）を考えることができる。まず観察の第一階層(ファースト・オーダー、Beobachtung erster Ordnung)があるが、これは「観察が明らかにしたものを明らかにすることができるのみであり、この意味において事実的(客体)次元において作動する」[303]ものである。ファースト・オーダーの観察において問題となるのは、常に「何を」観察しているかである[304]。しかしこのとき、ファースト・オーダーは自分自身の区別を観察することができない。そこでセカンド・オーダーの観察において、あるシステムは別のシステムが何かを「どのように」観察しているのかを観察する。

> セカンド・オーダーは、たとえばシステムについて、ファースト・オーダーの観察の根底にある特定の区別が、つまりシステム／環境という区別が横たわっているがゆえに、ファースト・オーダーの観察は自身が明らかにしたものを明らかにしている、ということを明らかにする。つまり、何がどのように区別されているかを明らかとする[305]。

観察の諸階層の関係性について視覚的に理解するために、ドイツの社会学者であるマルゴット・ベルクハウス（Margot Berghaus）による解説図を見てみよう。

入」（re-entry）概念を参照。

[302] Luhmann, Niklas, 1996, S. 170.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、木鐸社、2005 年、141 ページ。）

[303] Krause, Detlef, 2001, S. 111.

[304] Ebd.

[305] Ebd.

Massenmedien beobachten die Gesellschaft/Welt	*1. Ordnung*
Luhmann beobachtet die Massenmedien bei ihrer Beobachtung der Gesellschaft/Welt	*2. Ordnung*
Leser von Luhmann beobachten Luhmann bei seiner Beobachtung der Massenmedien, welche beobachten die Gesellschaft/Welt	*3. Ordnung*

図：ファースト、セカンドおよびサード・オーダーの観察[306]

この図は視覚的に階層を示しているため、原典の意図を十分に保ったまま日本語に置き換えることは非常に難しい。次のように説明するのが最も良いだろう。すなわち、

1. オーダー：マスメディアは観察する／社会・世界を
2. オーダー：ルーマンは観察する／マスメディアが観察しているところを／社会・世界を
3. オーダー：ルーマンの読者は観察する／ルーマンが観察しているところを／マスメディアが観察しているところを／社会・世界を

階層が上がっていくにしたがって、観察者の視点が下位層の観察者の視点を観察する構図になっていることがわかる。つまり、ファースト・オーダーにおいてマスメディアは自身の環境である社会・世界を観察しているが、マスメディア自身と社会・世界の区別がどこにあるのかをマスメディア自身は知ることができない。それゆえルーマンがセカンド・オーダーの次元において、マスメディアは自身と社会・世界の区別をどのように区別しているのかを観察するのである。そして読者は、ルーマンがマスメディアの観察に関して行った観察の著作を読み、ルーマン理論

[306] Berghaus, Margot, 2003, S. 44.

の要訣などを観察するのである。つまり、あるシステムの観察をメタ的に観察することが諸階層の観察なのである。

②システム理論的マスメディアと現実の構築

N. ルーマンのシステム理論は社会に関するシステムが中心であり、社会システム（Soziales System）と呼ばれる。N. ルーマンによればマスメディアもまた社会システムのひとつである。以下では、マスメディアが社会システムであるとはどういうことかを示す。

社会システムもオートポイエーシス的であり、したがって自分の構成要素を自分自身が再生産するものである。このとき、社会システムが再生産し続ける自身の構成要素はコミュニケーション（Kommunikation）である。

> コミュニケーションがコミュニケーションから展開するときに、一つの社会システムが発生するのです。[…] システムはそれが存続するとき、システムと環境の差異を再生産しコミュニケーションを通じてコミュニケーションを再生産するために唯一の作動を、唯一の作動タイプを必要とするということです[307]。

この「存続するとき」とはオートポイエーシス的作動が継続していることを意味している。つまり社会システムはコミュニケーションから成り立っており、自身を存続させ続けるために観察を通してコミュニケーションを再生産し続けているのである。それゆえ社会システムにとって「世界とはコミュニケーションの帰結にとって限定的にのみ意味をもつもの」なのである[308]。

ところで、コミュニケーションは三つの選択的差異から成立する。すなわち、情報（Information）、伝達（Mitteilung）、理解（Verstehen）である。

---

[307] ディルク・ベッカー編、土方透監訳:『システム理論入門　ニクラス・ルーマン講義録 1』、新泉社、2007 年、84 ページ以下
[308] 同上、86 ページ。

> コミュニケーションは一般に次のように定義される。すなわち、創発的に進化する情報、伝達、理解それぞれの選択性の非蓋然的な選択的総体である。[…] 三つの差異とは、情報／伝達と伝達／理解、情報／理解である[309]。

社会システムはしたがって、情報・伝達・理解の三つの選択をし続けていると言えよう。このように考えたとき、情報は社会システムの外部世界からもたらされるものではなく、社会システム自身が観察を通してみずから作り上げるものであることがわかる。したがって、社会システムについて次のように言うことができる。すなわち社会システムは、観察を通してシステム内部において情報・伝達・理解の差異＝コミュニケーションを不断に再生産し続けるオートポイエーシス的システムである。

さて、N. ルーマンにとってマスメディアも社会システムであり、それゆえマスメディアシステムはコミュニケーションを再生産し続けている。なお N. ルーマンはマスメディアの範囲を厳密に定義しており、まずは以下にそれを確認する。

> これ以降において、マスメディアという概念は、複製のための技術的手段を利用してコミュニケーションを伝播する社会のあらゆる装置を包括するものとする。とくに印刷によって製作される、本、雑誌、新聞が考えられる。また不特定多数の相手に多数の商品が製作されるという限りにおいて、複写されるあらゆる種類の写真や電子データも含む。また電波をとおして伝達されるコミュニケーションもこの概念に含まれる。それは […] 一般的にだれもがアクセスできるものであることが条件である。[…] いずれにせよ決定的なのは、次のこと、つまり、送り手と受け手の関係で同時に存在している者たちどうしのインターラクションというものが発生しない、

[309] Krause, Detlef, 2001, S. 152. N. ルーマンのシステム理論的コミュニケーション概念において、伝統的なコミュニケーション概念である情報送信者が送った情報を情報受信者がそのまま受け取ることができるという考え方は否定されている。コミュニケーションと三つの差異に関する説明は同項目に詳しい。

ということである[310]。

つまりマスメディアは、複製技術によって大量生産が可能であり、かつ同時的な受け手と送り手のあいだに相互作用が成立しないという前提によって成り立っている。複製技術による大量生産が可能であることによってマスメディアは特定の誰かにではなく、受け取り可能な人すべてに「マス的に」放送を提供することが可能なのである。

ところで、送り手と受け手のあいだに相互作用が成立しないというのは、コミュニケーション成立を前提とする社会システム理論において奇妙な印象を受ける。同時的な受け手と送り手のあいだに同時的な相互作用がないというのはどういう事態なのだろうか。確かに「読者の声」や「視聴者便り」などのコーナーが設けられている場合もあり、またテレビやラジオ番組において視聴者が電話を介して番組内に影響を与える場合もある。その限りにおいては送り手と受け手の相互作用があるように見える。しかし N. ルーマンは、それもまた「これら二つの例外もまた演出され番組のなかに統合されるものである」[311]と受け止めている。この理解はシステムと環境、オートポイエーシス的作動というシステム理論の概念に矛盾するものではないことがわかるだろう。マスメディアシステムにとって、マスメディア間のコミュニケーションが問題になるのであり、人間（受け手、送り手）は問題にならない。マスメディア間のコミュニケーションとは、例えば、テレビニュースの事件報道が翌朝の新聞に掲載され、その事件の真相を巡りワイドショーや週刊誌が連日取り上げる、という、マスメディア界全体における途切れることのないコミュニケーションを指す。その意味で、送り手と受け手のあいだに相互作用がないということが前提なのである。

こうした相互作用の断絶は、複製技術による大量生産よってのみ可能である。なぜなら両者に選択の自由が与えられ、お互いがお互いをまったく気にかけることなく自由に作動できるからである。もし、送り手と受け手がかなり厳密に特定できるとしたら、送り手の情報はその限定的

[310] Luhmann, Niklas 1996, S. 10ff.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、2005 年、8 ページ以下。）
[311] Margot, Berghaus, 2003, S. 178.

な受け手に（どのような結果であれ）依存的なものになるだろう。

> 両者は自由であり、直接相手を考慮することなしに作用することができる。送り手は自分が望む情報を選び出し、伝達し、印刷し、書き、話し、示すことができる。受け手も同様に無遠慮に選択し、受容し、テレビのリモコンを替え、解釈し、批判し、もしくはまったく拒否することができる[312]。

N. ルーマンは以上のようにマスメディアを定義している。まとめるならば、①複製可能な技術によって産出される、②不特定多数に拡散できる、③送り手と受け手のあいだに相互作用が発生しない、といえるだろう。

さて、このようなマスメディアシステムが作動するとき、どのような作動を観察することができるだろうか。マスメディアシステムを観察するとき、われわれは二つのリアリティを観察することが可能である。ひとつはマスメディアシステムがある、という現実である。すなわち新聞があり、テレビがあり、映画があるということを言うことができる。一方ふたつめのリアリティは、マスメディアが観察した現実を観察することである。

> 私たちはいま、マスメディアという観察されているシステムで起こっている、リアリティの二重性を観察している。[…] マスメディアは、リアリティを構築しなくてはならないのであり、しかも自分のリアリティとの差異において、もうひとつ別のリアリティを構築しなければならないのである[313]。

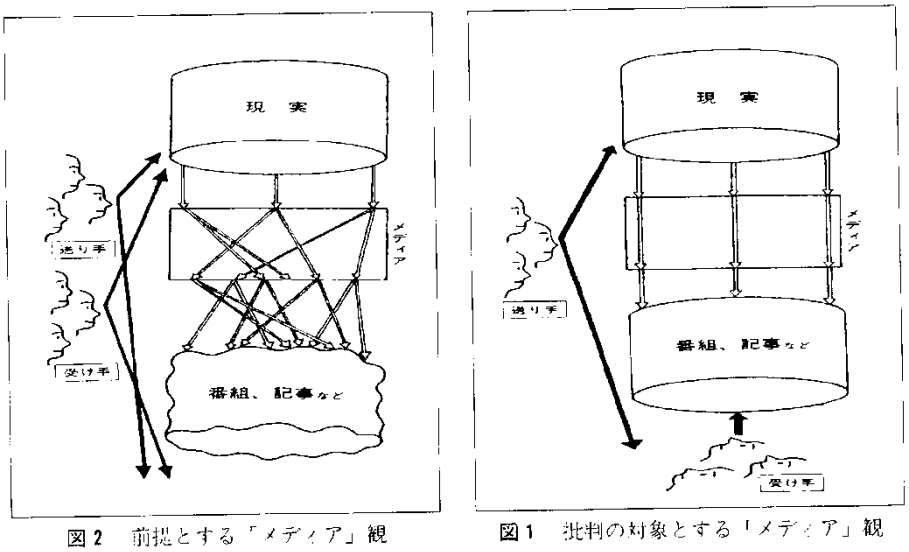
マスメディアシステムはマスメディアシステム以外のものの観察をとおして現実を構築しており、その構築された現実を観察するためにセカンド・オーダーの観察が必要となるのである。つまり、マスメディアシス

---

[312] Ebd., S. 180.
[313] Luhmann, Niklas, 1996, S. 15ff.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、2005 年、12 ページ以下。）

テムが何を構築しているのかではなく、どのように現実を構築しているのかを観察する必要がある。

N. ルーマンによれば、マスメディアが構築する現実は「セカンド・オーダーの観察のリアリティである。それは、こうあるべきだ、とする知識を代替するものである」[314]。それゆえ、ある社会が有する知識はすべてマスメディアによってもたらされるとしている[315]。このとき、たとえばメディアリテラシー論などにおいてしばしば取りあげられるように、マスメディアは現実を歪めるものである、という批判が想定されうる[316]。以下は、メディアリテラシー論において前提とされているメディア観である。



図：メディアリテラシー論におけるメディア観[317]

ここでは、現実それ自身を題材にしてメディアによって作られた「現実」

[314] Ebd.,S. 153.（翻訳：127 ページ。）
[315] Ebd., S. 9.（翻訳：7 ページ。）
[316]「メディア・リテラシーによるエンパワーメントとして重要なのは、メディアをクリティカルに読む過程で見えてくる情報の歪みや欠落している情報について、市民が積極的に発言できるようになることである。」鈴木みどり編:『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』、世界思想社、1997 年、20 ページ。
[317] メディアリテラシー研究会:『メディアリテラシー：メディアと市民をつなぐ回路』、日本放送労働組合、1997 年、18 ページ。

は、現実それ自身と比べて歪められており、視聴者はその歪められ形作られた「現実」を受け取る。しかし、視聴者はまたメディア製作者と同じ視点に立って、現実それ自身とメディアによって作られた「現実」を比較できる、といったことを示しているといえるだろう。したがって、メディアリテラシー論が前提とする現実概念およびコンセプトは次のようであるといえるだろう。すなわち、現実それ自身はわれわれにとってそうであるように観察されうる。そして、メディアリテラシー論が目指すものは、現実それ自身とメディアによって作り出された「現実」の間に認められる差異を明らかにすること、といえるだろう。その際、メディアによって形作られた「現実」はネガティブな、批判するべきものであるという立場にあることは明らかである。

しかし、N. ルーマンはこうした考え方を拒否する。なぜならすでに確認したように、そもそも現実それ自身をそうであるように観察することは不可能であり、さらにマスメディアが構築する現実は常にシステム／環境の差異の観察結果だからである。加えて N. ルーマンは、マスメディアシステムにおいて再生産され続けているコミュニケーションがあまりにも膨大なため、その正しさを確かめることなどできないと断言している[318]。それゆえマスメディアシステムの観察によって構築された現実が歪んでいるかどうかという問題は、ここでは除外される。マスメディアシステムにとっても、現実は常に相関的なものとしてのみ現れるのである。

マスメディアは集合的記憶を交渉する

①現実の更新

以上、マスメディアシステムの現実構築について確認してきた。マスメディアシステムには二重の現実が観察可能であり、ひとつはマスメディアシステムがあるという次元、もうひとつはシステム作動としての現実構築であった。とくに後者は、システムに相対的であること、それゆ

[318] Luhmann, Niklas 1996, S. 15ff.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、2005 年、12 ページ以下。）

え現実を歪めるという表現は適切ではないこと、マスメディアによってすべての知識がもたらされること、を確認した。

マスメディアをこのように捉えたとき、マスメディアはこれまで議論してきた意味における集合的記憶を交渉するということができる。本節ではこれを明らかにすることを目指す。

はじめに、マスメディアは現実を歪めないという議論に立ち返りたい。確かにマスメディアは現実を構築するがゆえに歪めるという表現は適当ではない一方で、「やらせ」「誤報」などが話題となっていることも事実である。しかし、これをもって現実を歪めているとはいえない。

> メディアは任意に報道することが許される、ということが意味されているわけではもちろんない。[…] 審査もまたシステム内部の「耐久性チェック」として、さまざまなメディア・ヴァリエーションのあいだの比較としてのみ可能なのである。[…] 常に構築物によって構築物が比較されるのであり、構築物と「客観的」現実が比較されるのではない[319]。

これに従えば、「やらせであった」「誤報であった」という知識もまたマスメディアシステムの産物といえよう。ここで重要なのは、あるマスメディアによって構築されたものが他のマスメディアによって構築されたものと比較されるということである。しかし互いに比較される構築物は別々のシステムの観察による結果であり、各々のシステムに固有の差異によって構築されたものである。それゆえ、両者が同一の構築物を構築するという必然性は生じえない。これは実在論の節においても確認したとおりであるが、同じ対象を観察したからといって万人が等しく同じ認識を得るとは限らないのである。「マスメディアはリアリティを生み出すにしても、それは同意を義務とするリアリティを生み出すのではない」[320]。

しかしこれは、マスメディアが意図的な虚報を必ず行っていることの

[319] Berghaus, Margot, 2003, S. 184.
[320] Luhmann, Niklas 1996, S. 164.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、2005 年、136 ページ。）

前提とはなりえない。なぜなら、情報操作があったことが明らかになる場合であっても必ずマスメディアによって伝達されるからである。

> ［情報操作の］疑念は、学問的に多かれ少なかれ十分立証可能な因果論に依拠している。もしそういうことがあれば、そうした理論について、その都度、レポートされることもあるだろう。システムはそういう基準も採用することができるかもしれない。ただし、それはすべてマスメディアによるコミュニケーションのテーマにすることができるような形式においてのみ、行われるのである[321]。

確かに、ある特定の番組の特定の回の一部分に情報操作の痕跡を見つけることができるかもしれない。ただしそれが虚報・誤報であったという現実は、マスメディアによって暴露されたときに現れる新しい／別の現実なのである。

ここで次の疑問が起こるだろう。すなわち、マスメディアは観察に際し何に価値を置いているのか、というものである。N. ルーマンによれば、マスメディアシステムは「新しい／古い」（neu/alt）という観察コードに従って、常に新しいものを観察していると説明する[322]。マスメディアは新しい情報を求めているのであり、それゆえ「マスメディアは社会を覚醒しておく働きがある」[323]。それゆえかつての自身のコミュニケーションのなかに新奇な部分を観察したとき、新しいものとして（それが訂正という言葉で表現されるかもしれない）情報の伝達がなされるのである。マスメディアにとって古い情報は価値がなく、繰り返されない。たとえ繰り返されるとしても、そこに別の新しさが見出されるときにのみ用いられるのである[324]。

それゆえ、マスメディアのコミュニケーションにおいて目新しいと目されるものが次々にコミュニケーションされるのであり、正しい情報である必要がない。しかし、虚報が許されるというわけではなく、その場

---

[321] Ebd., S. 31.（翻訳：25 ページ。）
[322] Ebd., S. 42.（翻訳：38 ページ）
[323] Ebd., S. 47.（翻訳：39 ページ）
[324] N. ルーマンはこの典型として広告をあげている。

合も虚報であるという目新しい情報として、マスメディアシステムの内部の後続コミュニケーションとなるのである。この「新しさ」を担保するのが記憶である。

> 記憶とはこの場合、[…] 忘却と想起の間の絶え間ない差別ということである。[…] 記憶は、繰り返し、つまり重複を構築していく。それは、新しいものに常に開かれており、また常時更新されながら刺激されやすくなっている状態なのである[325]。

ここで注意しなければならないのは、N. ルーマンの記憶概念はこれまで論じてきた集合的記憶に関するそれとは異なるという点である。N. ルーマンの記憶は何が新しくて何が古いかを判断する指針であり、システム内部のコミュニケーションは、常に記憶によって新しいと判断された情報をコミュニケーションしているのである。それゆえマスメディアは、社会に対し常に新しい情報を提供している。

ここまでの議論を整理しよう。マスメディアによって構築された現実は現実それ自身と同じではなく、常にマスメディア固有の観察に依存していた。それゆえ同じ出来事を観察した場合であっても、マスメディア A の現実とマスメディア B の現実が同一である必要はない。ただし後続のコミュニケーションにおいて、マスメディア A の現実が誤りであることがマスメディア C によって暴露されることもありうる。しかしそれは、マスメディア全体にとって新しい情報が産出されただけのことなのである。

マスメディアにおけるこのようなセカンド・オーダーの観察は、「こうあるべきだ、という知識を代替するものである」[326]が、これは文化（Kultur）という言葉でまとめられる[327]。ルーマン理論における文化とは、「日常生活を組織化している描写の再描写」という「セカンド・オーダーの観察の実行」である[328]。つまり日常生活において必要とされている情報や

---

[325] Luhmann, Niklas, 1996, S. 75.（翻訳：ニクラス・ルーマン著、林香里訳、2005 年、62 ページ以下。）
[326] Ebd., S. 153.（翻訳、127 ページ。）
[327] Ebd.
[328] Krause, Detlef, 2001, S. 164ff.

現実を再生産するもので、かつ他と区別を図るためのものである。

> 文化とは最終的に次のような想起と忘却の差異的総体として規定される。それは、自己観察の可能性、すなわち他文化との区別の可能性を形作る[329]。

新しい情報としての誤りを報じるということは、誤りでないものを示すことと同義である。それゆえそのようなコミュニケーションは誤りでないものを不断に再生産し続け､その結果として｢自分はこうあるべきだ｣という自己に関する知識を蓄積する。そしてそれは、後続のコミュニケーションにおける自己観察の可能性をもたらすのである。

②過去像の構築と更新

第 1 章および**第 2 章**で確認した通り、集合的記憶は（マス）メディアによって保存・伝達され、また（マス）メディアには想起されるきっかけという役割も付与されている。しかし集合的記憶のメディアをマスメディアに限定した場合、これまでの議論からさらに次の機能を加えることができるだろう。すなわち、マスメディアは集合的記憶を構築する、というものである。

N. ルーマンによれば、マスメディアはすべての知識の源であり、それゆえ過去についての知識もまたマスメディアによってもたらされると考えることができる。ところで、こうしたマスメディアにおける過去の呼び出し（Abruf）は生物学的記憶システムのそれと同一である。

> 個人的記憶システムの次元において内包的な想起の貯蔵、コード化および呼び出しという事象が存在するのと同じように、社会的文化的次元の実践においても内包的な想起という事象が観察される[330]。

---

[329] Ebd., S. 165.
[330] Welzer, Harald: *Gedächtnis und Erinnerung*. In: Jaeger, Friedrich / Rüsen, Jörn (Hg.): *Handbuch der Kulturwissenschaften Band 3. Themen und Tendenzen*. Stuttgart: J.B.Metzler, 2011, S. 165.

多くの心理学的実験が示すように、人間の想起はインプットした過去をそのままアウトプットするのではなく、常に想起する時点の多様な状況に応じた想起内容に変化している[331]。H. ヴェルツァーによれば、これは人間だけではなくマスメディアにおいても同様のことが起こり得るのである。つまり、同一の歴史的出来事を描写する場合においても、時代が経過するに従ってマスメディアは異なるパースペクティヴからそれを描く可能性が考えられる。世代の変化とともに価値観や歴史観が変化することを確認したが、マスメディアの描く過去像もまた世代の変化とともに変化し得るのである。

しかしこのことは、マスメディアが恣意的に過去を歪めるということを意味しない。上述したとおりマスメディアシステムの内部において誤りを訂正する機能が働いており、仮にあるマスメディア作品において学問的歴史観からまったく離れた過去像が提示されたとしても、別のマスメディア作品によって批判や訂正が行われるだろう。さらに、この問題について次のふたつのマスメディア的特性からも回答を与えることができる。第一に市場であり、第二に受容である。

マスメディアとして最も長い歴史をもつ書籍について、その誕生のときからすでに市場が先導的な役割を果たしてきた。N. ルーマンのコミュニケーション概念で確認したように、常に受け手（N. ルーマンの用語に従えばエゴ）がコミュニケーションを支配している。つまり印刷術という送り手側（同、アルター）の技術革新によって多くの商品を発信できるようになった一方で、どの商品を選択するのか、言い換えるならばどの現実を選択するのかは受け手である読者にゆだねられているのである。

> このように、それまで起こり得なかった出来事として、コミュニケーション商品の需要の基準、市場および経済の基準がコミュニケーションプロセスに加わることとなる。印刷されたものが読まれるのではなく、読まれる見込みのあるものが印刷されるのである。より正確に言うならば、買われるものが印刷される[332]。

[331] たとえば：U・ナイサー編、富田達彦訳、1988 年、1989 年。
[332] Berghaus, Margot, 2003, S. 151. ただし強調原文。

このように書籍は印刷されたものが消費されるのではなく、消費されるという見込み―需要―があるものが印刷されるのである。

これは他のマスメディアにも当てはまると考えることができる。映画は発明当初は主に見世物小屋などで上映されていたが、しかし上映のための場所である映画館ができると映画産業が興った。この「映画配給構造を伴う産業的映画製作はメディア産業の新しい形式ということができる」[333]。すなわち、

> 映画産業は［中略］質的にまったく同じメディア商品の集合的需要（die kollektive Nutzung）を、匿名の大衆を通して市場化する[334]。

映画は、当初の見世物小屋での上映から産業化することによって、大衆というより大きな市場に参入することになった。これに伴い映画製作は大衆の関心に合致するような作品を作ることを迫られるようになったのである。

したがって需要のない過去像や市場の興味を喚起しない過去像は、原則的にそもそもマスメディア化されないのである。確かに、歴史的人物を題材としたフィクション映画などはこの限りではない。しかしその場合も製作者はフィクション映画であることを強調し、それが史実であると主張することはないであろう。もしそのような事態があったとするならば、市場は反発し誰も買い手がいなくなってしまう。市場の需要に合致する作品が、商品として流通することができるのである。

これに関係するのが第二の受容である。マルティン・グロウナウ（Martin Gronau）は 2009 年公開のクエンティン・タランティーノ（Quentin J. Tarantino）制作『イングロリアス・バスタード』（*Inglourious Basterds*）について、映画成功のカギは観客の受容のあり方が重要であったと述べている。この映画は、ナチス占領下のフランスのとある映画館においてヒトラーやゲッベルスなどのナチス高官を含む占領軍を殺害するストーリーである。歴史的人物が登場するもののストーリー自体は

---

[333] Spangenberg, Peter M, 1995, S. 57.
[334] Ebd.

完全にフィクションであることは明らかであるが、M. グロウナウは映画のストーリーをフィクションであるか史実であるかと判断するのは観客に依存していると述べている。

> 『イングロリアス・バスタード』のなかで過去の「フィクション化」（ĂFiktionalisierungò）を先鋭化させたことにより、観客にとって1944 年に暴力によって強制的に戦争を終わらせるというユダヤ人の夢を「歴史的事実」と誤って解釈したり、機械的に「映画的真実」を実際の歴史像と取り換えたりする危険性はほとんどなかった。ここから明らかなことは、歴史映像（Historiophonty）は―歴史記述（Historiographie）と同様に―受容者の認識や解釈に依存している。言い換えるならば、現代の娯楽映画やドキュメンタリー映画は歴史や歴史記述の優れたメディアであるが、しかしそれ以上の可能性は受容のプロセスの中でのみ発揮される[335]。

映画における過去描写が史実であるかフィクションであるかという価値を決定付けるのは観客の認識であり、製作者ではない。これはつまり、受容者である観客がすでに持っている歴史的知識や社会的文化的背景、スキーマとしての集合的記憶に依存していると言い換えることができる。すなわち、過去描写はその時その時の集合的記憶によって認識され解釈される。1944 年に映画館においてヒトラーが殺害されたという過去をフィクションであると認識するのは、観客が保持している集合的記憶がそう解釈するからなのである。

これまで、映画における過去描写を確認しながら集合的記憶がマスメディアのなかで更新、構築される理論的背景を確認してきた。マスメディアシステムは常に新しい情報を発信し続けなければならないというシステム上の要請があり、それゆえ過去像も新しい描写を含むものが必然

---

[335] Gronau, Martin: *Der Film als Ort der Geschichts(de)konstruktion. Reflexionen zu einer geschichtswissenschaftlichen Filmanalyse*. In: Ley, Golo / Mzé, Hassen Soilohi (Hg.): *AEON – Forum für junge Geschichtswissenschaft 1*. Magdeburg; Meine Verlag, 2009. http://wissens-werk.de/index.php/aeon/article/viewFile/10/pdf_3, S. 19.（2012 年 8 月 15 日アクセス）

となってくる。このとき、マスメディア側が奇抜な過去像を提示したり、誤った過去像を受け手に示す危険性は非常に小さい。なぜならマスメディアは市場における需要によって供給されるものであり、それゆえ需要のない過去像は製作され得ないからである。マスメディア側の欲求が作品となるのではなく、受け手が望む過去像を提供することが望まれているのである。

同時にマスメディア作品のなかで提示された過去像をどのように受け取るのかは、受容者が共有する集合的記憶に照らし合わせて判断されるものであった。史実として受け止めるかフィクションであるかの判断基準は、それまで社会内部に蓄積され流通している集合的記憶によって行われる。ここで重要なことは、こうした集合的記憶もまたマスメディアによって媒介、構築されてきたものであるという点である。すでに確認したとおり、集合的記憶はメディアによって保存、流通され、また想起のきっかけを与えられていた。加えて本章で確認したように、集合的記憶はマスメディアによって構築されるものであった。こうした（マス）メディアの働きはすべての集合的記憶に共通であることから、上述した判断基準としての集合的記憶もまた、それ以前にマスメディアによって構築されたものであるということができる。こうして集合的記憶はマスメディアによって構築され、保存、蓄積され、来るべき新しい集合的記憶更新のときの認識・判断基準となるのである。

小括—記憶交渉の場としてのマスメディア

マスメディアシステムにとって現実を構築することはシステム作動上の要請であり、「新しい／古い」という二値コードに従って常に新しい現実を構築し続けている。このとき集合的記憶もまた同じ二値コードに従って新規に作られ続けていることを確認した。ただしマスメディア作品の製作は市場の需要に制限され、また完成した作品はすでに機能している集合的記憶によって認識、解釈、判断されるものであった。

このように集合的記憶は、マスメディアを通して常に新しいヴァージョンが再生産される一方で既成の集合的記憶と市場需要によって制限されているのである。逆を言えば、需要と社会的文化的スキーマ＝collected

memory によってそのヴァージョンは受け入れ可能であると判断されたものが、新しい過去描写として社会内部に流通、蓄積され新しい集合的記憶となるのである。このとき、以前あった過去描写が新しい過去描写によって一掃されるという事態は起こらない。それらは保存的記憶として社会内部に蓄積されるからである。そうして保存蓄積された集合的記憶は文化を形成し、将来的に時代の要請によってふたたび機能的記憶としての価値を取り戻すことを、メディアのなかで待っているのである。

このようにしてみると、集合的記憶はマスメディアによって構築されるだけでなく、その時その時の需要に合致するように取り消しや修正、新しい側面の付加などを行っているということができる。つまり集合的記憶はマスメディアにおいて交渉されており、マスメディアは集合的記憶が交渉する場なのである。マスメディアは社会システムであるがゆえに、こうした交渉は不断に行われ続けるものであり、停止することはない。マスメディアは時代の変遷とともに、社会的文化的に同意が得られるような集合的記憶を構築し続けている。

3：現代ドイツにおける過去

ここまで、一貫して集合的記憶の流動性とメディアにおける交渉を理論的に裏付けてきた。そのなかで、集合的記憶は常に変化の波にさらされていることを、またマスメディアは集合的記憶を構築し続ける作動を行っていることを確認した。このとき、集合的記憶のメディアは多様であり、さまざまな機能を併せ持ったコンパクト概念として用いられていることも確認した。これらの要因が、集合的記憶の流動性と交渉に関係していたのである。

以下では、この仮説を現代ドイツの事例に当てはめ、その正しさを確認することを目的としている。具体的には、世代による過去意識の差異やメディア内のユダヤ人ドイツ人描写に焦点を当てながら、戦後ドイツにおける過去意識がどのように変化しているのかを探る。まず、記憶が注目されている背景について、本論文で議論する問題の輪郭を示す。次に、過去意識の変化を A. アスマンの区分に従って概観する。特に 80 年代以降の過去意識に注目し、記念碑や戦争体験者の証言などの視点からその特徴を裏付ける。

以上の目的を達成するために、次のように論を進めていく。第一に、はじめにで言及したような「メモリー・ブーム」（memory-boom）[336]の背景について、現代ドイツの文脈に限定して詳しく考察する。第二に、戦後ドイツの過去意識の変化について、現代ドイツの世代変遷とそれに伴う過去意識の変化を確認する。特に 1990 年代以降の過去意識のあり方を中心に、何が話題となっているのかを中心に論を進める。第三に、1990 年代以降の過去意識のあり方について、その特徴についてメディア作品を用いて裏付ける。ここではふたつのホロコースト作品を分析対象とし、そこに登場する人物の証言に注目する。

3-1：再考—なぜ、いま記憶とメディアなのか

[336] Huyssen, Andreas, 1995, S. 5.

数え切れないほどの建築物と同様に数え切れないほどの人間を破壊し、さらには精神、道徳、モラルなど既存の価値観のすべてを粉砕した20世紀は、人類がそれまでに築きあげた物質的・非物質的なもの―人類の歴史―を文字通り灰燼に変えてしまう「破壊と忘却の破局」（die Katastrophe der Zerstörung und des Vergessens）[337]の時代であった。特に第二次世界大戦はその規模もさることながら、ユダヤ民族そのものを地上から消そうという破壊による忘却を含んだ、まさに前代未聞の戦争であった。この結果ドイツは忘却が許されない過去を抱えることになり、三島憲一はユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）を引用しながらこのことを指して「『良心の疚(やま)しさ』は消えない」[338]と述べている。法的責任を果たそうとも、賠償を行おうとも、それによってホロコースト自体を終わらせることはできない。法的に罪のない一般人や直接責任のない戦後世代であっても、「自分たちがかつて犯罪を犯した人々と同じ国民と国家に属しているゆえに」[339]、その良心の疚しさを自覚しながら過去を反省し続けることが求められている。

戦後ドイツのホロコーストへのまなざしはトラウマ的に固定されており、それゆえドイツの歴史はすべてナチスの罪に集約されてきた[340]。なぜドイツの地においてナチスが誕生したのか、戦後どのようにナチスと向き合ってきたのか、といった問いに象徴されるように、良くも悪くもホロコーストがドイツの過去の中心として反省的に語られてきたのである。それゆえドイツにおいて過去といえば、自動的にナチス時代を意味する術語となっていたほどである。

> ドイツの政治的論争において支配的なテーマの一つとして、特に注意がない場合、「過去」といえば自動的にナチスの過去と結び付けられている[341]。

---

[337] Assmann, Aleida, 2003, S. 18.（翻訳：アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007年、31ページ。）
[338] 三島憲一：「ドイツ知識人の果たした役割」、三島憲一ほか編：『戦争責任・戦後責任』、朝日新聞社、1994年、139ページ。
[339] 同上。
[340] Assmann, Aleida, 2007a, S. 16.
[341] Ebd, S. 18.

近年ではナチスをドイツ史の出発点／到達点としない歴史解釈が試みられる動きもあるが[342]、メインストリームを形成するにはほど遠い状況である。過去とナチスは、現代ドイツにおいてコインの表裏のように分かち難く併存している。

ところで過去の出来事というのは、それが個人的な出来事であれ社会的な出来事であれ、想い起された出来事のことを意味する。なぜなら想い起されることなしに、過ぎ去った出来事が現在化することはないからである。想い起されない出来事は、忘却された出来事である。それゆえ過去を問題にするときには、常に想起について考えなければならない。想起に関する考察は**第 1 章**で詳しく論じた通りであるが、端的にいえば「流れ去ったものに現代的意味を付与すること」[343]であった。つまり、過去は想起された時点の視点から構成された構成物なのである。したがってナチスの過去を問題にするとき、そのときの時代背景や社会背景といった視点を考慮しなければならないといえる。

ドイツでは現在、あらゆる領域において歴史と記憶に関する議論や運動が非常に活発に行われている。**はじめに**で言及したようにその背景は複数指摘されているが、大きな要因のひとつは過去をめぐる問題であった。すなわち、戦争世代の減少が「メモリー・ブーム」を牽引しているのである。現代はホロコースト及び第二次世界大戦を経験した世代が非常に少なくなっており、それが原因で歴史と記憶のあり方に変化が現れはじめているのだ。ドイツ統計局（Statistisches Bundesamt Deutschland）の人口予測によれば、今後 30 年間における 1945 年以前生まれの人口は次のとおりとなっている。

---

[342] たとえば、ドイツのテレビ局 ZDF で 2008 年に放映された歴史ドキュメンタリー『ドイツ人』などがあげられる。同番組は、「ドイツ人とはだれか？ドイツ人はどこから来たのか？ドイツ人はどこへ向かうのか？」という問いのもと、神聖ローマ帝国建国からヴァイマル共和国建国までを描くシリーズである。高い視聴率を誇る人気番組であった一方で、「テレビにおける歴史は常におとぎ話である」「彼らの[上述した問いが持つ]情熱を真剣に受け取る必要はない。」という批判もある。Vgl.: Hieber, Jochen: *Geschichte im Fernsehen ist immer Roman*. In: *FAZ.net im Online-Artikel*, 23. Oktober 2008, http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/medien/zdf-serie-die-deutschen-geschichte-im-fernsehen-ist-immer-roman-1713987.html.（2011 年 3 月 28 日アクセス）

[343] Assmann, Aleida, 2007a, S. 10.

	2010 年	2020 年	2030 年	2040 年
体験者数	16785	9522	3387	335
全人口比	20.6%	11.9%	4.4%	0.5%

図：ドイツ国内の戦争体験者数の推移（単位：千人）[344]

統計では 2040 年に人口比 0.5%の戦争体験者層が確認できるが、年齢や加齢による忘却などの問題を考慮すると、実際に戦争当時を語ることができる人口はさらに少ないと思われる。したがって戦争の体験を直接語ることのできる人は、2040 年には実質的にいなくなると考えられる。

戦争体験世代の減少を背景として、体験者側からもこれまでの過去像に異議を投げかける動きが出てきている。つまり、過去の真実を伝えるために自らの記憶を頼りに語りはじめたのである。このことに関して、ヒトラーの側近で地下要塞に最後まで残っていたローフス・ミッシュ（Rochs Misch）の自伝『最後の証言者』（*Der letzte Zeuge*）が参考となるだろう。すなわち、「私のような証言者に直接質問できる時間ももう長くは残されていないだろう。[…] 私は、その時代に生きていた最後の証言者である。[…] その私の認識とは異なるものが歴史に刻まれようとしているのだ。」[345]このように、これまでの過去描写の空白部分を補う、または自身の記憶とは異なる描写を改めようとする試みが行われはじめたのである。

こうした体験者側の意識の変化が、ドイツ社会全体におけるナチス・ヒトラー像の変化に貢献する一因であると考えられる。この点に関して、**はじめに**で引用した A. アスマンの言説をもう一度確認しよう。すなわち、

> ホロコーストという出来事は、時間の隔たりとともに色彩を失い、色褪せていくのではなく、逆説的にも、ますます身近で重大なもの

[344] ドイツ統計局ホームページ http://www.destatis.de/bevoelkerungspyramide/ （2010 年 10 月 29 日アクセス）

[345] Misch, Rochs: *Der letzte Zeuge. Ich war Hitlers Telefonist, Kurier und Leibwächter*. München: Piper Verlag, 2008, S. 11.

となっている。［中略］ショアーに関していえば経験記憶が後退しつつある一方で、メディアや政治に依存する記憶といった、別の形式の記憶が明らかにその重要性を増している。なぜなら、われわれから時間的にますます遠ざかっていく過去は、専門の歴史家たちの庇護下に完全に移るのではなく、競合するさまざまな要求や義務として、今後ともわれわれの現在に重くのしかかるからだ。単数形の歴史という抽象的なジンテーゼに、今日では多種多様な、中には互いに矛盾し合う複数の記憶が対峙している。これらの記憶は社会的承認を求めて自らの権利を主張しているのだ[346]。

つまり、体験者世代の減少に際し彼らが過去像を自身の記憶から再検証し、正しい過去像を主張するという動きが、現代ドイツにおけるナチスへの姿勢に少なからぬ変化を与えているのである。確かに戦争経験を語ることのできる人間の数は少なくなっているが、しかしそれは過去が退色することと同義ではない。むしろ次々と湧きあがる過去に関する言説が幾重にも折り重なり、重層的で色彩豊かな過去が現れてきているのである。このように、現代ドイツにおいて過去を問題とするとき、何よりもまず戦争体験者の減少とそれに伴う過去像の多様性いう点が強調されつつあるといえる。

同時に、A. アスマンが強調しているもうひとつの点に注目したい。それは、こうした過去記述におけるメディアの重要性が認知されつつあるという点である[347]。現代ドイツにとってナチスは忘却が許されない出来事であり、それゆえ戦争体験者が残すメッセージも社会内部に保存され想起され続けなければならない。これは、個人的な記憶をメディアに移行させることによってのみ達成され得るものである。なぜなら、「伝記的な身体的歴史を物質的メディアの歴史に移行させたとき、時空間は遠い地平の方向へ開放され拡大する」[348]からである。つまり物質化ないしメディア化された記憶は、時間的風化に対する耐久性が向上し、同時に社会内部への流通性が高まるのである。戦争体験者の記憶を彼らの身体

[346] アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007 年、27-29 ページ。
[347] 集合的記憶論におけるメディア概念と機能に関する議論は、**第 2 章**を参照。
[348] Assmann, Aleida, 2007a, S. 13.

からメディアに移行させることは、記憶を生物が持つ限界を超えて忘却から守り、それを社会内部に浸透させるために必要不可欠なことといえる。この点こそ、過去問題においてメディアが非常に重要である所以であった。

こうした戦争の記憶がメディア化される時代の到来について、次のような問題も指摘されている。歴史家ラインハルト・コゼレック（Reinhart Koselleck）は、すでに 80 年代初頭に「もはや戦争について博物館や資料館、記念碑などのほか、本やテレビ・映画などのメディアを通してしか語られ知る以外できない」と評し、そのような形でしか語ることができなくなってしまった過去は「色褪せたものとなるだろう」と述べていた[349]。R. コゼレックはメディア化された過去の記憶をメディア内部に密封して保存されるものと捉えていると読むことができるが、つまり過去をメディアに固着させるがゆえに変化のないものとなってしまうことといえるだろう。体験者からメディアに移し替えられた第二次世界大戦の記憶はこうして生気のないものとなってしまい、生き生きとした過去の記憶が失われてしまうことが危惧されているのである。

しかし、ふたたび A. アスマンの引用を振り返ってみると、メディア化によって過去が色褪せることはないと明確に述べてある。いわく、「時間の隔たりとともに色彩を失い、色褪せていくのではなく、逆説的にも、ますます身近で重大なものとなっている」[350]、と。たしかに、現代ドイツにおけるメディアの状況を鑑みたとき、A. アスマンの言説の方が状況をより的確に表しているように思われる。すなわち、現代ドイツのメディア領域において空前の「ヒトラーブーム」[351]が起こっているのである。確かにここ数年のあいだ、ヒトラーやナチスに関連するメディア作品は非常に多い。映画を例にとると、『ヒトラー―最期の 12 日間』（Ă*Der Untergang*ñ, 2004 年）や『白バラの祈り ゾフィー・ショル、最期の日々』（Ă*Sophie Scholl―Die letzten Tage*ñ, 2005 年）、『わが教え子、ヒトラー』（Ă*Mein Führer―Die wirklich wahrste Wahrheit über Adolf Hitler*ñ, 2007 年）

---

[349] Koselleck, Reinhart: *Nachwort zu Charlotte Beradt, Das Dritte Reich des Traumas*. Frankfurt am Main, 1981, S. 117. Zitat: Frölich, Margrit / Schneider, Christian / Visarius, Karsten (Hg.), 2007, S. 7.
[350] アライダ・アスマン著、安川晴基訳、2007 年、27-29 ページ。
[351] Zimmermann, Peter, 21. April 2005. Vgl. auch: *FAZ*, 23.04.2005, S. 41.

などの話題作が相次いで公開されている。一方テレビでは『ドレスデン、運命の日』（Ă*Dresden*ñ, 2006 年）、『ヒトラーの建築家　アルベルト・シュペーア』（Ă*Speer und er. Hitlers Archtekt und Rüstungsminister*ñ, WDR, 2005 年）などをあげることができるだろう。この論文を執筆している 2012 年には、『ヒトラー』（*Hilter*）と題するドラマも放映されはじめた。こうした大量のメディア作品の登場は、その結果として現代とナチス時代との距離を縮めていると指摘されている[352]。N. フライによれば、現代ドイツにおいてヒトラーは生前の公的会見を上回る頻度でメディアに登場している[353]。ナチスやヒトラーに関する作品は日を追うごとに増加しており、確かに現代は時間こそ経過したものの、N. フライが指摘するようにナチスを目にする機会が当時以上であると思わせるには十分である。こうした動きを指して N. フライは、メディアは「[ドイツ国民にとって] 1945 年をこれまで以上に身近に」したと表現している[354]。

以上のように、現代ドイツにおいて記憶が話題となる背景には、何よりもまず戦争体験者の減少が関係している。戦後 70 年を目前に、戦争体験を直接語ることができる人口が減るなかで、それまで語られてこなかった過去を残そうとする動きが加速しているのである。加えて、記憶を保存し流通させるというメディアの役割に注目が集まってきている。とりわけ現代は、戦争の語り部の減少を補うかのようにナチス関連のマスメディア作品が大量に発表される傾向にある。過去を経験した人が少なくなるなか、彼らの記憶をメディアに移行させることが求められているのである。

3-2：戦後ドイツにおける過去の変遷

ドイツにとって 1945 年のナチスの終焉は、その罪を償う贖罪のはじまりを意味している。しかしその取り組みは決して一様ではなく、時代の変化とともにさまざまな形をとって行われてきた。ここでは、戦後ドイツが過去とどのように向き合ってきたのか、その変遷を観察する。まず、

[352] Vgl.: Frei, Norbert, 2005, S. 7.
[353] Ebd.
[354] Ebd. ただし括弧内筆者。

過去への取り組みが変化した要因として、ドイツ再統一と世代に着目する。次に、現代ドイツの過去意識の変遷を3つに区分けし、各段階の特徴を実例とともに概観する。

少なくとも西ドイツでは、戦後すぐに「脱ナチ化運動」(Entnazifizierung)が開始され、この意味において「過去の克服」(Vergangenheitsbewältigung)と呼ばれる動きが早くから模索されてきた。アメリカ人政治学者のダニエル・ゴールドハーゲン(Daniel Goldhagen)は、「戦後ドイツ社会の『過去から学ぶ姿勢』を高く評価し、そこに達成された『ドイツ国民氏の国際化された理解』を他国も見習うべきモデルと推奨」[355]している。その一方で現代に至るドイツの「過去の克服」運動をそのように手放しで賞賛することへの批判もある。國重裕は「日本よりもドイツの方が、戦争責任に対する態度で誠実である、という言説には保留が必要」であると述べているが、その例としてドイツ知識人層による被害者意識の主張などを取りあげている[356]。政治の領域においてもペーター・ライヒェル(Peter Reichel)が「過去の克服の克服」(Die Bewältigung der Vergangenheitsbewältigung)[357]という言葉で表現したように、過去への取り組みであるはずの運動が、実はナチス犯罪の清算を可能な限り早く済ませようという、当局による一種の幕引きをもたらしたとする見解も、見逃すことのできない重要な指摘である。

そもそも旧東ドイツ領にあたる新しい州(neue Bundesländer)において、ナチスの犯罪と向き合うことは再統一直前からはじまった比較的新しい動きであり、古くから脱ナチ化運動を行っていた旧西ドイツ領に該当する古い州(alte Bundesländer)に比べて40年も遅れている。旧東ドイツは旧ソ連の後ろ盾によって建国された社会主義・共産主義国であり、それゆえ「はじめから歴史の勝利者のような態度をとり、西側に対して

---

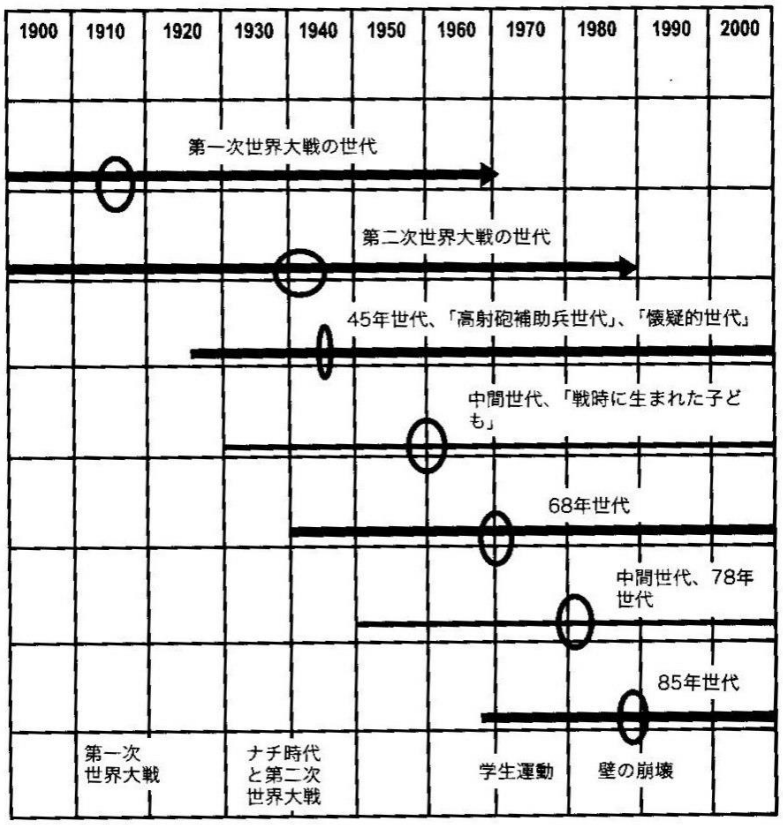
[355] 飯田収治:「ドイツの『過去』をめぐる忘却・記憶・学習」、『人文論究』第54巻4号、2005年、68ページ。D. ゴールドハーゲンは『ヒトラーの意に喜んで従った死刑執行人たち』(*Hitler's Willing Executioners*)において1945年のドイツ人は全員ユダヤ人殺害犯になりえたと厳しく追求した人物であり、また同著は「ゴールドハーゲン論争」を引き起こした。

[356] 國重裕:「戦後ドイツの戦争責任問題」、『龍谷紀要』Nr. 29-1、2007年、80ページ。

[357] Reichel, Peter: *Vergangenheitsbewältigung in Deutschland*. München: C. H. Beck, 2001=2007, S. 107.

道徳的に優れていると誇示しがち」[358]であり、それは旧東ドイツの憲法第 6 条において「この地におけるドイツ軍国主義とナチズムを根絶した」と自惚れるほどであった[359]。旧東ドイツがこの態度を誤りと認め撤回し、過去を反省して公的に謝罪するのはドイツ連邦共和国との再統一を目前に控えた 1990 年 4 月 12 日になってからである[360]。

加えて現代ドイツには複数の世代が混在しており、それぞれに異なる過去イメージを抱えている。20 世紀におけるドイツの世代階層は次のとおりである。



図：20 世紀の 7 つの歴史的世代についての外観[361]

このように現代ドイツは多くの世代を抱えている。ここで重要なことは、

[358] Ebd., S. 13.
[359] Ebd., S. 15.
[360] Ebd.
[361] アライダ・アスマン著、磯崎康太郎訳：『記憶のなかの歴史　個人的経験から公的演出へ』、松籟社、2011 年、95 ページより。

社会の中心を担う世代は時代とともに移ろい、それに伴って社会を主導する過去認識もまた変化することである[362]。たとえば、68 年世代は「国家社会主義によるユダヤ人犠牲者たちとみずからを同一視した」世代であったが、その子供にあたる 85 年世代は「六八年世代の価値観および、まさにみずからがそのなかで育ってきた社会環境から距離を置く」という姿勢を明確に打ち出している[363]。それゆえドイツは、戦後から現代に至るまでに複数の過去意識が存在してきており、いまなおその残滓が折り重なって社会内部に堆積しているのである。

これらの事態を考慮にいれたとき、現代ドイツにおけるナチスへの取り組みは複雑で、時には矛盾を孕んだものであるといわざるを得ない。一方では反ナチスから出発した国家、他方ではナチスの過去を引き受けて出発した国家が、現在はひとつの国家を形成している。また過去に対して異なった見解を持つ複数の世代が併存しているということは、ドイツ社会全体として過去への見解に対し、統一的な方向性を見いだせないことも意味している。この意味において、戦後ドイツの「過去の克服」の歴史を一本のストーリーラインにまとめながら俯瞰することもまた難しい。なぜなら、現代ドイツの戦後史は 1990 年以前までまったく異なる二つの公的見解が確認され、また少なくとも 5 つの異なる世代意識を観察することができるからである。

そこで本節においてこの複雑性と矛盾性を整理するために、A. アスマンによる時代区分を参考としよう。A. アスマンによれば、戦後ドイツのナチス時代に関する集合的記憶は次の三段階に分けられる。すなわち、

> われわれは、沈黙という第一段階および道徳化と断罪という第二段階の後で、時間的隔たりがより広くなったことに伴いイメージすること、すなわち理解願望および「追体験」願望という第三段階へ移行したのだ[364]。

---

[362] **第 1 章第 5 節**も参照。

[363] Assmann, Aleida, 2007a, S. 62ff.（翻訳：アライダ・アスマン著、磯崎康太郎訳、2011 年、101 ページ以下。）

[364] Assmann, Aleida: *Lichtstrahlen in die Black Box*. In: Frölich, Margrit / Schneider, Christian / Visarius, Karsten (Hg.), 2007b, S. 46.

第一段階は沈黙であり、過去への消極的な関わり方を意味している。具体的には、ナチスの罪を徹底追及することなく早期解決を求め、公的忘却を目指していたことを指した時期である。第二段階は道徳化と断罪であり、過去を反省しようとする態度へと変化した時期である。これは第一段階の反動として現れ、この時期は特に 68 年世代による糾弾や、それに伴う公的空間において過去を反省する機運が高まっていた時期である。第三段階は「追体験」であり、当時をそのままに捉えなおそうという動きへと移行していく時期である。この時期は本節の核となる時代区分であり、多角的に検証を行う予定である。

なおこれらの段階を年代で区別することは適わないであろう。すでに確認した通り戦後ドイツにおける「過去の克服」の歴史は複雑で矛盾に満ちているがゆえに、どの年代においても各段階が併存、共存している。もちろん本節において各段階における特徴的な事柄を可能な限り指摘するが、しかしそれはあくまで象徴的な出来事という意味にとどまり、その時点を以って次の段階に移行したことを示してはいないことをあらかじめ断わっておく。

「沈黙」

上述したとおり、戦後西ドイツにおいて国民の脱ナチ化運動が連合国主導のもとで行われた。連合国は当初、ナチス党と各関係機関の解体、高級幹部の逮捕とナチ党員の公職追放を計画していた。しかし、連合国が最初に設定した基準に従って機械的に処罰対象者を選別していった結果、約 40 万人ものドイツ人が対象となってしまったのである。処罰対象者があまりにも多いがゆえに、行政サービスを行える者や経済活動に参加できる者が非常に少なく、その結果「脱ナチ化の措置は公共部門と経済再建の障害となった」[365]。そこでアメリカは処罰対象者の処罰認定手続きを西ドイツ人に手伝わせ、手続きを簡易化するために急いで作った法律である解放法（Befreiungsgesetz）と、その執行機関である判決院

[365] Reichel, Peter, 2001=2006, S. 32.（翻訳：P. ライヒェル著、小川保博／芝野由和訳、2006 年、27 ページ。）

（Spruchkammerverfahren）によって事態の打開を図った。しかし判決院の担当ドイツ人が法律の素人であり、またそれにもかかわらず審理件数が何十万件にも上ったこともあって、判決院で処理された案件は決して多くなかった。しかも、ナチスの重要な関係者などの重要案件は審理が行われないことも多かったのである。こうした形だけの脱ナチ化運動という状況にもかかわらず、1948 年に脱ナチ化の終了が西ドイツ当局によって宣言され、結果的にナチスに関係の深い人物の追放はほとんど達成されなかった[366]。これには脱ナチ化運動に賛同していた西ドイツ人からも批判の声が上がるようになり、また連合国は「まったく不審に満ちた目」を向け、「脱ナチ化のこれまでの経過に関して深い失望を表明し」、「ドイツ人が公的生活の脱ナチ化を済ませないうちは、『ドイツ民族に自治を認める』つもりはない」と公言する事態に発展する[367]。しかし結局のところ問題解決には至らず、脱ナチ化の効果が非常に限定的なまま多くのナチス関係者がドイツ社会に復帰することとなったのである。

非ナチ化運動が道半ばで挫折したのと時を同じくして、その罪の記憶を公的空間から積極的に排除しようとする動きも一部で見られはじめるようになった。飯田は、ハンブルク州のノイエンガメ強制収容所（Neuengamme KZ）跡地の記念遺跡（Gedenkstätte）をめぐる一連の動きを考察し、そこではハンブルク当局が KZ 記念遺跡建設に消極的であっただけでなく、可能な限り元囚人らを寄せ付けないようにしようという意図があったことを明らかにした。ハンブルクのホームページには現在、ノイエンガメ KZ には第二次世界大戦当時 10 万人以上が収容されていたと書いてある[368]。このように現在はノイエンガメ KZ について州も公的に情報を提供しているが、しかし長いあいだハンブルクはノイエンガメの存在を積極的に公にしようとしてこなかった。まず 1948 年にイギリス軍から返還された KZ 跡地に刑務所を建設し、部外者の立ち入りを禁止した。これに対し元囚人らの粘り強い働きかけと抵抗運動を続け、1953 年に記念碑、1965 年に記念跡地の設置が実現する。しかしこうした動き

[366] Ebd., S. 33ff.
[367] Ebd. （翻訳：29 ページ以下）
[368] ハンブルク州ホームページ
http://www.hamburg.de/museen-kunst-ausstellungen/museen/251658/kz-gedenkstaette-neuengamme.html.（2011 年 11 月 5 日アクセス）

があってもなお、「ハンブルク当局、政界、市民がノイエンガメの記憶に本質的に無関心である事情に変わりはなかった」[369]。この無関心さはその後も続き、ノイエンガメ KZ の歴史がその地で公式に展示されるのは 1981 年まで待たなければならなかったほどである。この背景には、当時の州政府の「忌まわしい『過去』を『最終的に生きた記憶から消し去って…和解に尽くす』」という姿勢が関係しているといわれている[370]。

関連する事件としてアイヒマン裁判をあげることができる。亡命先のアルゼンチンで捕らえられ 1961 年にイスラエルで裁判にかけられたアドルフ・アイヒマン（Adolf Otto Eichmann）は、任務遂行の責任感からのみユダヤ人虐殺を指揮していたことを主張し、その凡庸な見かけと相俟って世界中に衝撃を与えた。これを受けてスタンリー・ミルグラム（Stanley Milgram）は、権威に服従する人間心理に関する心理学実験（ミルグラム実験）を行った。この実験は、罪人に電流を流す役目を被験者に与え、電圧を徐々に危険水準まで上げさせるというものである。ただし実際に電流は流れず、罪人も実は実験協力者であり、電流に苦しむ演技をする。被験者は途中で止めることも許されていたが、多くの被験者は最後の危険水準まで電圧を上げていった。つまりこの実験によって、人間は誰でも、武力的な強制が無くとも与えられた義務にしたがって他人を死に至らしめるほどの危害を加えられることが明らかになったのである[371]。つまりこれによって A. アイヒマンの主張は科学的に根拠があることとして証明されたといえる。任務遂行への義務感から結果的に虐殺を引き起こしてしまう可能性が誰にでもあることを、この実験は示したのである。

これらは、現代の視点から見ればナチスの罪を相対化するものであるといえるだろう。つまり「誰にでもありえた」ことが詳らかになったのであり、結果として罪の意識が相対化されることとなった。この時代におけるこうした意識は、最終的に「50 年代には元『囚人』の照会に対して、ハンブルクには強制収容所などなかった、という『無邪気な回答』

---

[369] 飯田収治、2005 年、72 ページ。
[370] 同上、71 ページ。
[371] スタンレー・ミルグラム著、岸田秀訳：『服従の心理』、河出書房新書、1995 年。

が送られるのが実情だった」[372]という態度に行き着くのである。

「道徳化と断罪」

フランクフルトのアウシュヴィッツ裁判など注目を浴びた出来事もいくつか指摘できるが、旧西ドイツでは 1960 年代前半に至るまでナチスと向き合うことには比較的消極的であった[373]。しかし 1968 年世代の登場により、状況は大きく変わることになる。戦後世代である当時の若者が父親世代を激しく糾弾したのを皮切りに、ナチスの罪を直視する方向へ舵を切ったのである。1945 年以降に生まれた世代は、「ナチスと結びついた両親の身体」（naziverbundener Elternkörper）からの解放を目指し、それまでの西ドイツ社会を変えようと運動を起した[374]。また当時の連邦首相ヴィリー・ブラント（Willy Brandt）が、1970 年にワルシャワ・ゲットーの記念碑前で跪いて謝意を示したことはあまりにも有名である。ブラント首相のこの行為が、その後の過去への向き合い方を方向付けた[375]。

この流れを大衆レベルで決定付けたのが、1979 年に放映されたアメリカ製テレビドラマ『ホロコースト』（*Holocaust*）であるといわれている。

> しかしながら、公にナチ期との論争が始まったのは、ようやく 1980 年代にもなってのことでした。とくに 1979 年初めにドイツで放映されたアメリカ合衆国の「ホロコースト」テレビ番組シリーズが与えた印象のもとで、ナチの過去をあまりにも長い間抑圧しており、今こそその怠慢をようやく取り返す時期であるといったイメージが広

---

[372] 飯田収治、2005 年、72 ページ。

[373] ラインハルト・リュールップ著、浅田進史訳：「ナチズムの過去と民主的な社会―ドイツにおける記憶政策と記憶文化」、『公共研究第5巻第2号』、千葉大学、2008年、66ページ。

[374] Vgl.: Mohr, Reinhard: *Hölle im Reihenhaus*. In: *Spiegel Special*, Nr. 4, 2007, S. 108. Vgl. auch: Kurbjuweit, Dirk: *Gnadenlos und selbstgerecht*. In: *Spiegel Special*, Nr. 4, 2005, S. 38.

[375] ラインハルト・リュールップ、浅田進史訳、2008 年、66 ページ。

がりました[376]。

ドラマ『ホロコースト』は西ドイツにおいてほとんど「集団ヒステリー」[377]を起こさんばかりの人気を博し、これによってユダヤ人虐殺に関するイメージが確立され、ドイツにおけるホロコーストのイメージ史の転換点となったのである[378]。

1985 年 5 月にリヒャルト・ヴァイツゼッカー（Richard von Weizsächker）大統領は降伏 40 周年に際して行った演説において「過去に眼を閉ざすものは、未来においてもやはり盲目となる」と述べて、ナチスの罪を直視すべきであると説いた。翌年 1986 年にエルンスト・ノルテ（Ernst Nolte）は、フランクフルター・アルゲマイネ紙上に「過ぎ去ろうとしない過去」（*Die Vergangenheit, die nicht vergehen will.*）と題する論文[379]を発表し、その結果としてユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）らを巻き込んだ歴史家論争を引き起こした。ナチスを相対化しようとする E. ノルテらに対しそれを認めない立場をとった J. ハーバーマス陣営という構図であったが、このときは J. ハーバーマスに軍配が上がったといわれている。

このように、西ドイツにおける過去との向き合い方には一定の時代的傾向があることがわかる。60 年代前半まではナチスとの向き合い方が消極的であり、68 年代世代を転換点にナチスの罪に取り組む姿勢が明確に表れたといえる。

「追体験」

---

[376] 同上。

[377] アントン・カエス：「ホロコーストと歴史の終焉」、ソール・フリードランダー編、上野忠男、小沢弘明、岩崎稔訳：『アウシュヴィッツと表象の限界』、未来社、1994 年、175 ページ。

[378] Bösch, Frank: *Film, NS-Vergangenheit und Geschichtswissenschaft. Von "Holocaust" zu "Der Untergang"*. In: *Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte. 55. Jahrgang Heft 1*. Institut für Zeitgeschichte. München: Olenbourg Wissenschaftsverlag, 2007, S. 2.

[379] Nolte, Ernst: *Die Vergangenheit, die nicht vergehen will. Eine Rede, die geschrieben, aber nicht gehalten werden konnte*. In: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 6.6.1986. http://www.hdg.de/lemo/html/dokumente/NeueHerausforderungen_redeNolte1986/index.html. （2013 年 4 月 2 日アクセス）

これまで「沈黙」および「道徳化と断罪」について確認してきた。それぞれ、ナチスの蛮行を直視せず戦後復興に励んだ時代、ナチスの罪を告発し自覚的な反省を促す時代であった。そして現代は、まさにナチス時代やヒトラーを「当時のように経験すること」[380]を目指す新しい時代に突入している。つまり、68 年世代ではドイツの汚点のみを視野に入れていたのに対し、「追体験」の時代である現代では過去は多様であったはずだとの認識が広まりつつある。それはちょうど、当時の人々がナチスや戦争に対して抱いていた思いと同様に、個人によって過去の解釈や印象が異なるということに他ならない。この点にこそ、「追体験」の時代的特徴があると考えられる。

それでは、この特徴をどこに認めることができるだろうか。以下では過去に関する記念碑やそのコンセプト、建設に至る議論などを確認することを通して、個人に依存する多様な過去像が市民権を獲得しつつあることを示す。

すでに冒頭で述べたように、1989 年のベルリンの壁崩壊と 1990 年のドイツ再統一によって、ナチス時代への取り組みもまた大きな転換点を迎えることになる。旧東ドイツは一貫して反ナチス国家という立場を貫いており、それゆえ東ドイツ国家はナチスの罪を謝罪してこなかった。しかし壁崩壊後に誕生したモロドフ首相が、東ドイツもナチスの犯罪の責任があると認め、統一直前になってようやく公式に謝罪がなされたのである。

このドイツ再統一を機に 11 月 9 日の意味が大きく変化した。11 月 9 日はミュンヘン一揆（Hitlerputsch, 1923）、水晶の夜（Reichskristallnacht, 1938）およびヒトラー暗殺未遂事件（Georg Elsers gescheitertem Attentat auf Hitler, 1939）の日として、人々に記憶されていた。しかし 1989 年 11 月 9 日にベルリンの壁が崩壊すると、この日はこれまでの「民主主義の喪失」（Verlust der Demokratie）という意味づけから「ドイツ人がナチス時代に成し遂げられなかった独裁者からの解放と、共同の、民主主義的

[380] Michaelsen, Sven: *Totaler Dämon und elende Witzfigur*. In: *Stern. 39/2004*, S, 62.

道のり」[381]という意味づけへと変化した。つまり、それまでナチスと結びついていた 11 月 9 日が、ベルリンの壁崩壊という圧政からの解放を記念する日へと意味が変わってしまったのである。こうした 11 月 9 日の意味の変化は、1996 年に当時のローマン・ヘルツォーク大統領（Roman Herzog）によって決定的なものになった。R. ヘルツォーク元大統領は、アウシュヴィッツ解放の 1 月 27 日を「ナチス犠牲者の追悼記念日」（Tag des Gedenkens für die Opfer des Nationalsozialismus）としたのである。これによって、従来 11 月 9 日が担っていたナチス想起の意味が 1 月 27 日に付与され、その結果として 11 月 9 日はナチスを想起する日から除外されてしまったのである[382]。

1989 年はベルリンの壁崩壊から再統一へ至る重要な年であるが、同時に開戦 50 周年でもあった。この年から、ユダヤ人ホロコーストやシンティとロマへの虐殺に関する記念碑や施設が整備され、互いに関連づけられるなどの動きが徐々に現れはじめる[383]。

この時期における記念碑に関する興味深い変化として、対抗的記念碑（Gegendenkmal）という思想表現の誕生があげられる。記念碑は本来的に国民的英雄を想起する機能を有しているがために、「犠牲者のモニュメントを建設すること自体が、本来はそれが告発するはずの、犠牲者を生み出した全体主義的支配やナショナリズムの実践をなぞることになってしまう」という逆説性を孕んでいる[384]。岩崎によれば、記念碑は古代より英雄や犠牲者を永遠化する目的で建てられ、「聖性」[385]を帯びるものである。それゆえ「記念碑は、どのような政治的文脈においても、ナショナルな英雄の記憶を産出する装置として滞りなく機能してしまう」[386]のである。言い換えるなら、どのような記念碑であっても全体主義的な

---

[381] Petri, Ester: *Holocaust-Erinnerungskultur im Wandel*. Grin Verlag, 2000, S. 32.
[382] Ebd.
[383] Kaschuba, Wolfgang: *Gedächtnislandschaften und Generationen*. In: Fank, Petra / Hördler, Stefan (Hg.): *Der Nationalsozialismus im Spiegel des öffentlichen Gedächtnisses*. Berlin: 2005. http://edoc.hu-berlin.de/oa/bookchapters/reKcV6NgAKooQ/PDF/22T8rDKLfB6js.pdf, S. 4. （2011 年 8 月 27 日アクセス）
[384] 岩崎稔：「記念碑と対抗的記念碑」、『Quadrante』Nr. 10、東京外国語大学海外事情研究所、2008 年、51 ページ。
[385] 同上、52 ページ。
[386] 同上。

感情を新たに引き起こさせてしまう危険性を持っている。ここから、全体主義を告発する記念碑が別の全体主義を生み出しかねない、という矛盾が指摘されるようになっているのである。

対抗的記念碑はこの問題を解消するために、記念碑の「形式性そのものを相対化ないし否定」するというものである[387]。ミュンスターの「黒いフォーム」(1987)、ハンブルクの「ファシズム、戦争、暴力に抗した、平和と人権のためのモニュメント」(1987-1993)などがこれに該当する。ハンブルクの対抗的記念碑は、記念碑に人々が自由に落書きすることが可能だったばかりでなく、描き込まれたハーケンクロイツまでもが「その時代、その状況における戦争とファシズムとの関係性を照らし出している」[388]として許容された。ただし、より特徴的なのは、このモニュメントが 1993 年には設立場所の地中に没してしまうよう設計されていたことである。これは記念碑が永続性を放棄し跡地だけを残すかわりに、関与した住民の記憶に留まるということが重視された結果である。

ハンブルクの対抗的記念碑における「追体験」としての特徴は、まさにこの点にある。記念碑への落書きが許容されたということは、記念碑は製作者の手によって完成されるのではなく、住民たちの手によって常に時代と関係づけられ続けることを意味する。加えて、そこに現れるのはひとつの意味を持った記念碑ではなく、文字通り多様な姿を持つ記念碑なのである。それは人々が思い思いの視点からナチスにアプローチした結果であり、記念碑を訪れた人は誰でも、ナチスの罪を反省することから鉤十字というナチスの象徴まで、両極端な視点を観察することができる。やがて記念碑は時間の流れとともに姿を消し、落書きをした人や訪れた人の心のなかに、自身が直接経験した出来事としてのみ残るのである。記念碑がなくなった後に訪れた人は経験することができない過去であり、記録や写真や説明などによってのみ知ることができる過去といえる。

これらは、まさにナチスの過去そのものである。当時の人々とナチスとの関係性は一義的ではなく、ひとりひとりの思いは多様で複雑である。それは完成することのない過去像であるが、やがて戦争の爪痕も薄くな

[387] 同上。
[388] 同上。

り直接経験者が不在となるとき、記録と記憶にのみ支えられる過去となるのである。ハンブルクの対抗的記念碑は、まさにこのプロセスを直接「追体験」できるものということができる。

記念碑をめぐる動きは、公的にも徐々に変化してきている。連邦政府は 1999 年に「追悼施設構想」（Gedenkstättenkonzeption）を提出し、財政的支援を約束した。この「追悼施設構想」に該当するのはナチスの犠牲者に関連するものだけではなく、ゲシュタポ関連施設などナチスの罪が行われた場所を示す「実行者の場所」（Täterorte）も含まれており、「追悼施設」認定にあたりナチスの犠牲者側、加害者側を問わない姿勢が明確になってきた[389]。また被害者に関しても、ユダヤ人だけに限定せずシンティとロマなども含めて議論する機会が多くなってきた[390]。記念碑はユダヤ人ホロコーストに関するものだけでなく、さまざまな過去を追悼・追憶できるものへと拡大してきているのである。

記念碑をめぐる動きのなかで、最も注目されたもののひとつにベルリンのホロコースト警告碑（Mahnmal für die ermordeten Juden Europas）をあげることができる。この警告碑は 2003 年に建設が開始され 2005 年に完成し一般公開されたが、ここに至るまでの道のりは決して平坦ではなかった。1994 年に公開設計競技が開催され、翌年にひとつの案が選出された。しかし直後に犠牲者をユダヤ人に限定し、ロマや同性愛者を除外していることに対する批判などによって計画は頓挫する。1997 年には第二回公開設計競技が開催されたものの複数案が選出されたに留まり、1998 年に至ってもなお最終案が決まらず結局 2003 年にまでずれ込んだのである[391]。

記憶論の視点から見たとき、より興味深いのは最終案のコンセプトである。最終案はアメリカの建築家ペーター・アイゼンマン（Peter Eisenmann）のものが採用されたが、第一回決定会議に提出された資料に

---

[389] ラインハルト・リュールップ、浅田進史訳、2008 年、68 ページ以下。

[390] 2005 年 5 月にブランデンブルク門の隣に完成した「虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人のための記念碑」（Mahnmal für die ermordeten Juden Europas）建設に際して、他の犠牲者を排除することは人種差別につながるという批判があった。Vgl.: Petri, Ester, 2000, S. 48.

[391] 田中純：「ベルリンにおける記憶の政治」、『ドイツ文學』 Nr. 101、1998 年参照。

は次のように書いてある。

> 生々しく生き続ける記憶、すなわち個人的経験の記憶のみが存在するだけなのだ―記念碑／モニュメントの体験の記憶のみが。なぜなら今日われわれは過去を、ひたすらこの現在における表現を通じてのみ知り、理解することができるのだから[392]。

田中純は P. アイゼンマンのコンセプトを「慰霊の営みを徹底して個人的でしかありえないものとして経験させようとしている」と分析しており[393]、この意味において過去を個々人のレベルで「追体験」することを迫るものであるといえよう。ハンブルクの対抗的記念碑においても同様であるが、ここでは国家レベルの次元よりも個人というよりミクロな次元において過去が意識されている。

このミクロ的過去を経験する際、これもハンブルクの「ファシズム、戦争、暴力に抗した、平和と人権のためのモニュメント」と同様に、現在の視点からのみ過去は再構成されることが強調されている。1 章で詳しく論じたとおり、想起される内容は常に現代的視点に支配された構成物である。この視点を導入することにより、記念碑が建設されたときに意図された過去を永続的に表象するのではなく、時代や訪れる人によって記念碑から受け取る印象が異なるという多様な過去解釈が許容されるようになったのである。

こうした過去への向き合い方が決定的に変化した転換点は、ヴァルザー・ブービス論争（Walser-Bubis-Debatte）であるといわれている。A. アスマンは 20 世紀後半ごろからナチスとの社会的政治的距離が変化しつつあったことを指摘したうえで、ヴァルザー・ブービス論争こそそうした転換の原因であると述べている。

> 本論文においてわたしは 50 年に及ぶドイツの想起の歴史を振り返り、次いでこの歴史における我々の位置を明確にすることを目的と

[392] *Engeres Auswahlverfahren zum Denkmal für die ermordeten Juden Europas. Materialien zur 1. Beurteilungssitzung*. Berlin, 14. November 1997. 田中純、1998 年、89 ページより引用。
[393] 田中純、1998 年、89 ページ。

している。パウルス教会におけるヴァルザーの演説とイグナツ・ブービスのリアクションによって生じた論争を、その原因と位置づける。［中略］ヴァルザー・ブービス論争は刺激というやり方によって想起をいま一度活性化させた[394]。

ヴァルザー・ブービス論争とは、1998 年 10 月 11 日に作家マルティン・ヴァルザー（Martin Walser）のドイツ書籍平和賞（Friedenspreis des Deutschen Buchhandels）受賞講演演説とそれに対するユダヤ評議会議長イグナツ・ブービス（Ignatz Bubis）の非難に端を発する、戦後ドイツの過去問題を論ずるうえで重要な論争である。M. ヴァルザーは演説において、マスメディアが凄惨なホロコースト映像を流し続けることは「ドイツ人の恥を道具化」（Instrumentarisierung unserer Schande）することであると批判し、あえて「目をそらすこと」（Wegschauen）を主張した。これが反ユダヤ主義的発言であるとして I. ブービスが反論を展開し、そこから同年 12 月 12 日に両者が和解会談を行うことで終息した[395]。M. ヴァルザーの真意は反ユダヤ主義の主張ではなく、マスメディアによって画一的なアウシュヴィッツ像をルーティン的に流し続けることは「後世に何も重要なことが伝わらない」という批判であり、「そこから彼［M. ヴァルザー］はホロコースト問題を個人の視点からはじめようと試みている。過去との関わりについてメディアの形式的な想起を促す模倣を個人が想い起すこと（Erinnern）に変えるべきである」[396]ことを強調するものであった。

記念碑の議論において確認したナチスの想起を大衆から個人次元へと転換する動きは、まさにこの論争がその方向性を最終的に決定付けたと

---

[394] Assmann, Aleida: *Erinnerung als Erregung. Wendepunkte der deutschen Erinnerungsgeschichte*. In: Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (Hg.): *Berichte und Abhandlungen, Band 7*. Berlin: Akademie Verlag, 1999, S. 41.

[395] Vgl.: Ackermann, Kristen: *Gefahren der Abkehr von Politischer Korrektheit am Beispiel der Walser-Bubis-Debatte*. In: Nies, Susanne (Hg.): *Political Correctness in der (inter)nationalen Politik. Zu Genese und Verbreitung eines Konzepts. Arbeitspapiere des Osteuropa-Instituts der Freien Universität Berlin* 36/2001.

[396] Ikeda, Hiroyoshi: *„Wie hin- oder wegschauen?“ – zur politischen Stellungnahme einens Schriftstellers in der Walser-Bubis-Debatte –*. In: 『言語と文化』Nr. 10, 愛知大学言語教育研究室, 2004, S. 153ff.

いえる。『ホロコースト』に代表されるような大衆的過去像の形成は、裏を返せば一人ひとりが過去に関する固有の考えを持たなくなることと同義である。M. ヴァルザーはこうした社会的に想起がひとつのイメージに固定化することを懸念し、警鐘を鳴らしたのである。

I. ブービスの懸念が杞憂に終わるか否かは今後のドイツ事情を注意深く観察し続ける必要があるだろう。他方、単一的な過去像から脱却し個々人それぞれが固有の過去像を獲得していこうとする動きは加速しつつあるといえるだろう。この意味において、A. アスマンが指摘したようにヴァルザー・ブービス論争は「追体験」における決定的な転機となったのである。

以上、記念碑およびヴァルザー・ブービス論争を通して「追体験」について確認してきた。個人が過去に対して多様な姿勢で接することが可能となったことに加え、過去を永続的なものではなく、現代との結びつきのなかで考えようとする動きがみてとれる。「断罪と道徳化」の時代にあってはナチス時代をドイツの罪とするところから出発していたのに対し、現代においてはこうした態度をいったん保留し、個人の視点から過去を経験するようになっていったのである。

戦後ドイツにおける、ナチスの過去をめぐる態度について概観してきた。東西ドイツのナチスに対する態度は、政治的な背景によってすでに出発時から大きく異なるものであり、その意味において現代ドイツの過去は戦後から線的に形成されたものではない。複雑な道のりを経て現在に至っているのである。A. アスマンはその過程を 3 段階に分けることで、過去への取り組みの変遷を描き出そうとしていた。本節においてその 3 段階の特徴を跡付けてきたが、その結果として現在の視点から過去を再構成すること、多様な過去像が許容されるようになってきていることが明確になったといえる。

このように、現代ドイツにおいて過去はさまざまな姿を見せるようになってきた。被害者か加害者かという二値的な過去像ではなく、複眼的で、ときには矛盾し対立しあうような視点が許されはじめているのである。

3-3：証言の変化

時代の移りかわりによって、多様な過去像が現れはじめたことを確認してきた。このとき特に注目すべきことは、過去は現代の視点から構成されるということであった。それゆえ、表象する過去像は一定ではあり得ず、各年代によってその姿を変化させることになる。前節では、これについて記念碑のコンセプトなどを振り返りながら確認してきた。

記念碑は当時を経験したことのない人々が「追体験」する場として機能しているが、それは実体験に基づかない過去ともいえる。つまり、記憶不在の「追体験」といえよう。一方で、過去を直接体験した世代は当時をどのように振り返っているのであろうか。過去像は一定ではないことを確認してきたが、これは当時の記憶を保持している戦争体験者にも当てはまるのだろうか。

以下では証言に焦点を当て、上述した疑問について考察する。特に、ホロコーストに関する証言を年代比較する。これによって、当時の記憶を保持する証言者の視点も年代とともに変化するのかを確認するとともに、多様な過去像現象は「追体験」者にのみ妥当するものなのかどうかも確認する。

ふたつのホロコースト作品

「追体験」の時代に移行したことに伴い、過去の語り口そのものも個人化してきている。加害者側においては自身の罪を認める一方で、それに加えて沈黙の時代以降封印されていた職務としてのナチス活動という証言が増加してきたのである。R. ミッシュは『最後の証言者』のなかで、当時ヒトラーに仕えていた自分自身を「責めない」と擁護したうえで、「私は絶対的な任務遂行を自分の意思に反して行わなければならなかったというわけではないし、自分自身と葛藤することもなく、またためらいもなかった。[…] 私は軍人だったのだ。」と、当時の率直な心情を述べている[397]。つまり、軍人としての任務に疑問を挟まず粛々と遂行し

[397] Misch, Rochs, 2008, S. 17.

ていたのみであることを書いている。このような記述は、「道徳化と断罪」の時代ならば決して許されるものではなかったであろうことは、想像に難くない。先述した歴史家論争において、戦争を体験していない世代に関する加害者としての集団的共通責任の有無までもが問われていたときである。そのなかで、SS であった自分自身に責任を負わず、またヒトラーをまるで普通の職場の上司のように描くことなど、単に不可能という以上の困難が伴ったことは明らかだ[398]。

加害者である（はずの）ドイツ人がこのような態度をとるのは許されるのかどうか議論が待たれるところであるが[399]、その一方で被害者である（はずの）ユダヤ人においても証言内容が変化してきている。ユダヤ人の証言内容の変化を観察するとき、フランスのクロード・ランズマン（Claude Lanzmann）によって制作された 1985 年公開の映画『ショアー』（*Shoah*）およびドイツ第 2 テレビ（ZDF）が 2000 年に放映したドキュメンタリー『ホロコースト』（*Holokaust*）が参考になる。

『ショアー』は被害者ユダヤ人をその中心に据えながら、ドイツ人やポーランド人らも加害者、傍観者として登場させ、各々の立場の語りを通してホロコーストを証言させている。映画制作の意図について C. ランズマンは「伝説と神話とフィクションとが、[中略] ホロコーストの現実性を、最も重大な逸脱の域に達するまでに、陳腐化させている」ことに対して、「過去を現在としてよみがえらせ、過去を非時間的な現代性（アクチュアリテ）のなかに復元すること」[400]を目指すものであったと述べている。当時、「ソープオペラ」[401]的なアメリカドラマ『ホロコースト』（*Holocaust*）が西ドイツを含め世界中で熱狂的な流行を見せていたなかで、映画『ショア

---

[398] もっとも、R.ミッシュは自分の置かれた特殊な環境をきちんと自覚しており、ホロコーストの罪を否定しているわけではない。Vgl.: Ebd., S. 15.

[399] この問題に対し、政治的、思想的、道徳的視点からアプローチすることは大変重要である。しかし本論ではそのような視点からの議論は行わず、**第 1 章**および**補論 4** で考察した文化科学的記憶論の視点を保持することとする。

[400] クロード・ランズマン著、高橋武智訳：『SHOAH』、作品社、1995 年、2 ページ。ただし括弧内筆者。

[401] ニューヨークタイムス紙、エリ・ヴィーゼル評。石浜昌宏：「ホロコースト表象の現在（Ⅰ）　映画『ショアー』以前」、宇都宮大学国際学部研究論集第 5 号、1998 年、17 ページより引用。

ー』は自己批判的ホロコースト作品として高く評価された[402]。つまりホロコーストの表象に関して、時代に流されやすい商業主義的フィクションを否定し、いつの時代においても参照可能である普遍的な過去像が模索されたのである。またこの映画の「語り」が各国語に翻訳されて出版されており、それによってホロコーストが「一つの記録として定着することができ、[中略]公衆と専門家の双方により、読みこまれ、読みつがれ、深く吟味される可能性を手に入れた」[403]と評価されている。

一方の ZDF『ホロコースト』も、ドイツ本国のみならずヨーロッパ諸国やアメリカ、イスラエルなどでも放映され、いずれも高い評価を受けている[404]。同ドキュメンタリーの制作過程において、アメリカからモスクワに至るまで史料を収集して新たなホロコースト関連の写真やフィルムを発見し、また冷戦終結に伴い東欧の文書館が広く開放されたことで、これまで西側諸国が閲覧不可能だった史料も手に入れることができたという。また同様に、「人生の終わりを迎えるにあたって初めて証言する勇気をふるいおこした」[405]という 500 人を超える被害者と加害者の証言も収録している。こうした新しい資料と証言を収めているという意味で、『ホロコースト』は「学問的に有益」[406]なものとなっている。

このように、『ショアー』と『ホロコースト』の両方において証言が重要な役割を果たしている。ただし証言をした年代が異なっており、前者は 80 年代、後者は 90 年代後半である。そこでふたつのホロコースト作品における証言の比較を通して、「道徳化と断罪」の時代における過去意識と「追体験」の時代における過去意識の違いを描き出すことにする。なおふたつの作品とも書籍化されており、本論文では証言をより明快に比較することを優先し、書籍版を分析対象として取り扱う。映画『ショアー』は同名の著書『ショアー』を、ドキュメンタリー番組『ホロコースト』は著書『ホロコースト全証言集』を用いる。

---

[402] アントン・カエス、ソール・フリードランダー編、上野忠男／小沢弘明／岩崎稔訳、1994 年、175 ページ。
[403] クロード・ランズマン著、高橋武智訳、1995 年、487 ページ。
[404] グイド・クノップ著、高木玲／藤島淳一訳:『ホロコースト全証言集』、原書房、2004 年、431 ページ。
[405] 同上、2 ページ。
[406] 同上、1 ページ。

①ドイツ人描写について

『ショアー』と『ホロコースト全証言集』は、いずれもナチスドイツによるユダヤ人大量虐殺の記録であるが、前者はインタビュー形式であるのに対し、後者はドキュメンタリー記録の形式となっている。したがって両者のあいだには、形式上の制約という意味において情報量に大きな差異があることは回避できないことである。しかしこのことは、『ショアー』においてドイツ人がユダヤ人を助けたという証言がないという事実とは、一切無関係であろう。『ショアー』のなかで、ドイツ人は加害者および傍観者であるばかりでなく悪であった、という証言が大半を占めているのである。また、『ショアー』のなかのユダヤ人は被害者の範囲内で描かれているが、『ホロコースト全証言集』においては加害者、傍観者としてのユダヤ人という書き方もなされている。このように両者のあいだには、ドイツ人およびユダヤ人の評価に差異が認められるのである。

他にもナチスドイツ占領下にあったポーランドやウクライナの人々の記述に関して差異が認められるが、ここでは上述した二点に限定して具体的に確認していきたい。まず一点目について、『ショアー』ではドイツ人をわずかでも肯定的に評価する人物は皆無である点が指摘できる。ジャーナリストおよび作家であるインゲ・ドイチュクローン（Inge Deutschkron）はベルリン生まれのユダヤ人であり、第二次世界大戦当時はベルリンに潜伏してホロコーストを生き延びた人物である。彼女は『ショアー』のなかで、戦後になってドイツ人がホロコーストを知らなかったと弁解していることについて厳しく批判を加えるとともに、潜伏時代を振り返り「すっかり孤独になった」「人間らしい温かみが、身の回りから、消え去りました」[407]と、潜伏期間中を独りで乗り切った印象を与える証言をしている。しかし『ホロコースト全証言集』における彼女の証言は、1942 年末の時点でユダヤ人がガスで殺されているという噂を聞いたとき、「信じることができませんでしたし、また信じようともしません

[407] クロード・ランズマン著、高橋武智訳、1995 年、127 ページ。『ショアー』では彼女の日本語表記は「ドイッチュクローン」となっているが、本論では『ホロコースト全証言集』の「ドイチュクローン」に統一する。

でした」と述べるにとどまっている[408]。このように、『ショアー』において I. ドイチュクローンはドイツ人を厳しく批判し、また当時の生活の悲惨さを語っているのに対して、『ホロコースト全証言集』ではガス殺のうわさ話のことしか証言していない。ここに、『ショアー』と『ホロコースト全証言集』のあいだにある証言の隔たりを読み取ることができる。この両者におけるドイツ人描写の隔たりは、先述した『ホロコースト全証言集』の I. ドイチュクローンの証言に続く、次の文章によって決定的となる。

> およそ六〇〇〇人のユダヤ人が「U ボート」と呼ばれながら、非合法にベルリンの地下に潜伏して生き延びた。少なくとも同数の「アーリア人」協力者が食糧を運び、隠れ家を提供し、密告者から守ってくれたからだ[409]。

このように『ホロコースト全証言集』では、当時ベルリンに潜伏していたユダヤ人たちに対してドイツ人が助けの手を差し延べていた、という記述がなされるようになったのである。実際に I. ドイチュクローンは非ユダヤ人宅に身を寄せて難を逃れたことを明らかにしている。このほかにも『ホロコースト全証言集』には、ヘルマン・ゲーリング元帥の実弟アルベルト・ゲーリング（Albert Göring）がユダヤ人を救済していた事実や[410]、SS 伍長がユダヤ人輸送の際に命の危険を顧みず数人ずつ逃がしていた話[411]、国防軍少尉が処刑現場に偶然出くわし、中止させた上で実行者を逮捕させたこと[412]などが証言されている。

もちろん、同書は手放しにドイツ人のユダヤ人救済を賞賛しているわけではない。同書にはドイツ人によるユダヤ人救済の話とならんで、「戦後になると、『何も知らなかった』と言って誰もが弁解したが、今日そうした言い分は欺瞞であることが暴かれている」[413]「ユダヤ人の権利侵害

---

408 グイド・クノップ著、高木玲／藤島淳一訳、2004 年、357 ページ。
409 同上、358 ページ。
410 同上、354 ページ以下。
411 同上、295 ページ以下。
412 同上、46 ページ以下。
413 同上、356 ページ。

は、誰の目にも明らかだった」[414]と書いており、そうすることで I. ドイチュクローンの批判を受け止めようとしている。しかしその一方で、当時のドイツ人がホロコーストを前にどのような反応を見せたかについて、「嫌悪感をあらわにした」「抗議した者はごくまれだった」「犯罪についてまったく知らず、前線で自分が生き延びることだけに忙しかった者も少なくなかった」「虐殺に喝采を送り、実行者をたきつけ、死を目前にした犠牲者をなおも愚弄する」[415]など、非常に多面的に描き出している。このドイツ人描写の多様性こそ、『ホロコースト全証言集』における『ショアー』との大きな差異のひとつといえる。

②ユダヤ人描写について

ドイツ人が多面的に描かれていたことと同様に、ユダヤ人に関する記述および証言もより複雑になってきている。つまり、『ショアー』においてユダヤ人は一貫して被害者としての視点からのみ証言されているが、『ホロコースト全証言集』においては加害者としての視点も盛り込まれているのである。

『ショアー』に登場するユダヤ人証言者について最も端的な評価は、シモーヌ・ド・ボーヴォアール（Simone de Beauvoir）による同書のまえがきであろう。彼は、ユダヤ人証言者のなかで「うわべだけでも平静さを保ちえたのはわずか二、三人で、多くは語ろうにもこらえきれないようすである。声も途切れがちに、泣き崩れてしまう。[…証言者の表情は言葉よりも雄弁に真実を語るものであるが、]ユダヤ人の表情はその語り（パロール）と一致している」[416]と書いており、暗にユダヤ人のみが真実を語っていると評価している。その真実とは、語ろうにも「こらえきれ」ずに「泣き崩れて」しまうほどの被害体験である。

今日では、当時各都市で行われたユダヤ人狩りにおいてユダヤ人自身が深く作戦に関わっていたこと、強制収容所内では囚人ヒエラルヒーが

---

[414] 同上、357 ページ。
[415] 同上、4 ページ。
[416] クロード・ランズマン著、高橋武智訳、1995 年、17 ページ。ただし括弧内筆者。

確立され、職長やカポ（Kapo）など権力を持っていたユダヤ人が囚人を殺害していたことなどが知られている。しかし、これらの事実は『ショアー』においてまったく証言されていない。たしかに、ナチスへの協力を（自身の意思に反して仕方なく）推進したワルシャワ・ゲットーのユダヤ人評議会責任者アダム・チェルニアコフ（Adam Czerniaków）について語られる場面があるものの、元ゲットー司政官補佐官ドイツ人とアメリカ人歴史学者による語りであり[417]、ユダヤ人自身による証言ではない。またその内容も、ユダヤ人評議会がたとえ強制的とはいえナチスドイツに協力していた事実を断罪するものではなく、A. チュアニコフは当局の「道具」[418]として操られ最後には自身を責めて自殺するという悲劇として構成されている。このように『ショアー』では、すべてのユダヤ人は被害者としてのみ語られている。

一方『ホロコースト全証言集』ではユダヤ人のナチスドイツへの協力、囚人への暴行などが批判的に証言されている。まず前者について、ゲットーから強制収容所への移送に関して次のような証言が収められている。

> 恥ずべきことに、そもそもユダヤ人信徒協会がこの種の輸送を編成し、参加者を選別したのです。ドイツ人は表に出てきませんでした。ドイツ人に会った者などいませんでした。
> わたしたちは八時以降外出を禁じられていたのですが、夜中に召集状を持ってきたのもユダヤ人の使者でした。[419]

また、この種の命令に背いた場合ユダヤ人信徒協会の役員が家に押しかけ護送することもあった、という記述もある[420]。このように、ユダヤ人がユダヤ人移送に深く関係していたことをはっきりと書いているのである。

後者の強制収容所内における囚人暴行については、次のような記述を確認した。すなわち、「衰弱して倒れ、もはや自力で立ち上がれないもの

---

[417] 同上、393-427 ページ。
[418] 同上、423 ページ。
[419] グイド・クノップ著、高木玲／藤島淳一訳、2004 年、167 ページ。
[420] 同上、166 ページ。

は、カポに撲殺された。」[421]「SS とカポにシャベルやつるはしで殴り殺された。」[422]「SS と機能囚人［カポや古参といった、他の囚人を管理する特権的囚人］がとくに好んだ虐待の一つは、冬に囚人を凍死させることだった。」[423]「古参は［違反行為をしたユダヤ人囚人の］ヤンケルを一撃のもとに殴り倒した。［中略］ヤンケルの命がつきるまで、殴打し、蹴り倒したのだ。［中略］われわれ皆に不快感以外の何ものもあたえなかった男を、われわれは憎んだ。」[424]他にも、権力をもつ囚人が他の囚人を継続的に強姦していたという証言もみられる[425]。

このように『ホロコースト全証言集』においてはユダヤ人のあいだでも非人道的な行為があったことを告発している。この件に関して、アウシュヴィッツから生還したユダヤ人の証言が当時の様子を生々しく伝えている。

> 自分自身囚人である人たちが、同じ囚人を苦しめる。それは恐ろしい経験でした。カポたちには、囚人の生活を地獄にすることはおろか、死にいたらしめることさえできました。殴打したり、その他ありとあらゆる懲罰手段を駆使して、もう生きていたくないと思うまで囚人を痛めつけることが許されていました[426]。

ここで注目したいのはユダヤ人の罪ではなく、加害者および傍観者としてのユダヤ人という描写が可能となっている点である。『ショアー』のなかでは徹底して被害者としてのみ描かれていたユダヤ人が、ここではそれ以外の側面があったことが明らかにされている。このように、前節で確認したドイツ人だけでなく、ユダヤ人の描写においても多様性が認められるようになってきたのである。

---

[421] 同上、238 ページ。
[422] 同上、241 ページ。但し、括弧内筆者。
[423] 同上、242 ページ。但し、注は原文。
[424] 同上、251 ページ以下。
[425] 同上、286 ページ。
[426] 同上、242 ページ。

3-4：小括

戦後ドイツにおいて、過去意識が変化してきていることを確認してきた。戦争体験者の減少により当時を語ろうという機運が高まり、それによって多くの証言が社会内部に広まることとなったのである。このとき、戦争直後から80年代ころまでとは異なり、ナチス時代を追体験しようという社会的な動きのなかで証言されているところに、現在の証言の特徴があった。これによって、たとえばユダヤ人を助けたドイツ人の話など、80年代にはなかった証言内容が観察されるようになった。ユダヤ人を被害者だけではなく加害者として、またドイツ人を加害者だけではなくユダヤ人救援者として描くことは、従来の単一的なイメージが多様化していることを裏付けるものである。

このように、現代ドイツにおいてナチスの過去像を多様化する動きが認められる。本章冒頭で、かつてドイツの歴史はナチスに集約すると考えられている時代があったが、現代はそれに当てはまらないということを書いた。それは、M. ヴァルザーがナチスをドイツ全体の問題から個々人の問題へ転化させようと試みたことと同じ文脈にあるといえよう。つまり、ドイツという大きな集合の歴史としてナチス時代をとらえるのではなく、一人ひとりの身に起こった出来事として反芻し咀嚼することが、より求められる時代になってきたのである。個人の出来事としてナチスをとらえなおすことは、ナチスを描写する視点が多様化するということに他ならない。過去の体験を多様な視点から語ることと、過去を多様な視点から追体験しようとする動きが重なり、重層的で多面的な過去像が想起されているのである。

次章ではヒトラー像が多様化してきていることを示す予定であるが、その社会的文化的背景がここにある。つまりヒトラー像が多様化している背景には、ナチス時代を当時のように語り当時のように経験しようとする「追体験」という現代ドイツの時代的特徴があるといえる。

4：ヒトラー映画における集合的記憶の交渉

現代ドイツにおいて、ナチスは単なる過去ではない。それは「過ぎ去ろうとしない過去」[427]であり、また「目を閉ざす」ことの許されない「過去」である。リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー（Richard Karl Freiherr von Weizsäcker）元大統領はこれを指して、「われわれ［ドイツ人］全員が過去を引き受けねばなりません。だれもが過去からの帰結に関わり合っており、過去に対する責任を負わされております。」[428]と述べている。ナチスはすべてのドイツ人にとって終わりなき「過去」であり、想起し続けることが求められているのである。

前章では、戦後ドイツにおいてこうした過去への意識が変化していることを確認した。それによれば、戦後ドイツの過去意識は3段階に分けられるが、特に現代は過去を当時と同じように追体験しようという意識が高まりつつある。この追体験を目指す意識によって、現代ドイツではナチス時代が多様に語られはじめていたのである。

ところで、こうした動きはヒトラーにも当てはまるのであろうか。従来のヒトラー像は、ナチスを率い民族大虐殺を主導したとして、常に「悪の権化」や「大量虐殺者のシンボル」として語られてきた[429]。少なくともナチス政権時代のときと同じように、ヒトラーをドイツ国民を正しい道へと「導く者」（Führer）であったと見なしている現代ドイツ人は、ネオナチなどの極右主義者を別にしてほとんどいないように思われる。このように、ヒトラーのイメージは原則として負の神話によって構成されてきていたといえるだろう。

ところが現代ドイツにおいて、必ずしも従来のヒトラーのイメージと一致していないヒトラー像が、さまざまな領域のなかで観察されるようになってきている。たとえば、感情を持った人間としての指導者や、ユダヤ人に同情される弱い指導者という笑いを伴った演出など、これまで

---

[427] Nolte, Ernst, 6.6.1986.

[428] リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー著、永井清彦訳：『荒れ野の40年：ヴァイツゼッカー大統領終戦40周年記念演説』、『岩波ブックレット』Nr.767、岩波書店、2009年、11ページ。

[429] Hissen, Alexandra: *Hitler im deutschsprachigen Spielfilm nach 1945: Ein filmgeschichtlicher Überblick*. Trier: WVT Wissenschaftlicher Verlag, 2010, S. 13.

「タブー」[430]視されてきたヒトラー像が次々と姿をあらわしてきているのである。つまり、ヒトラーが犯した罪に焦点を絞ったヒトラー描写だけではなく、ヒトラーをより多角的に描こうという動きが見られるようになってきているのである。こうした新しいヒトラー像のなかには、ヒトラーが晩年患っていたパーキンソン病の症状を描写するなど、本当のヒトラーを忠実に再現しようと試みた演出もある。それゆえ、いわゆる史実に従ったメディア作品は一部の分野では歓迎されており、たとえばそのような映画を歴史教育の教材として活用しようとする動きも報道されている[431]。

一方で、ヒトラーを忠実に描くことは、悪魔的なヒトラーという従来のイメージが弱まり人間として描くことへ繋がるとして、そのようなヒトラー描写の賛否も激しく議論されている[432]。まして人々の笑いと同情を誘うヒトラー像などもってのほか、と考える人も少なくないだろう。すでに指摘したように、ヒトラーはユダヤ人大虐殺を主導した人物である。民族浄化というスローガンの下、まったく無慈悲で機械的な作業によってひとつの民族を文字通り地上から消し去ろうと企てた張本人である。そのような人物を笑いの種とすることや、同情を誘う弱々しい姿として描くということは、いかに大きな衝撃を与えることであったのか容易に想像できるであろう。

こうした、ヒトラーを人間的に描くことは許されるのかという問題や、ヒトラーを笑いの種とすることは許されるのかという議論は、非常に興味深く重要なテーマであり、今後も引き続き注目していく必要があるだろう。しかし本章の関心はこれとは別にある。この論文の目的は、集合的記憶はメディアのなかで交渉することを理論面と実証面から考察することであった。前章では現代ドイツにおける過去描写の多様性に言及したが、本章においても引き続き集合的記憶の交渉について実証することが中心となる。ただし、本章では集合的記憶とメディアの深い関係を視野に入れて、集合的記憶の交渉についてメディアなかの集合的記憶に焦

---

[430] Bischof, Willi: *Vorweg*. In: Bischof, Willi (Hg.), 2005, S. 6.
[431] Ebd. この報告によれば、W. ビショフの論文執筆当時において、映画『ヒトラー―最期の 12 日間』は CDU と FDP の推薦によって学校教材となる見通しである。
[432] Weyand, Jan: *So war es!* In: Bischof, Willi (Hg.), 2005, S. 39.

点を当てた実証的分析を行いたい。本章で取り上げるメディアは、展覧会やカーニヴァル、雑誌などにも言及するが、考察の中心に据えるものは映画とする。したがって本章は、映画を中心にさまざまなメディアにおけるヒトラー像の観察を通して、ヒトラー像が多様化している様を描き出し、最後にそれを集合的記憶の交渉と捉えることを目的とする。

本章の構成は次のとおりである。はじめに、現代ドイツにおけるヒトラーイメージについて、展覧会やカーニヴァル、雑誌表紙などを例にあげながら、従来の悪魔的ヒトラー像とは異なるイメージが出てきていることを示す。次に近年作成されたヒトラーが描写されているドイツ映画について、社会的な評価の確認とヒトラー像の分析を行う。以上の考察を通して、メディアのなかでヒトラー像が従来とは異なる視点から描かれはじめたことを示し、これをメディアのなかにおける集合的記憶の交渉と結論づける。

4-1：ヒトラーイメージの現在

ここでは、現代ドイツにおいてヒトラーイメージが多様化していることを確認する。すでに述べた通り、現代のヒトラー像は従来の悪魔的なイメージだけではなく、史実に従って描写されたものや笑いを誘うものなどを観察することができる。本論文では映画を分析の中心に据えるが、しかし、このような現象が観察されるのは映画のなかだけではない。さまざまなメディアのなかに、ヒトラー描写の脱悪魔化と多様化を確認することができる。そこで本節では、現代ドイツにおけるヒトラーイメージの潮流を確認することを目的に、映画以外のメディアのなかで観察される脱悪魔化されたヒトラー像を概観する。特に、史実に基づいて再構成されたヒトラー像と、笑いと誘うキャラクターとして描かれたヒトラー像に焦点を絞り、次節の映画分析への布石とする。

はじめに史実に基づいたヒトラー像について確認する。ここでは、ヒトラーを第三帝国時代のように展示して話題となった展覧会を参考にしたい。2010 年 10 月 15 日からベルリンのドイツ歴史博物館（Deutsches Historisches Museum in Berlin）で催された『ヒトラーとドイツ人―民族共同体と犯罪』（Hitler und die Deutschen. Volksgemeinschaft und

Verbrechen）と題する展覧会は、ドイツでは戦後初めてヒトラーを展示することで話題になった。戦後 65 年の節目の年に開催されたこの展覧会は、各世代が今なお問い続ける次の問題に答えようとするものであった。すなわち、「ヒトラーはいかにして可能であったか？戦争と犯罪と民族殺戮に責任があるヒトラーと国家社会主義は、幕が引かれるときまでいかにして広範な受容をドイツ国内に築いたのか？なぜ多くのドイツ人は、自身の行動を『総統』に合わせ、ナチス独裁者を支持することとなったのか？」[433]、という問いが、世代を超えてドイツのなかで問われ続けているという。この展覧会は、こうした問いに対し、「ヒトラーのみならず、ドイツ社会やナチス支配におけるドイツ社会が果たした意味も視野に入れ」[434]ながら答えを探すという手法をとった。こうした理由からヒトラーと当時のドイツ社会が展示対象としたようであるが、展示物の重心は「ヒトラー個人の力とドイツ社会の大部分が［ヒトラーに］抱いていた期待と関心との交差点を展示する」[435]という点にあった。しかしこうした視点によるヒトラー展は、「『総統』としてのヒトラーを提示する」[436]という批判を受けることとなった。つまり、ヒトラーやナチスの罪に焦点を当てるのではなく、ヒトラーやナチスがドイツ国民の支持を得ていた様を全面に押し出す展示だったのである。確かに、ホロコーストなどに関する展示がまったくなかったわけではない。しかしそれも、「ホロコーストの展示がほんの少し、片隅に、ほぼ隠すように、強制収容所の囚人服が展示されている」[437]だけに過ぎないものであったようである。このように、展覧会『ヒトラーとドイツ人―民族共同体と犯罪』はヒトラーの負の側面に光を当てるのではなく、ある意味もっとも輝いていたヒトラー像を展示するものであったといえる。

---

[433] ドイツ歴史博物館ホームページ
http://www.dhm.de/ausstellungen/hitler-und-die-deutschen/.
（2011 年 9 月 2 日アクセス）
[434] Ebd.
[435] Ebd. ただし括弧内筆者。
[436] Weiss, Maurice: *Führer im Kleinformat*. In: *Der Spiegel* 41/2010, S. 37.
[437] Fischhaber, Anna / Reinbold, Fabian: *Hitler-Ausstellung in Berlin: "Sein starrer Blick ist schon einschüchternd"*. In: *Spiegel Online*, 15. 10. 2010. http://www.spiegel.de/politik/deutschland/0,1518,723408,00.html.
（2011 年 6 月 30 日アクセス）

こうした展示が抱える倫理的な問題点を指摘することも重要ではあるが、本論では次の点を強調したい。すなわち、ヒトラーを当時のように再構成するという目的を持ったこの展覧会は、前章で確認した「追体験」と同じ文脈のなかに位置づけることができるという点である。ヒトラー全盛期のナチス時代について、ヒトラーに賞賛を送っていたドイツ人の目線からヒトラーを再構成するという試みは、展覧会を訪れた人々に当時のドイツ人の目線を共有させることと同義であるといえるだろう。したがって、展覧会『ヒトラーとドイツ人―民族共同体と犯罪』はヒトラーを脱悪魔化し、当時のヒトラーとドイツ人感情を追体験させるものであったと評価することができるのである。

次に、公的空間においてヒトラーがコラージュやキャラクター化されている例をとりあげる。確かに展覧会は脱悪魔化の象徴であったといえるが、それは「総統」という人間的側面を展示するものであった。他方、近年ではヒトラーを脱悪魔化するのみならず、一種のキャラクターとして用いる動きも散見されるようになってきているのである。はじめに、この傾向を端的に示す実例を紹介しよう。

図 1：ヒトラーの山車（デュッセルドルフ、2007 年）[438]

[438] Arntz, Jochen: *Zum Totlachen*. In: *Süddeutsche Zeitung Online*, 07.03.2011.

図 2：雑誌『タイタニック』（*Titanic*）2010 年 8 月号表紙[439]

図 1 は、2007 年開催のデュッセルドルフにおけるカーニバルパレード（Rosenmontagszug）に出現した山車である。ヒトラーがズボンを下ろして下半身を丸出しにして排泄する姿を模った山車のなかに、ヒトラーを馬鹿にする意図を容易に読み取ることができるだろう。一方でこの山車の姿は多分に政治的であり、それゆえに大きな問題を誘発する可能性も心配された。これは、ネオナチなどからの襲撃を回避するため山車をスタートの直前まで秘密にしてきたという点によく表れているといえる。特にヒトラーの排泄物に右翼政党の略称である NPD（Nationaldemokratische Partei Deutschlands、ドイツ国家民主党）を書くことは、時代遅れの民族主義への痛烈な皮肉であると解釈することができる。このようにこの山車はヒトラーの排泄姿と政治という過激な笑い

http://www.sueddeutsche.de/kultur/zum-karneval-und-faschismus-zum-totlachen-1.1022114.（2011 年 10 月 14 日アクセス）

[439] Titanic ホームページ http://titanic-magazin.soup.io/since/78509494?mode=own.（2011 年 10 月 14 日アクセス）

を内包するものであったが、当時の主な雑誌記事を参考にする限りでは大きな問題には発展しなかったようである[440]。

図 2 は、ドイツの左派風刺雑誌『タイタニック』（*Titanic*）の表紙であり、見出しには『世界が呆然：だらしない国ドイツ』と書いてある。ヒトラーは 2010 年 FIFA ワールドカップのドイツサポーター姿にコラージュされ、吹き出しには「ドイツ、すべてに冠たるドイツ」（Schland, Schland über alles!）と書かれている。これはナチス時代にドイツ国歌として採用されていた『ドイツの歌』（*Lied der Deutschen*）の冒頭であり、現在は歌われていない部分である[441]。国名「Deutschland」の代わりに「Schland」という短縮形があてられているが、これは同ワールドカップにおけるドイツ応援歌『ドイツ、おおドイツ』（*Schland O Schland*）で用いられたものを踏襲している[442]。この表紙が飾られた雑誌にワールドカップ関連の記事はなく、それゆえタイトルを含めヒトラーをドイツサポーターとした真意は推測するよりほかはないが、おそらくワールドカップに熱狂するドイツ人たちを皮肉ったものであろう。自国の応援に熱狂する様は、ときに全体主義的に通じるものがあることを指摘しているのではないだろうか。

しかしここで重要なことは、ふたつの実例を通して確認したように、ヒトラーが公然と笑いを誘う意図のもとコラージュされキャラクター化されはじめたことである。言い換えれば、ヒトラーに笑いの要素を盛り込むことが社会的に許されてきているのである。確かに、たとえば映画『独裁者』（*The Great Dictator*, 1940 年）に代表されるように、ヒトラーを滑稽に描くことはヒトラーの生前から見られた現象である。しかしチャールズ・チャップリン（Charles Chaplin）が自伝において、「もっとも、

---

[440] Vgl.: N. N.: *Karneval an der Geschmacksgrenze*. In: *Kölner Stadt-Anzeiger*, 19.02.2007. http://www.ksta.de/region/karneval-an-der-geschmacksgrenze,15189102,13495610.html. （2013 年 4 月 3 日アクセス） Auch: N. N.: *Brisante Wagen in Düsseldorf*. In: *Focus Online*, 19. 02. 2007. http://www.focus.de/panorama/welt/rosenmontagszuege_aid_124932.html. （2013 年 4 月 3 日アクセス）

[441] 現在のドイツ国歌は『ドイツの歌』3 番が公式採用されている。

[442] Schland という造語そのものは 2006 年 FIFA ワールドカップにおいて用いられたのが最初といわれている。Vgl.: Guertler, Detlef: *Schland*. In: *blogs.taz.de*. http://blogs.taz.de/wortistik/2010/06/16/schland/（2012 年 9 月 19 日アクセス）

そう言うわたしも、もしあのナチス強制収容所の実態を知っていたら、あるいは『独裁者』はできていなかったかもしれないし、またナチどもの殺人狂を笑いものにする勇気も出なかったかもしれない。」[443]と述べているように、大量虐殺が明るみに出て以降はヒトラーを笑いの種にすることは長らくタブー視されていた。このことを考慮したとき、ナチスを生んだドイツにおいてヒトラーを笑いの種とする、キャラクター化するということが認められるようになってきたのは、現代ドイツにおけるヒトラーイメージが変化してきていることを裏付けるものであるといえよう。これは、現代ドイツにおいてヒトラーは悪魔であるという認識が緩みつつあることを示すものである。

これまで、現代ドイツにおけるヒトラーイメージの状況について確認してきた。当時のドイツ人の視点を史実として取り入れた展覧会や、ヒトラーをキャラクター化した実例などを通して、ヒトラーを多面的に描くことが許容されはじめたことが明らかになったといえる。ドイツの雑誌『シュピーゲル』（*Der Spiegel*）は、こうした現象を前にして「近年、公な空間のヒトラー像がものすごい勢いで変化してきた」[444]と述べているが、これはドイツにおいてヒトラー像の変化が許されてきていることの表れである。現代ドイツにおけるヒトラーイメージについて、従来の悪魔的ヒトラーというイメージが緩みつつあり、代わりに多様な視点から描写しようという動きがあるということができる。

4-2：映画におけるヒトラー像の分析

アレクサンドラ・ヒッセン（Alexandra Hissen）は著書『1945 年以降のドイツ語圏映画におけるヒトラー』（*Hitler im deutschsprachigen Spielfilm nach 1945*）において、フィクション映画のなかでヒトラーを登場させる際の問題点を指摘している。A. ヒッセンによれば、現代ドイツ映画のヒトラー像は「集合的記憶的に後世へ伝達されている」[445]。具体的には、現代のヒトラー像はナチス時代のプロパガンダ映像によるイ

[443] チャールズ・チャップリン著、中野好夫訳：『チャップリン自伝』、新潮社、1966 年、459 ページ。
[444] Weiss, Maurice, 41/2010, S. 37.
[445] Hissen, Alexandra, 2010, S. 13.

メージと、戦後に形成されたヒトラー像というふたつの側面が、さまざまな媒体を通じて現れつづけているのである。このとき前者は、ナチス時代のヒトラー像に一致する部分があると A. ヒッセンは指摘する。すなわち、実在した人物が映画の登場人物になるとき、一般に観客は映画がはじまる前にすでにその人物について知っており、その人物の「典型イメージ」（Vorbild）を映画に期待している[446]。ヒトラーの場合この先行イメージが、

> このイメージ［ヒトラー像］はその本質において、［第三帝国時代の］週刊ニュースやレニ・リーフェンシュタール（Leni-Riefenstahl）や写真家ハインリヒ・ホフマン（Heinrich Hoffmann）たちが撮ってきたヒトラー描写によってイコン的に形作られている。それらは、第三帝国や彼の「指導者」（ĂFührerñ）像をナチス的意味合いにおいて表現したものである。［中略］われわれが映画館で見ることを期待しているヒトラー像は、彼自身が好んで眺めていたヒトラー像でもある[447]。

このように A. ヒッセンは、観客はナチス時代の英雄的ヒトラー像を期待して銀幕のヒトラーを見に来ていると述べている。この意味において、英雄的ヒトラー像はヒトラー映画に今なお欠かすことのできないイメージなのである。

一方、後者の戦後に形成されたヒトラーイメージは、英雄的ヒトラー像の対極に位置するといえるものである。映画におけるヒトラー像はナチスプロパガンダ的ではあるものの、その「解釈そのものは急激に変化した」[448]。すなわち、

> 戦後、以前の「メシア」神話は全く反対のものに転化した。彼は悪の権化であり、大量虐殺と人道に対する罪を犯した人物（Menschenheitsverbrecher）のシンボルであり、「人類の汚点の筆頭」

[446] Ebd, S. 12.
[447] Ebd, S. 13. ただし括弧内筆者。
[448] Ebd.

（ñarchetyp of mankindôs infamyò）である[449]。

したがって現代のヒトラー映画におけるヒトラー像は、ヒトラーを美化したプロパガンダ的イメージと、戦後に形成された悪魔というレッテルを張られた悪名高き独裁者という、ふたつのイメージを内包しているのである。

ここで重要なのは、両者のイメージを内包していないヒトラー像は原則として不可能であるという点である。つまり、そのようなヒトラー像は人々のなかのヒトラーイメージと合致しないため、「間違っている」と受け取られるのである。

> 普通の口調で話す、または日常の家事に専念するなど「普通の」ヒトラー像という、こうしたイメージ［プロパガンダ的ヒトラー像や悪魔］から逸脱している場合、映画以前の知識を参照する視点からすれば「間違っている」か、少なくとも困惑を与えることになる[450]。

以上の観点から A. ヒッセンは、映画のなかでフィクション的にヒトラー像を描くことの困難性を指摘している。つまりヒトラーイメージは集合的記憶的に固定化され受け継がれているがゆえに、英雄的ヒトラーと悪魔という解釈が付与されたヒトラーという上述した二つのイメージを保ったまま新しいキャラクター性を加えることは、人々にこれはヒトラーではないと受け止められてしまう危険性を孕んでいるのである。したがって映画にヒトラーを登場させる場合、良くも悪くも従来のヒトラー像が出発点とならざるを得ない、と A. ヒッセンは述べているのである。

こうした実情を受けて A. ヒッセンは、ヒトラー像分析におけるポイントをふたつ指摘している。第一は「作品内在的な登場人物分析」であり、第二は「ヒトラーおよび過去の克服という視点から見て重要である、各々の映画のなかに現れる映画史的社会的文脈の要因の分析」である[451]。前者は「外的表象、描写された人物の特徴、社会的相互作用、映画にお

---

449 Ebd.
450 Ebd.
451 Ebd., S. 15.

ける重要性と映像技術による演出」を観察対象とするもので、特に「すでに形成された集合的記憶のヒトラー像に一致しているか、逸脱しているか」を問題とする[452]。つまり服装や仕草、部下たちとの関係性など、上述したふたつのイメージ（プロパガンダ的英雄的ヒトラー像および戦後に形成された悪魔的ヒトラー像）を分析基準に設定するものである。これは、集合的記憶論の視点から言い換えるならば、従来のヒトラーイメージを踏襲しているか、新しい視点から描写しているか、を基準とするものである[453]。

A. ヒッセンは後者の外的要因としての映画史的社会的文脈に関して、映画が製作された時代の社会背景や時代的枠組みなどを意識しているが、特にヘルムート・コルテ（Helmut Korte）の分析モデルを引用しながら、「映画的現実」（Filmrealität）、「条件的現実」（Bedingungsrealität）、「関係的現実」（Bezugsrealität）および「作用現実」（Wirkungsrealität）という分析基準を設定している[454]。映画的現実とは、映画において断言可能な過去の日付、データ、情報、人物の言葉などを意味している。たとえば歴史的出来事が起こった日や、それに関わった人物などである。条件的現実は、その時代にあって映画作りに影響を及ぼした要素すべてが該当する。たとえば、ある映画の内容に関する時代的文脈などを問題とする。関係的現実は映画内のテーマが社会に対して投げかける問いのことであり、作用現実は観客動員数や評論、受容のされ方の歴史などが当てはまる。映画を分析する際には、こうした外的要因が映画に与えた影響も考慮に入れなければならない、と述べている。

以上、映画におけるヒトラーイメージの分析について A. ヒッセンの議論を概観してきた。A. ヒッセンによれば、ヒトラーイメージの分析には、映画内在的な登場人物分析と映画外在的な社会的文脈の分析が必

---

[452] Ebd.

[453] 集合的記憶からの逸脱という表現は、本論文においては馴染まない。なぜなら、このヒトラー像は集合的記憶から逸脱しているというとき、そこにはひとつの正統なヒトラー像があるという考え方が含まれているからである。本論文は集合的記憶は多様で相互に競合していることを示すものであり、その意味において正統、異端、逸脱などの価値づけをすることはない。すべてのヒトラー像が自己の正統性を求めて主張しているのである。

[454] Korte, Helmut. *Einführung in die systematische Filmanalyse*. Hier: Hissen, Alexandra, 2010, S. 17.

要であると主張していた。本論文でもこの主張に従って、次の通り分析を行う。すなわち、登場人物分析として映画のなかのヒトラー像を観察し、ヒトラーのどのような面が強調されているのかを分析する。社会的文脈の分析として、本論文の主題である映画における集合的記憶の観察という視点から、主に条件的現実と作用現実に焦点を当てることとする。条件的現実を基準とする分析とは、具体的には映画のなかで描写されたヒトラー像について現代の文脈に置き換えて説明を試みることである。映画のなかで描かれたヒトラー像は現代ドイツのほかの領域ではどのように描写されているのかを観察することで、ヒトラー像が生起した時代的枠組みについて考察する。他方の作用現実について、具体的には映画がどのように受容されたのかを雑誌記事や映画評論などを参考に検討する。

このとき、現代ドイツにおけるヒトラー像の観察および雑誌記事における映画批評のいずれもメディアが分析の中心となっていることに注意を向ける必要があるだろう。つまり、映画に加えて複数のメディア領域のヒトラー像を観察することは、第 2 章で検討した集合的記憶のメディアに関する複数メディア性にも照準を当てたものであり、集合的記憶はさまざまなメディアのなかで形成され伝達され、また交渉を行っていくことの例証という側面も持っている。以下では、こうした問題意識を基盤におきながら観察および分析を行っていく。

4-3：ヒトラー映画分析
―『ヒトラー―最期の 12 日間』と『わが教え子、ヒトラー』

2004 年公開の『ヒトラー―最期の 12 日間』(*Der Untergang*、以下『最期の 12 日間』)および 2007 年公開の『わが教え子、ヒトラー』(*Mein Führer*)は、近年のドイツ映画史のみならず集合的記憶論的意味においても重要な役割を果たした映画である。前者はヒトラーを人間的に描いたことで話題になり、後者はヒトラーを「笑いの対象」として描いたことが取りざたされた。ルドルフ・ヴォルシェヒ（Rudolf Worschech）は、このような「悪魔的ではないヒトラー像」が可能になったのは『最期の 12 日間』の功績であり、この映画を抜きに現在のヒトラーイメージを考えること

はできないと述べているが[455]、この指摘からも『最期の 12 日間』が現代ドイツ映画史において重要な地位を占めていることがわかる。一方の『わが教え子、ヒトラー』も、後述するように、ヒトラーをはじめてコメディー映画化した作品として、同様に重要なメルクマールと位置づけることができる。

それでは『最期の 12 日間』および『わが教え子、ヒトラー』は、集合的記憶論の視点からどの点において記憶の交渉が起こっていると判断できるだろうか。以下では、この問いの検討を主軸として映画『最期の 12 日間』および『わが教え子、ヒトラー』が果たした役割を確認し、この映画の現代における意義を考察する。その際、次の疑問を解決しながら論を進める予定である。まず、なぜヒトラーを人間的またはコメディー風に描くことができたのか、という問いである。実際『最期の 12 日間』や『わが教え子、ヒトラー』に出てくるヒトラー像は、少し前の時代には考えられない描き方であることは間違いないだろう。この背景を考察することで、両映画において人間的およびコメディーというヒトラー像が可能になった理由を考える。第二に、なぜそのようなヒトラー像が受け入れられるのか、という問いである。以下で考察するように人間的なヒトラー描写や笑いの対象としてのヒトラー描写について賛否が分かれている状況であるが、人間的描写やヒトラーを笑うことが少なからず賛成される、言い換えればかつてのタブーが受け入れられるようになったこともまた、近年になってはじめて可能になった現象といえる。最後に、N. フライがいうようにヒトラーを含む 1945 年は本当に身近になっているのか、という問いを扱う。確かに近年の「ヒトラーブーム」[456]には目を見張るものがあるが、ドイツではすでにナチスやヒトラーに関するメディア作品は非常に多く存在する。また、学校の歴史授業においてもナチス時代に大きなスペースが割かれており、その意味ではすでにヒトラーは十分すぎるほど身近になっているといえるだろう。それでもなお以前よりも身近になっているとすれば、ヒトラーの何が身近になってきているのだろうか。

本節ではこうした問題に答えるために、次のとおり考察を進めていく。

---

[455] Vgl.Worschech, Rudolf, 2007, S. 214.
[456] Zimmermann, Peter, 21. April 2005. Vgl. auch: *FAZ*, 23.04.2005, S. 41.

第一に、映画の社会的評価について雑誌や新聞記事、インタビューなどを用いて明らかとする。第二に映画分析を通してヒトラー描写において特徴的なポイントを明らかとし、第三にそれらをまとめて集合的記憶論における追体験の事例として再評価する。

『ヒトラー—最期の 12 日間』

原題：*Der Untergang*
監督：オリヴァー・ヒルシュビーゲル（Oliver Hirschbiegel）
脚本：ベルント・アイヒンガー（Bernd Eichinger）
製作：ベルント・アイヒンガー（Bernd Eichinger）
公開：2004 年

あらすじ
第二次世界大戦末期のベルリンにある総統地下要塞が主な舞台である。迫りくるソ連軍に対抗する戦力がないにもかかわらず、ヒトラーは降伏を拒み支離滅裂な命令を出し続ける。そのあいだも市民が無謀な戦闘によって次々に命を落とし、ヒトラー側近たちは我先にと地下要塞を脱出していった。ヒトラーがベルリン陥落を目前に自殺すると、残った人たちも地下要塞からの脱出を試みる。彼らの手には、ヒトラーから手渡された毒入りカプセルが握られていた。

①映画史的社会的文脈

『最期の 12 日間』はベルント・アイヒンガー（Bernd Eichinger）とオリヴァー・ヒルシュビーゲル（Oliver Hirschbiegel）によって制作された映画であり、ドイツ系スイス人であるブルーノ・ガンツ（Bruno Ganz）がヒトラー役を演じた。この映画は歴史家ヨアヒム・フェスト（Joachim Fest）の同名の著書および元ヒトラー秘書トラウデル・ユンゲ（Traudl Junge）の自伝『私はヒトラーの秘書だった』（*Bis zur letzten Stunde*）を原作とするもので、これまでの「ヒトラー＝悪魔」という見方を打ち破り、はじめてヒトラーを人間的に描いた作品として大きな反響を呼んだ。

ユダヤ人虐殺についてほとんど触れず、ヒトラーが女性に優しく接しているところや、親友であるアルベルト・シュペーア（Arbert Speer）に裏切られ涙する姿ばかりを観客に提示するこの映画に、ドイツ国外メディアの一部によって「今年もっとも酷いコメディー」[457]と評価されるなど厳しい批判と非難が集中した。しかしその一方で、世界 100 ヵ国以上で公開され、2005 年のアカデミー賞外国映画部門にノミネートされるなど世界的な成功も収めている。『最期の 12 日間』がドイツで公開されたのは 2004 年 9 月 16 日であるが、公開から 3 日後の 2004 年 9 月 19 日までに 48 万人以上の観客動員数を記録し[458]、4 年後の 2008 年においても The Internet Movie Database のユーザー投票による Top250 の中で 71 位を占めていることから[459]、これまでのヒトラー映画の中でも特に注目を集めるものであったということができる。さらに 2005 年アカデミー賞ノミネートをはじめ様々な映画祭において 13 のノミネートと 14 の賞獲得を果たしている。以上のことから『最期の 12 日間』は非常に大きな成功を収めた作品であることは間違いないだろう。

このような華々しい成果をあげたにもかかわらず、上述したようにこの映画に対し慎重な見解や否定的評価も少なくない。確かにこの映画のなかに描かれた人間的なヒトラー像はこれまでメディアによって形成されてきたヒトラーのイメージからはかけ離れている部分も多く、それに対する拒否反応であるといえるかもしれない。しかし批評家たちの評価・批判・非難は脱悪魔化したヒトラーへの拒否反応というよりは、むしろこの映画のなかで描かれていないこと、すなわちホロコーストなどのナチスの罪に向けられているようである。

そこで、この映画をめぐる評価が以上のように二つに分かれていることについて新聞および雑誌のなかで『最期の 12 日間』がどのように評価されているのかについて確認と分析を行い、ヒトラーやナチスをめぐる

---

[457] N. N.: *Ein vorzeigbarer Hitler. Die ausländische Presse belächelt Oliver Hirschbiegels Film »Der Untergang«*. In: *ZEIT ONLINE*. http://www.zeit.de/2004/40/Untergang_International.（2008 年 7 月 13 日アクセス）

[458] *Der Untergang (2004)*. In: *The Internet Movie Database*. http://www.imdb.com. （2008 年 7 月 23 日アクセス）

[459] Ebd. （2008 年 7 月 23 日アクセス）なお、他のドイツ映画についてはĂDas Bootñ(1981)が 65 位に、ĂMñ(1931)が 45 位にランクインしている。

現代ドイツの動きと関連付けながら考察を試みる。

フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング紙（*Frankfurter Allgemeine Zeitung*　以下 FAZ 紙）は、かつてヒトラーを題材に映画を撮影したニュージャーマンシネマの監督ハンス＝ユルゲン・ジーバーベルク（Hans-Jürgen Syberberg）の「ヒトラーの最期を誠実に演出しようとすれば、そこで死んでいった人々への同情は避けられない」というコメントを掲載し[460]、さらにイスラエルでの上映は「試写会に参加した人が賛成した」ことにより決定したと報じた[461]。FAZ 紙はこうした記事を掲載することでこの映画がユダヤ人に受け入れられたと評価し、世界的に最も成功したドイツ映画の中のひとつであると述べているのである[462]。

一方ツァイト紙（*DIE ZEIT*）は FAZ 紙とは対照的に、この映画を否定的に報じている。このことを端的に示す記事として、「体裁のいいヒトラー。海外メディアは『最期の 12 日間』に苦笑い」（ĂEin vorzeigbarer Hitler. Die ausländische Presse belächelt Oliver Hirschbiegels Film 》Der Untergang《ñ）という見出しのものがある[463]。この中でトロント映画祭において『最期の 12 日間』は見向きもされていなかったことを報じるとともに、各国の反応も紹介している。オーストリアのスタンダード紙（*Standard*）が「ドイツの過去との付き合い方の中の新しい波を見ることができる」と興味をもって報道したことを除いては、特に英米仏においては脱悪魔化をドイツが描いたことへの警告さえ拒否し「今年もっとも酷いコメディー」「退屈だ！」「この映画について何を言うことができるのか？」などのきつい皮肉で批判している、と報道している。

以上のようにドイツの代表的新聞である FAZ 紙とツァイト紙において『最期の 12 日間』に対する評価が分かれていることが確認できた。同様に、ドイツの主要雑誌であるシュピーゲル誌（*Der Spiegel*）およびシュテルン誌（*Stern*）の記事も確認してみよう。

---

[460] N. N.: *Der Untergang. Reaktion: Syberberg, Pieper, Reiche*. In: *FAZ*, 20.09.2004, S. 33.

[461] Gasmann, Michael: *Votum für das Kino. "Der Untergang" kommt nach Israel*. In: *FAZ*, 20.04.2005, S. 42.

[462] N. N.: *Hitler boomt.Weltweiter Erfolg „Der Untergang"*. In: *FAZ*, 23.04.2005, S. 41.

[463] N. N.. In: *ZEIT ONLINE*. http://www.zeit.de/2004/40/Untergang_International.（2008 年 7 月 13 日アクセス）

シュピーゲル誌およびシュテルン誌はそれぞれ『最期の 12 日間』の特集を組んでいるが、その内容の差異は新聞以上に明確である。シュピーゲル誌の特集「悪の地下要塞のなか」（*Im Bunker des Bösen*）は記事全体が映画の解説書の様相を呈している。例えば「ヒトラーが誰かに口づけするなどこれまで誰も見たことがなかった行為である」と解説している部分、または「汚いコンクリートに囲まれた高級家具だけが独裁者がいることを物語っている」など、切り抜いた映画のワンシーンに対し補足説明的に書いている文章などをあげることができる[464]。記事のなかではホロコーストなどナチスの罪についてほとんど触れていない一方で、ソ連軍に殺されたと思しきドイツ兵の写真などは掲載されており、ここから加害者としてのドイツ人ではなく被害者としてのドイツ人の姿を演出しているといえる。映画のストーリーをなぞりながらベルリンの惨状や地下要塞のなかを再描写しているこの記事は、『最期の 12 日間』を補足的に説明する解説書として機能しているということができるだろう。言い換えるなら、読者はこの記事を読むことで映画を容易に追体験できるようにする狙いがあるといえる。

この記事におけるヒトラー役 B. ガンツへの言及がきわめて特徴的である。B. アイヒンガーがヒトラーに本物の顔を与えることを意図しているとした文章に続いて、次のように書いている。すなわち、

> 戦後に生まれた者にとって、週間ニュース映画の中で見られるようなキザで叫んでいる「総統」が、いかに人々を魅了することができたのかということの多くを理解することはできないだろう。ヒトラー役のブルーノ・ガンツはこの感覚を伝えることのできる最高の俳優である。アイヒンガーに助言を与えたフェストは 63 歳になるガンツの芸術について、「これこそ本当のヒトラーである。彼を見たときに、身震いせずにはいられない。」と述べた[465]。

このようにシュピーゲル誌は、当時を知らない世代にとって B. ガンツが演じるヒトラー像は「本物」であり、それを通して当時多くの人々が

---

[464] *Der Spiegel*, 35/2004, S. 56.
[465] Ebd., S. 54.

抱いていた感覚に接近できることを書いている。

シュピーゲル誌の別の号に T. ユンゲを演じたアレキサンドラ・マリア・ララ（Alexandra Maria Lara）のインタビューが収められている。そのなかで彼女は、ヒトラーは T. ユンゲの父親的位置付けであったとの解釈を披露している。すなわち、「彼女の人生において父親像というものが欠けていたが、[…] ヒトラーのそばにいることで確実な安心感を得ることができた」[466]。続いて A. ララはヒトラーが演じられる危険性について、B. アイヒンガーや O. ヒルシュビーゲルらが「歴史的真実に可能な限り到達するためあらゆる手を尽くし」ており、B. ガンツの演技によってそれが可能となったと発言している[467]。またゲッベルスの子供たちが親の手によって毒殺された事実をそれまで知らなかったことに触れているが、こうしたドイツ人もまたナチスの被害者であったという視点が、これまで彼女自身のなかになかったことを批判的に告白している。この記事全体としてヒトラーはむしろ安心できる存在であったという印象を与えるものとなっており、またナチスの罪に関してもユダヤ人への迫害や虐殺ではなく、同胞であるドイツ人に向けられたものを指している。非常に批判的に解釈するならば、このインタビュー記事は、ドイツ人は戦時中にヒトラー以外のナチス幹部によって犠牲になったと主張しているようにも受け取ることもできるだろう。

一方シュテルン誌はまったく異なるアプローチを試みている。『最期の 12 日間』は「総統を美化することはない」[468]映画であると断ってはいるが、記事全体は『最期の 12 日間』のなかで描かれていないナチスの罪やドイツ社会の罪について批判的に書かれている。「永遠に悪の魅惑のなかで」（Ă*Ewig im Bann des Bösen*ñ）[469]と題する記事は、レニングラードにおける殺戮やホロコースト、戦後世代における父親や祖父世代への糾弾などに言及しており、それはあたかも『最期の 12 日間』を見る際に過去への眼差しをもう一度確認するべきだと訴えているようである。こ

---

[466] *Der Spiegel*, 38/2004, S. 150.
[467] Ebd., S. 150-151.
[468] Schönfeld, Gerda-Marie: *„Verzeiht Deutschland Hitler?”* In: *Stern*, 39/2004, S, 50.
[469] *Stern*, 39/2004, S, 48ff.原語の Bann には、魅惑以外にも「抗しがたい力」「呪縛」などの意味がある。『独和大辞典』第 2 版、小学館、2000 年参照。

の記事の興味深い点は、特集の見出しの写真でヒトラーを歓喜で迎えるドイツ人の姿を用いながら、ページをめくると、ユダヤ人を焼いた焼却炉の写真が現れる構成となっているところである。これは、ヒトラーブームの裏に悲劇が隠されていることを想起させるものであるといえるだろう。このように、シュテルン誌の記事は『最期の 12 日間』に描かれていないホロコースト的側面に重点を置いて書かれおり、映画を無批判に説明しているシュピーゲル誌とは一線を画している。

上ではドイツ国内の主要な新聞・雑誌における『最期の 12 日間』の評価を通して、ナチスやヒトラーをめぐる言説が二重化してきていることを明らかにしてきた。つまり『最期の 12 日間』をめぐって、ヒトラーについて人間的描写を肯定する言説とあくまでもヒトラーの負の側面を強調するというふたつの方向性を確認することができる。この二重化が示すことは、『最期の 12 日間』の評価においてヒトラーの脱悪魔化が問題となっているのではなく、ナチスという歴史的出来事を評価する際の視点が問題になってきているということであろう。一方ではあくまでもナチスの罪を常に意識していることを求める立場であり、他方ではナチスおよびヒトラーの歴史描写について「当時のように経験すること」[470]を目指す新しい視点であった。J. フェストはこうした新しい動きが登場してきた背景について、これまでの歴史研究においてナチス時代末期についての記憶再生的・物語的手法による考察が欠けていたこと原因のひとつとしてあげている[471]。つまり最近の動きは、歴史研究の領域において記憶によるヒトラー像の再構成が評価されはじめたことの現われといえる。

歴史研究という言葉から思い出されることは、80 年代中ごろに起こった歴史家論争であろう。今回の二重化もまた歴史家論争と同じ構図のように見えるが、実際はまったく次元が異なっている。「[歴史家論争の]中心的な論点は、ナチの犯罪は特異であって比類なき悪の遺産であり、ドイツ国民という概念に取り返しのつかない重荷を負わせてしまったの

[470] *Stern*. 39/2004. S, 62.
[471] Vgl.: Fest, Joachim: *Der Untergang. Hitler und das Ende des Dritten Reiches*.Berlin: Alexander Fest Verlag, 2002, S. 11.

か、それとも、この犯罪は他の国民的残虐行為、わけてもスターリン主義のテロと比較可能なのか、ということであった」[472]。つまりホロコーストというドイツの加害経験を認めたうえで、それをどのように評価するかがポイントになっていた。しかし『最期の 12 日間』をめぐる論争はそれとは異なり、ホロコーストを問題にしないままドイツを被害者として描くことは可能か、という問いを突き付けるものである。「これまでこの映画[『最期の 12 日間』]は何にもまして次の視点から論じられてきた。［中略］ナチスの映画を作るものは、ナチスの罪も描かなければならない」。[473]

この映画はそれゆえ、これまでの評価基準が通用しない新しい時代が到来していることを世に示したものと評価できる。すなわち「これまでの［歴史］解釈の間違いを一般的な判断の放棄を通して回避する、歴史への新しい出発点」[474]をもたらした。新聞や雑誌における評価の二重化は、したがって、これまでの「一般的な判断」、すなわちヒトラーやナチスを題材とする映画はホロコーストを描かなければならないという判断をめぐって意見が二分してきたことを示すものである。つまり現代ドイツのナチス・ヒトラー描写をめぐる状況は、ナチスの罪を顧みることなく第二次世界大戦の歴史を語るということを擁護しこれまでの判断が間違いであったとする立場の新しい姿勢が出てきた一方で、あくまで従来の一般的判断を考慮していこうとする勢力が依然として存在している状況にあるといえる。

ところで、こうした二重化の動きは決して『最期の 12 日間』が公開された結果としての状況というわけではない。すでに、A. アスマンによるドイツにおけるナチスの記憶の三段階を指摘したが、それは第一段階は「沈黙」、第二段階は「道徳と非難」、第三段階は「追体験」というものであった[475]。これに従えば現代の二重化の動きは第二段階から第三段階への過渡期と考えることができるだろう。したがって、多くのドイ

---

[472] Maier, Charles: *The Unmasterable Past*. Cambridge, Mass: Harvard University Press, 1988. ソール・フリードランダー編、1994 年、139 ページから引用。
[473] Weyand, Jan, 2005. S. 39.ただし強調および括弧内筆者。
[474] Ebd. ただし、［］は筆者。
[475] 本論**第 4 章**参照

ツ人がホロコーストを知らずただヒトラーに心酔していたままに終戦を迎えたことをそのまま追体験しようとすることは、『最期の 12 日間』にのみ特徴的なことではなく、むしろ現代の潮流だといえる。

それでもなお R. ヴォルシェヒが言及するように『最期の 12 日間』が後続のヒトラー映画にとって重要な地位を占めているとすれば、どの点においてそういえるのだろうか。以下ではこの点を明らかにするために、集合的記憶論の視点から考察を試みる。

集合的記憶論は現在、社会的にも学術的にも非常に注目を集めている分野である。その理由として、第二次世界大戦世代が減少し体験を語り継ぐ人がいなくなる危機を迎えていること、冷戦の終結という事態を受けて両陣営が構成してきた歴史イデオロギーが終わりを迎え、多様な歴史意識が誕生したことがあげられる[476]。このような状況の現代社会において集合的記憶論は次のことを可能にする。すなわち、「記憶」というテーマによって、政治や世論、社会、文化などの領域におけるディスクルスを結びつけることである[477]。つまり「記憶」を結節点として異なる領域の意見を橋渡しし、これによって現代社会におけるさまざまな事象について多方面からの観察を可能にするものである。

集合的記憶論の第一人者である A. アスマンは、過去への着眼点は世代によって異なるがゆえに歴史関心の差異を考える際には世代的差異も考慮すべきだとしている。つまり「ドイツ人は何を想起するべきか」という問題ではなく、歴史的関心の変遷や歴史を消費することのメカニズムを解明することが必要であると考えている[478]。こうした見解を『最期の 12 日間』の評価にあてはめた場合、ある歴史的事実、すなわちホロコーストを描くか描かないかという対立は、世代間における歴史的関心が避けがたい相違として現れたものであり、それゆえ世代間の分裂線に沿って考察するべきである、といえるだろう。

以上のような集合的記憶論の関心に注意を払いながら『最期の 12 日間』における歴史への眼差しについて検討する。その際、集合的記憶形成にとって不可欠である「証言」をキーワードに歴史への眼差しの変遷を観

[476] Vgl. Erll, Astrid, 2005a, S. 3.
[477] Vgl. Ebd. S. 2.
[478] Vgl. Assmann, Aleida, 2007a, S. 12.

察する。

『最期の 12 日間』の原作はふたつあり、それぞれ J. フェストの『ヒトラー―最期の 12 日間』（*Der Untergang*）および T. ユンゲの『私はヒトラーの秘書だった』（*Bis zur letzten Stunde*）であった。前者は、これまでヒトラーの最期について詳しく検討された文献がなかったことを出発点としており、それまでに収集されていた資料に加え時には矛盾する多くの証言を精査して再構成し、ひとつの Geschichte（ストーリー／歴史）として書かれたものである。このときフェストは従来の歴史学では軽視される傾向にあった記憶再生による歴史記述を積極的に採用しており、その意味でこれまでの歴史書とは異なる視点からヒトラーの最期を描写している。また後者は、ヒトラーの元秘書としての体験を戦後すぐに文字にしたものである。普段の生活から自殺の瞬間に至るまで地下要塞におけるヒトラーの様子を克明に記録したこの著書は、ヒトラーの最期を証言する貴重な資料として読むことができるものである。確かに出版は 2003 年ではあるが、この本の原稿が実際に書かれたのは 1947 年であり、その意味で当時の記憶が生々しく綴られているといえる。それゆえこの本は、ヒトラーの晩年や地下要塞における生活などを知るうえで大変貴重な手がかりとなっている。

A. アスマンは何かを想起するときには必ず現代の視点から想起内容が再構成されるとしており[479]、したがって証言も同様に現代的な視点を含んでいるといえるだろう。確かにユンゲの自伝記は戦後すぐに書かれたものであるが、それが現代になって出版されたということが重要である。言い換えれば、ユンゲの自伝記のような当時のヒトラー像という内容を現代社会が欲してきはじめたといえるだろう。すでに本節の冒頭でも言及したように、『最期の 12 日間』ではヒトラーを人間的に描いているが、これは現代が人間的ヒトラー像を想起し、またその想起内容に適合する証言を社会に流通させることで、人間的ヒトラーという過去の事実を補完し再構成するものであるといえる。

こうした想起が生まれた背景として、現代は被害か加害かにかかわらず、戦争を体験した世代すべてが消滅してしまうという危機に直面して

[479] Assmann, Aleida, 2003, S. 29.

いるということがあげられる。つまり戦争体験者が不在となる社会を目前にして、その記憶や証言を可能な限り収集し保存しようとする動きがあるといえるだろう。つまりこれまで語られてこなかったものも含めて、彼らの記憶を完全な忘却から守るために、その証言をメディアへ移し替えている段階を迎えているといえるだろう。2002 年に T. ユンゲのインタビューを収めたドキュメンタリー映画『死角にて』(*Im toten Winkel*)が公開されたが、その公開直後に T. ユンゲが亡くなったことは、この社会的事情を象徴的にあらわした事例であるといえよう。証言をメディアに保存することで、体験者が不在となっても過去を振り返ることができるのである。

集合的記憶研究者 A. エアルは「歴史の目撃者がいない社会においては、学問的歴史研究およびメディアによって支えられた『文化的記憶』というふたつの方法によって、過去との関係が参照される」[480]と述べているが、『最期の 12 日間』およびこの映画を可能にした証言はそのような社会的要請を背景としてでてきたものである。言い換えるならば、『最期の 12 日間』の証言は戦争の全貌の忘却に対抗するものであるといえる。

『最期の 12 日間』における証言の観察を通して、現代ドイツはどの歴史的出来事を忘却から守ろうとしているのかという歴史的関心について、ヒトラーの多様な証言を保存しようとしていることを確認してきた。それでは、こうした歴史的関心の相違に加えて、現代ドイツにおける世代間の相違はどのような関係にあるのだろうか。ここでは『最期の 12 日間』の制作スタッフへのインタビューを中心に、ヒトラーの全貌の忘却に対抗する歴史観はどのような意識を前提としているのかを確認する。

『最期の 12 日間』の監督である B. アイヒンガーおよびヒトラー役の B. ガンツは、この映画の意図についてそれぞれ「私の断固とした意図は、ヒトラーを悪魔として絶対化する代わりに彼の感情の一部を理解することだ。」「私の野心は、この男をもう一度当時のように経験することだ。」と述べている[481]。そのうえで B. アイヒンガーは、この映画は世代交代を明確に意識して作られたものであると強調している[482]。その理由

[480] Erll, Astrid. 2005a, S. 156.
[481] Michaelsen, Sven, 2004, S. 61ff.
[482] Blasberg, Marian / Hunke, Jörg: *Interview mit Bernd Eichinger: Hitler ist greifbar geworden*. In: *Frankfurter Rundschau*, 11,09,2004. Zitat:

としてそもそも 1945 年以降の人々は歴史的トラウマにかかっており、ヒトラーやゲッベルスを語るときは大きな望遠鏡を用いて眺めていただけであり、これまで直接的にナチスと関わろうとしてこなかったことを挙げている。さらに、「歴史は人間に起こったことであること、それゆえ、人間を理解しないということは歴史を理解しないということ」「自分自身の意見を持たなければならない。それが後に間違いだと判明するとしても、他の誰かがある一つのことを規定してしまうよりはよほどいい」と考えており、それゆえ「観客はこの登場人物と直接にかかわりあい、根本的に取り組まなければならない」述べている[483]。

したがってこの世代の歴史的関心は、従来の過去への取り組みを批判的に反省するところから出発しているといえる。ヒトラーを「悪魔」と絶対化することで歴史への理解を拒否してきたことを批判し、その克服を試みているのである。ツァイト誌の文芸欄編集長であるイェンス・イェッセン（Jens Jessen）の言葉を借りるならば、現代のこうした意識は「第三帝国と戦っているのではなく、第三帝国への取り組みが我々の頭の中に残してきた悪魔のような出来事の姿と戦っている。」[484]と評価することができるだろう。

B. アイヒンガーはこの戦いを「悪魔に顔を与える」[485]と表現しているが、A. アスマンはこのことについて別の言葉で言い換えている。すなわち『最期の 12 日間』のプロジェクトは、ヒトラー描写の定型化と慣習的視点を打破し、ヒトラーの脱神話化を目指すものであった、というものである[486]。つまり、これまで悪魔的に描かれることが定番だったヒトラーの「人を誘惑する力をなくし、吸血鬼を棺に戻し、[…] ヒトラーを悪魔ではなく、矛盾の中の人間として描いた」[487]ことを通して、ヒトラーを人間として解釈し再評価しなおす可能性を投げかけるものであったといえるだろう。したがって顔を与えるとは「悪魔」という解釈以外

---

filmportal.de. http://www.filmportal.de/node/69095/material/544449.（2013 年 4 月 5 日アクセス）

[483] Ebd.

[484] Jessen, Jens: *Im grellen Zirkus des Gedenkens*. In: *Zeit-Online*, 13/2005, S. 45. http://www.zeit.de/2005/13/Hitler.（2008 年 7 月 13 日アクセス）

[485] Michaelsen, Sven, 2004, S. 61.

[486] Assmann, Aleida: 2007b, S. 51ff.

[487] Ebd.

の余地を提示することであるといえる。それゆえ『最期の 12 日間』は、新しい証言内容を通してヒトラー再評価を働き掛けたものである。同時に、現代ドイツにおいてそうした再評価が可能である時代が到来したことも告げている。

世代間の移ろいに伴う歴史関心の変化について、以上の通り確認してきた。現代ドイツにおける保存すべき記憶の対象は、時間の経過とともに拡大され、いままで主流であった「ホロコースト体験の記憶保存」という流れから「戦争体験者全体の記憶保存」へと移行してきている。近年のメディアにおけるナチス関連情報の氾濫にはこうした背景があり、かつてはホロコーストと加害者としてのドイツ人という記憶以外あまり語られてこなかったが、近年は戦争当時と同じ視点からヒトラーを描こうという意図が生まれはじめ、人間的ヒトラー像という新しいヒトラー像を生み出すに至ったのである。またこうした記憶保存対象の変化と並行して、過去への取り組みの態度も変化してきていることを確認した。従来のヒトラーを絶対化する態度から直接関わりあう姿勢へと移行し、こうした意識の変化が当時を追体験できる状況を作り出しているといえる。

②映画分析

『最期の 12 日間』はヒトラーの脱悪魔化および脱神話化を通して、ヒトラーを当時と同じように描こうとするものであった。この映画をめぐって社会的評価が二分(にぶん)しているが、それは A. アスマンが提唱した三段階の第二段階「非難」から第三段階「追体験」への移行であることを指摘した。同時にヒトラーを人間的に描くことは、ヒトラーに関する証言において当時の視点を導入することが許されたことに起因することを示した。

以下では、これらの点を映画のなかで具体的に指摘する。すなわち、映画『最期の 12 日間』において以上の点をどのように観察できるだろうか。この映画はヒトラーの人間性をどのように描き、また過去の「追体験」をどのように可能としているのであろうか。映画『最期の 12 日間』の分析を通して、これらの問いに取り組んでいく。ここでは特に、ヒト

ラーに焦点を当てていきたい。すでに前節で言及したように、現代ドイツでは追体験をキーワードに多様なヒトラー像が現れてきている。本節では、『最期の 12 日間』のヒトラー描写を具体的に観察することで、現代におけるヒトラー像の多様性を裏付けることを目的とする。

映画『最期の 12 日間』について、別図 1 のとおり分析を行った。分析項目は以下の 3 点である。

・服装
・感情
・側近などのヒトラーへの態度

第一の服装に関して、ヒトラーが軍服姿以外の場合に灰色とした。第二の感情に関して、赤を怒り・激高、青を無慈悲・冷酷、黄を優しさ、紫を弱さ、緑をその他とした。第三の側近やその他の人物のヒトラーへの言及や態度として、肯定的な態度や発言の場合にオレンジ、中立的な場合に薄紫、否定的な場合に濃緑とした[488]。

これらに加えて、重要と思われる情報を適時描写し、全体として『最期の 12 日間』における人間的ヒトラー像および追体験に関する包括的な観察を提示することとする。

・服装

次節において分析を行う『わが教え子、ヒトラー』との対比において、服装分析は重要である。

ヒトラーは常に口髭に軍服というイメージで描かれてきた[489]。『最期の 12 日間』においてもこの伝統は守られており、ヒトラーが軍服以外の姿を見せるのは 1 回、眼鏡姿を見せるのは 2 回であり、全体を通して 3 回 7 分程度だけとなっている。眼鏡姿は作戦会議のシーンであるが（0:38、

[488] 各項目の色分けについては別図に詳細を示すこととする。
[489] この意味において前述した H. J. ジーバーベルクの作品は例外的であるといえる。そこには、裸に白い布を巻きつけながら墓から蘇るヒトラー像が描かれている。

1:25)、眼鏡をかけたヒトラー像は非常に珍しい[490]。加えて、上着を脱いでワイシャツ姿のヒトラーが一度登場する（1:24)。ヒトラーが個室にいるシーンであり公務中ではないが、本映画においてヒトラーが軍服を脱いでいるのはこの一度だけである。

ここから、『最期の 12 日間』においてヒトラー像は、服装の観点からみた場合に伝統的な姿を保っているということができる。

・感情

映画『最期の 12 日間』においてヒトラーは約 60 分間銀幕の上に登場する。このとき各感情の内訳は、別図 1 より下図のとおりとなる。

ヒトラー感情	時間（分）	%
怒り・激高	13	21.67
無慈悲・冷酷	8	13.33
優しさ	14	23.33
弱さ	10	16.67
その他	15	25.00
ヒトラー登場時間計	60	100.00

図 :『最期の 12 日間』におけるヒトラー各感情の内訳

怒り・激高および無慈悲・冷酷の合計が 35%であるのに対し、優しさおよび弱さの合計が 40%となっている。仮に従来のヒトラーイメージが前者に強く印象付けられているとするならば、それとは異なる感情がより多く描写されていることが分かる。しかし一方で、その差は 3 分程度のものであり、この意味において必ずしも従来のイメージが顧みられていないとはいえないだろう。

[490] Google においてòAdolf Hitlerò の画像検索を行った結果、眼鏡をかけたヒトラー像は 1 枚も検出されなかった。(2011 年 11 月 17 日アクセス)

注目すべきは、ヒトラーが誰に対して優しさや弱さを見せたのかという点である。別図 1 から明らかであるように、優しさは秘書や子供たちに向けられており、軍人に対しては一切そのような描写がない。特に、地下壕に残りヒトラーと運命を共にすると誓った愛人エヴァ・ブラウン（Eva Braun）に対して側近や秘書たちの眼前でキスをしており（0:42）、彼女への思いを身体的な愛情表現で示している点にヒトラー像の大きな変化を指摘することができる。その一方で弱さを見せているのは、最後の食事を終えて料理人に礼を述べた後に力なく立ち上がり、「時は来た」とつぶやいて自殺に向かうシーン（1:46）をのぞいて、常に側近ら軍人に対してさらけ出している姿である。ここからヒトラーは軍人以外の女性と子供には優しく接していたことを描写していることが明らかであり、また自身の弱さを女性と子供には見せていないことがわかる。T. ユンゲ役の A. ララが述べていたように、この意味においてヒトラーは女性と子供にとって父性の象徴として描かれている。

次に、冷酷なヒトラー描写について観察する。ヒトラーの冷酷さが現れるとき、必ず弱者が対象となっている。これは次の項目にも関係することであるが、ドイツ国民こそヒトラーにとって弱者であった。ヒトラーが軍需大臣シュペーアにベルリン破壊命令を下すシーンがある（0:25）。この命令はインフラを含むベルリンにあるすべてを破壊し、「どこへ行っても廃墟しかないように」することが目的であった（0:25）。これに対しシュペーアは、インフラがなくなれば市民の運命は決してしまうがゆえに再考を求めるが、ヒトラーは「破壊し尽くせばいい。それで生き延びられねば弱者ということだ」と返答している（0:25）。こうしたドイツ国民に対する冷酷さを示すほかの個所として、作戦会議においてベルリンから女子供を含む 300 万人の市民を退避させるべきであるとの進言に対し「心を鬼にしろ。戦時に国民など存在せん」と告げるシーン（0:18）、ヒトラーに別れを告げに来たシュペーアに対し「国民は同情に値しない」と述べるシーン（1:09）、および敵弾の中を掻いくぐって地下壕に来た女性飛行士ライチュらを囲んだ席上で「弱さには死あるのみ」というシーン（1:16）などである。

これは上述した優しさと相反する。とりわけ女性や子供をベルリンから脱出させるべきだとの進言に対し冷酷な態度をとったことは、明らか

に優しさの分析結果と矛盾している。秘書たちと国民との差異はどこにあるのだろうか。この差のひとつとして、ヒトラー自身との直接的な関りの有無をあげることができるだろう。ヒトラーにとって国民は顔の見えない集合であるのに対し、秘書や愛人、勲章を授与した子供たちやゲッベルス夫妻の子供たちは、ヒトラーが直接会っており、言い換えればヒトラー自身が彼らの自分への忠義を確かめた人たちである。これは、次に説明する激高・怒りの感情と関係することでもある。つまりヒトラーにとって優しさを注ぐ対象は、自身への忠義を尽くしたことをヒトラー自身が確認できる相手に限定されているといえる。

ヒトラーが激高しているシーンに関して、自分に対し疑念を抱かれたときや裏切られたと感じているときに集中している。唯一の例外は、映画冒頭において、ベルリンに侵攻したソ連軍を空軍防空所が見逃したことに対しその怠慢さを詰るときだけである（0:07）。それ以外はすべて裏切り行為に対して怒り激高する姿が描かれている。映画の中においてヒトラーは、ゲーリングの権力委譲（1:02）およびヒムラーの降伏受諾交渉（1:16）という裏切り行為に対して「裏切」という言葉を使って激しく罵倒している。また、自身が発した攻撃命令が伝達されていなかったことを知るシーン（0:38）、裏切ったヒムラーの部下が行方をくらませていると知るシーン（1:20）においても同様である。ヒトラーにとって許せざる行為は、裏切り行為であることが映画の中で描写されている。

このことは次のシーンにおいて裏付けることができるだろう。シュペーアがベルリン脱出を前に、別れの挨拶をするためにヒトラーを訪れるシーンがある（1:09）。このとき、ヒトラーはシュペーアと別れの握手を拒否するものの、涙を流すことで怒りとは逆に悲しみを表現している。ゲーリングやヒムラーとの違いについて、エヴァとシュペーアの会話に見ることができる。シュペーアはヒトラーに別れの挨拶に行く前に、エヴァの個室を訪れている（1:07）。このときに交わされた会話が以下である。

エヴァ「信じてたわ。総統を見捨てないと」
シュペーア「お別れに来たんだ」
エヴァ「それでいいのよ」

エヴァ「来ることが重要なの。彼の味方と分かるわ。」
シュペーア「彼は疑念を？」
エヴァ「裏切るんじゃないかって」

エヴァは、ヒトラーが側近たちに見捨てられ裏切られていると感じているが、ヒトラーと会うことで彼が抱いているそうした疑念を取り除くことができると述べている。これは先述した優しさにも通じる部分であるが、ヒトラーにとって重要なことは忠義を直接示されているかどうかであることがわかるだろう。この点において、シュペーアはヒムラーたちと異なっていたのである。

以上、ヒトラーの感情について観察してきた。はじめに、優しさや弱さといった感情が激高や冷酷を大幅に凌駕しないことを確認した。次に、女性や子供といった軍人以外に対して優しさを見せているが、ヒトラー自身が直接面識を持たない集合としての国民に対しては、女性や子供であっても冷酷な感情を見せることを明らかにした。軍人に対しては背信行為に神経質であり、激しく激高し怒ることがわかった。この分析結果から、ヒトラーの感情を左右する要因は忠誠が示されているかどうか、裏切り行為であるかどうかであることが明らかとなった。

・側近などのヒトラーへの態度

ここまで、ヒトラー自身の言動を通してヒトラー像を分析してきた。以下では視点を変えて、映画の中においてヒトラーをどのように描写しているかを観察する。本分析において、他者によるヒトラーへの態度を二つに分類した。ひとつは肯定的な態度であり、ヒトラーへ忠誠を示す、ヒトラーを無条件に肯定するなどが該当するものとする。他方は否定的な態度であり、ヒトラーの意思と異なる行動をとる、ヒトラーを否定するなどが該当するものとする。また、いずれにも当てはまらない言動は中立的態度とする。

本映画において、他者のヒトラーへの態度に関する上記の内訳は下図のとおりである。

	時間（分）	%
肯定的態度	56	49.56
中立的態度	14	13.21
否定的態度	43	40.57
態度計	106	100.00

図：『最期の 12 日間』における他者のヒトラーへの態度

なお別図において、肯定的態度と否定的態度が同時に表れている場合や、肯定的態度と中立的態度が同時に表れている場合など、二つ以上の態度が同時間内に示されているケースがある。これは、該当シーンにおいて二人以上の人物が異なる態度を表明していることを示している。

この図によれば、肯定的態度が否定的態度を 13 分上回り、割合としては約 9%高い数値となっている。このことから、『最期の 12 日間』において側近やその他の人物は、ヒトラーに対する肯定的な態度を示す割合の方が否定的な発言や態度よりも明らかに多いことが分かる。

この分析結果においてまず注目したいことは、ヒトラーが自殺して以降もヒトラーに肯定的な態度を示すシーンが否定的な態度を示すシーンと同程度あることである。とりわけ秘書や側近たちがヒトラーの死後に地下壕を脱出し味方陣営にたどり着いた場面が象徴的である（2:15～）。陣営に近付くロシア兵を前に、ドイツ将校たちが最後まで抵抗を試みるべきだとするものと、無駄な抵抗はやめて生き延びる選択をするべきだというものとに二分（にぶん）されて描写されている。このとき、生き延びるべきだとするシェンク大佐と他の将校とのあいだで交わされる言葉が次である。

将校「最後の弾で自決を」
シェンク「バカな。名誉のために助かる道を捨てるのか」
将校「総統と SS は一心同体だ」（賛同者多数）
シェンク「なぜ死にたいんだ」
将校「誓いを立てさせた。敵に捕まったら自殺を、と」

このシーンの後にドイツが降伏したことを知ると、将校はヒトラーへの誓いを守って自殺をする。

ここに、最後までヒトラーを信奉するものとヒトラーに見切りをつけるもののせめぎ合いが観察される。ヒトラーへの忠義を表明するシーンは、軍人や秘書、看護師のいかんに関らず随所に見られる。またヒトラーへの否定的な態度が示される場合、それが単独で示されることはほとんどなく、ほとんどのシーンにおいて必ず肯定的態度を伴っていることが分かる。ヒトラーを絶対的に否定せず、ヒトラーと自己を同一視し最後まで忠実であろうとする人物を映画内で描くことは、観客に対しかつてそのようなヒトラーへの忠義が実際にあったということを伝達している。このとき、映画の中においてヒトラーは信奉の対象として描かれているといえる。

一方、秘書 T. ユンゲと愛人エヴァがヒトラーについて言及するシーンは対照的である（1:42）。ヒトラー自殺が迫る中で、エヴァもまた運命を共にする覚悟を決めている。そのような状況の中で、次のような会話がなされている。

エヴァ「彼とは 15 年以上だけど何も理解していない」
エヴァ「ベルリンに追ってきたら、変わってしまっていた」
ユンゲ「総統の内面は謎だわ」
ユンゲ「私生活ではお優しい。その一方で、冷酷な言い方も」
エヴァ「(彼が) "総統"のときね」

二人はヒトラーの内面を分析しており、映画の中におけるヒトラーに関するセカンド・オーダーの観察であるといえる。これによれば、ヒトラーは国民を導く指導者のときには冷酷であり、プライベートでは優しいと見なされている。こうした切り替えが、T. ユンゲらにとって理解不能で謎な一面として残るのである。上述したように、『最期の 12 日間』は T. ユンゲの自伝を下敷きにしており、この意味において映画の中における元秘書の発言は特に大きな意味を持っているといえる。常にヒトラーを観察していた元秘書や愛人にとって、ヒトラーは理解不可能な二面性を持つ人物として描かれている。

以上の分析から次のことが言えるだろう。第一に映画の中においてヒトラーは、側近やその他の人にとっては信奉の対象であると同時に見捨てる対象として描かれていた。言い換えれば、常に対立する評価が与えられていたといえる。第二に、秘書らのセカンド・オーダーから明らかなことは、公私の差が激しい、謎の多い二面的人物として描かれている。

③小括

以上、ヒトラーの服装および感情、側近やその他の人のヒトラーへの態度の観察を通して、映画『最期の 12 日間』におけるヒトラー像の分析を行ってきた。ここから、以下のことが明らかになった。

服装においては伝統的なヒトラーイメージを踏襲しており、大きな変化は認められなかった。一方、ヒトラーの内面描写においては 4 つの特徴が指摘できる。第一として、信奉対象としてのヒトラーである。すでに確認したように、ヒトラーの生前死後を問わず盲目的に信奉する、もしくは誓いに従い最後まで忠誠を示し続ける国民の姿が描かれていた。第二に、ヒトラーは自身への裏切りを決して許さず、激高し、裏切りに対し非常に厳しい態度で挑もうとする姿である。この忠誠と裏切りは、本映画の主導的モチーフのひとつであるといえるだろう。ヒトラー像に関して言えば、ヒトラーに対し一定の忠義心を見せている限りにおいてヒトラーが激怒することはなかった。しかし、ひとたび裏切られると、激しく怒りだすのである。ここから、ヒトラーは常に信奉の対象であることを自ら欲していたということができるだろう。それゆえ、裏切りに対して病的なまでに敏感になっていたのである。

第三に、ヒトラーの二面性をあげることができる。T. ユンゲとエヴァのシーンで明らかにしたように、ヒトラーは冷酷さだけではなく優しさも併せ持つ存在として描かれている。ヒトラーは、自身に忠誠を尽くしている人間に対しては、冷酷さを現すことはなかった。とりわけ、自身を慕う女性や子供に対しては笑みや気遣いをみせるなど、総統ではない場面においてヒトラーの優しさが際立つのである。第四に、ヒトラーの弱さが描かれていた。裏切りを恐れ、裏切りに涙し、弱々しく歩くシーンは見る者に衝撃を与える。従来の悪魔的ヒトラー像の対極にある姿

がそこにはある。確かに弱さが描写されているシーン時間は長くはなく、この意味においてヒトラーの弱さが描かれているのはほんのわずかである。しかし描写時間の長さが衝撃の大きさに比例するとはいえないだろう。むしろここでは、ヒトラーの弱さがわずかしか描かれないがゆえに、逆に特異点として強調されると考えることができる。いずれにせよ、ヒトラーの弱さが描かれているところに本映画におけるヒトラー描写の特徴の 4 点目とすることができる。

『わが教え子、ヒトラー』

原題：*Mein Führer – Die wirklich wahrste Wahrheit über Adolf Hitler*
監督：ダニー・レヴィ（Dani Levy）
脚本：ダニー・レヴィ
製作：シュテファン・アルント（Stefan Arndt）
公開：2007 年

あらすじ
1945 年新年の演説を前に、ヒトラーは精神が衰弱しきって自信を失っていた。そこへ演説の指導者として、ゲッベルスの命令でユダヤ人の俳優であるアドルフ・グリュンバウム教授が首相官邸に呼ばれた。ヒトラーを小ばかにした演説指導を行うが、やがてグリュンバウム教授はヒトラーの孤独に気づき、いつしか二人は心を通わせるようになる。ヒトラーも最後には心を開くが、しかし新年の演説でグリュンバウム教授はヒトラーを裏切り殺される。

①映画史的社会的文脈

2007 年に公開された映画『わが教え子、ヒトラー』（*Mein Führer – Die wirklich wahrste Wahrheit über Adolf Hitler*）は、ユダヤ人であるダニー・レヴィ（Dani Levy）監督によって撮影されたコメディー映画である。演説直前でありながら自信喪失状態のヒトラーに対しユダヤ人教授による演説指導によって自信を取り戻すが、指導を通してヒトラーとユダヤ人

教授のあいだに友情が芽生えるものの最後にユダヤ人教授は殺されてしまう、というストーリーである。ヒトラーは幼少期に父親から受けた虐待がトラウマとなっているという設定を下敷きにユーモアや皮肉、笑いを散りばめた本作品は、「ヒトラーを笑う」というタブーを侵した「はじめてのドイツ映画」[491]として話題になった。

本作品が公になったときに、ドイツ社会はこの映画を『われわれはヒトラーについて笑うことが許されるのか』[492]という率直な驚きで迎え入れた。つまり多くのドイツ人はヒトラーを笑うことについて「何百万人の犠牲者を前に、ヒトラーレジームのキーパーソンを笑いものにすることはふさわしくない」[493]と見なしており、これを裏付けるように 56%のドイツ人が『わが教え子、ヒトラー』に否定的であるというアンケート結果がドイツのフォルザ社会調査統計分析調査研究所（Forsa Gesellschaft für Sozialforschung und statische Analysen mbH）から発表された[494]。『最期の 12 日間』と比較すると、ドイツ社会における本作品の受容は非常に低いといわざるを得ない。ドイツ人にとってヒトラーを笑うことはいまだタブー視されているのである。

ただし、すでに第 1 節でも確認したようにヒトラーを笑いの対象とすることは一部の領域で観察され得るようになってきており、特にインターネットやポップカルチャーではヒトラーコメディーはひとつのジャンルとして確立されている[495]。ドイツの漫画家であるヴァルター・メルス（Walter Moers）はヒトラー風刺漫画『アドルフ、このナチ野郎』（*Adolf, die Nazi-Sau*）を描き、『アドルフ、再び』（*Adolf. Äch bin wieder da!* 1996）、

---

[491] Martenstein, Harald: *Adolf auf der Couch*. In: *Die Zeit*, 02/2007. http://www.zeitgeschichte-online.de/portals/_rainbow/documents/pdf/presse_levy.pdf.（2012 年 9 月 17 日アクセス） ただし A. ヒッセンによれば、トビアス・バウマン（Tobias Baumann）監督の『ヴィクサー』（ĂWixxerñ, 2004）がドイツにおける最初のヒトラーコメディーであると紹介している。Vgl., Hissen, Alexandra, 2010, S. 202ff.

[492] Adorján, Johanna: *Dürfen wir über Hitler lachen?* In: *Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung*, 17. 12. 06, S. 25. http://www.zeitgeschichte-online.de/portals/_rainbow/documents/pdf/presse_levy.pdf.（2012 年 9 月 17 日アクセス）

[493] N. N.: *Mehrheit der Deutschen lehnt Hitler-Satire ab*. In: *Spiegel Online*. www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/umfrage-mehrheit-der-deutschen-lehnt-satire-ab-a-458931.html. （2012 年 9 月 27 日アクセス）

[494] Ebd.

[495] Martenstein, Harald, 2007.

『アドルフ、またまた再び』(*Adolf, Teil 2. Ach bin schon wieder da!* 1998)、『アドルフ―地下壕。三幕のなかの悲劇コメディー』(*Adolf – Der Bonker. Eine Tragikomödie in drei Akten*. 2006) を出版している。2006 年の出版の際に宣伝用に作成し単行本と抱き合わせで公開された特典映像『アドルフ：地下壕に閉じこもって』(*Adolf: Ich hock' in meinem Bonker*) がインターネット上で話題になり、YouTube などの動画サイトにアップロードされた本映像の再生回数は 200 万回を超えるなどまたたくまに社会に広がっていった[496]。

図 :『アドルフ：地下壕に閉じこもって』より

こうした既出のヒトラーパロディーやヒトラーコメディーと『わが教

[496] Moers, Walter (idea & character, storyboard) / Piger, Thomas (music) / Gönnerst, Felix (director): *Adolf: Ich hock' in meinem Bonker*. http://www.youtube.com/watch?v=RHMZDfWAAuI（2012 年 9 月 29 日アクセス）なお動画の投稿日時は 2006 年 9 月 5 日であり、2012 年 9 月 29 日現在の動画再生数は 2,469,365 回である。

え子、ヒトラー』のあいだに差異があるとすれば、監督である D. レヴィ自身がユダヤ人であるという点であろう。つまり、それまでナチス・ヒトラーの悪行を批判してきたホロコーストの犠牲となった民族の子孫が、ヒトラーを笑うというタブーを破ったのである。ホロコーストは現代においてもなおユダヤ人の苦しい記憶であることは疑い得ない。ドイツユダヤ人中央評議会副議長のディーター・グラウマン（Dieter Graumann）は「私自身、ホロコーストを経験した家族の出自である。それゆえ、ヒトラーやホロコーストをコメディーにすると聞くと、ひどい腹痛に襲われる。」「私は笑うことはできない。笑おうにも、のどに引っかかって出てこないのだ。」[497]と述べており、ユダヤ人にとってヒトラーを笑うことは苦痛を伴うものである。また、ホロコーストを題材とした劇を作り続けている劇作家ロルフ・ホーホフート（Rolf Hochhuth）は「自身がユダヤ人であるような人間が、このような歴史の捻じ曲げを映画に持ち込むことは理解しがたい」[498]と厳しく批判している。

もっとも、D. レヴィは娯楽のためにヒトラーコメディーを作成したのではない。彼はドイツ人がヒトラーを消化し、ついには追い出すことを願っているが[499]、その目的を達成するためにコメディーは有効であると述べている。

> ユーモアはタブー化された空間を照らす光であり［中略］それゆえコメディーは解放の領域に含まれるものである[500]。
>
> 私は巨大なものを小さなものに置き換えたいと思っている。すなわち、そこに到達し理解可能とするために、巨大なナチズムをより小

---

[497] N. N.: *Massive Kritik an Levys Hitler-Satire*. In: *Spiegel Online*. http://www.spiegel.de/kultur/kino/0,1518,458676,00.html （2011 年 12 月 3 日アクセス）

[498] Ebd.

[499] Thilo, Andrea: *Ich habe einen Traum. Die Angst vorm leeren Saal*. In: *Zeit Online*, 11.01.2007, S. 2. http://www.zeit.de/2007/03/Traum-Dani-Levy（2012 年 2 月 23 日アクセス）

[500] Lewitan, Louis: *Gespräch mit Dani Levy. „Komödien gehören in den Bereich der Erlösung.“* In: *Zeit Online*, 31,12,2006. http://www.zeit.de/2010/14/Rettung-Dani-Levy （2012 年 2 月 23 日アクセス）

さな尺度に引き下げることである[501]。

つまり D. レヴィにとってヒトラーをコメディー化することは、何よりもナチス・ヒトラーと向き合うための方策のひとつとして提案するものである。『最期の 12 日間』においてヒトラーは人間的に描かれているが、その 3 年後にはヒトラーをより深く知るためにコメディーとして描かれるようになってきたのである。

D. レヴィのコメディーにおけるもうひとつの衝撃は、ドイツで活躍するコメディアン、ヘルゲ・シュナイダー（Helge Schneider）をヒトラー役として抜擢したことである。ここに D. レヴィのコメディーを徹底しようとする姿勢をうかがうことができる。D. レヴィは 2007 年 1 月 5 日付のインタビュー記事において、H. シュナイダーをヒトラー役に抜擢したのは深い意図があったわけではなく直感であったと述べている「私は彼の作品をまったく知らなかったし、思い至らなかったかもしれない。［中略］それはただ、ヘルゲは自分にとっても映画にとっても完全な僥倖である、という直感だった」[502]。しかし 2007 年 1 月 10 日付のインタビュー記事では、一転して H. シュナイダー起用の意図を次のように語っている。「私は、新しい総統官邸の権力者は笑いものにできなければならないという基本的な前提条件から出発した。［中略］ヘルゲのような人物は、通常とは違ったさりげなさと冷静さを役に当てはめることができる」[503]、と。ふたつのインタビューのあいだには、直感的に決定したのか H. シュナイダーの長所を踏まえて起用に踏み切ったのかという、ヒトラー役にコメディアンを起用した動機について大きな開きがある。しかしいずれにおいても、最終的に俳優ではなくコメディアンをヒトラー役に抜擢したことは、ドイツ社会に大きな衝撃をもたらしたことは間違いない。

---

[501] Thio, Andrea, 2007, S. 4.

[502] Zander, Peter: *Levy: „Der Kontext von Sex und Macht ist sehr interessant.“* In: *Die Welt*, 05. 01. 07. http://www.zeitgeschichte-online.de/portals/_rainbow/documents/pdf/presse_levy.pdf. （2012 年 9 月 17 日アクセス）

[503] N. N.: Ă*Natürlich wird mir der Kopf gewaschen.*ñ In: *General Anzeiger*, 10. 01. 2007. http://www.general-anzeiger-bonn.de/news/interviews/Natuerlich-wird-mir-der-Kopf-gewaschen-article118746.html （2012 年 10 月 1 日アクセス）

H. シュナイダーは、音楽や映画も手掛けるマルチタレントな人気コメディアンである。彼の芸風は非常に風刺的・皮肉的で、こうしたコメディアンがヒトラーを演じることの意味は非常に大きいといわざるを得ない。シュピーゲル誌の web 版であるシュピーゲル・オンラインがはじめて『わが教え子、ヒトラー』を報じた記事は、次のようにはじまっている。

> ダニ・レヴィが素晴らしいコメディー映画監督であることは『すべてを砂糖に！』（*Alles auf Zucker!*）で証明された。目下彼は自身のユーモアの才能を歴史的かつ世界的狂人で試そうとしている：アドルフ・ヒトラーである。それをヘルゲが、そう、あのヘルゲ・シュナイダーが賛助しているのだ[504]。

後に H. シュナイダーはヒトラーをコミカルに演じたことについて「言われたとおりにしただけ」であり、「もう自分はこの映画を好きではない」とまで言い切っている[505]。つまり H. シュナイダーは本作品から距離を置こうと努めていることがうかがえるが、しかし重要なことはコメディアンである H. シュナイダーがヒトラーを演じたという点であり、これは彼がいくら批判を展開しても打ち消すことのできない事実である。これは、『最期の 12 日間』において B. ガンツというベテラン俳優がヒトラーを演じたこととは正反対である。このコメディアンと大俳優という対立は、ふたつの映画における姿勢の違いであるということができるだろう。すなわち、D. レヴィの言葉を借りるならば、「権威主義」への挑戦である。

> 独裁者の権威は盲目的服従に基づくものである。もし映画が追従を強いるとすれば、それは危険なものとなる。［中略］これに対して

---

[504] N. N.: *Mit Helge gegen Hitler*. In: *Spiegel Online*, 21.12.2005. http://www.spiegel.de/kultur/kino/regisseur-dani-levy-mit-helge-gegen-hitler-a-391703.html （2012 年 10 月 3 日アクセス）

[505] Zander, Peter: Ă*Ich habe mich nur zur Verfügung gestellt*.ñ In: *Die Welt*, 04.01.07. www.welt.de/kultur/article706456/Helge_Schneder_Ich_habe_mich_nur_zur_Verfuegung_gestellt.html （2012 年 10 月 3 日アクセス）

良い映画というのは弁証法的で、かつ疑うことを基盤としている[506]。

D. レヴィは、ナチス・ヒトラーに関するドキュメンタリーや映画における「異常なまでの信憑性への姿勢」や「視聴者にすでに出来上がっている過去像を提供し、一切の矛盾を許さない」という現状に対し、「彼[D. レヴィ]は題材をコメディー的に加工することについて、『ヒトラー神話』を笑いによって脱構築し、歴史を権威的に模写することができるかを問うための適切な解毒剤とみなしていた」[507]。つまり H. シュナイダーというコメディアンが抜擢されたことの意味は、権威主義的に再生産され続ける歴史像を再構成し、「脱神秘化」(Entmystifizierung)[508]させることであるといえる。

具体的には、ふたつの映画におけるヒトラーの演じ方がまったく異なっている。A. ヒッセンによれば、『最期の 12 日間』において B. ガンツは可能な限りヒトラーの声の調子や身振り—演説のみならず、日常生活のなかでのリアルなヒトラー像を完全にコピーすることを模索していた。たとえばヒトラーは「R」音を巻き舌で発音するという特徴や、晩年のヒトラーを悩ませた手の震えなどを忠実に再現しようと努めていたのである[509]。しかし一方の H. シュナイダーは「独裁者の普段の声を可能な限り正確にコピーしようとはしなかった。[中略]つまりシュナイダーのヒトラーは、[中略]『歴史的正確性』に注意を払うことなく話しているのである」[510]。口調のみならず身振りなどの模倣も拒否するという、「集合的記憶に固定された演説者［ヒトラー］の話しぶりを想起させるシチュエーション」[511]からの脱却は、D. レヴィがこの映画を通して主張しようと試みた、新しいヒトラー像を提示することへの意識を読み取ることができる。「惨劇を変えることは決してできないが、しかし私は新

---

[506] Haas, Daniel: Ă*Hitler hätte in Therapie gehört*.ñ In: *Spiegel Online*, 04,01,2007 http://www.spiegel.de/kultur/kino/mein-fuehrer-regisseur-dani-levy-hitler-haette-in-therapie-gehoert-a-457208.html （2012 年 10 月 3 日アクセス）
[507] Hissen, Alexandra, 2010, S. 208.
[508] Haas, Daniel, 2007.
[509] Hissen, Alexandra, 2010, S. 214f.
[510] Ebd.
[511] Ebd. ただし括弧内筆者。

しい過去像を生み出すという力を持っている」[512]。

ここまでの議論を整理しよう。『わが教え子、ヒトラー』はヒトラーがユダヤ人教授の助けを借りて演説を行うというコメディーであるが、ヒトラーを笑いものにするという態度に批判が向けられた。ヒトラー役にコメディアンを抜擢し、その歴史的正確性を省みない演技は『最期の 12 日間』と対極に位置するといえる。しかし『最期の 12 日間』がヒトラーを当時のように追体験しようとする意図から出発していたのに対し、D. レヴィはそうした「信憑性」への批判的態度をあらわすと同時にナチス・ヒトラーへ接近するための方策としてコメディーという手法を取り入れていた。確かにヒトラーコメディーは多くのドイツ人にとって受け入れることが難しい映画であったが、しかし過去の真正性を目指すのではなく笑いから過去を理解しようとするところに、本映画の過去との関わり方における新規性を認めることができる。

『わが教え子、ヒトラー』に関する記事はヒトラーをコメディー化したことに重点を置いたものが目立つが、「マスメディアは現実を構築する」という本論文の基本テーゼに照らしたとき、この映画のもうひとつの特徴にも言及する必要がある。すなわち、ヒトラーは幼少時代に父親から暴力を振るわれていたという史実である。

本作品には、次節で詳しく検討するように、ヒトラーが自身の幼少期に父から虐待されていたことを告白するシーンがあるが、これはポーランド出身の精神分析家アリス・ミラー（Alice Miller）の主著『魂の殺人 親は子どもに何をしたか』（*Am Anfang war Erziehung*, 1980）を下敷きとしている。著者の A. ミラーは第二次世界大戦後にスイスに移住し社会学と哲学を修めたのち、精神医学者であり哲学者でもあるカール・ヤスパース（Karl Jaspers）のもとで心理学の訓練を受けた。その後精神分析家として医療現場に身を投じるが、理論と現実のずれに疑問を感じたことを出発点に著述業へとシフトしていった[513]。

A. ミラーは『魂の殺人』のなかで「アドルフ・ヒットラーの子供時代」という章を設け、ヒトラーがドイツ国民を動員してユダヤ人虐殺を

[512] Thilo, Andrea, 2007, S. 3.
[513] A. ミラー著、山下公子訳：『魂の殺人　親は子どもに何をしたか』、新曜社、1983 年、訳者あとがき参照。

行った衝動の背景を探ろうと試みている。そのさい A. ミラーは、ヒトラーは子供時代に父親から日常的に暴力を受けていたことに着目する。

> 一方では両親によって傷つけられ辱められながら、しかしその、自分を傷つけ辱める者を敬い愛さねばならず、自分の受けた痛みをどのようなことがあっても表に出してはならないという命令に服さねばならぬ子どもの内部では一体何が起こっているのでしょうか。［中略］幼い時期に受けた迫害はどこかに蓄積されていたのだということがはっきりわかってしまいます。［中略］すなわち、かつての迫害される子どもは、今や迫害するものとして登場するのです[514]。

ヒトラーは幼少期に父親から「名前も呼んでもらえず、犬のように指笛で呼びつけられ」[515]、「気分がムシャクシャするからというので［中略］眠っている子どもをベッドから引きずり出して殴」[516]られるという仕打ちを毎日のように受けていた。幼いときからヒトラーは父親に対して「こみ上げてくる憎しみはアドルフの中で止まることがなく、しかも決定的なもの」[517]となり、心のなかに「自分に乱暴を働くこの人間に対する敵意と軽蔑」[518]を秘めて復讐の機会をうかがっていた[519]。しかしヒトラーが 13 歳のときに父が亡くなり、その際、高級官吏であった父に対して社会は「人間の権利に対する真正の敬意と、その擁護のための衷心からの配慮を示していた」と高く評価したことにより[520]、ヒトラーは父親への復讐の機会をそがれてしまう。そこでヒトラーは「自分の経験した悪を『ユダヤ人そのもの』に転嫁させることで、周囲から孤絶することをまぬがれ」[521]、「父親の折檻という精神的外傷を忘れるため、［中略］彼は

---

514 A. ミラー著、山下公子訳、1983 年、189 ページ。
515 同上、210 ページ。
516 同上、211 ページ。
517 同上、212 ページ。ただし強調原著。
518 同上、214 ページ。
519 A. ミラーによれば、ヒトラーの学業成績が悪いのは上級税関事務官であった父に対する「お返し」であると分析している。同上、214 ページ参照。
520 同上、203 ページ。
521 同上、216 ページ。

ドイツの支配層を屈服させ、大衆を味方につけ、ヨーロッパ列強を手玉にとりました」[522]。

以上のように A. ミラーは、ヒトラーの独裁政治の確立やヨーロッパ侵攻、ユダヤ人大量虐殺という蛮行は、幼少期の虐待に起因するものであることを精神分析的手法を用いて明らかとした。『わが教え子、ヒトラー』は、父親に虐待された過去を持つ被害者としてのヒトラー像という新しい側面を提示したのである。

大量虐殺の原因を幼児虐待に求めることでヒトラーの罪が軽減され、また加害者ではなく被害者であるという視点の転換を伴う精神分析の鑑定に対し、ホロコーストの言い訳であると批判することは可能であろう。また、ヒトラーを笑いの種にするのみならず、このようにヒトラーを被害者として描く『わが教え子、ヒトラー』は、ナチス・ヒトラーの罪を過小評価していると非難することも同様に可能であろう。しかし、そもそも A. ミラーや D. レヴィはそのような意図を持っているわけではない。A. ミラーはヒトラーの幼少期を精神分析した動機について次のように述べている。

> 自分が残虐性の道具、ということはつまり、その残虐性をそれと気づかぬままに（したがって責任はないかもしれないが、盲目的に）支持したり、仲介したりする者になることを拒もうとするかぎり、残虐性の原因を探求することをあきらめることはできません。もし私たちがこの捉え難いものに背を向け、激昂して「そんなことをするのは人間じゃない」と言ってしまったら、私たちはその捉え難いものを知り得なくなります。そんなことをしては、次にそういうものがやってきた時、再びそれをまったく無邪気に、悪気もなく支持してしまうことになりかねません[523]。

A. ミラーが強調するのは、ヒトラーの残虐性の原因を探ることによって、将来同じような事態になったときに適切に対応することが可能となるという点である。つまり、将来のために過去を冷静に見つめなおす必

[522] 同上、226 ページ。
[523] 同上、186 ページ以下。

要があると論じているのである。言い換えるなら「言い訳ではなく、なぜ彼がそのような行動をとったのかの説明」[524]のために、ヒトラーの精神分析を行うべきであるといえる。D. レヴィはこうした考え方をさらに一歩進め、こうした視点はヒトラーのみならず多くのドイツ人に当てはまるとしている。D. レヴィはシュピーゲル・オンラインのインタビューにおいて、インタビュアーの「ミラーは歴史的惨劇を間違った教育へと引き下げている」という発言を受けて次のように述べている。

> 暴力や横暴といった特定の子供時代における経験が不可抗力的に繰り返されること、およびそれが政治システムにおいて異常なかたちで姿をあらわすという考え方は、ひとつの有効なアプローチであると思われる。この際私はヒトラーのみならず、暗黒の教育を受けて成長した何百万ものドイツ人をも意図している。ヒトラーは観客に共感され、この登場人物との距離はある程度消えてなくなってしまう。基本的にこうした感情の動きは許されておらず、それゆえこれは非常に不安定な状態である。観客は共感することから脱却するよう本能的な試みをおこない、こうした緊張は認識を促進するのである[525]。

観客にはすでにヒトラーへ共感を寄せることは許されないという意識があるが、弱いヒトラー像が提示されることで一時的にヒトラーと共感してしまう。ところがすぐに自分のこうした態度を反省し、ヒトラーは共感に値すべき人物ではないという認識を再確認するのである。被害者としてのヒトラーは、加害者としてのヒトラーを再確認させるための手段なのである。

以上の議論を通して、『最期の 12 日間』においてヒトラーを理解するという方向性が開けたことを受けて、どのように理解するかという方法

[524] Grandt, Michael: *Adolf Hitler: Teufel, Dämon oder schwer misshandeltes Kind?* In: *KOPP Online*, 02.06.2010. http://info.kopp-verlag.de/hintergruende/zeitgeschichte/michael-grandt/adolf-hitler-teufel-daemon-oder-schwer-misshandeltes-kind-.html （2012 年 12 月 6 日アクセス）

[525] Haas, Daniel, 2007.

論が多様化してきていることを確認してきた。過去の信憑性に固執することはヒトラーを神格化することに繋がりかねないという批判のもと、脱神格化という視点からヒトラーをコメディー化するという新しい解釈が誕生しつつある。加えて被害者であるヒトラー像を描くことは、大量虐殺の原因を探求すること、および同情を自らに禁じようとすることでヒトラーの悪行を再自覚することを意図していた。

こうした姿勢が「追体験」の時代に登場してきたことは、現代の意識が C. チャップリンの『独裁者』作成当時の意識に近づいてきていることの表れであるといえる。つまりホロコーストの存在がヒトラーを笑うことを許さなかった「道徳化と断罪」を乗り越え、当時と同じように笑いを通してヒトラーを批判することが再び可能となってきているのである。同時に、ヒトラーの幼年時代における虐待に大量虐殺の原因を求める動きは、多角的にホロコーストを理解しようとしていると解釈することができるだろう。確かに A. ミラーの『魂の殺人』は 1980 年に著されたものであり、年代にだけ注目する限りでは「道徳化と断罪」時代のものであるといえる。しかし A. ミラーのテーゼの現代における評価が「詳細が明らかになっているわけではない」[526]というものであることを鑑みたとき、彼女の考えはこれまで十分に知られていなかったことがわかる。これは A. ミラーが「心理学や精神分析学会内では彼女はほとんど無視され続けてきた」[527]という事実からも、現代に至るまで彼女の功績に対する社会的評価が非常に低かったことがわかる。したがって、大量虐殺はヒトラーの子供時代の家庭内暴力が原因であるという考え方は、「追体験」の時代になってはじめて受け入れられたということができる。ヒトラーやホロコーストといった過去と関わり合う姿勢が多様化してきているということができる。

②映画分析

本作品はヒトラーを笑うという試みとともに、ヒトラーもまた被害者

[526] Ebd.
[527] A. ミラー著、山下公子訳、1983 年、372 ページ。（訳者あとがきより）

であるという新しいヒトラー像を提案するものであった。すなわち、ヒトラーは幼少時代に父親から虐待を受けた被害者で、他人からの愛情に飢えているがゆえに残虐な性格になったというものである。以下では、こうしたヒトラー像が映画のなかでどのように描写されているのかを分析する。

具体的な分析結果は別図 2 のとおりである。分析項目は『最期の 12 日間』と同様に、

・服装
・感情
・側近などのヒトラーへの態度

とした。これらの分析を通して従来のヒトラー像との相違点を明らかにすることを目指す。なお本映画に関する笑いの分析について、『最期の 12 日間』分析との比較を行うことから、上記項目の分析や新しいヒトラー像との関係において言及することはあり得るが、特に笑いに関する項目を設けた分析は行わないことを断っておく。

・服装

『最期の 12 日間』におけるヒトラーの服装は軍服姿を中心に集合的記憶に合致するものであったのに対して、『わが教え子、ヒトラー』のヒトラーはそこから大きく逸脱している。『最期の 12 日間』において伝統的なヒトラー像を踏襲していない服装はわずかに 2 分だけであり、それも上着を脱いだシャツ姿だけであった。これに対して『わが教え子、ヒトラー』では 29 分ものあいだ伝統的ヒトラー像の服装からはずれており、これはエンドロールを除く映画上映時間全体の約 32%に該当する。なお、内訳は次のとおりである。

・白いスーツと黒いマント、サングラス姿 7 分
・寝巻姿 7 分
・運動服姿 6 分

・口髭なし 3 分
・全裸 2 分
・その他 4 分

以上の分析から、『わが教え子、ヒトラー』はヒトラーの多種多様な姿を提示していることがわかる。本作品にはヒトラーの口髭が半分剃り落される場面があるが（1:21)、ヒトラーのトレードマークともいうべき口髭を無くすという演出は特に興味深い。寝巻や運動着、半分にそられた口髭という日常生活のなかで蓋然性の高い服装や出来事を織り込むことにより、軍服および口髭というヒトラーの集合的記憶から脱却を図ろうとしているということができる。

・感情

『わが教え子、ヒトラー』においてヒトラーは約 55 分登場するが、このときヒトラーの感情は別図 2 より次のとおりである。

ヒトラー感情	時間（分）	%
怒り・激高	7	14.89
無慈悲・冷酷	0	0.00
優しさ	3	6.38
弱さ	14	29.79
喜び	9	19.15
その他	14	29.79
ヒトラー登場時間計	47	100.00

図 :『わが教え子、ヒトラー』におけるヒトラー各感情の内訳

ヒトラーが銀幕上に現れる時間の合計が 47 分であるが、このときヒトラーが怒り・激高を示すのは全体の約 15%に該当する 7 分であるのに対して、ヒトラーが弱さ、優しさを示すのは全体の約 36%である 17 分となっている。これに『最期の 12 日間』では観察されなかった感情である喜

びを加えると、全体の 55%を占めることになる。一方で、『最期の 12 日間』では優しさ、弱さとほぼ同じ割合であった怒り・激高は全体の 15%を占めるにとどまり、ヒトラーの感情のなかでは優しさに次いで 2 番目に少ない登場頻度である。また、無慈悲・冷酷が描かれていない点も注目に値する。『最期の 12 日間』ではドイツ国民を見殺しにすることを命令して憚らなかったが、『わが教え子、ヒトラー』ではそのような描写は一切見られない。以上のことから、『わが教え子、ヒトラー』におけるヒトラー像は弱さを中心に描写されているということができる。

本作品のなかでヒトラーがはじめて登場するシーン（0:14）において、ヒトラーはすでに自らを否定的に描写している。

ヒトラー「私に“ハイル”（Heil）を。癒せという意味だ」
ヒトラー「私はドイツ帝国のお荷物だ」
ヒトラー「私はもはやドイツ帝国を導く者ではない」
（Ich bin kein Führer mehr!）

ヒトラーに演説指導を行うユダヤ人俳優であり教授でもあるグリュンバウムによって「（ヒトラーは）心も病気です」（0:16）というヒトラー描写があるが、こうしたヒトラーの他者描写のみならずヒトラー自身による自己描写によっても弱いヒトラー像が描かれている。

こうした弱さは 2 つの事柄に起因していることが作品のなかで描かれている。ひとつは父による虐待である。すでに前節で確認したように、ヒトラーは父親に常時暴力を受けており、これがトラウマとなってユダヤ人虐殺やヨーロッパ侵攻に繋がっていた。『わが教え子、ヒトラー』ではこうした父親の影が随所に現れ、ヒトラーの精神的不安定さに説得力を与える働きをしている。具体的には次の場面をあげることができるだろう。ひとつはヒトラーが自ら父の思い出を語るシーン、もうひとつは就寝中のヒトラーがうなされて起きるシーンである。

本映画のなかでヒトラーが父について語る場面は 3 回あるが、このうち 2 回は父親からの仕打ちを告白するものである[528]。1 回目は父親から

[528] 残りの 1 回は父から贈られたパチンコで鳩を撃ち落としたことを語るシーンである（0:31）。ヒトラーはこれを楽しかった思い出としてグリ

殴られた過去を涙ながらにグリュンバウムに語るシーンであり（0:41）、殴られた数を口に出して数えさせられたことを告白する。2 回目に父親に言及するシーンとして、「私の内面がわかる話をしよう」と切り出し窓枠に下半身を露出したままはまって動けなくなったところを父に笑われたという思い出を語る場面がある（0:56）。ヒトラーはこの出来事を「みじめだった。もうみじめな思いはしたくない」と述べ、父に受けた仕打ちを乗り越えることが政治活動の原動力であることを語っている。ヒトラーが就寝中にうなされて起きるシーンは父語りと同様に 2 回ある（0:34、1:02）。最初のシーンでは失禁しており、また耳に綿を詰めて就寝するなど繊細な様子も描写されており、ヒトラーがいかに悪夢に悩まされているかが描かれている。これらはいずれも A. ミラーの著作のなかで報告されている出来事であり[529]、これによって劇中のヒトラーの弱さに歴史的科学的正当性を与えている。

ヒトラーの弱さと並んで、喜びと優しさもまた『最期の 12 日間』のヒトラー像と異なっている。『最期の 12 日間』において優しさは 14 分 23%であったのに対し、『わが教え子、ヒトラー』は優しさ、喜びが 12 分 26%である。後者では優しさ、喜びの全体に占める割合がやや高いものの、特に大きく異なるわけではない。しかし喜びや優しさという感情が向けられる対象が、ほぼすべてがユダヤ人であるグリュンバウムおよびその家族であることは興味深い。ユダヤ人絶滅計画の首謀者であるヒトラーであるが、本作品のなかでグリュンバウムに「祖父がユダヤ人であった」と述べているシーンや（0:42）、ユダヤ人について「何もしなきゃ君らに敵意はない」（同）と述べるなど、ユダヤ人への親近感や寛容さを示す場面がたびたび見られる[530]。さらにヒトラーはグリュンバウムの指導を通

ュンバウムに語るが、のちにグリュンバウムは「愛に飢えている」と解釈した。

[529] A. ミラー著、山下公子訳、1983 年。父親からの虐待については 203、204 ページ。就寝中に父の影におびえうなされる場面については 227 ページ。

[530] なおヒトラーは、父親にユダヤの血が流れているがゆえに父を憎んでいる旨発言している。しかし同時にグリュンバウムに対して「個人的にとらないでくれ」と述べ、グリュンバウムに対し敵対心がないことを語っている（0:41）。これも、なぜヒトラーがユダヤ人大量虐殺を行ったのかを自ら説明させている演出といえる。ヒトラーが自身の出自ゆえにユダヤ人虐殺を行うという因果関係については、A. ミラー著、山下公

して信頼を高め、映画の後半では次のように語りかける（1:19）。

ヒトラー「感謝する、アドルフ（グリュンバウム）」
ヒトラー「ユダヤの友よ」
ヒトラー「そばにいてくれ、我が指導者（Mein Führer）」

ここに、ヒトラーがグリュンバウムに対し好意を抱いていることがわかる。劇中、ゲッベルスが同じ政府高官であるヒムラーとヒトラー暗殺計画について密談するシーンがあるが（0:53）、ヒトラーはこうした環境を肌で感じているのかグリュンバウムに対し「孤独だ」「私は厄介者だ。皆わたしに罰を与えようと…」と漏らしている（1:16）。グリュンバウムはヒトラーにとって唯一心を許すことができる存在なのである。

一方のユダヤ人教授グリュンバウムは、これに対し、当初はヒトラーを殺すことを画策している。グリュンバウムは演説の最中に隙を見て暗殺を 2 回試みている（0:29、0:41）。しかしヒトラーの子供時代の話を聞き、また指導を通して彼の内面に触れていくうちに、ヒトラーへの同情とも共感ともとれる感情が芽生えてくる。ヒトラーは新年の演説を行う前夜に、孤独感と不安感からグリュンバウム家族が住む部屋に行き、グリュンバウム夫婦と同じベッドで寝るシーンがある。皆が寝静まったころグリュンバウム夫人はヒトラーの顔に枕を押し付け殺そうと試みるが、気づいたグリュンバウムはそれを制止する（1:18）。

グリュンバウム夫人「大量虐殺者なのよ」
グリュンバウム「無抵抗の者を殺すと？」
グリュンバウム「この人は愛に飢えている」

このように、ヒトラーとグリュンバウムは心を通わせあう仲として描写されている。側近たちではなくユダヤ人に心を許していたという描写は史実から大きく逸脱しているものであり、ヒトラー描写の新しい側面であるといえる。

子訳、1983 年に詳しい。

以上、映画におけるヒトラーの感情について観察してきた。ここで明らかとなったのは､何よりもヒトラーの弱さが強調されている点である。子供時代の虐待という学問的根拠に依拠しながら描くことでその信憑性を高め、ヒトラー描写の新しい可能性を成し遂げた。加えて、ユダヤ人教授との心の交流を描くことで、歴史・集合的記憶との逸脱を試みていることが確認された。こうした史実と対極に位置するヒトラー像を提示することは、ヒトラーの集合的記憶に新しい側面を付与しようとするものであるといえる。

・側近などのヒトラーへの態度

『わが教え子、ヒトラー』におけるヒトラー像について、新しいヒトラー描写が模索されていることを明らかにしてきた。絶対的悪という神話からの脱却を目指し､『最期の 12 日間』で試みられた人間としてのヒトラーという次元を超えて、弱くユダヤ人と心を通わせるヒトラー像という新しいヒトラー像が提示されていた。以下では周囲の人間によるヒトラー評価の観察を行い､『わが教え子、ヒトラー』においてヒトラーの他者描写について検討する。

本映画における他者のヒトラーへの態度は次のとおりである。

	時間（分）	%
肯定的態度	15	26.32
中立的態度	18	31.58
否定的態度	25	43.10
態度計	58	100.00

図 :『わが教え子、ヒトラー』における他者のヒトラーへの態度

『最期の 12 日間』と比較したとき、肯定的態度が『最期の 12 日間』が約 50%であったのに対し『わが教え子、ヒトラー』は 26%とほぼ半減している。否定的態度は前者が 41%、後者が 43%であり、中立的態度は前者が 13%､後者が 32%であった。このことから『わが教え子、ヒトラー』

は『最期の 12 日間』と比べ、肯定的態度の減少、中立的態度の増加、否定的態度の微増であることがわかる。ただし、別図 2 より中立的態度はグリュンバウムの指導時に集中していることがわかる。それゆえここでは肯定的態度と否定的態度に絞って考察を進めていく。

『わが教え子、ヒトラー』において、ヒトラーに忠義を尽くしているのは軍需大臣シュペーアの描写が中心である。確かにヒトラーが心の病であることを告げたグリュンバウムに対しボルマンが「無礼である」と怒る場面もあるが（0:17）、例外的であるといえる。シュペーアは、ヒトラーとグリュンバウムが友好的になりつつあるなかで危機感を募らせる。そして、ゲッベルスに対しヒトラーの友人として「ヒトラーは繊細である」ことから演説指導をやめるよう進言し（0:31）、ヒトラーにグリュンバウムは陰謀を抱えており近づかぬよう進言し（1:11）、ヒトラーがグリュンバウムと抱擁を交わすと慌てて止めに入るなど（1:19）、ヒトラーをユダヤ人の手から離そうと画策する。しかしこうした努力は実らず、ヒトラーはシュペーアよりグリュンバウムを信頼し続ける。

一方の否定的態度は映画に占める割合こそ『最期の 12 日間』と同程度であるが、内実はまったく異なっている。『最期の 12 日間』ではヒトラーへの忠誠に対する問題が扱われていたが、『わが教え子、ヒトラー』ではヒトラーを笑いものにするという視点から描かれている。『最期の 12 日間』との対比において差異が顕著である点のひとつとして、エヴァのヒトラーへの態度をあげることができる。大晦日の夜にヒトラーとエヴァははじめて性交を行おうと試みるが、ヒトラーの性的不能により失敗に終わってしまう（1:14）。その後ヒトラーが窓際でひとり新年の花火を見上げるなか、エヴァはヒトラーと視線を交わそうとせず早々と寝てしまう。こうしたエヴァがヒトラーを突き放すことは『最期の 12 日間』においてはまったく見られない演出である。本作品の冒頭において、第三帝国の女性はヒトラーの子供を産みたがっていたというナレーションとともにヒトラーに熱狂する当時の女性たちの映像が流れるが（0:00）、この演出によりヒトラーの妻となるエヴァがヒトラーの女性人気と男性らしさを否定している。性的不能というヒトラーの弱さに救いの手を差し伸べるのではなく徹底的に否定するところに、『最期の 12 日間』と『わが教え子、ヒトラー』におけるエヴァの役割の違いを観察することがで

きる。

ユダヤ人教授グリュンバウムは演説指導を引き受けた当初はヒトラー暗殺を企むなど、ヒトラーに対し否定的な態度を見せている。なおグリュンバウムがヒトラーに共感を示すようになったことを上記したが、これは作品の後半以降の描写である。グリュンバウムは演説指導の折、ヒトラーに「ユダヤ人は無抵抗だ」と挑発され殴り倒してしまう（0:26)。また演説指導と称して跪いて四つん這いさせ犬の鳴きまねをさせるなど（0:56)、ヒトラーに対し惨めな姿をするように命じている。さらにグリュンバウム夫人に殺されかけるなど、劇中のユダヤ人はヒトラーに対し常に優位に描かれている。こうした殴り倒すことや惨めな姿を強要することは実際にユダヤ人迫害においてナチスが行ってきたことであり、本作品ではユダヤ人とヒトラーのパワーバランスが逆転していることがわかる。本映画の後半にグリュンバウムはヒトラーに同情と共感を示すが、しかしラストシーンであるヒトラーの演説において声の出なくなったヒトラーの代わりに演説を行い、ヒトラーを貶す発言を大観衆の前で行う（1:26)。

グリュンバウム「みな金髪碧眼だが、私だけ違う」
グリュンバウム「私は寝小便たれで、薬物に依存している」
グリュンバウム「しかも勃たない！」

その後グリュンバウムはナチス高官らに撃たれるが、大衆の前でヒトラーの恥部を否定的に暴露するという裏切りを成し遂げている。

最後にゲッベルスらによるヒトラー暗殺計画について確認する。ゲッベルスは、ユダヤ人教授以外の聞く耳を持たなくなりつつあるヒトラーを「威厳を失っておられる」と評しながら、ヒムラーに暗殺の話を持ちかける（0:52)。

ゲッベルス「この際我々が帝国を最終勝利に導かねば」
ヒムラー「驚いたな。どうやって？」
ゲッベルス「教授に暗殺させる。演説台に爆弾を仕掛けるのです」

ヒムラーは最初狼狽するが、ユダヤ人教授がヒトラーを暗殺したと情報操作することによりユダヤ人最終解決および浄化政策（ホロコースト）の根拠を得ることができるとの説得に、最終的にはゲッベルスに同意する。ラストシーンの演説の場面においてグリュンバウムがヒトラーを卑下する演説を行うなか、爆弾により暗殺することを優先させ一度はグリュンバウム制止を踏みとどまらせている[531]。以上のゲッベルスの行為から、ヒトラーを利用して自身の理想を実現させようとする意志を読み取ることができるだろう。本作品冒頭においてゲッベルスは「ハイル、ヒトラー」というナチ式敬礼に対し「勘弁してくれ」と述べるなど（0:09）、すでにヒトラーへの敬意を失っている人物として登場する。これは、ゲッベルスは演説指導が行われている最中は隣室にて隠し窓から監視を行っていたが、グリュンバウムによってヒトラーが暗殺されかけ、また犬の恰好を命令されるなどの侮辱を受けても特に気に留める様子もなく談笑しているというシーンにも表れている（0:41）。『わが教え子、ヒトラー』においてヒトラーは、ゲッベルスによって利用される存在であり、政治的イニシアチヴを失っている存在として描かれているといえる。

以上のことから次のことがいえるだろう。第一に、女性のスターであったという史実が否定されたヒトラー像が提示されている。『最期の 12 日間』ではエヴァや秘書、看護師といった女性たちに最後まで支えられていたが、『わが教え子、ヒトラー』では否定されている。第二にユダヤ人との立場が逆転した存在として描かれている。ユダヤ人教授を友と呼んで全面的に信頼する一方で、犬の真似や性的不能を暴露されるなどユダヤ人によって惨めな姿を晒されている。第三に側近によって暗殺を計画されるなど、側近とヒトラーとの関係も逆転していた。権力構造が形骸化しゲッベルスの指示で演説大会が開催されるなど、主導権を失ったヒトラーの姿を観察することができる。

③小括

以上、『わが教え子、ヒトラー』について服装、感情および側近の態度

[531] グリュンバウムを射撃した後に演説台は爆発するが、ヒトラーは間一髪で難を逃れている。

の分析を行ってきた。コメディー映画として撮られた本作品において、すべての項目においてヒトラーは従来の悪魔的ヒトラー像から逸脱していたのみならず、『最期の 12 日間』において提示されたヒトラー像からも大きく異なっていることが確認された。

第一に軍服姿以外の服装が多く提示され、その種類は多様であった。特に運動着や寝巻など、戦争と関係のない服装が特徴的である。このことに加えてトレードマークである口髭も剃られており、集合的記憶のヒトラー像からの脱却が模索されたヒトラー像が観察された。第二に英雄的ヒトラー像からの脱却として、A. ミラーの精神分析に依拠した弱いヒトラー像が提示されていることを確認した。これによって作中のヒトラー描写に信頼性を付与するのみならず、現実のヒトラーがなぜホロコーストに至ったのかを説明する役割も果たしていた。第三にヒトラーと他者の関係性について、ヒトラーが常に下位の存在として描かれていることを明らかにした。特にユダヤ人とヒトラーの関係は逆転しており、歴史的加害者と被害者の関係性に関する新しい描写視点であることを確認した。

これらは何よりも伝統的ヒトラー像を否定し、新しいヒトラー解釈を付与することに貢献している。D. レヴィはナチス・ヒトラー描写について史実からの逸脱が許されない風潮から批判的に出発し、史実とは異なる描写を通して過去と向き合うことを目指していた。本作品は銃撃されたグリュンバウムが最後に聴衆に向けて「君たち自身を癒せ」（Heil euch selbst）と呼びかけて終わる。これは監督 D. レヴィがドイツ人に向けて発したメッセージであるといえる。

> 私は今日に至るまで、映画は真実性に対抗するものであり、観客が映画のなかに入り込み一人前に成長するような、そうした穴を抱えた大胆な試みでなければならないと確認している[532]。

4-4：小括

[532] Thilo, Andrea, 2007, S. 2. ただし強調筆者。

以上、『最期の 12 日間』と『わが教え子、ヒトラー』という二つのヒトラー映画の分析を行ってきた。ほぼ同時期に撮られた作品ではあるが、前者はヒトラーの元秘書の手記および歴史家の調査を下敷きにするなど歴史的真実性への視点を備えていたのに対して、後者はそうした視点を批判しコメディーによって過去との向き合い方を模索しようとするものであった。こうした姿勢は現代ドイツにおける過去との向き合い方の潮流である「追体験」に合致するものであり、つまり当時のようにナチス・ヒトラーを観察することを意味している。

こうした「追体験」は、従来の過去像への挑戦という形で現れる。『最期の 12 日間』はヒトラー＝悪魔というそれまでの定式を覆し、ヒトラーを人間的に描くことが模索されていた。たとえば優しさや弱さという感情や側近たちのヒトラーへの妄信的な信仰のみならずヒトラーに懐疑的な目を向ける者の描写など、絶対者としてではなく多様な視点からヒトラーを描写していた。これらは J. フェストの歴史書や T. ユンゲの手記をもとに構成されており、第三帝国当時のヒトラー観を再現しようとする試みでもあった。一方の『わが教え子、ヒトラー』は歴史的真実性への盲目的な追従を否定する立場から出発し、笑いを通して過去との向き合い方に再考を促すというものであった。ヒトラーを笑うという不安定な経験はヒトラーの悪行を真摯に受け止める契機となり、史実とは異なる次元からナチス・ヒトラーの真実に迫ろうとした。ただしヒトラーはまったくフィクション的に描かれるのではなく、A. ミラーの精神分析に沿ったキャラクター設定を行うことで一定の真実性を担保することに成功していた。ヒトラー描写は従来の集合的記憶的ヒトラー像からの逸脱が多くみられ、またユダヤ人を友と呼ぶなど史実におけるヒトラーとユダヤ人の関係性を転換させる試みがなされていた。

両者に共通していることは、何よりもそれまでタブーとされてきた事柄を破るという点である。絶対的な悪の代表者であるヒトラーを人間として描き直すことや笑いの種として描くことは、ヒトラーの人間性や人となりを理解可能にしようとする動機を孕んだものであった。しかし、ヒトラーに対するそのような試みは彼の罪を相対化しかねないとして大きな批判を巻き起こした。

しかしこうした取り組みは、ヒトラー描写に新しい視点を持ち込もう

とする試みと理解することができる。マスメディアシステムは自身の構成要素を再生産するために、常に新しい情報を構成し続けていた。これまでに社会内部に蓄積されてきた情報の総体である記憶が基準となり、新規性の高い情報のみが伝達され得る。このときマスメディアシステムは、そのようにして伝達した情報を現実として伝達し、社会的現実を構築する働きがあった。ふたつの映画を通して構築された社会的現実は次の 2 点であるということができる。すなわち、『最期の 12 日間』においては J. フェストおよび T. ユンゲそれぞれの著作のなかで書かれていた史実である。『わが教え子、ヒトラー』においては、A. ミラーの精神分析によって明らかとなったヒトラーの幼少時代の父親からの虐待である。しかしこうした現実とは別に、両映画にはヒトラー描写に対して新しい次元を切り開いたという功績を認めることができる。つまり、『最期の 12 日間』において、絶対的悪としてのヒトラーという集合的記憶に対し人間的ヒトラー像という新しい現実を付与することが行われ、次いで、『わが教え子、ヒトラー』において、人間的ヒトラー像というかつて新しかったが今は古くなってしまった記憶を前提に、より新しいヒトラー像への模索としてヒトラーコメディーが提出されたのである。

加えて、集合的記憶を刷新するシステムに関して現代における新しい集合的記憶の構築はマスメディアにおけるコミュニケーションを通して行われていることが確認された。新規性の高い新しいヒトラー像が書籍や写真、映画などのマスメディアによって伝達されるが、その伝達を受けて新聞や雑誌、別の映画作品などのマスメディアが批評や批判、コメントなどを伝達する。このようなサイクルが社会内部にヒトラー像に関する情報の蓄積を生み、文化が形成されるのである。言い換えるならば、多様なヒトラー像の流通は多様なヒトラー観察の結果であるが、こうした多様なヒトラー像が社会内部に定着するためにはマスメディアによるコミュニケーションを経る必要があるのである。

『最期の 12 日間』と『わが教え子、ヒトラー』は、いずれも現代ドイツのタブーに挑戦する作品であった。歴史真正主義的な人間的ヒトラー像という集合的記憶の形成に対して、コメディーによる歴史の反省という相反するふたつの集合的記憶が、マスメディアの上で合意を求めて作動している。どのヒトラー像が真正な集合的記憶として合意を勝ち得

るかは、今後の議論の行方にかかっているだろう。より重要なことは、多様なヒトラー像が提出されるシステム的および時代的背景を理解することではなかろうか。複数の、ときに矛盾する過去像が提出されることは不可避である。そうであるならば、今後ますます増加し豊かになっていくであろうナチス・ヒトラーの集合的記憶のなかにあって、どのように考えどのように行動していくのかを選択し続けなければならない。

5：まとめ

第二次世界大戦終結から 70 年を目前に、集合的記憶論の重要性はますます大きくなってきている。1990 年代から注目されるようになった若い学問ではあるが、時代の要請と後押しによって精力的な研究が行われている。

しかしナチス・ヒトラーを研究対象としたとき、戦争責任やホロコーストという繊細な問題、証言者の減少や世界情勢の変動など多様な要因が重なり、非常に多くの困難がある。とりわけ「正しい過去の保存と伝達」という要請がある一方で、過去の正しさをめぐる議論が巻き起こり、さらにポップカルチャーの領域においてパロディ化されたヒトラー像が流通するなど、多様な問題が複雑に絡み合っている状況にある。本論文では、このような問題を整理する意味も込めて、集合的記憶のダイナミズム描写について映画を題材に考察を進めてきた。

集合的記憶という概念の下に文化的記憶、コミュニケーション的記憶、保存的記憶、機能的記憶など複数の下位概念が考えられているが、これらはいずれも流動的であった。社会内部に流通し想起され続けることによって、集合的記憶の持続時間は異なっている。より長く、神話時代から語り継がれる文化的記憶もあれば、およそ 3 世代程度の持続時間であるコミュニケーション的記憶まで、時間軸の幅が非常に広かった。このとき、社会内部で想起されず忘却された集合的記憶であっても消滅することはなく、社会内部に保存され蓄積されている。そして何かのきっかけによってふたたび想起され、機能的記憶として社会のなかで価値基準としての役割などを果たすことになるのである。

これらの集合的記憶は、常にメディアを必要とした。保存と流通およ

びキューという集合的記憶のメディアが果たす役割は、集合的記憶が社会内部で機能を果たし続けるうえで不可欠である。それゆえ集合的記憶はメディアなしにはあり得ず、集合的記憶を研究することはメディアを研究することでもあった。こうしたメディアは一枚岩ではなく多様な機能を備えた複合体であり、また各種の具体的なメディア（本、ラジオ、テレビ、映画など）に特徴的な機能があることを指摘した。また近年はメディアミックスが進み、あるひとつのメディアによって情報が伝達されるのではなく、複数のメディア媒体やメディア番組によって多様に伝達されることを確認した。

集合的記憶を伝達し蓄積するメディアのひとつとして各種のマスメディアをあげることができるが、マスメディアは N. ルーマンが提唱する社会システム理論の意味におけるシステムある。社会システムは固有の二値コードに従って環境を観察し、自己の構成要素を再生産するという作動を続けているが、特にマスメディアシステムにおいては現実を構築するという作動を行っていた。これに従えば、過去像もまたマスメディアによって構築されていると読み替えることが可能である。ただし、こうした過去像を任意に作り出すことができるわけではなく、社会的ニーズおよび受容者の態度が大きく作用していることを確認した。

一方、現代ドイツにおけるナチス・ヒトラーをめぐる過去への態度は時代を経るごとに変化していた。時間的距離感や育った社会的時代的背景の違いなどによって各世代が保持する歴史観は異なっていることを一因として指摘し、これを証言の変化に沿って確認した。また、現代はナチス・ヒトラーを「追体験」しようとする意識を持った時代でもあり、それゆえ当時と同じ感覚で、当時と同じような経験を求める傾向にある。これはナチス・ヒトラーを多面的に捉え、また多様に記述しようとする動きにもつながっており、現代ドイツにおける過去への意識に多くの可能性が許されるようになってきたのであった。

そのようななかで公開された映画『ヒトラー―最期の 12 日間』および『わが教え子、ヒトラー』は、それぞれナチス・ヒトラーを記述する際にタブーとされてきた視点に挑戦し、激しい議論を巻き起こした映画である。前者は証言を基盤とする歴史的真実性による人間的ヒトラー像を、後者は歴史的真実性を批判し、精神分析という科学的根拠に基づくヒト

ラー像を笑いを通して描きなおすという特徴を持っている。いずれも激しい批判と多くの議論を巻き起こした話題作であり、また『わが教え子、ヒトラー』は『最期の 12 日間』を下敷きに、それとは異なるアプローチを試みるなど、それぞれの過去描写の妥当性に関して社会が覚醒したことも特記すべき事柄であった。こうした従来の伝統的ヒトラー像を打ち破ろうとする試みによって集合的記憶に新しい 1 ページが刻まれ、過去記述がより豊かになっていく。同時にこのことは、過去像がより複雑でより深くなることも意味している。いずれにしてもナチス・ヒトラーの集合的記憶に新しい側面が付与され、またその妥当性が社会の広い範囲で議論されていることは、集合的記憶がマスメディアのなかで合意を目指して交渉を続けているという理論的仮説を十分に裏付けているといえる。

一連の考察で明らかとなったように、正しい過去像を求める動きがある一方で、それを確定することは理論的に非常に難しいものである。第二次世界大戦およびホロコーストの問題に関していえば、体験者の減少により証言の保存が求められるが、雑多で膨大な証言をひとつのストーリーとして再構成することの問題性は、『最期の 12 日間』に対する批判から明らかであろう。こうした問題は今後も終息することはあり得ず、過去描写のあり方をめぐって『わが教え子、ヒトラー』のような奇抜なものの評価といった新しい問題も噴出してくるだろう。こうした問題に対処するためには、本論文において随所に指摘した記憶の多様性と流動性から出発することが肝要ではないだろうか。また、メディア技術の発展に伴って過去描写のあり方も変化し続けるであろう。記憶の多様性・流動性とともに、メディアの果たす役割の可能性にも注視し続けることが求められる。集合的記憶はメディアのなかで書き換えられ修正される。これは他の歴史的出来事においても同様であろう。今後の集合的記憶研究においても、見落としてはならない点であると確信している。

現在があるかぎり過去がなくなることはない。これにはふたつの意味が込められている。ひとつは、時の経過から逃れられるものは存在しないというものである。もうひとつは、過去は常に現在の視点から再構成されるというものである。この 2 点を心に刻み、過去と向き合い続けなければならない。

映画『ヒトラー―最期の12日間』の分析

時間（分）	シーン	ヒトラー感情	服装	Hへの肯定的態度	中立	Hへの否定的態度
1	オープニング					
2						
3	秘書選出					
4						
5						
6						
7	ベルリン砲撃受ける					
8						
9	ヒトラー誕生会					
10						
11						
12						
13						
14	都市模型を前に					
15						
16						
17						
18	作戦会議					
19						
20						
21	子供たちへ勲章					
22						
23						
24						
25	壊滅作戦命令					
26						
27						
28						
29						
30						
31						
32						
33						
34						
35						
36						
37						
38						
39	作戦会議					
40						
41						
42						
43	エヴァにキス					
44						
45						
46						
47						
48						
49						
50						
51						
52						
53						
54	ゲッベルスの子供と					
55	エヴァ、秘書らと					

56						
57						
58						
59						
60	個室					
61						
62	ゲーリングの裏切り					
63						
64						
65						
66						
67						
68						
69	シュペーア脱出に際し					
70						
71						
72						
73						
74	ライチュらと					
75						
76						
77	（ヒムラーの裏切り）					
78						
79						
80	側近と					
81						
82						
83						
84	エヴァと					
85						
86	作戦会議					
87						
88						
89	秘書と					
90						
91	結婚式					
92						
93						
94	作戦会議					
95	自殺表明					
96						
97						
98						
99	医者らと					
100						
101						
102	愛犬毒殺					
103	エヴァとユンゲ					
104						
105						
106	秘書らと					
107						
108	側近らと別れの挨拶					
109						
110	ゲッベルス夫人と					
111						
112	ヒトラー自殺					
113						
114						

115						
116	ソ連と休戦交渉決裂					
117	作戦会議					
118						
119	ゲッベルス子供毒殺					
120						
121						
122						
123						
124						
125						
126	秘書ら脱出準備					
127	戦闘終結宣言					
128						
129						
130	ゲッベルス夫妻自殺					
131						
132						
133						
134	逃亡中仲間に会う					
135	味方陣地へ到着					
136						
137	ソ連軍接近					
138						
139	秘書脱出成功					
140						
141	陣地内					
142	降伏					
143						
144						
145						
146						
147	秘書インタビュー					
148						
149						
150						

ヒトラー感情色分け		%
怒り、激高	13	21.67
無慈悲、冷酷	8	13.33
優しさ	14	23.33
弱さ	10	16.67
その他	15	25.00
ヒトラー登場時間計	60	100.00

服装	7	11.67

ヒトラーへの肯定的態度	49	46.23
ヒトラーへの中立的態度	14	13.21
ヒトラーへの否定的態度	43	40.57
ヒトラーへの態度計	106	100.00

映画『わが教え子、ヒトラー』の分析

時間(分)	シーン	ヒトラー感情	服装	Hへの肯定的態度	中立	Hへの否定的態度
1	OP、過去映像					
2	ゲッベルス、電話					
3						
4						
5						
6						
7	グリュンバウム官邸到着					
8						
9	ゲッベルス寝室					
10						
11						
12						
13						
14	ヒトラー、教授と					
15						
16						
17	教授、幹部と					
18						
19	教授、妻と					
20						
21						
22						
23	指導					
24						
25						
26						
27						
28	(殴られ失神)					
29						
30						
31						
32						
33	外。教授家族と					
34	ヒトラー寝室					
35						
36						
37	食事					
38	指導					
39						
40						
41						
42						
43	教授、家族と					
44						
45	教授、ゲッベルスと					
46	教授、収容所へ					
47	ヒトラー、ゲッベルスと					
48						
49						
50						
51						
52	ヒトラー暗殺計画					
53						
54	教授、官邸へ戻る					

55	指導					
56						
57						
58						
59						
60						
61						
62	ヒトラー、夜に外へ					
63						
64						
65						
66	指導					
67						
68						
69						
70	入浴中、シュペーアと					
71						
72	歌うヒトラー					
73						
74	エヴァとセックス					
75						
76	教授のもとへ					
77						
78						
79	パレードを前に					
80						
81	身支度					
82						
83						
84	出発					
85						
86						
87						
88						
89						
90	教授射殺					
91	エンドロール					
92						

ヒトラー感情色分け	時間	%
怒り、激高	7	14.89
無慈悲、冷酷	0	0.00
優しさ	3	6.38
弱さ	14	29.79
喜び	9	19.15
その他	14	29.79
ヒトラー登場時間計	47	100.00

服装	29	32.22

ヒトラーへの肯定的態度	15	25.86
ヒトラーへの中立的態度	18	31.03
ヒトラーへの否定的態度	25	43.10
ヒトラーへの態度計	58	100.00

参考文献

- A. ミラー著、山下公子訳:『魂の殺人　親は子どもに何をしたか』、新曜社、1983 年
- アーリック・ナイサー編、富田達彦訳:『観察された記憶―自然文脈での想起（上）（下）』、誠信書房、1988 年、1989 年
- 赤坂憲雄／玉野井麻利子／三砂ちづる著:『歴史と記憶　場所・身体・時間』、藤原書店、2008 年
- アントン・カエス:「ホロコーストと歴史の終焉」、ソール・フリードランダー編、上野忠男、小沢弘明、岩崎稔訳:『アウシュヴィッツと表象の限界』、未来社、1994 年
- 飯田収治:「ドイツの『過去』をめぐる忘却・記憶・学習」、『人文論究』第 54 巻 4 号、2005 年
- 石川智也著:「売れる『わが闘争』漫画版　苦言も『歴史資料』の声も」、asahi.com、2009 年 9 月 6 日 http://book.asahi.com/clip/TKY200909020105.html（2012 年 11 月 15 日アクセス）
- 石浜昌宏:「ホロコースト表象の現在（Ⅰ）　映画『ショアー』以前」、宇都宮大学国際学部研究論集第 5 号、1998 年
- 岩崎稔:「ヤン・アスマンの《文化的記憶》1」、『未来』Nr. 382、未来社、1998 年
- 岩崎稔:「歴史学にとっての記憶と忘却の問題系」、歴史学研究会編:『現代歴史学の成果と課題 1980-2000 年　Ⅰ:歴史学における方法的転回』、青木書店、2002 年
- 岩崎稔:「虚偽の記憶と真正性」、ひろたまさき／キャロル・グラック監修、冨山一郎編:『記憶が語りはじめる』、東京大学出版会、2006 年
- 岩崎稔:「記念碑と対抗的記念碑」、『Quadrante』Nr. 10、東京外国語大学海外事情研究所、2008 年
- 岩本隆茂／上田悦子:「行動心理学と認知心理学（III)」、『北海道大學文學部紀要』Nr. 38（2)、1990 年
- 宇佐美公生:「道徳における内的実在論と自由」、岩手大学人文社会科

学部:『人間・文化・社会』、岩手大学人文社会科学部地域文化基礎研究講座、1997 年
・ 太田信夫／多鹿秀継編:『記憶研究の最前線』、北大路書房、2000 年
・ 片桐雅隆著:『過去と記憶の社会学』、世界思想社、2003 年
・ 金児曉嗣／結城雅樹編:『文化行動の社会心理学』、北大路書房、2005 年
・ カント著、篠田英雄訳:『純粋理性批判　上』、岩波書店、1961＝1996 年
・ 國重裕:「戦後ドイツの戦争責任問題」、『龍谷紀要』Nr. 29-1、2007 年
・ クロォチェ著、羽仁五郎訳:『歴史の理論と歴史』、岩波書店、1952 年
・ クロード・ランズマン著、高橋武智訳:『SHOAH』、作品社、1995 年
・ 小林義武著:『バッハ復活―19 世紀市民社会と音楽運動』、春秋社、1997 年
・ 齊藤公輔:「『ヒトラー' 最期の 12 日間』の観察' 集合的記憶論の視点から' 」、『独逸文学』第 53 号、関西大学独逸文学会、2009 年
・ 澤たか子／舩尾日出志:「アイデンティティの形成と修正―エーリヒ・ヴェニガーを例にして―」、『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第 11 号、2008 年
・ 澤井千恵:「詩論　芸術歌曲の成立をめぐって」、『熊本大学社会文化研究』Nr. 1、2003 年
・ 柴田 剛:「『場所』／『記憶』／『物語』」、『空間・社会・地理思想』12 号、2008 年
・ ジャック・ル・ゴフ著、立川孝一訳:『歴史と記憶』、法政大学出版会、1999 年
・ 鈴木みどり編:『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』、世界思想社、1997 年
・ スタンレー・ミルグラム著、岸田秀訳:『服従の心理』、河出書房新書、1995 年
・ ソール・フリードランダー編、上野忠男／小沢弘明／岩崎稔訳:『アウシュヴィッツと表象の限界』、未来社、1994 年

・ 田中純:「ベルリンにおける記憶の政治」、『ドイツ文學』 Nr. 101、1998年
・ チャールズ・チャップリン著、中野好夫訳:『チャップリン自伝』、新潮社、1966年
・ ディルク・ベッカー編、土方透監訳:『システム理論入門　ニクラス・ルーマン講義録 1』、新泉社、2007年
・ テッサ・モーリス-スズキ著、田代泰子訳:『過去は死なない　メディア・記憶・戦争』、岩波書店、2004年
・ 中尾健二／丸山佳佑:「公共の記憶をめぐる抗争: 旧西ドイツにおける『ホロコースト』放映」、『静岡大学情報学研究』Nr.10、2004年
・ 成田龍一:「『証言』の時代の歴史学」、ひろたまさき／キャロル・グラック監修、冨山一郎編:『記憶が語りはじめる』、東京大学出版会、2006年
・ 西村清和:「詩と絵画のパラゴーネ」、『美学藝術学研究』Nr. 24、 2006年
・ ひろたまさき／キャロル・グラック監修、冨山一郎編:『記憶が語りはじめる』、東京大学出版会、2006年
・ マーシャル・マクルーハン著、栗原裕／河本仲聖訳:『メディア論――人間の拡張の諸相』、みすず書房、1987年
・ 松本俊吉:「ヒラリー・パトナムの『内在的実在論』についての一考察」、『東海大学文明研究所紀要』Nr. 20、2000年
・ 三島憲一:「ドイツ知識人の果たした役割」、三島憲一ほか編:『戦争責任・戦後責任』、朝日新聞社、1994年
・ 水谷雅彦:「バーチャルリアリティは「悪」か（共同討議 リアリティとヴァーチャル・リアリティ)」、『哲学』Nr. 60、日本哲学会、2009年
・ メディアリテラシー研究会:『メディアリテラシー:メディアと市民をつなぐ回路』、日本放送労働組合、1997年
・ モーリス・アルヴァックス著、小関藤一郎訳:『集合的記憶』、行路社、1989年
・ 森本敏己編:『視覚表象と集合的記憶:歴史・現在・戦争』、旬報社、2006年

・ 安川晴基：「『記憶』と『歴史』」、『藝文研究』No.94、慶應義塾大学藝文研究会、2008 年
・ ラインハルト・リュールップ著、浅田進史訳：「ナチズムの過去と民主的な社会―ドイツにおける記憶政策と記憶文化」、『公共研究第 5 巻第 2 号』、千葉大学、2008 年
・ リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー著、永井清彦訳：『荒れ野の 40 年' ヴァイツゼッカー大統領終戦 40 周年記念演説』、『岩波ブックレット』Nr.767、岩波書店、2009 年
・ ルチャーノ・カンフォラ著、竹山博英訳：『アレクサンドリア図書館の謎 ： 古代の知の宝庫を読み解く』、工作舎、1999 年
・ ワルター・J・オング著、桜井直文／林正寛／糟谷啓介訳：『声の文化と文字の文化』、藤原書店、1991 年
・ J. ハーバーマス／E. ノルテ他著、徳永恂／清水多吉／三島憲一／小野島康雄／辰巳伸知／細見和之訳：『過ぎ去ろうとしない過去　ナチズムとドイツ歴史家論争』、人文書院、1995 年
・ 筆者不詳（文責：編集部）:「オリヴァー・ヒルシュビーゲル監督、自作を語る」、『シネ・フロント』第 337 号、2005 年 7 月号
・ Ackermann, Kristen: *Gefahren der Abkehr von Politischer Korrektheit am Beispiel der Walser-Bubis-Debatte*. In: Nies, Susanne (Hg.): *Political Correctness in der (inter)nationalen Politik. Zu Genese und Verbreitung eines Konzepts*. *Arbeitspapiere des Osteuropa-Instituts der Freien Universität Berlin* 36/2001.
・ Adorján, Johanna: *Dürfen wir über Hitler lachen?* In: *Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung*, 17. 12. 06. http://www.zeitgeschichte-online.de/portals/_rainbow/documents/pdf/presse_levy.pdf. （2012 年 9 月 27 日アクセス）
・ Aichenberg, Ariane/ Gudehus, Christian/ Welzer, Harald (Hg.): *Gedächtnis und Erinnerung: Ein interdisziplinäres Handbuch*. Stuttgart; Metzler, 2010.
・ Arntz, Jochen: *Zum Totlachen*. In: *Süddeutsche Zeitung Online*, 07.03.2011. http://www.sueddeutsche.de/kultur/zum-karneval-und-faschismus-zum-to

tlachen-1.1022114.（2011 年 10 月 14 日アクセス）

- Assmann, Aleida: *Erinnerung als Erregung. Wendepunkte der deutschen Erinnerungsgeschichte*. In: Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften (Hg.): *Berichte und Abhandlungen, Band 7*. Berlin: Akademie Verlag, 1999.
- Assmann, Aleida: *Speicher oder Erinnern? Das kulturelle Gedächtnis zwischen Archiv und Kanon*. In: Csáky, Moritz/Stachel, Peter (Hg.): *Speicher des Gedächtnisses. Bibliotheken, Museen, Archive 2: Die Erfindung des Ursprungs -Die Systematisierung der Zeit*. Wien: Passagen, 2001. http://www.kakanien.ac.at/beitr/theorie/AAssmann1.pdf.（2012 年 11 月 29 日アクセス）
- Assmann, Aleida: *Vier Formen des Gedächtnisses*. In: *Erwägen, Wissen, Ethik*. Nr. 13, 2. Stuttgart: Lucius & Lucius Verlagsgesellschaft mbH, 2002.
- Assmann, Aleida: *Erinnerungsräume*. München: C. H. Beck, 2003. —アライダ・アスマン著、安川晴基訳：『想起の文化　文化的記憶の形態と変遷』、水声社、2007 年
- Assmann, Aleida: *Zur Mediengeschichte des kulturellen Gedächtnisses*. In: Nünning, Ansger/ Erll, Astrid (Hg.): *Medien des kollektiven Gedächtnisses. Konstruktivität – Historizität – Kulturspezifität*. Berlin, New York: Walter de Gruyter, 2004.
- Assmann, Aleida: *Von individuellen zu kollektiven Konstruktionen von Vergangenheit*. Wien: A. Assmann-Online-Text. -univie.ac.at. 2005. http//www.univie.ac.at/zeitgeschichte/veranstaltungen/a-05-06-3.rtf.（2011 年 4 月 12 日アクセス）
- Assmann, Aleida: *Der lange Schatten der Vergangenheit. Erinnerungskultur und Geschichtspolitik*. München: C. H. Beck, 2006.
- Assmann, Aleida: *Geschichte im Gedächtnis: Von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung*. München: C. H. Beck, 2007a. —アライダ・アスマン著、磯崎康太郎訳：『記憶のなかの歴史　個人的経験から公的演出へ』、松籟社、2011 年
- Assmann, Aleida: *Lichtstrahlen in die Black Box*. In: Frölich, Margrit /

Schneider, Christian / Visarius, Karsten (Hg.): *Das Böse im Blick. Die Gegenwart des Nationalsozialismus im Film*. Stuttgart; Edition text + kritik in Richard Boorberg, 2007b.

- Assmann, Aleida: *Einführung in die Kulturwissenschaft. Grundbegriffe, Themen, Fragen*. Berlin: Erich Schmidt Verlag, 3., neu bearbeitete Auflage, 2011.
- Assmann, Aleida/ Assmann, Jan: *Das Gestern im Heute. Medien und soziales Gedächtnis*. In: Merten, Klaus/ Schmidt, Siegfried J./ Weisenberg, Siegfried (Hg.): *Die Wirklichkeit der Medien. Eine Einführung in die Kommunikationswissenschaft*. Opladen: Westdeutscher Verlag, 1994.
- Assmann, Jan: *KÖRPER UND SCHRIFT ALS GEDÄCHTNISSPEICHER. Vom kommunikativen zum kulturellen Gedächtnis*. In: Csáky, Moritz/Stachel, Peter (Hg.): *Speicher des Gedächtnisses. Bibliotheken, Museen, Archive 2: Die Erfindung des Ursprungs -Die Systematisierung der Zeit*. Wien: Passagen, 2001. http://sammelpunkt.philo.at:8080/1819/1/JAssmann1.pdf.（2011 年 4 月 11 日アクセス）
- Assmann, Jan: *Das kulturelle Gedächtnis. 5. Auflage dieser Ausgabe*. München; C. H. Beck, 2005.
- Berek, Mathias: *Kollektives Gedächtnis und die gesellschaftliche Konstruktion der Wirklichkeit. Eine Theorie der Erinnerungskulturen*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz GmgH & Co. KG, 2009.
- Berghaus, Margot: *Luhmann leicht gemacht*. Köln: Böhlau Verlag, 2003.
- Bischof, Willi: *Vorweg*. In: Bischof, Willi (Hg.): *Filmri:ss. Studien über den Film „Der Untergang”*. Münster: UNRAST-Verlag, 2005.
- Blasberg, Marian / Hunke, Jörg: *Interview mit Bernd Eichinger: Hitler ist greifbar geworden*. In: *Frankfurter Rundschau*, 11,09,2004. Zitat: filmportal.de. http://www.filmportal.de/node/69095/material/544449.（2013 年 4 月 5 日アクセス）
- Bösch, Frank: *Film, NS-Vergangenheit und Geschichtswissenschaft. Von "Holocaust" zu "Der Untergang"*. In: *Vierteljahreshefte für*

Zeitgeschichte. 55. Jahrgang Heft 1. Institut für Zeitgeschichte. München: Olenbourg Wissenschaftsverlag, 2007.

- Chiavacci, David/ Wieczorek, Iris (Hg.): *Japan 2010. Politik, Wirtschaft und Gesellschaft*. Berlin: VSJF, 2010.
- Erll, Astrid: *Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*. In: Nünning, Ansger/ Nünning, Vera (Hg.): *Konzepte der Kulturwissenschaften*. Stuttgart und Weimar: J. B. Metzler, 2003.
- Erll, Astrid: *Kollektives Gedächtnis und Erinnerungskulturen*. Stuttgart, Weimar: Metzler, 2005a.
- Erll, Astrid: *Literatur als Medium des kollektiven Gedächtnisses*. In: Erll, Astried/ Nünning, Ansger (Hg.): *Gedächtniskonzepte der Literaturwissenschaft*. Berlin, New York: Walter de Gruyter, 2005b.
- Esposito, Elena: *Soziales Vergessen. Formen und Medien des Gedächtnisses der Gesellschaft*. Frankfurt am Main: Surkamp Verlag, 2002.
- Erll, Astrid / Wodianka, Stephanie: *Einleitung: Phänomenologie und Methodologie des „Erinnerungsfilms”*. In: Erll, Astrid / Wodianka, Stephanie (Hg.): *Film und kulturelle Erinnerung. Plurimediale Konstellation*. Berlin: Walter de Gruyter, 2008.
- Faulstich, Werner: *Einführung in die Medienwissenschaft*. München: Wilhelm Fink, 2002.
- Fest, Joachim: *Der Untergang. Hitler und das Ende des Dritten Reiches*.Berlin: Alexander Fest Verlag, 2002.
  ―ヨアヒム・フェスト、鈴木直訳：『ヒトラー　最期の 12 日間』、岩波書店、2005 年
- Fischhaber, Anna / Reinbold, Fabian: *Hitler-Ausstellung in Berlin: "Sein starrer Blick ist schon einschüchternd"*. In: *Spiegel Online*, 15. 10. 2010. http://www.spiegel.de/politik/deutschland/0,1518,723408,00.html.
  （2011 年 6 月 30 日アクセス）
- Frei, Norbert: *1945 und Wir*. München: C. H. Beck, 2005.
- Frölich, Margrit / Schneider, Christian / Visarius, Karsten (Hg.): *Das Böse im Blick. Die Gegenwart des Nationalsozialismus im Film*. Stuttgart;

Edition text + kritik in Richard Boorberg, 2007.

- Gasmann, Michael: *Votum für das Kino. “Der Untergang” kommt nach Israel*. In: *FAZ*, 20.04.2005.
- Grandt, Michael: *Adolf Hitler: Teufel, Dämon oder schwer misshandeltes Kind?* In: *KOPP Online*, 02.06.2010. http://info.kopp-verlag.de/hintergruende/zeitgeschichte/michael-grandt/adolf-hitler-teufel-daemon-oder-schwer-misshandeltes-kind-.html （2012 年 12 月 6 日アクセス）
- Ganzfried, Daniel: *Die geliehene Holocaust-Biographie*. In: Die Weltwoche. Nr. 35/98, August 27, 1998. Zürich.
- Gronau, Martin: *Der Film als Ort der Geschichts(de)konstruktion. Reflexionen zu einer geschichtswissenschaftlichen Filmanalyse*. In: Ley, Golo / Mzé, Hassen Soilohi (Hg.): *AEON – Forum für junge Geschichtswissenschaft 1*. Magdeburg; Meine Verlag, 2009. http://wissens-werk.de/index.php/aeon/article/viewFile/10/pdf_3.（2012 年 8 月 15 日アクセス）
- Guertler, Detlef: *Schland*. In: *blogs.taz.de*. http://blogs.taz.de/wortistik/2010/06/16/schland/（2012 年 9 月 19 日アクセス）
- Haas, Daniel: Ă*Hitler hätte in Therapie gehört*.ñ In: *Spiegel Online*, 04,01,2007 http://www.spiegel.de/kultur/kino/mein-fuehrer-regisseur-dani-levy-hitler-haette-in-therapie-gehoert-a-457208.html （2012 年 10 月 3 日アクセス）
- Hannemann, Mathias: *Interview Horst Möller. Soll man „Mein Kampf“ edieren?* http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/buecher/interview-horst-moeller-soll-man-mein-kampf-edieren-1460152.html （2012 年 11 月 15 日アクセス）
- Heiser, Sabine / Holm, Christiane: *Einleitung*. In: Heiser, Sabine / Holm, Christiane (Hg.): *Gedächtnisparagone- Intermediale Konstellationen*. Göttingen; V&R unipress GmbH, 2010.

- Hieber, Jochen: *Geschichte im Fernsehen ist immer Roman*. In: *FAZ.net im Online-Artikel*, 23. Oktober 2008, http://www.faz.net/aktuell/feuilleton/medien/zdf-serie-die-deutschen-geschichte-im-fernsehen-ist-immer-roman-1713987.html（2011 年 3 月 28 日アクセス）
- Hissen, Alexandra: *Hitler im deutschsprachigen Spielfilm nach 1945: Ein filmgeschichtlicher Überblick*. Trier: WVT Wissenschaftlicher Verlag, 2010.
- Huyssen, Andreas: *Twilight Memories. Marking Time in a Culture of Amnesia*. New York: Routledge, 1995.
- Ikeda, Hiroyoshi: *„Wie hin- oder wegschauen?“ – zur politischen Stellungnahme einens Schriftstellers in der Walser-Bubis-Debatte –*. In: 『言語と文化』Nr. 10, 愛知大学言語教育研究室, 2004.
- Jessen, Jens: *Im grellen Zirkus des Gedenkens*. In: *Zeit-Online*, 13/2005. http://www.zeit.de/2005/13/Hitler.（2008 年 7 月 13 日アクセス）
- Kaschuba, Wolfgang: *Gedächtnislandschaften und Generationen*. In: Fank, Petra/ Hördler, Stefan (Hg.): *Der Nationalsozialismus im Spiegel des öffentlichen Gedächtnisses*. Berlin: 2005. http://edoc.hu-berlin.de/oa/bookchapters/reKcV6NgAKooQ/PDF/22T8rDKLfB6js.pdf. （2011 年 8 月 27 日アクセス）
- Kneer, Georg / Nassehi, Armin: *Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme: Eine Einführung*. München: Wilhelm Fink Verlag, 1993=2000. ―ゲオルク・クニール／アルミン・ナセヒ著、舘野受男、池田貞夫、野崎和義訳：『ルーマン社会システム理論』、新泉社、1995 年
- Knopp, Guido: *Holokaust*. München: Wilhelm Goldmann Verlag, 2001. ―グイド・クノップ著、高木玲／藤島淳一訳：『ホロコースト全証言集―ナチ虐殺戦の全体像』、原書房、2004 年
- Krause, Detlef: *Luhmann Lexikon: eine Einführung in das Gesamtwerk von Niklas Luhmann*. Stuttgart: Lucius & Lucius, 3., neu bearb. und erw. Aufl., 2001.
- Kuhlbrodt, Dietrich: *Deutsches Filmwunder. Nazis immer besser*. Hamburg: Konkret Literatur Verlag, 2006.

・ Kurbjuweit, Dirk: *Gnadenlos und selbstgerecht*. In: *Spiegel Special*, Nr. 4, 2005.
・ Lewitan, Louis: *Gespräch mit Dani Levy. „Komödien gehören in den Bereich der Erlösung.“* In: *Zeit Online*, 31,12,2006. http://www.zeit.de/2010/14/Rettung-Dani-Levy（2012 年 2 月 23 日アクセス）
・ Luhmann, Niklas: *Soziales System*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1984.
・ Luhmann, Niklas: *Die Realität der Massenmedien*. Wiesbaden: VS Verlag, 2004.
—ニクラス・ルーマン著、林香里訳：『マスメディアのリアリティ』、木鐸社、2005 年
・ Martenstein, Harald: *Adolf auf der Couch*. In: *Die Zeit*, 02/2007. http://www.zeitgeschichte-online.de/portals/_rainbow/documents/pdf/presse_levy.pdf. （2012 年 9 月 17 日アクセス）
・ Maturana, Humbert / Varela, Francisco: Autopoiesis and cognition : the realization of the living. Boston: D. Reidel Pub. Co, 1980.
—H. R. マトゥラーナ／ F. J. ヴァレラ著、河本英夫訳：『オートポーエーシス：生命システムとはなにか』、国文社、1991 年
・ Mersch, Dieter: *Medientheorien zur Einführung*. Dresden: Junius Verlag, 2006.
・ Michaelsen, Sven: *Totaler Dämon und elende Witzfigur*. In: *Stern. 39/2004*.
・ Misch, Rochs: *Der letzte Zeuge. Ich war Hitlers Telefonist, Kurier und Leibwächter*. München: Piper Verlag, 2008.
・ N. N.: *Der Untergang. Reaktion: Syberberg, Pieper, Reiche*. In: *FAZ*, 20.09.2004.
・ N. N.: *Hitler boomt.Weltweiter Erfolg „Der Untergang“*. In: *FAZ*, 23.04.2005.
・ N. N.: *Mit Helge gegen Hitler*. In: *Spiegel Online*, 21.12.2005. http://www.spiegel.de/kultur/kino/regisseur-dani-levy-mit-helge-gegen-hitler-a-391703.html （2012 年 10 月 3 日アクセス）

- Mohr, Reinhard: *Hölle im Reihenhaus*. In: *Spiegel Special*, Nr. 4, 2007.
- N. N.: *Karneval an der Geschmacksgrenze*. In: *Kölner Stadt-Anzeiger*, 19.02.2007. http://www.ksta.de/region/karneval-an-der-geschmacksgrenze,15189102,13495610.html. （2013 年 4 月 3 日アクセス）
- N. N.: *Brisante Wagen in Düsseldorf*. In: *Focus Online*, 19. 02. 2007. http://www.focus.de/panorama/welt/rosenmontagszuege_aid_124932.html. （2013 年 4 月 3 日アクセス）
- N. N.: Ă*Natürlich wird mir der Kopf gewaschen.*ñ In: *General Anzeiger*, 10. 01. 2007. http://www.general-anzeiger-bonn.de/news/interviews/Natuerlich-wird-mir-der-Kopf-gewaschen-article118746.html（2012 年 10 月 1 日アクセス）
- N. N.: *Ein vorzeigbarer Hitler. Die ausländische Presse belächelt Oliver Hirschbiegels Film »Der Untergang«*. In: *ZEIT ONLINE*. http://www.zeit.de/2004/40/Untergang_International. (2008 年 7 月 13 日アクセス)
- N. N.: *Massive Kritik an Levys Hitler-Satire*. In: *Spiegel Online*. http://www.spiegel.de/kultur/kino/0,1518,458676,00.html （2011 年 12 月 3 日アクセス）
- N. N.: *Mehrheit der Deutschen lehnt Hitler-Satire ab*. In: *Spiegel Online*. www.spiegel.de/kultur/gesellschaft/umfrage-mehrheit-der-deutschen-lehnt-satire-ab-a-458931.html (2012 年 9 月 27 日アクセス)
- Nolte, Ernst: *Die Vergangenheit, die nicht vergehen will. Eine Rede, die geschrieben, aber nicht gehalten werden konnte*. In: *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, 6.6.1986. http://www.hdg.de/lemo/html/dokumente/NeueHerausforderungen_redeNolte1986/index.html. （2013 年 4 月 2 日アクセス）
- Nünning, Ansger/Nünning, Vera: *Kulturwissenschaften: Eine multiperspektivische Einführung in einen interdisziplinären Diskussionszusammenhang*. In: Nünning, Ansger/Nünning, Vera (Hg.): *Konzepte der Kulturwissenschaften. Theoretische Grundlagen – Ansätze – Perspektiven*. Stuttgart, Weimar: J. B. Metzler, 2003.

- Olick, Jeffrey K.: *Collective Memory: The Two Cultures*. In: *Sociological Theory* 17:3. American Sociological Association, November 1999.
- Pethes, Nicolas: *Kulturwissenschaftliche Gedächtnistheorien*. Hamburg: Junisu Verlag, 2008.
- Pethes, Nicolas/ Ruchatz, Jens (Hg.): *Gedächtnis und Erinnerung. Ein interdisziplinäres Lexikon*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch, 2001.
- Petri, Ester: *Holocaust-Erinnerungskultur im Wandel*. Grin Verlag, 2000.
- Polkinghorne, Donald E.: *Narrative Psychologie und Geschichtsbewußtsein Beziehungen und Perspektiven*. In: Straub, Jürgen (Hg.): *Erzählung, Identität und historisches Bewußtsein. Die psychologische Konstruktion von Zeit und Geschichte*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 1998.
- Reichel, Peter: *Vergangenheitsbewältigung in Deutschland*. München: C. H. Beck, 2001=2007.
  —ペーター・ライヒェル著、小川保博／芝野由和訳：『ドイツ　過去の克服』、八朔社、2006 年（2001 年版翻訳）
- Schönfeld, Gerda-Marie: *„Verzeiht Deutschland Hitler?”* In: *Stern*, 39/2004.
- Schmidt, Siegfried J.: *Kalte Faszination. Medien, Kultur, Wissenschaft in der Mediengesellschaft*. Weilerswist: Velbrück Wissenschaft, 2000a.
- Schmidt, Siegfried J.: *Medien- die alltäglichen Instrumente der Wirklichkeitskonstruktion*. In: Fischer, Hans Rudi / Schmidt, Siegfried J. (Hg.): *Wirklichkeit und Welterzeugung*. Heidelberg: Carl-Auer-Systeme Verlag, 2000b.
- Schmidt, Siegfried J.: *Der Medienkompaktbegriff*. In: Münker, Stefan / Roesler, Alexander (Hg.): *Was ist ein Medium?* Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 2008.
- Schulze, Hagen/François, Etinne: *Einleitung*. In: Schulze, Hagen / François, Etinne (Hg.): *Deutsche Erinnerungsorte*. München: C. H. Beck, 2001.
- Spangenberg, Peter M. : *Mediengeschichte- Medientheorie*. In: Fohrmann,

Jürgen / Müller, Harro (Hg.): *Literaturwissenschaft*. München: Wilhelm Fink, 1995.

- Statistisches Bundesamt (Hg.): *Bevölkerung Deutschlands bis 2060. 12. koordinierte Bevölkerungsvorausberechnung*. Statistisches Bundesamt; Wiesbaden: 2009.
- Thiele, Martina: *Publizistische Kontroversen über den Holocaust im Film*. Berlin: LIT Verlag, 2007.
- Thilo, Andrea: *Ich habe einen Traum. Die Angst vorm leeren Saal*. In: *Zeit Online*, 11.01.2007. http://www.zeit.de/2007/03/Traum-Dani-Levy.（2012 年 2 月 23 日アクセス）
- Weber, Mark: *Holocaust Survivor Memoir Exposed as Fraud*. In: *The Journal of Historical Review*, Nr. 17, 1998. http://ihr.org/jhr/v17/v17n5p15_Weber.html（2011 年 10 月 21 日アクセス）
- Weber, Stefan: *Einführung: (Basis-) Theorien für die Medienwissenschaft*. Weber, Stefan (Hg.): *Theorien der Medien*. Konstanz: UVK, 2003.
- Weidhaas, Peter: *Zur Geschichte der Frankfurter Buchmesse*. Frankfurt am Main: Surkamp Verlag, 2004.
- Weiss, Christogh (Hg.): *„Der Gute Deutsche". Dokumente zur Diskussion um Steven Spielbergs „Shindlers Liste" in Deutschland*. St. Ingbert: Werner J. Röhtig Universitätsverlag, 1995.
- Weiss, Maurice: *Führer im Kleinformat*. In: *Der Spiegel* 41/2010.
- Welsch, Wolfgang: *„Wirklich". Bedeutungsvarianten – Modelle – Wirklichkeit und Virtualität*. In: Krämer, Sybille (Hg.): *Medien Computer Realität*. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1998.
- Welzer, Harald: *Das kommunikative Gedächtnis. Eine Theorie der Erinnerung*. München: 1. Auflage (Beckôsche Reihe), 2005.
- Welzer, Harald: *Gedächtnis und Erinnerung*. In: Jaeger, Friedrich / Rüsen, Jörn (Hg.): *Handbuch der Kulturwissenschaften Band 3. Themen und Tendenzen*. Stuttgart: J.B.Metzler, 2011.
- Wetzel, Dietmar J.: *Maurice Halbwachs – kollektives Gedächtnis und Vergessen*. Institut für Soziologie, Universität Bern, Kolloquium Theorie, 21.10.2009.

http://www.soz.unibe.ch/unibe/wiso/soz/content/e5976/e7254/e8637/e8647/files17831/Vortrag.MauriceHalbwachs-KollektivesGedchtnisundVergessen.21.10.2009.pdf. （2012 年 9 月 27 日アクセス）

- Weyand, Jan: *So war es! Zur Konstruktion eines nationalen Opfermythos im Sipelfilm „Der Untergang“*. In: Bischof, Willi (Hg.): *Filmri:ss. Studien über den Film „Der Untergang”*. Münster: UNRAST-Verlag, 2005.
- Willaschek, Marcus: *Einleitung: Die neuere Realismusdebatte in der analytischen Philosophie*. In: Willaschek, Marcus (Hg.): *Realismus*. Paderborn: Ferdinand Schöningh, 2000.
- Wittkamp, Robert F.: *Japanologie als Kulturwissenschaft*. In: *Die Deutsche Literatur*, Nr. 49, 関西大学ドイツ文学会編, 2005.
- Wittkamp, Robert F: *Krieg und Erinnerung zwischen Mündlichkeit und Medien: Streifzüge durch japanische Gedächtnisdiskurse*. In: Chiavacci, David/ Wieczorek, Iris (Hg.): *Japan 2010. Politik, Wirtschaft und Gesellschaft*. Berlin: VSJF, 2010.
- Worschech, Rudolf: *Mein Führer-Die wirklich wahrste Wahrheit über Adolf Hitler. Dani Levys Hitler-Satire*. In: Frölich, Margrit/ Schneider, Christian/ Visarius, Karsten (Hg.): *Das Böse im Blick. Die Gegenwart des Nationalsozialismus im Film*. Stuttgart: edition text+kritik in Richard, 2007.
- Zander, Peter: Ă*Ich habe mich nur zur Verfügung gestellt*.ñ In: *Die Welt*, 04.01.07. www.welt.de/kultur/article706456/Helge_Schneder_Ich_habe_mich_nur_zur_Verfuegung_gestellt.html （2012 年 10 月 3 日アクセス）
- Zander, Peter: *Levy: „Der Kontext von Sex und Macht ist sehr interessant.“* In: *Die Welt*, 05. 01. 07. http://www.zeitgeschichte-online.de/portals/_rainbow/documents/pdf/presse_levy.pdf. （2012 年 9 月 17 日アクセス）
- Zimmermann, Peter: *Hitler & Co als Fernsehstars. Das „Dritte Reich“ in Film und Fernsehdokumentationen.* Vortrag zum Symposium Ă*Hitler und Co als Fernsehstars*.ñ im Haus des Dokumentarfilms. Stuttgart 21. April

2005.
http://www.mediaculture-online.de/fileadmin/bibliothek/zimmermann_hitler/zimmermann_hitler.pdf（2013 年 3 月 29 日アクセス）

その他

・ 『独和大辞典』第 2 版、小学館、2000 年
・ Dudenredaktion (Hg.): *Duden. Deutsches Universalwörterbuch. 4., neu bearbeitete und erweiterte Auflage*. Mannheim, Leipzig, Wien, Zürich: Dudenverlag, 2001.
・ ドイツ統計局ホームページ
http://www.destatis.de/bevoelkerungspyramide/ （2013 年 4 月 2 日アクセス）
・ ドイツ歴史博物館ホームページ
http://www.dhm.de/ausstellungen/hitler-und-die-deutschen/.
（2011 年 9 月 2 日アクセス）
・ トーマス教会ホームページ
http://www.thomaskirche.org/r-thomanerchor.html （2012 年 11 月 17 日アクセス）
・ ハンブルク州ホームページ
http://www.hamburg.de/museen-kunst-ausstellungen/museen/251658/kz-gedenkstaette-neuengamme.html（2011 年 11 月 5 日アクセス）
・ Moers, Walter (idea & character, storyboard) / Piger, Thomas (music) / Gönnerst, Felix (director): *Adolf: Ich hock' in meinem Bonker*.
http://www.youtube.com/watch?v=RHMZDfWAAuI （2012 年 9 月 29 日アクセス）（特典映像 DVD のビデオクリップ）
・ The Internet Movie Database.
http://www.imdb.com （2008 年 7 月 23 日アクセス）
・ Titanic ホームページ
http://titanic-magazin.soup.io/since/78509494?mode=own（2011 年 10 月 14 日アクセス）